

就学前保育施設における子どもの主体的な活動を支援する  
保育室付帯諸室の計画に関する研究

早川 亜希

A study on the planning of the supporting rooms around the nursery rooms to enhance children's independent activities in the nursery facilities.

HAYAKAWA Aki

## 目次

### 第1章 研究の概要

1. はじめに	1
1.1 研究の背景と問題意識	2
1.1.1 子どもの生活環境と保育施設	2
1.1.2 保育空間と保育方法	2
1.1.3 問題意識	3
1.2 研究の目的	4
1.3 研究の方法	4
1.4 調査の方法	4

### 第2章 研究の理論的背景と本研究の位置付け

2.1 本章の概要	9
2.2 研究の理論的背景	9
2.2.1 保育施設に関する社会問題	9
2.2.2 施設形態の種類と法的位置づけ	11
2.2.2.1 保育施設のはじまり	11
2.2.2.2 現在の保育施設の位置付け	12
2.2.3 保育施設の建築計画	14
2.2.4 保育・幼児教育の方針と規制緩和	16
2.2.5 保育の質	19
2.2.6 子どもの主体性とその評価	20
2.2.6.1 保育・幼児教育における扱い	20
2.2.6.2 学術研究における構造化	21
2.3 既往研究の系譜と本研究の位置付け	23
2.3.1 既往研究の系譜と課題	23
2.3.3 本研究の位置付けと意義	27
2.4 用語の定義と研究の範囲	27
2.4.1 子どもの主体的な活動	27
2.4.2 保育室に付帯する諸室及び廊下のスペース	28
2.4.2.1 付帯諸室	28

2.4.2.2 遊びスペース	30
2.4.3 付帯諸室を含む自由活動範囲	31
2.4.4 子ども	32
2.4.4 保育者	32

### 第3章 研究対象事例の保育空間と保育方法

3.1 本章の概要	33
3.1.1 目的	33
3.1.2 調査方法	33
3.1.3 分析の対象	34
3.2 事例の保育空間の概要	35
3.2.1 施設定員数と延べ床面積	35
3.2.2 園舎及び保育室の平面形状と配置	36
3.2.3 施設の使用開始後の執拗と変更及び改修	37
3.3 事例の保育方法の概要	38
3.3.1 施設形態と運営主体	38
3.3.2 食寝遊の分離	38
3.4 付帯諸室の構成と子どもの活動場所	40
3.4.1 付帯諸室の種類	40
3.4.2 付帯諸室の構成	42
3.4.3 子どもの活動と活動場所	42
3.4.4 整備済みの食事室を食事で使用しない事例	44
3.4.5 自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲	46
3.5 小結	48
3.5.1 付帯諸室の構成と子どもの活動	48
3.5.2 子どもが自由に出入りできる活動場所	48
3.5.3 課題	48

### 第4章 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型とその空間構成

4.1 本章の概要	49
-----------	----

4.1.1 目的	49
4.1.2 分析方法	49
4.2 保育室と付帯諸室の配置と自由活動室	49
4.2.1 4歳児保育室と付帯諸室の配置	49
4.2.2 4歳児保育室と付帯諸室配置の細分類	50
4.2.3 同階配置の付帯諸室	50
4.2.4 付帯諸室と自由活動室の割合	50
4.2.4.1 種類毎の割合	50
4.2.4.2 配置毎の割合	52
4.3 自由活動範囲のタイプ	52
4.3.1 保育室完結型（N型）	54
4.3.2 範囲制限C型（C型）	55
4.3.3 範囲制限S型（S型）	56
4.3.4 完全自由形（F型）	57
4.4 小結	58
4.4.1 自由活動範囲内にある付帯諸室の特徴と保育室との配置	58
4.4.2 自由活動範囲の類型化	58

## 第5章 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型と保育者の空間評価

5.1 本章の概要	59
5.1.1 目的	59
5.1.2 分析方法	59
5.2 該当箇所の有無による評価の比較	60
5.2.1 重要度が両群で高い設問	60
5.2.2 重要度が両群で差がある設問	61
5.3 自由活動範囲の類型による評価の比較	62
5.3.1 類型によって差が生じない普遍的項目	62
5.3.2 類型によって差が生じる特徴的項目	64
5.3.2.1 保育者の視点	64
5.3.2.2 子どもの視点	66

5.4 小結	68
5.4.1 保育空間として重視される物理的特徴	68
5.4.2 自由活動範囲の類型別に差異のある空間的特徴	68

## 第6章 保育室に付帯した遊びスペースの使われ方と役割

6.1 本章の概要	69
6.1.1 目的	69
6.1.2 調査方法	69
6.1.3 分析方法	70
6.2 遊びスペースの種類と自由活動範囲の関係	70
6.3 自由活動範囲内の遊びスペースの種類と活動	72
6.3.1 種類	72
6.3.2 活動ルール	73
6.4 遊びスペースの家具配置と家具の可動性	75
6.4.1 造形室	76
6.4.2 絵本室	76
6.4.3 絵本コーナー	78
6.4.4 廊下のスペース	79
6.4.5 アルコーブ	80
6.4.6 デン	80
6.5 遊びスペースの視認性と保育者による見守りやすさ	82
6.5.1 遊びスペースの視認性	82
6.5.1.1 遊びスペースの一部が自由活動範囲の事例	82
6.5.1.2 全ての遊びスペースが自由活動範囲の事例	88
6.5.2 保育者による見守りやすさ	93
6.6 遊びスペースの場所選択の自由度と活動の多様性	94
6.6.1 自由活動範囲外にある遊びスペース	96
6.6.2 自由活動範囲に制限がある遊びスペース	96
6.6.3 自由活動範囲内にある遊びスペース	97
6.6.4 遊びスペースの活動の多様性	97

6.7 絵本室でみられた活動の実態	98
6.7.1 調査概要	98
6.7.2 保育室のゾーニングからみた絵本室の位置付けの違い	100
6.7.3 絵本室の使われ方と滞在人数の変化	102
6.7.4 絵本室での活動場所と頻度	106
6.7.5 保育者の発言と活動実態の比較	106
6.8 子どもの主体的な活動と遊びスペースの役割	108
6.8.1 遊びや人間関係を深める場所	108
6.8.2 子どものセルフケアの場所	108
6.8.3 クラス活動や保育者の活動場所	110
6.8.4 活動の切り替え場所	110
6.8.5 遊びスペースの物理的評価からみた遊びスペースの位置付け	110
6.9 小結	112
6.9.1 遊びスペースと自由活動範囲	112
6.9.2 遊びスペースの設えの比較	112
6.9.3 遊びスペースの役割と空間的配慮	112
6.9.4 子どもの主体的な活動を支援する遊びスペース	113

## 第7章 研究の総括と今後の課題

7.1 各章のまとめ	115
7.2 研究全体の総括と子どもの主体性を支援する要件への提言	121
7.2.1 保育室に付帯する諸室及び廊下のスペースの計画論について	121
7.2.2 子どもの主体的な活動を支援する要素と保育者の関わり	122
7.2.3 研究成果に基づく建築計画学への示唆	123
7.3 今後の課題	124

謝辞	o_1
学位論文公聴会資料	o_3
研究業績	o_13
参考文献・論文リスト	o_15
資料編	a_1

## 図表一覧

### 第1章

図 1.1 事例の抽出方法

図 1.2 論文の構成

### 第2章

表 2.1 保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園の比較

表 2.2 保育政策の流れと規制緩和

図 2.1 就学前保育児童の保育状況

図 2.2 子ども・子育て支援新制度の概要

図 2.3 保育所の空間構成

図 2.4 幼稚園の空間構成

図 2.5 保育の質の構造

図 2.6 幼児の主体性の構造

図 2.7 幼児の主体性の各要素の相互作用

図 2.8 「子どもの主体性」の概念モデル

図 2.9 マズローの自己実現理論

図 2.10 子どもの主体性の段階（試案）

図 2.11 保育施設に関する既往研究

図 2.12 保育施設的环境要因

図 2.13 本研究における主体性

図 2.14 保育施設における子どもの活動場所と本研究の範囲

図 2.15 保育室に付帯する諸室及びスペースの種類

図 2.16 保育室に付帯する廊下のスペースの定義

図 2.17 付帯諸室を含む自由活動範囲の例

写真 2.1 付帯諸室の例

### 第3章

表 3.1 事例抽出にもちいた建築雑誌及び書籍の一覧

表 3.2 アンケート調査の概要と回収率

- 表 3.3 ヒアリング調査の概要
- 表 3.4 改修箇所の内訳
- 表 3.5 食事室を整備しながら食事で使用していない事例
- 図 3.1 定員数と延べ床面積
- 図 3.2 園舎と保育室の平面構成
- 図 3.3 施設種別、運営主体と設置者
- 図 3.4 食寝遊の分離
- 図 3.5 食寝遊の分離別の生活行為の活動場所
- 図 3.6 分析対象の 68 事例概要
- 図 3.7 付帯諸室の種類
- 図 3.8 付帯諸室の面積分布
- 図 3.9 付帯諸室の組み合わせ
- 図 3.10 子どもの活動別の活動場所
- 図 3.11 付帯諸室の整備構成と子どもが自由に出入りできる範囲

## 第 4 章

- 表 4.1 付帯諸室の種類及び配置と自由活動室数
- 表 4.2 自由活動範囲の類型
- 図 4.1 4 歳児保育室と付帯諸室の配置
- 図 4.2 自由活動範囲と付帯諸室および廊下のスペースの数の分布
- 図 4.3 自由活動範囲 N 型の平面構成
- 図 4.4 自由活動範囲 C 型の平面構成
- 図 4.5 自由活動範囲 S 型の平面構成
- 図 4.6 自由活動範囲 F 型の平面構成

## 第 5 章

- 表 5.1 保育者による園舎の空間評価の設問
- 図 5.1 場所の有無による評価の比較
- 図 5.2 園舎の空間評価 普遍的項目
- 図 5.3 園舎の空間評価 保育者の視点

図 5.4 園舎の空間評価 子どもの視点

## 第6章

表 6.1 自由活動範囲と遊びスペースの関係

表 6.2 ヒアリング調査対象の事例概要

表 6.3 保育活動の場所と活動上のルール

表 6.4 遊びスペースの家具の可動性と建築条件

表 6.5 事例 NT の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.6 事例 SR の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.7 事例 RB の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.8 事例 MK の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.9 事例 KI の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.10 事例 EG の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.11 事例 SH の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.12 事例 SK の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.13 事例 TG の遊びスペースにおける保育者の発言

表 6.14 遊びスペースの物理的な見え方の評価と保育者の見守り方

表 6.15 遊びスペースでみられる活動についての発言

表 6.16 遊びスペースでみられる活動のまとめ

表 6.17 行動観察調査の実施概要

表 6.18 遊びスペースの視認性と場所選択の自由度からみる遊びスペース

表 6.19 遊びスペースの視認性と活動の多様性からみる遊びスペース

表 6.20 遊びスペースの家具の可動性と活動の多様性からみる遊びスペース

図 6.1 27 事例における遊びスペースの種類

図 6.2 9 事例における遊びスペースの種類

図 6.3 遊びスペースの家具配置と可動性 <造形室と絵本室>

図 6.4 遊びスペースの家具配置と可動性 <絵本コーナー>

図 6.5 遊びスペースの家具配置と可動性 <廊下のスペース>

図 6.6 遊びスペースの家具配置と可動性 <デンとアルコーブ>

図 6.7 事例 NT の平面図

図 6.8 事例 SR の平面図

- 図 6.9 事例 RB の平面図
- 図 6.10 事例 MK の平面図
- 図 6.11 事例 KI の平面図
- 図 6.12 事例 EG の平面図
- 図 6.13 事例 SH の平面図
- 図 6.14 事例 SK の平面図
- 図 6.15 事例 TG の平面図
- 図 6.16 事例 RB の平面図と調査範囲
- 図 6.17 事例 TG の平面図と調査範囲
- 図 6.18 事例 RB の保育室と絵本室の概要
- 図 6.19 事例 RB の 1 日の保育の流れ
- 図 6.20 事例 TG の保育室と絵本室の概要
- 図 6.21 事例 TG の 1 日の保育の流れ
- 図 6.22 図 6.22 絵本室の使われ方の実態
- 図 6.23 絵本室での活動場所と頻度
- 図 6.24 子どもの主体性を支援する要素と主体性の段階
- 写真 6.1 事例 NT の遊びスペース
- 写真 6.2 事例 SR の遊びスペース
- 写真 6.3 事例 RB の遊びスペース
- 写真 6.4 事例 MK の遊びスペース
- 写真 6.5 事例 KI の遊びスペース
- 写真 6.6 事例 EG の遊びスペース
- 写真 6.7 事例 SH の遊びスペース
- 写真 6.8 事例 SK の遊びスペース
- 写真 6.9 事例 TG の遊びスペース
- 写真 6.10 事例 RB の保育室
- 写真 6.11 事例 TG の保育室
- 写真 6.12 「おうちごっこ」スペースでみられた活動例

## 第 7 章

- 図 7.1 子どもの主体性を支援する 3 つの要素と保育者の関わり方



## Chapter1

### 研究の概要

## 1. はじめに

本研究に取り組む以前に、私自身は多くの保育所、幼稚園、認定こども園（以下、保育施設と総称する）に訪れる機会に恵まれた。どの施設も、それぞれに子どもを思い、保育や幼児教育のねらいを持って日々の生活が営まれていたが、賑やかで大人数が駆け回る施設から、こじんまりと静かに過ごす施設まで、一見すると、非常に施設差が大きく感じられた。それは、単に施設の理念や保育者の持つ保育観の違いによるものであるが、それと共に、やはり建築のあり様について深い興味が向いた。というのも、保育者による建築の評価は二分していると感じられたためである。

保育に明確な理念がある施設でも、園舎の建て替え後に「ここは失敗した」と感じる場所は多少あるだろうが、設計者の意図と保育方法が全く噛み合わず、デッドスペース化した諸室や廊下などを持つ施設が多く存在した。そこが、単なる物置としてでも新しい使命を持つならば、まだ良いが、設計者の「良かれ」が、結果的に子どもの事故や怪我を招いたり、その予防策として活動の制限を強いられたりしていたら、本末転倒どころか、迷惑な話である。空間の質を高めるために、設計に携わることは、私たち建築に携わる者が保育に貢献できるチャンスであるが、空間を計画し建てるだけでなく、使い続ける経過の中で生じる新たな課題への解決や、使い心地の向上に対し、現場の保育者との継続的な関わり合いと協働が必要とされている。

私たち建築に携わるものは、このことを、もっと自戒すべきではなかろうか。一部の、カリスマ的園長が率いる施設や、世界的に有名な幼児教育メソッドを忠実に実施する施設でなくとも、子どもが自らの興味や特性を伸ばし、主体的に活動できる保育施設は存在している。後者の施設において、保育をコントロールしているのは保育者であるが、建築空間も保育を支援し、子どもの活動に影響を与えているに違いない。保育施設において、子どもにとっての質の高い空間を考えると、それはやはり、多様な子ども一人ひとりの居心地の良さに繋がる提案となるべきであるし、そういった空間を保育者と協働で作り上げ続ける必要があると考える。

そういった動機を元に、本研究は、子どもの主体的な活動を支援する建築のあり方について、保育施設での調査分析から保育者による空間評価を軸に考察し、現状の課題と今後の園舎設計に資する知見を得ることを期待して進めたものである。本章では、就学前の幼児が通う保育施設の研究に関する背景を概観し問題意識を述べた上で、本研究における研究の目的と方法、論文の構成を述べる。

## 1.1 研究の背景と問題意識

### 1.1.1 子どもの生活環境と保育施設

保育施設における子どもの生活は、保育の長時間化に伴い家庭に次ぐ重要な生活空間として位置付けられ、学習や様々な経験のみならず、子ども一人ひとりにとって安心して休息できるなど居心地の良い環境であることが求められる。保育施設では、子どもの滞在時間は4時間から8時時間を超え、食事や午睡などの生活行為と様々な遊びが連続して行われる。また、その多くの時間は同世代の子ども同士の集団活動であると想定される。集団生活によって培われる社会性の獲得は、保育施設において重要な役割<sup>註1.1</sup>であるが、それと共に重要なことは、子ども自身が自らの意思で居る場所や活動を選択できる、というような主体性が確保されることである。

### 1.1.2 保育空間と保育方法

保育施設における子どもの活動は、幼稚園や保育所といった施設形態や、運営者の保育観や幼児教育の目的によって異なるが、使用する園舎の空間構成や規模にも影響を受ける。例えば、子どもが保育の中で活動する範囲は、保育室と廊下など限られた場所のみでおこなう施設と、食事室や絵本室といった様々な諸室や、デンやアルコーブなど廊下に整備されたスペース（以下、総称して付帯諸室とする）でも保育をおこなう施設がある。これらの施設を比較すると、保育中の活動が同様でも、活動の流れや保育室の位置付け、各諸室における子どもの過ごし方が変化していると予想される。

保育室は、その多くが見通しの良い均質的な空間であり、1日を通して活動が重層的に展開するという特徴があるため課題も多い。そういった空間的な制約を解決する方法として、いくつかの活動を保育室外でおこなうために、保育活動の場所を拡張した付帯諸室の整備が挙げられる。

食事室や午睡室など生活行為のための付帯諸室では、これらを整備することで、それまで保育室で完結していた活動が一部分離される。保育室で生活行為と遊び活動が全て行われる場合は、活動に合わせて都度生じる片付けが、遊びの中断や終了を強制し、家具の出し入れは保育者の身体的な負担になっていることが指摘されている<sup>文1.2</sup>。一方で、食事又は午睡の何かを保育室以外の付帯諸室でおこ

---

註1.1) 保育施設の役割として重要なものに「社会性の獲得」がある。佐藤ら（2002）<sup>文1.1</sup>は、保育施設における子

どもの行動観察から、子どもの遊びを観察し、環境要因との関係を分析した。

文1.1) 佐藤将之，高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察—園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究—その1，日本建築学会計画系論文集，562, pp. 151-156, 2002. 12

文1.2) 正保正恵，塩崎賢明：保育制度転換期における認可保育所の生活保育と食寝分離の意義と実態—東京都と地方都市（岡山市・福山市）の調査を通して，日本建築学会計画系論文集，622, pp. 25-32, 2007. 12

なうメリットとして、行為と場所の対応が明確になり、子どもの気持ちの切り替えがしやすいことや、保育者が準備や片付けをしている時間に、子どもを待機させる必要がなくなる点が考えられる。

また、造形室や図書スペースなど遊び活動のための付帯諸室では、生活行為の付帯諸室と同様に、特定の遊びと遊び場所を明確化し、遊びの混在や衝突を防ぐといったメリットや、例えばブロック遊びなど一部の遊び場所を、1日単位で片付けず、数日間継続して遊ぶことで、遊びが深まったり、遊びが発展していくといった効果が期待できる。さらに、遊びのための付帯諸室は、保育室より規模が小さく、より少人数での活動がしやすいと考えられるため、静的活動時に使いやすいという点が挙げられる。

### 1.1.3 問題意識

保育施設では、利用者である子どもと建築の間に、保育者という環境設定者が存在する。これは、子どもにとって良い建築空間があっても、そこで保育を実践する保育者の目的や狙いと、建築空間の意図が合致しなければ、空間は活かされないことを意味する。保育室の外に整備された付帯諸室が、保育者から評価されず、または使いづらい場合は、子どもの活動場所ではなく、物置やデッドスペースに変わる可能性がある。

保育の質の向上という点で、子どもの主体的な活動を支援する環境整備が重要であるといえよう。しかし、その実現には、保育方法とともに、保育者の空間評価の傾向を理解し、保育施設に求められる建築的、空間的要件を明らかにする必要がある。これまで、保育施設の建築計画は、集団活動に重心をおいて論じられてきたが、今後は、子ども一人ひとりの特性や、探究心を満たすなど、その精神面に寄り添う必要があると考える。

## 1.2 研究の目的

以上の背景と問題意識から、本研究は、保育施設に整備された付帯諸室を対象に、保育方法と保育者の空間評価から、子どもの主体的な活動を支援する建築的な知見を得ることを目的とする。具体的には、以下の5点を明らかにする。

- 1) 付帯諸室の種類と整備状況の概観：付帯諸室の種類として、生活行為と遊び活動に大別して整理し、その種類と整備状況を理解する。
- 2) 保育室と付帯諸室の配置関係と子どもの利用の自由度の評価：保育室と付帯諸室の諸室配置と、自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲（以下、自由活動範囲）の関係から、子どもの主体的な活動場所となりやすい付帯諸室の空間条件を示す。
- 3) 保育方針の指標として「自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲」による類型化：自由活動範囲を保育方針の1つの指標として捉え、保育空間と保育方法の関係を考察する。
- 4) 「自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲」の類型別の保育者の空間評価の差異：自由活動範囲の類型別に保育者の空間評価を整理し、保育施設として普遍的に求められる空間条件と、保育方針の違いによって差異がある空間条件の特徴を示す。
- 5) 子どもの主体的な活動からみた付帯諸室の役割：付帯諸室における、子どもの主体的な活動と保育者の使い方から、付帯諸室のもつ役割を明らかにする。

## 1.3 研究の方法

研究方法は、まず、全国の保育施設を対象に（1）保育施設の空間条件として、平面構成、諸室配置などと、（2）保育方法や保育上の活動ルール、活動範囲を整理し、（3）子どもの自由活動範囲に着目して、付帯諸室の使われ方や保育者の評価から、付帯諸室の役割と意義を分析する。

## 1.4 調査の方法

調査は、以下の手順でおこなう。

- ①全国の保育施設の内、平面図や断面図などの建築図面が入手可能な事例として、2000 年以降の建築雑誌に掲載された保育施設事例を抽出する。148 事例を抽出。【3章】
- ②保育方法（クラス構成・子どもがおこなう作業の種類）と保育空間（各活動と活動場所、自由遊び中の子どもの活動範囲、各空間的要素に対する評価）の現状について、アンケート調査をおこ

ない、各事例の情報を整理する。83 事例のアンケートを回収。【3 章】

③自由保育時間中に子どもが自由に活動できる範囲の差異を類型化し、空間構成および保育者による空間評価を比較分析する。68 事例を対象に分析。【4 章】

④③の事例の内、保育室に付帯する遊びスペースをもつ事例から、自由活动範囲内に 1 つ以上の遊びスペースを整備した事例を対象に、保育者へのヒアリング調査をおこなう。付帯諸室の設え、子どもの活動の様子、保育者の評価から、遊びスペースの比較をおこない、子どもの主体的な活動における遊びスペースの役割を考察する。9 事例へのヒアリング調査。【5 章】

以上の調査方法を通して、全国の保育施設から付帯諸室をもつ事例を抽出し（図 1.1）、子どもの自由活动範囲を視点に、保育者の空間評価の傾向と付帯諸室の中の遊びスペースの役割から、子どもの主体的な活動を支援する建築における示唆を得る。

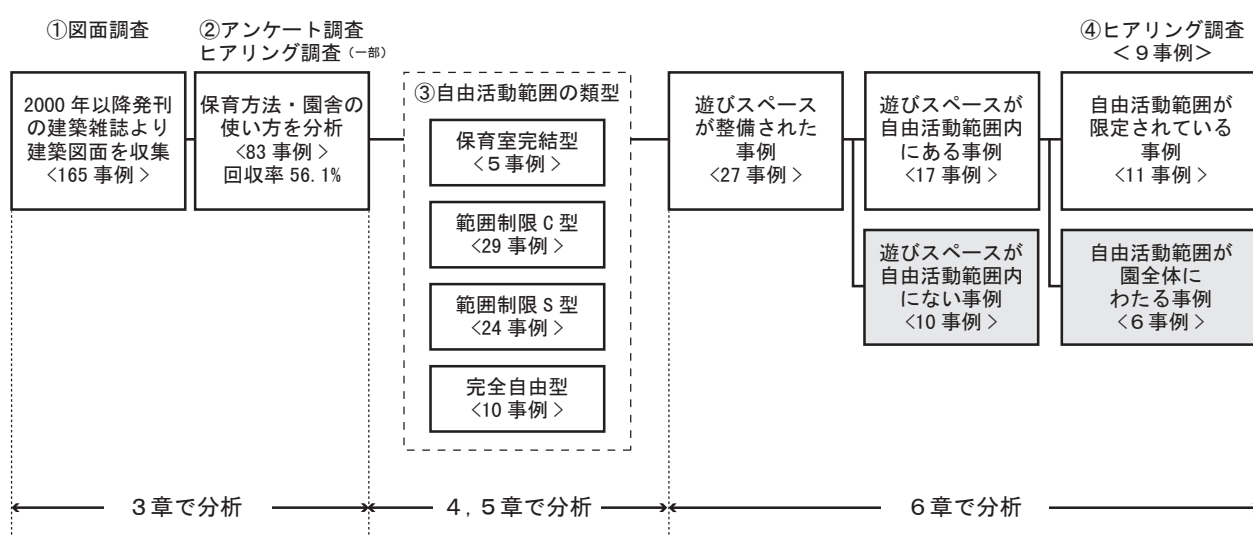


図 1.1 事例の抽出方法

研究の構成を図 1.2 に示す。

1 章では、研究の概要として社会的背景、研究目的と方法を述べる。

2 章では、研究の論理的背景と本研究の位置付けとして、保育施設の法的な位置付けや既往研究の系譜から、本研究の意義を述べた後、本研究の分析範囲と用語の定義を整理する。

3 章では、本研究で対象とする保育事例の保育空間と保育方法について概観する。保育施設における子どもの活動と保育空間の関係性を理解するために、付帯諸室の種類と規模、諸室配置、各活動の活動場所や、保育者が子どもに課しているルール、自由に活動できる範囲、増改築の有無などを考察する。

4 章では、3 章で得られた保育空間と保育方法の関係から、自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲を「自由活動範囲」と称し、付帯諸室を含む自由活動範囲を類型化する。自由活動範囲を保育方針の 1 つの指標として捉え、その設定範囲によって、子どもの活動の自由度が異なると過程し、保育空間と保育方法の関係を考察する。

5 章では、4 章から続いて付帯諸室を含む自由活動範囲の類型別に、保育者の空間評価の傾向を考察する。

6 章では、5 章までの付帯諸室を含む自由活動範囲の分析から、付帯諸室の内、自由活動範囲内に 1 つ以上の遊びに関する付帯諸室を持つ事例を対象に、子ども主体的な活動からみた遊びスペースの役割を考察する。

7 章では、これまでの分析から得られた、保育空間と保育方法における知見と遊びスペースの役割から、子どもの主体的な活動を支援する保育空間の建築的要件を示唆する。

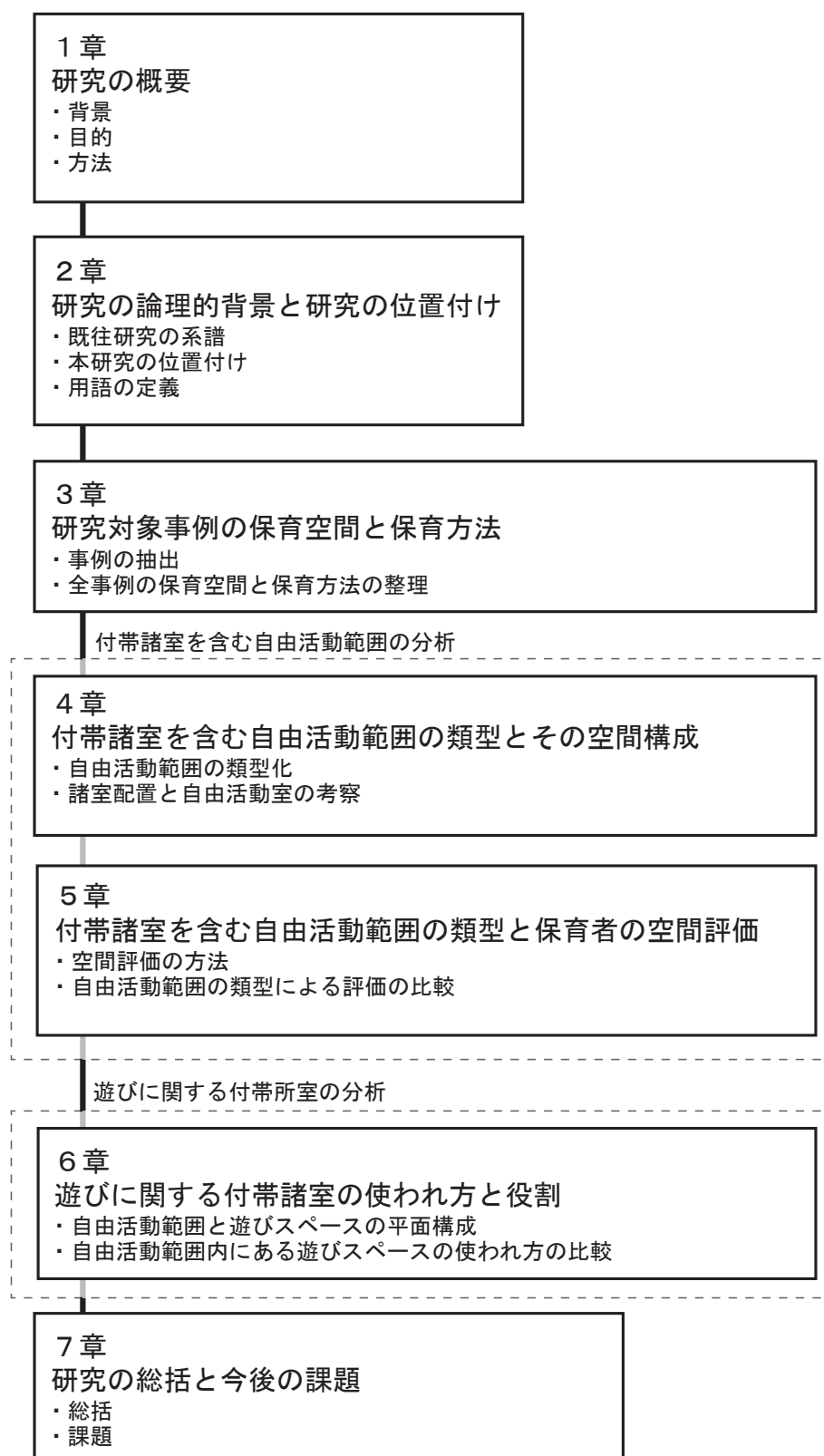


図 1.2 論文の構成



## Chapter2

---

### 研究の論理的背景と本研究の位置付け

## 2.1 本章の概要

本章では、本研究における理論的背景と研究の位置付けを示すために、まず、保育施設の法的位置づけや保育、幼児教育の目標、幼児の発達課題など論理的背景（2.2）を述べた後、既往研究の系譜から本研究の意義を示す（2.3）。そして、最後に、本研究の範囲と用語の定義を述べる（2.4）。

## 2.2 研究の理論的背景

まず、本研究の対象である保育施設における論理的背景として、保育環境を保育方法と保育空間の両面から整理し、現状の位置付けや課題について述べる。

### 2.2.1 保育施設に関する社会問題

現在、日本における保育需要は上昇している（図 2.1）。2008 年と 2018 年の保育利用率をみると 58.6% から 69.2% に増加しており、特に 1.2 歳児の増加が大きい。施設形態別にみると、認定こども園の新設と保育所の利用率は増加している一方で、幼稚園の利用率は減少している。その理由は、女性の就労、キャリア形成に対する価値観の変化や、共働き世帯の増加によって、子どもを長時間預けたいという保育需要が高まっているためである。つまり、現在、少子化が進行しているにも関わらず、

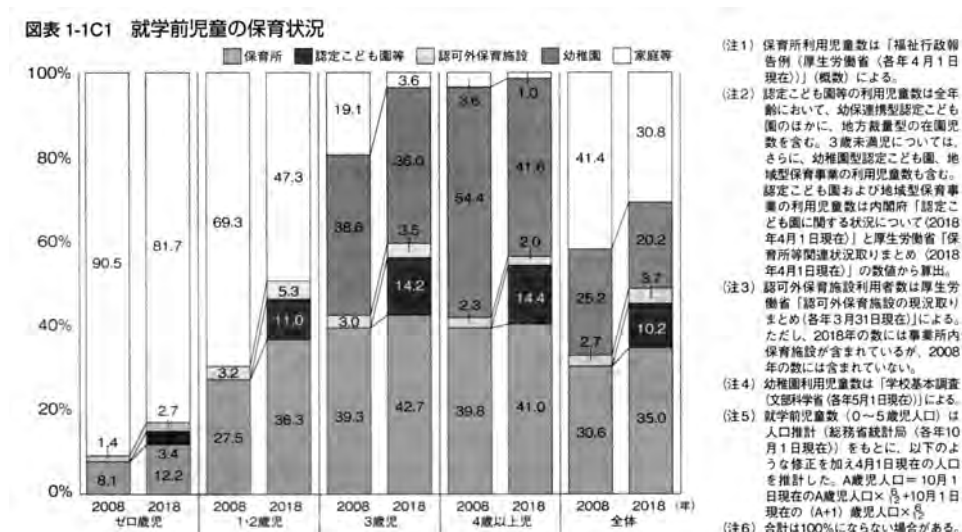


図 2.1 就学前保育児童の保育状況（保育白書 2020<sup>文 2.1</sup>, 図表 1-1C1）

文 2.1) 全国保育団体連絡会・保育研究所：保育白書 2020, ちいさいなかま社, 2020. 8

大都市を中心とした、待機児童の増加や過酷な保活事情<sup>註2.1</sup>は、社会問題化している。こうした「預け先があるだけでも幸運」という状況は、保育サービスの利用者である保育者に選択肢を与えず、結果的に子どもの福祉に寄与していない。量の拡充は当然の課題であるが、保育の質についての議論を進めることが求められている。

国は、保育の充実を図るために、2015年4月より「子ども・子育て支援新制度<sup>註2.2</sup>」を実施した(図2.2)。この制度は、幼児教育や保育の拡充と質の向上を目指し、市町村が主体となって、保育ニーズに対応した環境整備や事業の推進を行おうとするものである。従来からの変更点として、①「幼保連携型認



図 2.2 子ども・子育て支援新制度の概要(内閣府)

註 2.1) 「保育園落ちた、日本死ね」というタイトルの匿名ブログ(2016年2月15日記事, <https://anond.hatelabo.jp/20160215171759>, 最終アクセス 2020. 11. 20) は、東京都での保活の結果、申請した全ての保育施設から入所を断られ、子どもは待機児童になり、母親は退職を余儀なくされた実体験を綴ったものである。センセーショナルで切実な内容が注目され、国会の場で取り上げられるなど、待機児童と過酷な保活の問題を再認識させ、社会全体の問題としての認知度を向上させた。

註 2.2) 「子ども・子育て支援新制度」とは、平成 24 年 8 月に成立した「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」の子ども・子育て関連 3 法に基づく制度の総称である。就学前の子どもだけでなく、妊産婦や小学校以降の子どもの支援など、幅広い子どもに対する支援制度である。

定こども園」の法的位置付けを明確にし、認可施設としたことによる認定こども園の普及、②幼稚園での一時預り事業（保育）の推進と支援、③保育の無償化（2019年10月より）、④子どもの人数あたりに配置される保育者の人数の改善と、保育者の処遇改善、などが挙げられる。第一に量的拡充を目的に進められている政策であり、保育の質向上に関する踏み込んだ法整備や支援策にはなっていない。

## 2.2.2 保育施設における施設形態の種類と法的位置づけ

日本において、未就学児が家庭を離れて通所する施設の内、3歳児以上が対象の施設は、保育所・幼稚園・認定こども園の3種類ある。まずは、保育施設の歴史的系譜をみる。

### 2.2.2.1 保育施設のはじまり

日本における保育施設の始まりは、1876年に東京女子師範学校（現 御茶の水女子大学）に設立された幼稚園である。当初、社会の幼児教育に対する認識の低さや、建物の水準の高さから一般に普及するには至らなかった。民間で生じた寺子屋や私塾とは性格が異なり、一部の富裕層の為の場所であったとされる<sup>文2.1</sup>。しかし、1899年に「幼稚園保育及設備規定」が制定され、位置付けが明らかになると、1909年には全県に1園が置かれるまでに普及した。その後、幼児教育の発展と共に、制度整備の要望が高まり、1926年に「幼稚園令」が出されたことにより、他学校と同一の法的位置付けを得た。これをきっかけに園数は増加するが、太平洋戦争の開戦により衰微した。戦後、1947年の「教育基本法」と「学校教育法」の教育改革では、幼稚園のあり方に大きな変化はなかったが、後の、1970年代に起こった「第三の教育改革」では、幼児教育と初等教育の一貫性が主要テーマの1つに挙げられている<sup>文2.2</sup>。

保育所の始まりは、1890年に私塾「新潟静修学院（設立者：赤澤鐘美）」に付属して赤澤ナカ（鐘美の妻）が、開いた幼児室だといわれている。両親が共働きの塾生が、幼い弟妹を連れて来塾するのをみて、別室で手芸や歌を教えたといわれる。女子の労働力確保のための託児所として生まれ、1908年には、一般に公開された。1947年には児童福祉法により福祉施設として制度化された<sup>文2.3</sup>。

認定こども園は、「就学前の子どもに関する教育，保育等の総合的な提供の推進に関する法律」の成立により、2006年から制度が始まった。これまで就学前の子どもが通所する保育所と幼稚園の役割を踏まえつつ、多様化するニーズに合わせて、子どもの教育・保育ならびに保護者に対する子育て支

文2.1) 川添登，内田祥哉，青木正雄，中山克己，加藤隆：建築学体系 32 学校・体育施設，彰国社，1957.7

文2.2) 長倉康彦，長沢悟，上野淳，小川信子，渡邊昭彦：新建築学大系 29 学校の設計，彰国社 1983.6

文2.3) 笈和夫，萩田秋雄，吉田あこ，加藤隆：新建築学大系 32 福祉施設，レクリエーション施設の設計，彰国社，1987.11

援の総合的な提供を推進するために整備された<sup>文2.4</sup>。保育所と幼稚園の一元化の動きは昭和初期からあるとされるが、認定こども園の創設以後も達成されていない。

## 2.2.2.2 現在の保育施設の位置付け

現在も、日本の保育施設は、施設形態によって、入所する子どもの年齢や保育時間、管轄する省庁や法律が異なる（表 1.2）。

保育所は、児童福祉法 39 条において「保育を必要とする乳児・幼児を日々保護者の下から通わせて保育をおこなうことを目的とする児童福祉施設」とされている。管轄は私立公立問わず市町村であ

表 2.1 保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園の比較（保育白書 2020<sup>文2.5</sup>，図表 1-2G1）

	保育所	幼稚園	幼保連携型認定こども園
(1) 所 管	(国) 厚生労働省・内閣府 基準・施設整備は厚生省、運営費などの財源は内閣府  (都道府県) 知事部局  (市町村) 首長部課	(国) 文部科学省・内閣府 公立、私立私学助成型幼稚園はすべて文科省 給付型幼稚園の財源は内閣府、運営基準は文科省 (都道府県) 公立は教育委員会、私立私学助成型幼稚園は知事部局(私学担当) (市町村) 私立給付型幼稚園は首長部課、公立は教育委員会	(国) 管轄は内閣府・文部科学省・厚生労働省だが、窓口は内閣府  (都道府県) 知事部局  (市町村) 首長部課
(2) 性 格	児童福祉施設【児福 39】	就学前の教育施設【学法 22】	子どもに対する学校としての教育及び児童福祉施設としての保育並びに保護者に対する子育て支援事業の相互の有機的な連携を図る施設【認定こども園法 9】
(3) 目 的	保育を必要とする乳児・幼児を日々保護者の下から通わせて保育を行う【児福 39】	幼児を保育し適当な環境を与えてその心身の発達を助長する【学法 22】	満3歳以上の子どもに対する教育並びに保育を必要とする子どもに対する保育を一体的に行い、保護者に対する子育て支援を行う【認定こども園法 2】
(4) 設置認可等	(公立) 都道府県知事への届出 、 (私立) 都道府県知事の認可【児福 35】 【社福 69】	(公立) 都道府県教育委員会への届出【学法 4 の 2】 (私立) 都道府県知事の認可【学法 4】	(公立) 都道府県知事への届出【認定こども園法 16】 (私立) 都道府県知事の認可【認定こども園法 17】
(5) 入園入所	対象 保育を必要とする乳児・幼児、その他の児童【児福 39】 定員に余裕がある場合は私的契約児の入所可【児童家庭局保育課長通知（平成10年2月13日児保第3号）】	保護者の希望による。制限なし	満3歳以上の子ども及び満3歳未満の保育を必要とする子ども【認定こども園法 11】
	対象児年齢 0歳から就学前の乳幼児 特に必要があるときはその他の児童【児福 39】	満3歳～就学前までの幼児【学法 26】	0歳から就学前の乳幼児【認定こども園法 11】
	手続き・決定 保育の実施を希望する保護者は市町村に保育の必要性と必要量（短時間か標準時間）の認定申請、保育所入所申請書を提出、市町村は認定し、希望の保育所への受け入れが可能な場合入所させる。希望の保育所の定員より申請が超過している場合、市町村は公正な方法で選考し入所を決定する【児福24】【子支法19、20】【子支法附則 6】【子規則1～16】【児童家庭局長通知（平成9年9月25日児発第596号）】	入園を希望する保護者の申請により、幼稚園設置者との契約により決定	利用する保護者は教育・保育給付の支給認定を市町村に申請して受け、入園申請を園に提出する【子支法 19、20】【子規則 1～16】

文 2.4) 文部科学省：文部科学白書 第二部第二章 認定こども園について，2006 年

文 2.5) 全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2020，ちいさいなかま社，2020.8

(6) 保育時間・保育日数	1日8時間を原則として、その地方における状況を考慮して、保育所の長が定める【児設基34】 保育日数についての規定はないが、費用の額の基準では、1日の開所時間は11時間。おおよその年間保育日数は300日としている。土曜日開所の日数に応じて保育費用の段階的削減規定あり。11時間以上の延長保育については加算額が支給される【費用基準等】	1日4時間を標準とする【幼稚園教育要領】 毎学年の教育週数は39週を下ってはならない【学規則37】 通常教育時間終了後の預かり保育については新制度により地域子ども・子育て支援事業の一時預かり事業（幼稚園型）として実施するか、私学助成の補助を活用し実施する場合もある	教育に係る標準的な1日あたりの教育時間は4時間を標準、原則として年間39週以上とし、保育を必要とする子どもに該当する教育及び保育の時間は、1日8時間を原則とするが、開園時間は保育所と同様11時間とすることを原則とし、園長が定める。その地方における園児の保護者の労働時間その他家庭の状況等を考慮する【教育・保育要領第1章第2】【連携園設基9】
(7) 保育者	保育士【児福第1章7節】 保育士資格取得	幼稚園教諭【学法27】【教育職員免許法4】 幼稚園教員免許状取得	保育教諭（保育士資格と幼稚園教員免許の併有）【認定こども園法15】
(8) 職員の配置	保育士、調理員、嘱託医の必置。ただし調理業務の全部を委託する施設は調理員をおかないことができる 保育士の数は 乳児おおむね3人につき1人以上 3歳未満児はおおむね6人に1人以上 3歳児はおおむね20人に1人以上 4・5歳児はおおむね30人に1人以上 ただし1保育所2人を下ることはできない【児設基33】特例あり【児設基94～97】	園長、教頭、教諭の必置【学法27】 1学級の幼児数は35人以下を原則とし、学級毎に1名の教諭を配置【幼設基3、5】 養護教諭又は養護助教諭及び事務員を置くように努めなければならない（努力義務）【幼設基6】	1学級は35人以下を原則。同じ年齢にある園児で編成する 各学級ごとに保育教諭等を1人以上置く 園児の教育及び保育（3歳未満児についてはその保育）に従事する職員の数は保育所と同じ基準【連携園設基4、5】
(9) 保育内容	保育内容の最低基準として「保育所保育指針」が厚生労働大臣によって告示される【児設基35】	教育課程の基準として「幼稚園教育要領」が文部科学大臣によって公示される【学規則38】	教育及び保育の内容は主務大臣が定め、その際、幼稚園教育要領と保育所保育指針との整合性の確保と小学校における教育との円滑な接続に配慮しなければならないと規定【幼保連携型認定こども園教育・保育要領】を内閣府・文科省・厚労省告示で定める【認定こども園法10】
(10) 保育料	市町村が国基準額を上限に保育料額を定め、市町村で徴収する【子施令4～6、9～13】 国の保育料基準額については所得に応じた額を定めている。「無償化」実施により、2019年10月以降、3歳以上児、住民税非課税世帯の0～2歳児の市町村設定の保育料額がゼロになる。ただし、3歳以上児については、副食料費（4,500円）が公定価格から除かれるので園で保護者からの実費徴収となる【子施令】【子規則】【子ども・子育て支援法施行令等の一部を改正する政令及び子ども・子育て支援法施行規則の一部を改正する内閣府令の公布について（通知）】	私学助成型幼稚園は各幼稚園設置者が決める。保護者の所得の多寡を問わず均一料金。「無償化」により2019年10月から、月2万5,700円まで給付され負担軽減がなされる【子支法30の4】【子施令15の6】 同時に就園奨励費補助金制度は廃止された 給付型幼稚園は、国基準額を上限に市町村が保育料額を決め、園で徴収する【子施令4～6、9～13】 「無償化」により2019年10月から市町村設定の保育料額がゼロになる【子施令】【子規則】【子ども・子育て支援法施行令等の一部を改正する政令及び子ども・子育て支援法施行規則の一部を改正する内閣府令の公布について（通知）】	国の基準を上限に、市町村が保育料額を決め、園で徴収する【子施令4～6、9～13】 国の保育料基準額については所得に応じた額を定めている。「無償化」実施により、2019年10月以降、3歳以上児、住民税非課税世帯の0～2歳児の市町村設定の保育料額がゼロになる。ただし、3歳以上の2号認定子どもについては、副食料費（4,500円）が公定価格から除かれるので園で保護者からの実費徴収となる【子施令】【子規則】【子ども・子育て支援法施行令等の一部を改正する政令及び子ども・子育て支援法施行規則の一部を改正する内閣府令の公布について（通知）】
(11) 国庫補助	○国が定める基準により算定した費用の額に相当する額（保育費用）の支給（私立） 市町村が児童福祉法24条第1項により実施する保育の費用については、支援法27条第3項第1号の国が定める費用の額（公定価格）に相当する額を保育費用として当該保育所に委託費として支払う。財源は支援法の施設型給付費の財源をあてる【子支法附則6】  ○特別保育事業等に対する補助制度 延長保育、夜間保育、一時保育、子育て支援事業等【児福6の3で示された事業について、子支法59に基づき助成金を補助】  保育所の新設・増築に対する補助制度（社会福祉法立）。公立は2006年度より一般財源化	○幼稚園の運営費 ＊公立は地方交付税に計上（一般財源） ＊私学助成型幼稚園は私立幼稚園の経常経費に対し、都道府県が助成し、国が一定額を補助 ＊給付型幼稚園は支援法に基づき保護者に施設型給付費を支給し、園が代理受領  ○特別補助 預かり保育推進事業、子育て支援活動の推進など  幼稚園の新設・増築・改築等に対する補助制度（学校法人立）。公立は2008年度より交付金化	利用する保護者に対して施設型給付費が支給される。園はその施設型給付費を市町村に請求し代理受領する。そのため、園への運営費に関する公費補助はない【子支法27】  幼保連携型認定こども園の新設・増築・改築等に対する補助制度。公立は一般財源化

☆国表では学校教育法【学法】、同法施行規則【学規則】、幼稚園設置基準【幼設基】と表記する。以下同様。

☆児童福祉法【児福】、社会福祉法【社福】、児童福祉施設の設備及び運営に関する基準【児設基】

☆子ども・子育て支援法【子支法】、同法施行令【子施令】、同法施行規則【子規則】

特定教育・保育、特別利用保育、特別利用教育、特定地域型保育、特別利用地域型保育、特定利用地域型保育及び特例保育に関する費用の額の算定に関する基準等【費用基準等】

☆就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律【認定こども園法】、幼保連携型認定こども園の学級編制、職員、設備及び運営に関する基準【連携園設基】

（2020年6月 村山祐一作成）

る。保育内容の基準は「保育所保育指針」、建築基準は「児童福祉法最低基準」に定められている。

幼稚園は、学校教育法において「幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」教育施設である。管轄は、私立幼稚園は都道府県、公立幼稚園は設置者である市町村の教育委員会が所轄する。教育内容の基準は「幼稚園教育要領」、建築基準は「幼稚園設置基準」に定められている。

認定こども園は、以下の2種類に大別される。まず、幼保連携型認定こども園は、都道府県知事の認可を受ける単一の認可施設。教育内容の基準は「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、建築基準は「幼保連携型認定こども園の学級の編制、職員、設備及び運営に関する基準」に定められている。そして、幼保連携型以外の認定こども園（幼稚園型・保育所型・地方裁量型）は、都道府県条例に基づいて知事の認定を受ける施設。認定こども園の設置は「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（通称、認定こども園法）」によって定められ、児童福祉法と学校教育法の特例について規定しているため、保育内容については保育所保育指針・幼稚園教育要領との整合性確保が義務付けられている。

なお、本研究では、子どもが家庭を離れて通所する施設として、これらの保育所、幼稚園、認定こども園を総称し「保育施設」と呼ぶ。また、施設において子どもに教育や保育を施す専門職員は、それぞれ保育士、幼稚園教諭、保育教諭と呼称が異なるが、総称し「保育者」と呼ぶ。

### 2.2.3 保育施設の建築計画

園舎の建築計画について、保育所は（前述<sup>文2.2</sup>）、「子どもの生活を基本に考え、－中略－幼児の具体的な体験を通してその生活習慣や知能の発達が育成されるように環境を整える」とされている。さらに「幼児の仲間意識が持ちやすい小集団を基本」とし、「指導する側（保育者）が働きやすく、全体を把握しやすいようにいくつかの小集団になるよう小室でグループ配置し、さらに保育・サービス・管理各部門別にまとめていく」としている。幼稚園は（前述<sup>文2.3</sup>）、「幼児自身の主体的な活動意欲を基礎にして、具体的な日常経験を重ね、－中略－創作活動に置き換えられる。それは遊びを通して得られるから、幼児が思いきって遊べる環境を保証しなければならない」とし、「そこで行われるであろう行為を予測して、机と椅子を設置する空間だけでなく、自由に動けるような豊かな空間を用意」し、「一人一人の園児にとって好ましい空間であるとともに、集団での行為や要求にも答えられ」ることが求められるとされている。

双方の園舎の空間構成の模式図をみると（図2.3, 2.4）、均一の広さの保育室が一行に並び、廊下か

ら接続する形を基本としている。遊戯室や園庭との接続には多様なバリエーションがみられるが、保育所と幼稚園の間に建築計画上の明確な特性があるとはいえない。また、この空間構成は、各施設の方針に合わせてアレンジされたり、改良されていると考えられるが、分筆者の小川信子氏によれば、「現在の幼稚園をみると、1876年に東京女子師範附属幼稚園が開園した時から、その空間はあまり変化していない。むしろ実験的に作られていた初期の時代より画一化し、狭小化しているともいえよう」と評されている（前述<sup>文2.2</sup>p203より）。

保育空間の多様性については、保育所では、保育室内に①作業の場（机や椅子を設置した場所）、②創作活動の場（音楽や遊戯が展開される場所）、③静室（応接間風の遮音、吸音性のある場所）といった、いくつかの空間分けをして、遊びのよりどころとなる場所を作るよう示唆している。一方、幼稚園は、1960年以降、従来までの保育室と遊戯室だけという保育空間から変化がみられ、1975年以降に多様化して、豊かな空間づくりが行われるようになったとされる。空間例としては、保育室内のコーナー、保育室の前室（便所、手洗い、コート掛けの場所）、図書室、工作室、音楽室、集会室兼給食室、

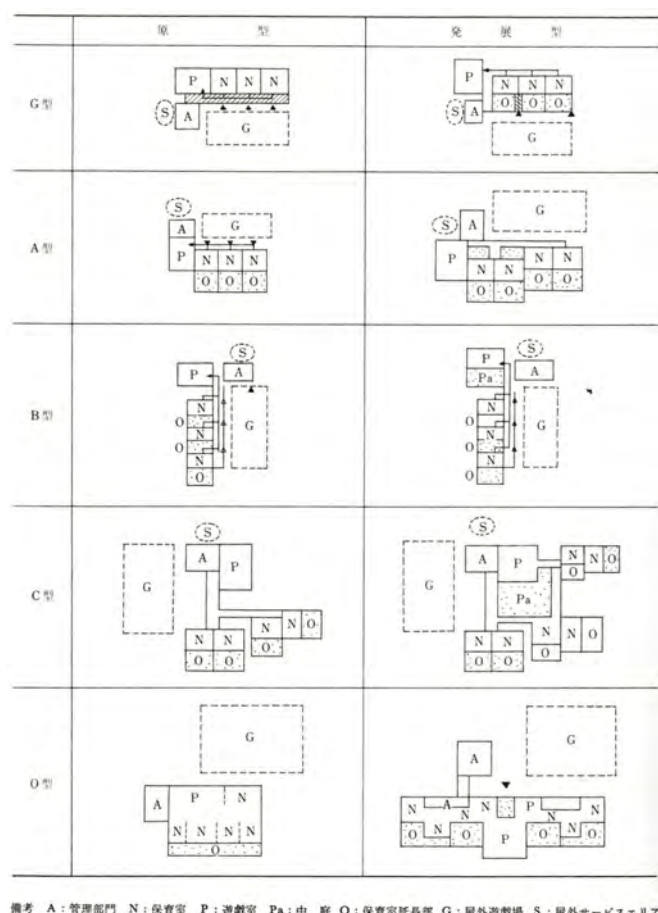


図 2.3 保育所の空間構成（新建築学体系 32 文 2.2, p44

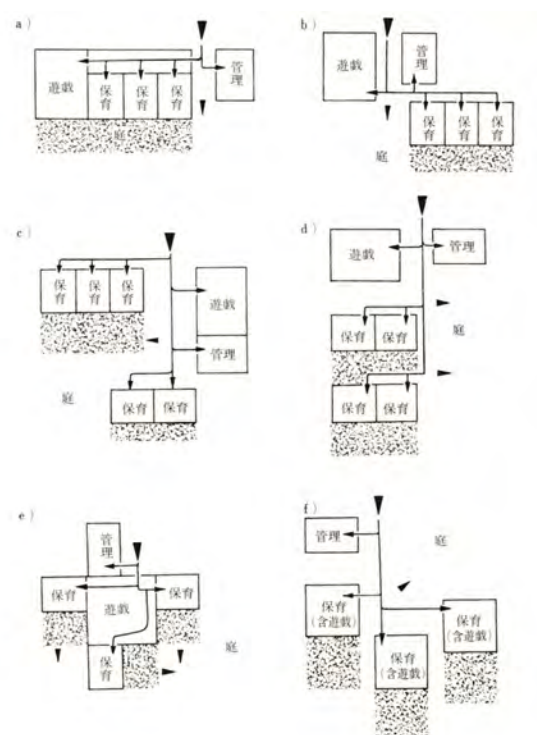


図 2.4 幼稚園の空間構成（新建築学体系 29 文 2.3, p217 図 4.5 さまざま空間構成）

図 2.8 園舎建築の基本型と発展型）

ギャラリーなどがあり、保育室と遊戯室以外にも、子どもが生活する場や遊ぶ場所の広がり意識され始めたといえよう。これらの場所は、本研究が主題として扱う付帯諸室であるが、子どもの自由な利用や、子どもにとっての居心地の良さについては言及がない。例えば、図書室の整備では、「先生のために必要な図書、親たちへの推薦図書、教養書なども設けておく。幼稚園の記録や資料などを整理して参考資料として取り扱えるように収納戸棚などを設置する」といったように、保育者や保護者の利用について配慮を求める記述はあるが、子どもにとっての本の取りやすさ、本棚の高さ、本を読むスペースの設えについては、具体的な例示がない。あくまでも、グループでの保育や教育を実践する場所として整備され、本来、保育施設の計画で目的とすべき、子ども一人ひとりの居心地の良さや、子どもにとって「好ましい空間」という意識が薄い様に感じられる。

以上のことより、建築計画の系譜を整理すると、保育所と幼稚園は共に、子どもの生活行為や遊びを通して、子どもの育ちを支援する環境を整備し、子どもの仲間意識を育てつつ、一人ひとりにとっても好ましい空間であることを目的に計画されてきた。しかし、実際の計画では、初期の実験的で、建築水準の高い空間構成から、画一化と狭小化が進み、建築計画の上では、ほとんど変化がない。幼稚園では、保育所と遊戯室以外の諸室（付帯諸室やギャラリー、前室など）の整備例がみられ、空間は多様化しているが、子どもの居心地の良さや、一人ひとりの特性に合わせたような、子ども主体の空間構成や空間の質の確保に繋がっていない。これは、これまで建築計画が示唆してきた膨大な研究成果が、実際の設計に活かされていないと評することもできるが、その前に、次項（2.2.4）で現在の保育・幼児教育の方針と園舎に影響を与える規制緩和政策の視点から、この問題を取り上げる。

#### 2.2.4 保育・幼児教育の方針と規制緩和

保育施設における、保育や教育の方針は、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領によって示されている。2018年の改定<sup>註2.3</sup>により、保育所保育における幼児教育の積極的な位置付けと指針や要領における記載内容の共通化、食育推進と防災項目の新設、保護者や地域と連携した子育て支援の必要性、職員の資質や専門性の向上などにおいて、記載事項が見直された。具体的には、保育所保育指針では「保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ」をおこなうことで、保育とは、「養護と教育」であるという位置づけを示し、幼稚園やこども園と同様に幼児教育を行う施設としての立場を明確にしている。また、幼稚園教育要領では「主体的・対話的で深い

註2.3) 保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、2018年3月31日に揃って改定、2018年4月1日施行された。

学びの充実」などが重点項目として挙げられ、改めて就学前の子どもに対する保育の質を向上する方針が示されている<sup>文2.6</sup>。

また、「育みたい資質・能力」として、「知識・技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性など」を一体的に育むよう努めるよう促し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、具体的に10項目<sup>註2.4</sup>を具体的に示した。これらが、現在の保育施設の方針として、国が示しているものである。但し、小学校以降に比べると、保育施設の実践や活動は多岐にわたり、施設差が大きい。独自のメソッドや運営方針の元で特色ある活動を提供する施設や、モンテッソーリ<sup>註2.5</sup>やシュタイナー<sup>註2.6</sup>、レッジョエミリアアプローチ<sup>註2.7</sup>等、諸外国の方法論を取り入れた施設、またそれらが混在し、独自解釈で再構成された施設も多い。

保育方針については、様々な改善案が挙げられている一方で、待機児童の解消を急務とした政策の中で、1990年以降、物的環境条件は引き下げ続けられている。建築空間としての施設構成や必要諸室、面積基準<sup>註2.8</sup>については制定(1950年前後)以降、見直されるどころか、規制緩和が繰り返し行われた(表2.2)ことで、基準は後退している現状である。また、2019年10月からは「保育の無償化」が実施された。これに関連して、公立保育所の民営化や統合による大規模なこども園化が促進すると懸念されている。さらに、保育の無償化は、認可外保育所も対象になっているため、これからの「保育の質」をどう担保するのか、議論を進めることが急務である。

註2.4) 幼児の終わり、つまり小学校入学前に育ってほしい姿として、次の10項目が定められた。1)健康な心と体、2)自立心、3)協同性、4)道徳性・規範意識の芽生、5)社会生活との関わり、6)思考力の芽生、7)自然との関わり・生命尊重、8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、9)言葉による伝え合い、10)豊かな感性と表現

註2.5) モンテッソーリは、マリア・モンテッソーリがイタリアで提唱した幼児教育の手法で、子どもの「自発性」を重んじ、数多の教具を用いることが特徴である<sup>文2.7</sup>。

註2.6) シュタイナー教育は、ルドルフ・シュタイナーがドイツで提唱した手法で、体験を通して「意思」や「想像力」を育み、子ども自身の意思で自由に行動できるよう育てることを目的としている<sup>文2.8</sup>。

註2.7) レッジョエミリアアプローチは、ローリス・マラグッチがイタリアのレッジョエミリア市で始めた手法で、芸術表現や子ども同士による議論を重んじる方針に特徴がある<sup>文2.9</sup>。

註2.8) この基準は、定行ら(2008)<sup>文2.10</sup>による国際比較研究によると、米、仏、独、スウェーデン、イングランド、ニュージーランドの6カ国間中、最も低い水準であることが明らかにされている。

文2.6) 全国保育団体連絡会・保育研究所：保育白書2017、ちいさいなかま社、pp.154-160、2017.8

文2.7) 早田由美子：モンテッソーリ教育思想の形成過程、勁草書房、2003.4

文2.8) ルドルフシュタイナー：子どもの教育、筑摩書房、2003.6

文2.9) 佐藤学：驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育、ワタリウム美術館編、2011.3

文2.10) 定行まり子(調査研究委員長)：機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業、総合報告書、社会福祉法人全国社会福祉協議会、2008

「我が国の子どもの生育環境の改善に向けて－生育空間の課題と提言 2020-<sup>文2.11</sup>」では、子どものための専門施設への提言の中で、「多様な構成、発達段階の子どもに対応して保育や教育施設は選択肢が多く、主体的な遊び・学を触発する柔軟性、環境性能にも優れた質の高い空間とすべきである」とし、子どもの居場所となる空間づくりの重要性を述べている。「質の高い空間」の実現には、まず、子どもや保育施設に対する、社会の不寛容を是正することが必要である。日本では、保育施設が迷惑施設として建設反対運動にあうなど、社会や地域で子どもを育てるといった風潮が薄れ、保育施設を守るような法的支援がない。また、待機児童を解消するという名目で繰り返された、規制緩和は、結果的に空間の質を低下させている一因であり、積極的に解消する必要がある。保育施設が、現在の保護者の多様なニーズに応えるためには、大規模な保育施設を利便性の高い場所に整備することだけが解決策ではない。待機児童が多い未満児を対象にした小規模型の施設や、幼稚園での未満児の受け入れ（又は、こども園化）についても、保育の質を担保した上で一層推進していく必要がある。現状のように、子どもと保育者が、保育施設を選べない状況では、保育の質の低い施設の淘汰に繋がらない。子ども

表 2.2 保育政策の流れと規制緩和

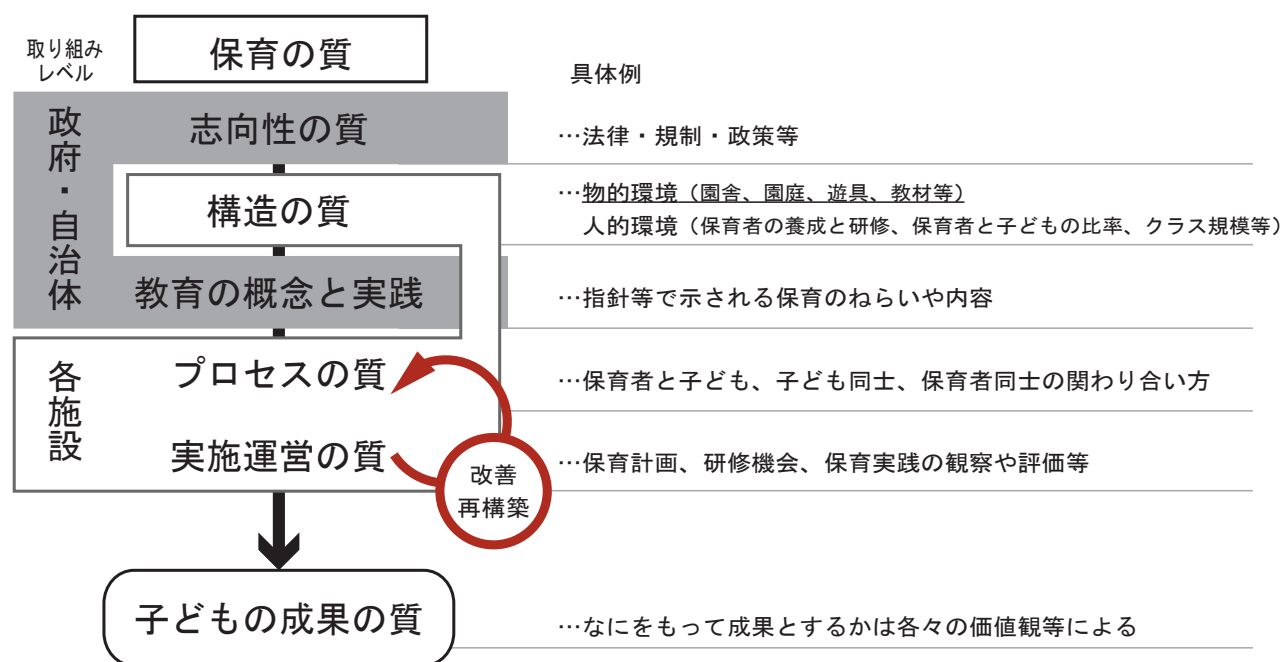
年代	保育政策の流れ	規制緩和事項（保育所）
1870	日本初の幼稚園開設（1876） 日本初の保育所開設（1890）	
1940	児童福祉法制定（1947） 保育要領作成（1947） 保育所保育指針作成（1948） 保育所整備5カ年計画1次（1967） 2次（1971）	
1970		
1990	1.57ショック（1990） エンゼルプラン（1994）	
2000	新エンゼルプラン（2000） 待機児童ゼロ作戦（2002） 認定こども園法成立・施行（2006） 新待機児童ゼロ作戦（2008）	
2010	子ども・子育てビジョン（2010） 子ども・子育て支援新制度（2014） 子育て安心プラン（2017） 幼稚園教育要領改訂（2018） 保育所保育指針改訂（2018）	<b>定員</b> （1998）超過 4月10%、途中15% <b>定員</b> （1999）超過 4月15%、途中25% <b>設主</b> （2000）設置主体の制限撤廃 <b>定員</b> （2001）年度後半の規制撤廃 <b>防災</b> （2003）防火・避難基準緩和 <b>定員</b> （2010）定員の超過規制撤廃（過密化促進） <b>防災</b> （2014）避難用外階段必置規制の緩和 <b>配置</b> （2015）地域型の設置基準の緩和 <b>資格</b> （2016）有資格者配置の緩和 他資格者の代替 <b>採光</b> （2017）事務所等からの転用物件における 保育室採光規定の緩和

文 2.11) 日本学術会議 子どもの生育環境分科会：我が国の子どもの生育環境の改善に向けて－生育空間の課題と提言 2020-、2020.9

にとって良い保育環境とは何かを考える上で、子ども一人ひとりにとっての居心地の良さや安心感を  
感じられる空間であることを追求しなければならない。子どもの育ちのためには、多様で新鮮な経験  
が可能であることが保育施設の重要な役割であるが、自分のやりたい事を追求したり、ほっと一息つ  
けるような、個人としての子どもに寄り添う場であることが求められよう。

## 2.2.5 保育の質

保育の質は、一義的に定義づけることはできない。世界的には、21世紀からEUやOECD（経済協力  
開発機構）を中心に就学前の保育・幼児教育改革が進められてきた。OECDの報告書（2006）<sup>文2.12</sup>では  
保育の質を次の6つに整理している。これを元に、淀川・秋田ら（2016）<sup>文2.13</sup>は、「志向性の質」や  
「教育の概念と実践」は政府や自治体レベル、「構造の質」、「プロセスの質」、「実施運営の質」は施設  
レベルの取り組みとして整理し、それらの結果として子どもの「成果の質」がもたらされるとした（図  
2.5）。この概念では、上位の項目に影響を受け、下位の項目が設定される関係性が成立すると考えら



「保育プロセスの質」評価スケール<sup>文2.13</sup>（2016）pp. 84-85より作成・加筆  
図2.5 保育の質の構造

文2.12) OECD Organisation for Economic Co-operation and Development: Starting Strong II, OECD Publishing, 2006. 9

文2.13) Iram Sirai, Denise Kingston, Edward Melhuish, 秋田喜代美ら（訳）：「保育プロセスの質」評価スケール，明石書店，2016. 2

れる。また、子どもの成果の質を踏まえてプロセスの質や運営の質を見直すという循環が発生し、質の改善と各項目の再構築がおこなわれていると考えられている。子ども一人ひとりが、質の高い保育を享受するためには、保育者の専門性の向上や安定した運営もさることながら、構造の質として上位に位置づけられている、物的環境の質、つまり建築空間についての改善・再構築が極めて重要である。

## 2.2.6 子どもの主体性とその評価

### 2.2.6.1 保育・幼児教育における扱い

「子どもの主体性」は、現在の幼児教育・保育の重要なキーワードである。保育施設における保育・幼児教育の方針から見てみると、「主体、主体性、主体的な活動」という用語が多く用いられている。

例えば、保育所保育指針では、保育の方法（第1章．総則，1．保育所保育に関する基本原則，（3）保育の方法，オ）において「子どもが自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子どもの相互の関わりを大切にすること」とし、その為に、「子どもの主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりを持つことが重要である」など、子どもの主体性が尊重される保育の重要性を説いている。また、幼稚園教育要領では、幼稚園教育の基本（第1章．総則，第1節．幼稚園教育の基本）において、「略－次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。1．幼児は安定した情緒の元で事故を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること－略」とし、その為に「教師（幼稚園教諭）は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」としている。同様に、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、教育及び保育の基本（第1章．総則，第1節，幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等，1．幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本）でも、「略－次に示す事項を重視して教育及び保育を行わなければならない。－中略－（2）幼児期においては生命の保持が図られ安定した情緒の下で事故を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、園児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること－略」とし、その為に「保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」としてゐる。

このように、各保育施設いずれにおいても、子どもの主体性を尊重した教育と保育が重視され、その実現のための環境を整え、支援することが保育者の役割であるとしている。また、幼稚園教育要

領及び、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、子どもの主体的な活動の基礎には、「安心感や安定感」が必要で、「生活が安定し、落ち着いた心を持つこと」が基盤になり、「友達（他者）との関わりを通してより充実し、豊かなものになる」としているように、子どもの主体的な活動は、幼児期の子どもの発達過程では、極めて重要な役割を持つといえる。

## 2.2.6.2 学術研究における構造化

「子どもの主体性」という言葉は、1980年代後半の教育の中で使われてきた。例えば、陣川(1989)<sup>文2.14</sup>は、「主体性」の同類語として、自主、自発、自立、自律、を上げながら、主体性を「他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場に立って行う。自発的能動性、実践的であること」と整理し、評価方法として「主体性は程度で評価する（有無ではない）」、「強弱」、「継続性」、「表出の度合い」の4つの視点を挙げている。

幼児を対象とした研究では、新井(1992)<sup>文2.15</sup>は、幼児の主体性を「自分の行動の開始や調整に関して、周囲の状況を考慮しながら自分で判断し、選択・決定しようとする子どもの傾向」とし、次稿の新井ら(1995)<sup>文2.16</sup>では、その構造を子どもが持つ「信頼感・イメージ・葛藤の調整」から説明し、階層構造であること(図2.6)と、各要素が相互作用し互いに高め合う循環関係であることを示した(図2.7)。また、新井は、一連の研究の中で、「信頼感・イメージ・葛藤の調整」の各要素別に、保育活

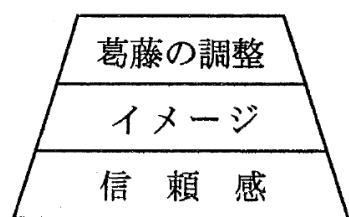


図 2.6 幼児の主体性の構造  
(<sup>文2.16</sup>, p68, fig. 1)

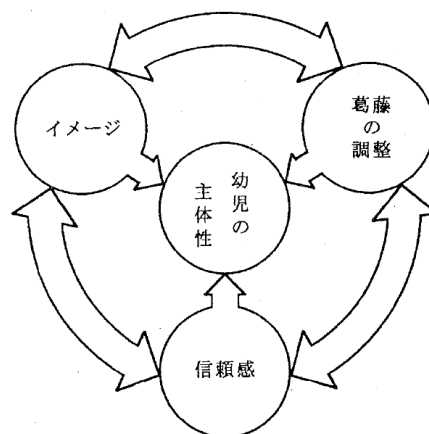


図 2.7 幼児の主体性の各要素の相互作用  
(<sup>文2.16</sup>, p70, fig. 2)

文 2.14) 陣川桂三：子どもの主体性をどう評価するか，児童心理，第 544 巻，8 号，pp. 82-86，1989. 7

文 2.15) 新井邦二郎：幼児の主体性の教師評定尺度の作成 1，筑波大学心理学研究，第 14 号，pp. 61-74，1992

文 2.16) 新井邦二郎，宮腰養，後藤かつ：幼児の主体性の教師評定尺度の作成 2，筑波大学心理学研究，第 17 号，pp. 67-88，1995

動時の子どもの様子を保育者が段階的に評価する評価尺度を作成し、子どもの年齢と尺度の実施時期によって、子どもの主体性の発達の程度を相対的に評価した。また、田畑（2016）<sup>文2.17</sup>は、「子どもの主体性」の概念が、これまで明確に定義されていないことに触れ、多様な分野の研究論文及び書籍から、「子どもの主体性」の概念分析を行い、概念モデル（図2.8）を示した。これによると、子どもの主体性は「能動的な認知・情意・行動」と定義され、「段階的に発達する」という特性を持つ。また、子どもの主体性の先行要件として、「子どもの発達・情意・体験」が基盤にあり、子どもの主体性に影響するものとして「周囲の大人の働きかけ」が大きいことを示した。そして、「子どもの主体性」が、「子どもの健康的な自我・発達」と「子どもの前向きな情意」に帰結するとした。また、田畑の概念図においても、各要素が循環構造であることが示されている。

以上のことから、子どもの主体性には階層性と循環性があることが示唆される。階層性については、マズローの自己実現理論<sup>註2.9</sup>（図2.9）があるが、子どもの主体性についても同様に、生活の安定や安

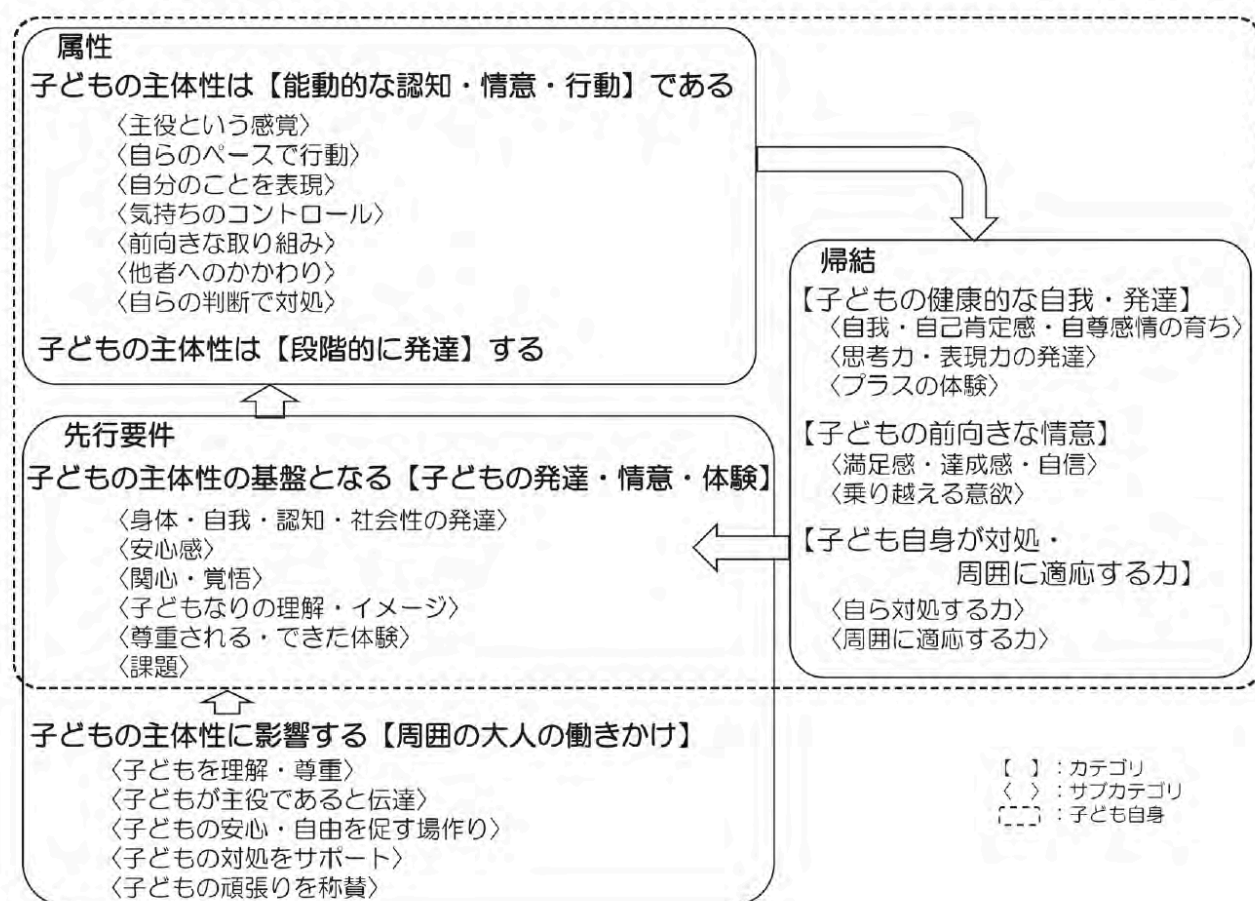
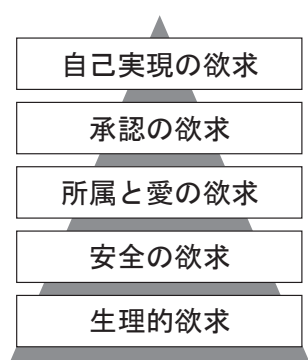


図2.8 「子どもの主体性」の概念モデル（文2.17, p52、図1）

文2.17) 田畑久江：「子どもの主体性」の概念分析，日本小児学会誌，第25巻，3号，pp.47-54. 2016



基本的欲求 ※文 2. 18, p56～90 より作成

図 2. 9 マズローの自己実現理論

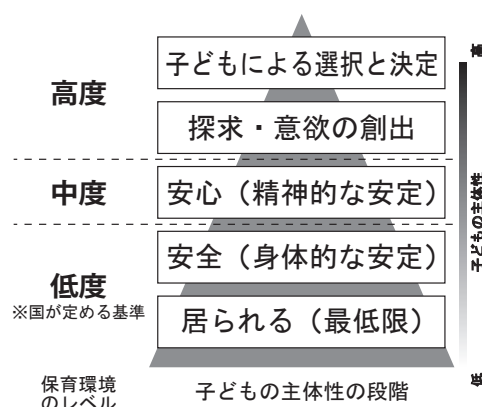


図 2. 10 子どもの主体性の段階（試案）

心感が、他者への信頼感へ繋がり、それにより精神的な落ち着きが強化され、他者との葛藤の中で自我の発達や意欲が創造されると推察できよう（図 2. 10）。さらに、保育施設における、子どもの主体的な活動には、保育者の肯定的な態度や、支援が不可欠である。また、循環性については、相互の要素の関係性から、スパイラルアップの構造であると考えられる。

## 2. 3 既往研究の系譜と本研究の位置付け

### 2. 3. 1 既往研究の系譜と課題

既往研究では、長年多くの保育施設研究がおこなわれてきた。主な保育政策の流れと既往研究の系譜を図 2. 11 に示す。主に建築空間について論じた研究を整理する。

保育施設の実態を捉えようとした研究として、宮川ら（1956）<sup>文 2. 19</sup>、小川ら（1956）<sup>文 2. 20</sup>、浦ら（1957）<sup>文 2. 21</sup>、無藤ら（1993）<sup>文 2. 22</sup> による施設利用の実態と使われ方研究が始まりである。

註 2. 9) Maslow, A. H (アメリカの心理学者) が提唱した心理学理論で、人間の欲求を階層構造で示した。人間の欲求は、「生理的欲求」、「安全の欲求」、「所属と愛の欲求（社会的欲求）」、「承認の欲求」、「自己実現の欲求」の 5 段階に整理し、低次の欲求がある程度満たされると、高次の欲求があらわれるとした<sup>文 2. 18</sup>。

文 2. 18) Abraham H. Maslow, 小口忠彦（訳）：改訂新版 人間性の心理学 Motivation and personality, 産業能率大学出版部, 1987

文 2. 19) 宮川英二, 小谷喬之助, 藤野則雄, 山本信嘉：東京都における児童施設（保育園）について No. 1：措置児と私的契約児の割合、園児の男女の割合、年令、通園, 日本建築學會研究報告, 37, pp. 242-245, 1956. 12

文 2. 20) 小川信子, 石井順子, 斉藤幸：子保育所における生活と保育室の使われ方—保育所の平面計画に関する研究（2）, 日本建築学会論文報告集, 276, pp. 123-131, 1979. 2

文 2. 21) 浦良一, 鈴木成文, 日下あこ：保育内容とプランとの関係：保育所・幼稚園の研究, 日本建築学会論文報告集, 57. 2 (0), pp. 105-108, 1957

文 2. 22) 無藤隆, 倉持清美, 柴坂寿子：園環境は子どもにとってどのような意味を持つか, 日本保育学会保育学研究, 31, pp. 13-122, 1993

次に、生活支援機能の配置と食寝分離についての研究として、北浦（2003）<sup>文 2. 23</sup>、宮本ら（2007）<sup>文 2. 24</sup>、正保ら（2007）<sup>文 2. 25</sup>、近藤ら（2009）<sup>文 2. 26</sup>がある。特に、北浦は、夜間保育所を対象にした調査より、食寝分離や子どもの私的空間を視点に考察し、昼間保育所よりも「家庭的で小規模な空間構成」の必要性を明らかにした。また、宮本らは、幼稚園における生活支援空間（下駄箱、荷物置き場、道具置き場）と設備（手洗い場とトイレ）、送迎方法と出入り口の形態を整理し、保育方針による基本的生活習慣行動の位置付けの違いから、支援空間と設備の配置モデルを提案した。さらに正保らによる、保育者へのアンケート調査では、ランチルームの需要の高さと、施設面積への不満、財政面や人員確保に難しさを感じているという課題を示した。

子どもの自由遊びと居場所についての研究としては、佐藤ら（2002）<sup>文 2. 27</sup>、北浦ら（2003）<sup>文 2. 28, 2. 29</sup>、山田ら（2004）<sup>文 2. 30</sup>、（2005）<sup>文 2. 31</sup>、（2006）<sup>文 2. 32</sup>がある。佐藤らは、子どもの社会性獲得という視点から、子どもの遊び集合の発生と崩壊を分析し、子どもが周囲の環境要因を読み取る事で、その様態が変化することを示した。また、山田らは一連の研究から、子どもの行動を詳細に調査することで、滞在場所の分布と行為の記録から「5分以上継続した行為をおこなった場所を固有の場所」として、その行為と場所、物、人との関係を考察し、学齢毎に強く影響を受ける要因を示した。その結果、子どもの「居場所」は、クラス毎に異なり、一定の類似性を持つこと、5歳児では反復性が高いことを示した。

その他、人数規模・建築のかたちの特性について分析した研究として、北浦ら（2004）<sup>文 2. 33</sup>、藤田ら（2006）<sup>文 2. 34</sup>や、特徴的な保育思想や保育方法と空間特性を論じた研究として、井本ら（2005）<sup>文 2. 35</sup>、細谷ら（2008）<sup>文 2. 36</sup>、（2009）<sup>文 2. 37</sup>、高橋（2014）<sup>文 2. 38</sup>、白川ら（2017）<sup>文 2. 39</sup>、コーナー保育や保育室

---

文 2. 23) 北浦かほる，木下千絵，萩原美智子，木下恵津子：保育環境としてのこどもの生活空間の検討―夜間保育所の保育環境整備にむけて 2，日本建築学会計画系論文集，568，pp. 33-40，2003. 6

文 2. 24) 宮本文人，中尾友子：幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間，日本建築学会計画系論文集，611，pp. 45-51，2007. 1

文 2. 25) 正保正恵，塩崎賢明：保育制度転換期における認可保育所の生活保育と食寝分離の意義と実態―東京都と地方都市（岡山市・福山市）の調査を通して，日本建築学会計画系論文集，622，pp. 25-32，2007. 12

文 2. 26) 近藤ふみ，定行まり子：保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について，日本建築学会計画系論文集，74（645），pp. 2371-2377，2009. 11

文 2. 27) 佐藤将之，高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察―園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その 1，日本建築学会計画系論文集，562，pp. 151-156，2002. 12

文 2. 28) 北浦かほる，萩原美智子：保育環境としての遊び空間のあり方―夜間保育所の保育環境整備にむけて 1，日本建築学会計画系論文集，563，pp. 139-146，2003. 1

文 2. 29) 北浦かほる，木下千絵，萩原美智子，木下恵津子：保育環境としてのこどもの生活空間の検討―夜間保育所の保育環境整備にむけて 2，日本建築学会計画系論文集，568，pp. 33-40，2003. 6



図 2.11 保育施設に関する既往研究

- 文 2.30) 山田あすか，上野淳，登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察—保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その 1），日本建築学会計画論文集，580，pp. 57-64，2004. 6
- 文 2.31) 山田あすか，上野淳，登張絵夢：園児の固有の活動場所の成立に影響する環境要素の分析—保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その 2），日本建築学会計画論文集，587，pp. 49-56，2005. 1
- 文 2.32) 山田あすか，上野淳：保育所における園児の居場所の反復性に関する研究，日本建築学会計画系論文集，602，pp. 35-42，2006. 4
- 文 2.33) 北浦かほる，木下恵津子：夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化—夜間保育所の保育環境整備にむけて 3，日本建築学会計画系論文集，575，pp. 37-45，2004. 1
- 文 2.34) 藤田大輔，山崎俊裕：幼稚園各室・空間における保育活動の時間的特性について，日本建築学会計画系論文集，599，pp. 203-208，2006. 1
- 文 2.35) 井本佐保里，定行まり子，小池孝子：保育空間のセッティングと子どもの行為に関する研究，学術講演梗概集．E-1，建築計画 I，5213，pp. 459-460，2005. 7
- 文 2.36) 細谷俊子，積田洋，青木健三：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究，日本建築学会計画系論文集，634，pp. 2565-2572，2008. 12
- 文 2.37) 細谷俊子，積田洋，鶴崎有：保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析，日本建築学会計画論文集，74（639），pp. 1029-1035，2009. 5
- 文 2.38) 高橋節子：モンテッソーリ保育所における物理的環境—非モンテッソーリ保育所との比較による検討—，日本建築学会技術報告集，第 20 巻第 44 号，pp. 207-212，2014. 2

内の設えに関する研究として、西本ら（2006）<sup>文 2. 40</sup>、山田ら（2009）<sup>文 2. 41. 42</sup>、西本ら（2013）<sup>文 2. 43</sup>、（2014）<sup>文 2. 44</sup>がある。空間の質や使いこなしに分析の視点を持つ研究は、前出の井本ら（2005）による保育思想と空間特性を子どもへの役割から論じた発表と、境ら（2012）<sup>文 2. 45</sup>によるテラスの役割を明らかにした研究がある。

以上のように、多くの保育施設研究がおこなわれている。多くの研究は、詳細な子どもの行動分析をおこなっているが、子どもの精神面に踏み込んだ研究は少なく、保育施設の理念や空間構成に配慮し、保育の方法と空間を横断的に分析した研究は少ないため、保育のねらいや目的に即した知見の蓄積には至っていない。また、保育室内のコーナーの形状やコーナー内での遊びの発展性、アクションリサーチの手法による遊び方の変化についての研究成果は示されているが、食事室や絵本室といった付帯諸室に着目した研究例は少なく、さらに保育者の視点から空間を評価する研究についても蓄積が少ないため、園舎全体で保育者が空間をどのように捉え、使いこなしているか、という実態についても課題があると考えられる。

---

文 2. 39) 白川 賀津子，定行 まり子：保育・教育思想に基づく保育施設の空間特性ーモンテッソーリ教育とハンガリーの保育実践を対象として，日本建築学会計画論文集，82（734），pp. 877-884, 2017. 4

文 2. 40) 西本雅人，今井正次，木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究，日本建築学会計画系論文集，601, pp. 47-55, 2006. 3

文 2. 41) 山田恵美，佐藤将之，山田あすか：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究，日本建築学会計画系論文集，74（637），pp. 549-557, 2009. 3

文 2. 42) 山田恵美，山田あすか，佐藤将之，：幼保一体型施設における活動の分布と規模変化に関する研究，日本建築学会計画系論文集，74（638），pp. 761-770, 2009. 4

文 2. 43) 西本雅人，河合慎介，今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集，78（688），pp. 1257-1264, 2013. 6

文 2. 44) 西本雅人，河合慎介，今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その2，日本建築学会計画論文集，79（696）319-327, pp. 319-327, 2014. 2

文 2. 45) 境愛一郎：「境」としてのテラスは幼児にとってどのような場所であるのか，保育学研究，50（3），pp. 309-319, 2012. 12

### 2.3.2 本研究の位置付けと意義

本研究では、保育室とは異なる保育空間として、付帯諸室に着目した研究である。園舎の室内空間として、保育室と遊戯室（次章より、分析の上では多目的室と称する）を整備した保育施設は多いが、保育の質や空間の質の向上を検討する際に、その他の多様な空間として、食事室や絵本室といった付帯諸室のあり方を議論することは重要である。

特に、子どもが自由保育時間中に自由に出入りできる付帯諸室の範囲（自由活動範囲）を分析の視点とすることには2つの意義がある。第一に、自由活動範囲を、保育者による保育方針の指標の1つとして捉えることである。これにより施設を類型化すると、保育方針の違いによる保育者の空間評価の傾向を知ることができる。これは、保育方針や保育方法によって、要求される保育空間の空間特性が異なると仮定した為である。保育施設が、子どもだけの空間ではなく、あくまでも幼児教育や保育の方針に沿った、「ねらい」を持つ施設である以上、保育者のねらいと空間の適合性や評価を比較することは重要であろう。

また、第二に、自由活動範囲内での子どもの活動と活動場所の実態を比較分析することで、空間の面積や整備された場所の用途だけでなく、子ども一人ひとりにとっての場所の意味や、空間の質的な要素に着目し、子どもの主体的な活動を支援する空間のあり様について、論じることができる。自由活動範囲は保育者が定めた保育方針であり、子どもにとっては自由保育時間中の1つのルールであるため、その範囲の中で、子どもの主体的な活動が生じやすい場所や、保育室では見られない活動を知ることが、子ども一人ひとりの特性に着目するという点で今日的な意義がある。

## 2.4 用語の定義

### 2.4.1 子どもの主体的な活動

広辞苑第7版（2018）<sup>文2.46</sup>によると、主体性は「主体的であること。またはそういう態度や性格であること」とし、主体的は「①ある活動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま。」と記述されている。また、新井（前述の2.2.2.5）は、幼児の主体性を「自分の行動の開始や調整に関して、周囲の状況を考慮しながら自分で判断し、選択・決定しようとする子どもの傾向」とした。

保育施設において、子どもが主体性を発揮し、主体的な活動を行うためには、保育者との関係のみならず、その場所での過ごし方のルールや保育方法、建築空間などの相互の関係が重要であり、それ

文2.46) 新村出編：広辞苑第7版，岩波書店，2018.1

らが、子どもの主体的な活動を支援したり、時には阻害する要因になる。(図 2.12)。

以上のことを踏まえ、本研究では、子どもの主体性を「子ども自らが選択できること」と定義し、  
①自由保育の時間において選択することができる、子どもの活動範囲（諸室や廊下のスペース）  
②自由保育の時間において選択することができる、子どもの活動種類（遊び・休息・生活行為）  
の2つの視点から評価する（図 2.13）。

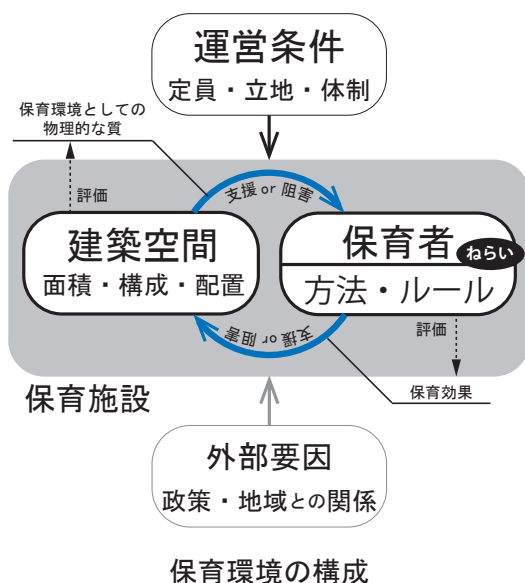


図 2.12 保育施設の環境要因

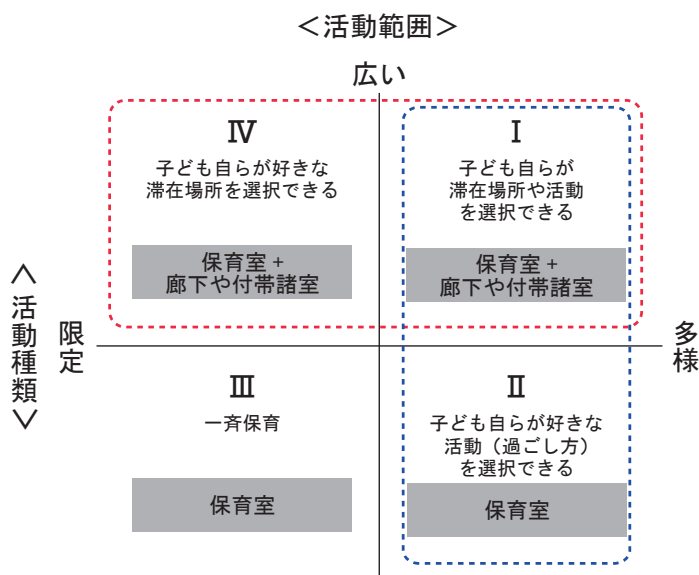


図 2.13 本研究における主体性

## 2.4.2 保育室に付帯する諸室及び廊下のスペース

本研究は、保育施設の子どもの活動範囲の内、園庭など屋外とサンタリー（トイレや沐浴槽）を除く、諸室及び廊下のスペースを分析の範囲とする（図 2.14）。また、多目的室（遊戯室）や食事室、絵本室など、保育室以外の保育空間を「保育室に付帯する諸室と廊下のスペース」と定義し、総称として「付帯諸室」とした。

### 2.4.2.1 付帯諸室

付帯諸室の種類は、まず、諸室タイプと廊下のスペースタイプに分けられ、次に、用途で分類した（図 2.15. 写真 2.1）。

付帯諸室の諸室タイプは、園舎内の諸室の内、「子どもが活動することを想定して整備された諸室」と定義する。例えば、食事室や午睡室といった生活行為や、絵本室や造形室といった遊び活動のため

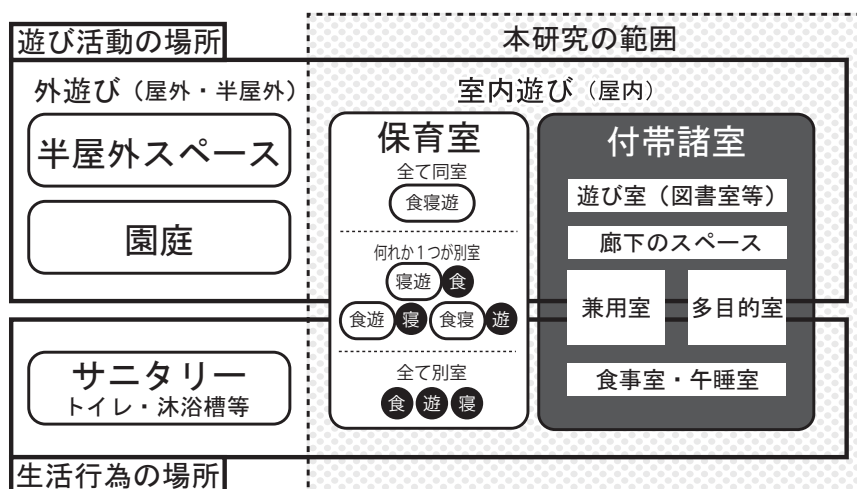


図 2.14 保育施設における子どもの活動場所と本研究の範囲

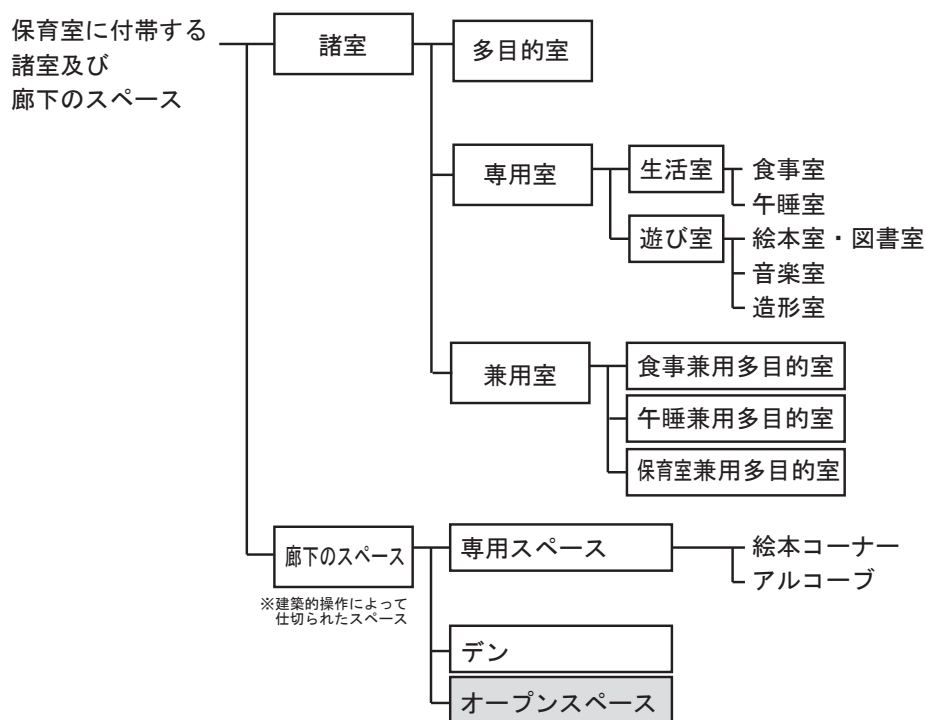


図 2.15 保育室に付帯する諸室及びスペースの種類



遊び活動のための付帯諸室＜遊びスペース＞

写真 2.1 付帯諸室の例

の専用室、行事会場や室内運動場として利用される多目的室がある。また、多目的室を食事や午睡といった特定の生活行為と兼用して使う、食事兼用室を多目的室や、午睡兼用多目的室がある。兼用室は、整備当初より兼用を前提としている事例と、保育実践の中で結果的に兼用して使用している事例があると考えられる。付帯諸室には、保育者のための図書室や会議室、倉庫は含まれない。

廊下のスペースタイプは、園舎内の廊下の内、「建築的な操作によって仕切られたスペース」と定義する。

廊下のスペースは、事例の平面図や断面図、写真から判断して抽出した。ここでの建築的操作とは、次の3つの条件の内1つ以上を満たす場合とした（図2.16）。

- ① 2方向以上を壁または作り付け家具によって区切る
- ② 床材や天井の高さを変える等スペースとして認知しやすくする
- ③ 滞留のための椅子やアルコーブが整備されている

いずれも、諸室タイプとは異なり、建具などによって個室化できないため、一部が廊下と連続した空間である。なお、廊下の一部を「プレイスペース」等と称したオープンスペースタイプの場所は、面積計測が困難なため本研究の分析対象から除外した。また、事例によっては、幅広の廊下に、家具によって間仕切られたコーナーを設え、遊び場所として利用している施設もあるが、本研究の分析では、オープンスペースタイプと同様に、面積計測が困難であり、平面図から範囲の読み取りが困難であるため、分析対象から除外した。

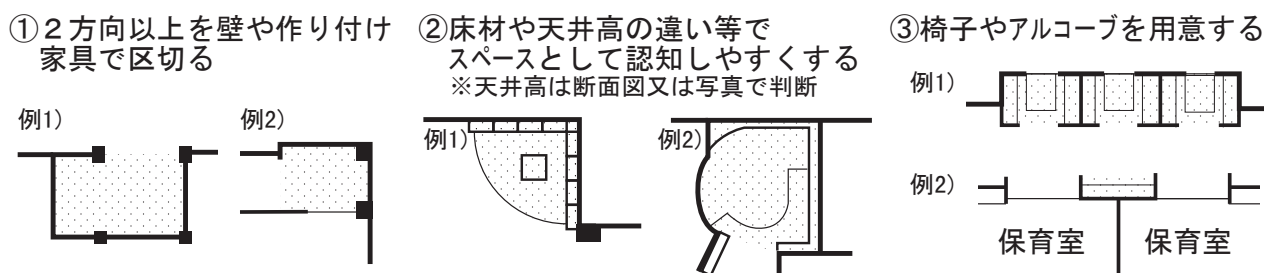


図 2.16 保育室に付帯する廊下のスペースの定義

#### 2.4.2.2 遊びスペース

また、付帯諸室の内、多目的室を除いた遊び活動のための付帯諸室を「遊びスペース」と定義した（6章）。遊びスペースの種類は、絵本室や音楽室などの諸室タイプと、絵本コーナーやアルコーブなどの廊下のスペースタイプがある。遊びスペースは、保育室と比較して、狭いスペースである施設が多いため、小スペースを活かした少人数の活動や、特定の遊び専用に使えられた家具、保育室とは異

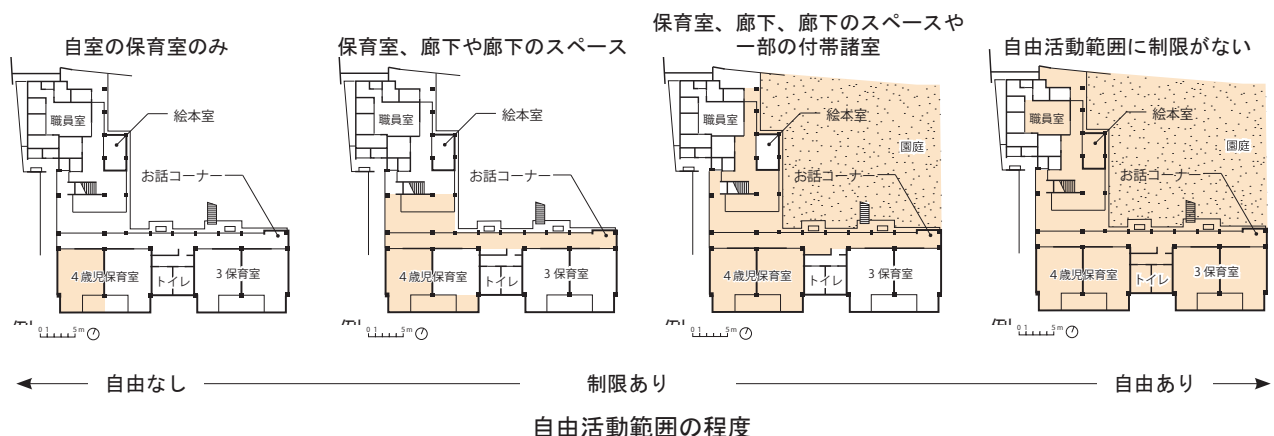
なる空間的特徴を活かした、子どもの活動がみられると考えられるため、自由活動範囲に含まれる遊びスペースと含まれない遊びスペースの空間的特徴や保育室との配置関係を考察することで、子どもの主体的な活動を支援する空間として着目する。

### 2.4.3 付帯諸室を含む自由活動範囲

本研究では、4章から、自由保育時間中に子どもが自由に入出入りできる範囲を「自由活動範囲」と称し、園舎内の付帯諸室を含む自由活動範囲を施設の保育方針の一つの指標として捉え、事例を類型化する。自由保育時間は、主に自由な遊びの時間である。時間帯は、保育施設によって様々であるが、自由保育時間中は、基本的には、子どもの主体的な活動がみられる遊びの時間である。

自由活動範囲は、施設それぞれに異なり、遊び時間のルールとして活動範囲に制限がある施設が多い。また、子どもの自由な活動については、自由に入出入りできる諸室でも、室内での活動内容が制限されている施設がある。例えば、絵本室での活動は、絵本を読んだり選んだりする行為が想定され、寝転んだり友達と賑やかに喋ることが許容されない施設がある。そのため、本研究では、自由保育中における子どもの活動範囲と活動種類の両面から分析をおこなうことで、子どもの主体性を評価している（前述 2.4.1）。

自由活動範囲の類型は、図 2.17 に例示するように、自室の保育室のみが自由活動範囲である施設から、保育室に加え、廊下や廊下のスペース、付帯諸室の一部が自由活動範囲である施設、自由活動範囲に制限がない自由な施設まで段階的に整理する（4章）。後者になるほど、子どもの自由活動範囲は自由になる。自由活動範囲内には、生活行為のための付帯諸室である食事室や午睡室が含まれる施設や、反対に、遊びスペースが自由活動範囲に含まれていない施設もある。付帯諸室の種類別にみ



※例示のために、同一の施設をもちいて自由活動範囲の違いを4段階で示した  
図 2.17 付帯諸室を含む自由活動範囲の例

られる子どもの遊び活動に関する分析を3章(3.4.3)、自由活動範囲内の遊びスペースに関する分析を6章(6.6)でおこなう。

#### 2.4.4 子ども

本研究の対象は、幼児の中でも3歳児(4月時点で満3歳に達している子ども)から5歳児(4月時点で満5歳に達している子ども)までの就学前学齢児を対象とする。

#### 2.4.5 保育者

本研究は多様な保育施設を対象とするため、保育者として保育士・幼稚園教諭・保育教諭の有資格者をまとめて総称する。

## Chapter3

---

### 研究対象事例の保育空間と保育方法の分析

### 3.1 本章の概要

#### 3.1.1 目的

本章では、保育施設における子どもの活動と建築空間の関係性を理解するために、まず保育空間と保育方法の傾向を概観する目的で、全国の保育施設より事例を抽出し分析をおこなう。

#### 3.1.2 調査方法

調査は、図面調査とアンケート調査及び一部の事例に対するヒアリング調査を実施した。実施手順を以下に示す。

- 1) 全国の保育施設より、建築図面が入手可能な施設事例を抽出するために、2000 年以降に竣工した保育施設を建築雑誌及び書籍（表 3.1）から抽出した。結果、165 事例を抽出した。
- 2) 1) で抽出した 165 事例の内、増築や一部改修、3 歳未満児のみを対象とした小規模保育施設を除く 148 事例を対象に、郵送によるアンケート調査を実施した。アンケートでは、事例の施設規模、保育理念、保育方法、保育活動と活動場所、園舎に対する空間評価などについて尋ねた（表 3.2）。結果、83 事例から回答を得た（回答率 56.1%）。

表 3.1 事例抽出にもちいた建築雑誌及び書籍の一覧

	書籍名	出版社	出版年		書籍名	出版社	出版年
1	新建築 第75巻6号	新建築社	2000	14	新建築 84巻3号	新建築社	2009
2	新建築 第75巻7号	新建築社	2000	15	新建築 第85巻6号	新建築社	2010
3	新建築 76巻7号	新建築社	2001	16	新建築 第85巻13号	新建築社	2010
4	新建築 76巻11号	新建築社	2001	17	新建築 第86巻6号	新建築社	2011
5	建築計画・設計シリーズ10	市ヶ谷出版社	2003	18	新建築 第86巻13号	新建築社	2011
6	新建築 第78巻1号	新建築社	2003	19	新建築 第87巻4号	新建築社	2012
7	新建築 78巻6号	新建築社	2003	20	新建築 88巻4号	新建築社	2013
8	新建築 第78巻10号	新建築社	2003	21	近代建築 68巻6号	新建築社	2014
9	建築設計資料 第91	建築資料研究社	2003	22	新建築 第89巻7号	新建築社	2014
10	新建築 第79巻6号	新建築社	2004	23	新建築 90巻5号	新建築社	2015
11	新建築 79巻8号	新建築社	2004	24	新建築 91巻5号	新建築社	2016
12	新建築 82巻6号	新建築社	2007	25	新建築 91巻9号	新建築社	2016
13	新建築 82巻14号	新建築社	2007	26	新建築 92巻7号	新建築社	2017

表 3.2 アンケート調査の概要と回収率

目的	保育施設の保育方法と保育空間に関する実態を把握・整理する
調査対象	2000年以降に竣工された保育施設の内、建築図面が入手できた148施設
調査内容	1) 施設概要（運営形態・施設定員と現員・クラス単位） 2) 保育・幼児 教育の方法（理念・クラス構成・食寝遊の分離等） 3) 保育と建築空間（整備済み諸室・活動場所・空間評価等）
調査方法	対象施設へのアンケート郵送調査
調査期間	2018年6月～8月
回答数（率）	83事例（56.1%）

- 3) 付帯諸室に関する分析では、図面調査とアンケート調査を総合的に分析する必要があるため、両調査が不足なく揃った 68 事例を分析の対象とした。
- 4) 3) の分析において、付帯諸室の中で、建築図面上の室名と現在の用途が異なる事例がいくつかみられた。特に、食事室（兼用室を含む）として整備された部屋が、現在は食事に使われていない施設が 12 事例あった。使用しない理由や経緯について明らかにするために、12 事例の内、調査許可を得られた 8 事例に対し、施設へ訪問し、保育者に対するヒアリング調査を実施した（表 3.3）。

表 3.3 ヒアリング調査の概要

目的	整備済みの食事室を使用しない意図・経緯を把握する
調査対象	アンケート回答より「食事室があるが、使っていない」事例 8 事例
調査内容	1) 元「食事室」の現在の様子と用途 2) 現在の食事場所 3) 食事室を使用しない理由・経緯 4) 食寝遊の分離についての考え
調査方法	現地訪問によるヒアリング調査および写真記録 ※なお 1 事例についてはメールでの問い合わせに留まる
調査期間	2018年11月～12月

### 3.1.3 分析の対象

図面調査とアンケート調査から、抽出された事例は 83 事例である。本章では、まず 83 事例における保育空間と保育方法を網羅的に把握するため、以下の項目について整理する。

第一に、事例の保育空間の概要として、保育空間に関する項目を 3 つに大別した。施設定員数と延べ床面積（3.2.1）、園舎及び保育室の平面形状と配置（3.2.2）、施設の使用開始後の室用途変更及び改修（3.2.3）である。

第二に、事例の保育方法の概要として、保育方法に関する項目を 2 つに大別した。施設形態と運営主体（3.3.1）、食寝遊の分離（3.3.2）である。

第三に、83 事例の内、図面調査とアンケート調査に不足がない事例を対象に、保育空間と保育方法の横断的な分析として、付帯諸室に着目した分析をおこなう。対象事例は、68 事例である。付帯諸室の構成と子ども<sup>註 3.1</sup>の活動場所について、5 つに大別した。付帯諸室の種類（3.4.1）、付帯諸室の構

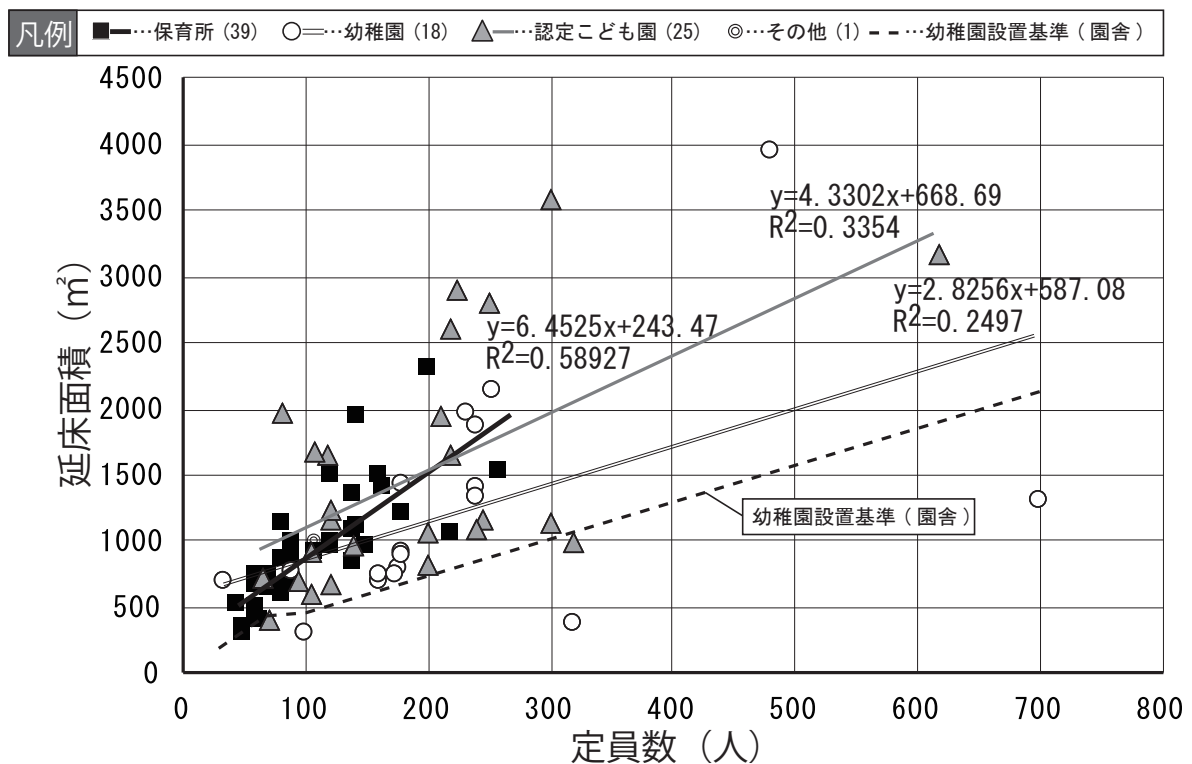
註 3.1) アンケート調査では 4 歳児（又は 4 歳児が含まれる 1 クラス）の保育環境および保育実践について回答を得た。4 歳児は新規入園者が多い 3 歳児や小学校進学のための準備が必要な 5 歳児と異なり、施設の方針に即した保育実践が行われていると推測したためである。

成 (3.4.2)、子どもの活動と活動場所 (3.4.3)、整備済みの食事室を食事で使用しない事例 (3.4.4)、自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲 (3.4.5) である。

### 3.2 事例の保育空間の概要

#### 3.2.1 施設定員数と延べ床面積

事例の運営種類別に施設の定員数および延床面積の分布を示す (図 3.1)。保育所は定員が 200 人未満の施設が多く、定員数と延床面積の関係は相関がある ( $R^2=0.589$ ) が、幼稚園・こども園は定員に比べて延床面積が著しく小さかったり、定員に対して広い園舎を持つ事例があり、弱い相関があるがばらつきが大きい。



### 3.2.2 園舎及び保育室の平面形状と諸室配置

園舎の平面形状と保育室の配置関係において、事例数の分布を示す（図 3.2）。

園舎の平面形状では、最も多いのは、園庭の周りを園舎がコの字やL字で囲んでいる囲み型で 34 事例（41.0%）ある。次いで、園庭に対し園舎が平行に配置された平行型が 17 事例（20.5%）、園舎に囲まれて中央に園庭がある中抜き型が 14 事例（16.9%）と多い。

保育室の配置では、最も多いのは、各保育室が横並びになった並列型で 30 事例（36.1%）ある。次いで、廊下を介して保育室が対面している廊下対面型、園庭を介して保育室が対面している園庭対面型、保育室一室毎の区切りがなくワンルームに複数のクラスが入るワンルーム型は、それぞれ 15 事例（18.1%）ずつである。

園舎の平面形状と保育室の配置の両方をみると、平面形状は園庭に対して囲み型で、保育室の配置は並列型が多い（13 事例、15.7%）。園庭に対して、1 つまたは複数の保育室群が対面して並ぶ構成が多いことから、保育施設において園庭と保育室の関係や、異年齢や他クラスの活動が身近に感じられることが重要視されていると推察される。

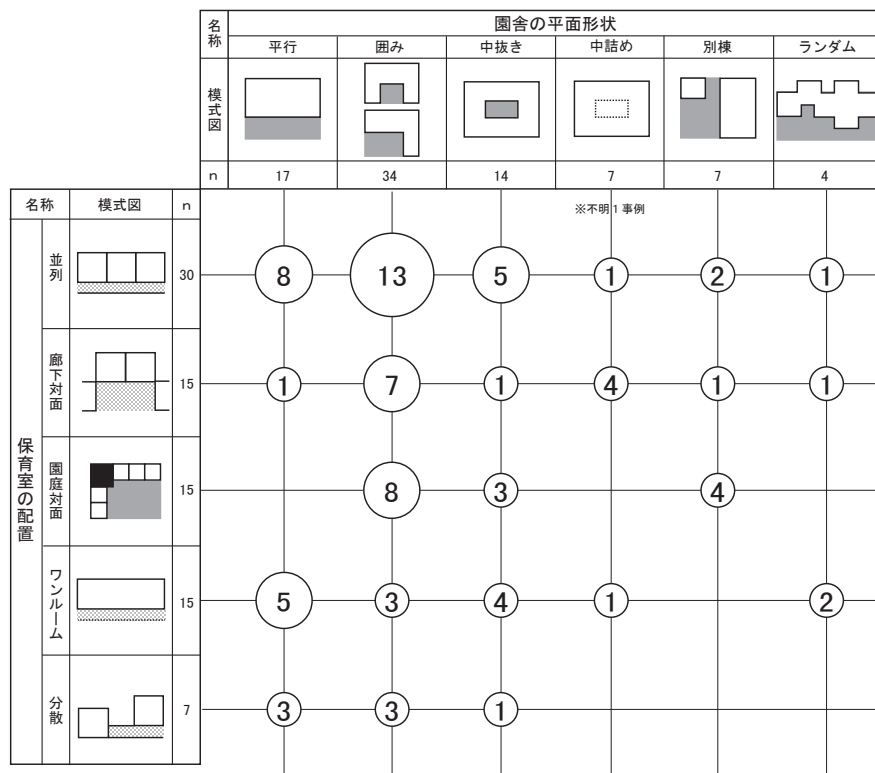


図 3.2 園舎と保育室の平面構成

### 3.2.3 施設の使用開始後の室用途変更及び改修

83 事例中、22 事例（26.5%）で計画時の室用途から変更が生じていた。使い勝手の改善や受け入れ人数の増減への対応が主な要因であり、使わなくなった保育室を午睡室に転用する事例や、廊下に設置された絵本コーナーを改修により個室化して個別対応が必要な子どもの支援室とする事例があった。変更の回数は、1 回（13 事例）が最も多かった。毎年、園舎全体の室用途を保育者同士が議論し、変更している事例（1 事例）もある。

改修箇所についての自由記述は 22 事例において 51 件あった。内容別に整理すると（表 3.4）、最も多かったのは建具に関する項目（13 件）である。ドアの取っ手を付け替える等の修理（2 件）や、柵の高さや幅を変更する改良（3 件）がおこなわれていた。また、テラス（半屋外部分）は 6 件が改修している。保育施設におけるテラスは、子どもが水を使ったり裸足で活動する重要な場所であるが、6 件中 4 件がウッドデッキの張り替えをおこなっていることから、テラスに使用されるウッドデッキには、耐久性の向上や日常的なメンテナンスの簡素化が求められていると推測される。

表 3.4 改修箇所の内訳

改修箇所		詳細	件数	
建 築	庇・軒先	新設(2)、増設・伸長(2)	4	
	天井	ドーム型から平らに(1)、穴を塞ぐ(1)	2	
	柱	撤去(1)	1	
	玄関	－	2	
	トイレ・手洗い	便器の数を減らす(1)、改修(1)	4	
	テラス	腐食・劣化による補修、張り替え(4)	6	
	保育室	増築(2)	2	
	園庭	拡張(1)、築山を平す(1)、池の改修(1)	6	
	導線の変更	園庭から保育室を玄関から保育室(1) 通園バスの発着場をメインエントランスへ(1)	2	
家具・ インテリア	建具	ドア	修理(2)、鍵をつけた(1) 防音のためアコーディオンカーテン設置(1)	13
		窓	防音カーテン新設(1)、断熱材追加(1)	
		転落防止ゲート	新設(2)	
		柵	デッキ柵新設(1)、柵の高さをあげる(1) 柵の幅を狭くする(2)	
		階段	－	1
	家具	作り付け家具の撤去(1)、下駄箱の位置変更(1) ロッカーの位置変更(1)、照明器具の増設(1) 道具入れの増設(1)	5	
	床仕上げ	長尺シートに変更(1)、溝を埋める(1)、畳撤去(1)	3	

### 3.3 事例の保育方法の概要

#### 3.3.1 施設形態と運営主体

83 事例の施設形態の内訳は（図 3.3）、保育所 39 事例（47.0%）、幼稚園 18 事例（21.7%）、認定こども園 25 事例（30.1%）である。運営主体は、公営 16 事例（19.3%）、社会福祉法人 32 事例（38.6%）、学校法人 27 事例（32.5%）である。設置者と運営者の関係では、民設民営の施設が最も多く 62 事例（74.7%）と過半数を占め、次いで、公設公営が 16 事例（19.3%）、公設民営が 4 事例（4.8%）であった。

#### 3.3.2 食寝遊の分離

保育・幼児教育の生活の仕方として、食寝遊の分離<sup>註3.2</sup>状況については（図 3.4）、食寝遊を全て同室でおこなう施設が最も多く 43 事例（51.8%）で、次いで食又は寝のどちらかを別室でおこなう一部分離が 29 事例（34.9%）、食寝遊全てを分離している施設が 10 事例（12.0%）であった。食寝遊全てが同室でおこなわれている事例の内、18 事例は午睡がない幼稚園又はこども園で、全ての幼稚園が食遊の部屋を同室でおこなっていた。

食寝遊の活動を諸室名で整理すると（図 3.5）、食事室や午睡室といった専用室よりも運動を伴う諸

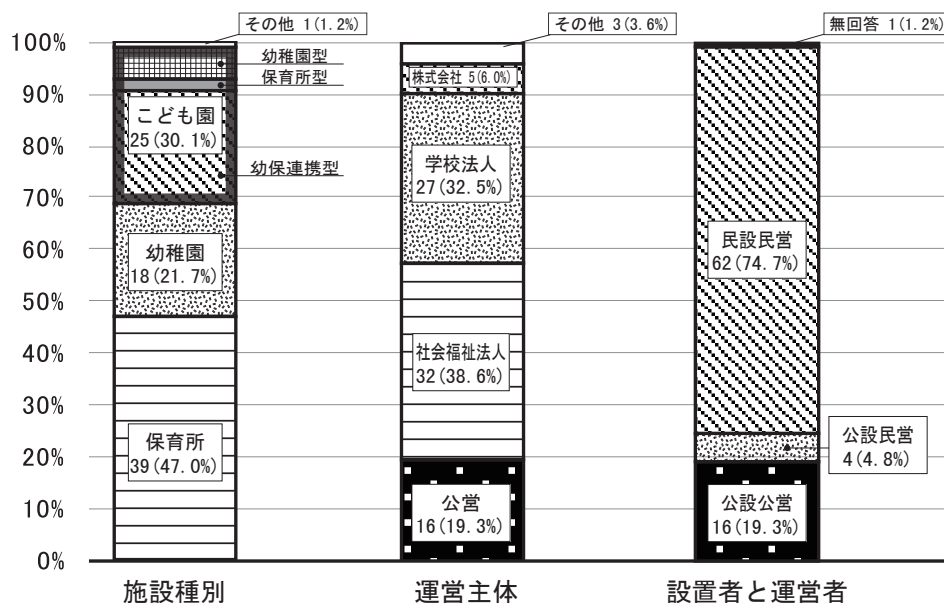


図 3.3 施設種別、運営主体と設置者

註 3.2) 保育施設において日課とされる、食事・午睡（寝）・遊びの 3 つの行為をまとめて称し、「食寝遊」とした。食事・午睡・遊びの各行為をおこなう場所を離す、または別室でおこなうことを食寝遊の分離という。

室（遊戯室や室内運動場）で午睡や食事をおこなうなど諸室を兼用して活用する割合が多い（以後、兼用室と称する）。特に午睡を分離している 20 事例の中でも、15 事例は運動を伴う兼用室で午睡をしている。保育室と午睡場所を分離することで子どもの気持ちの切り替えや保育者による布団敷き等の準備が容易におこなえる一方で、兼用室のために、午睡のための空間としては面積が広すぎたり、天井高に関する配慮がない可能性がある。同様に食事室については、運動を伴う兼用室で活動することによって埃が舞う等、分離しない事例と同様に衛生面の課題が生じている可能性が考えられる。

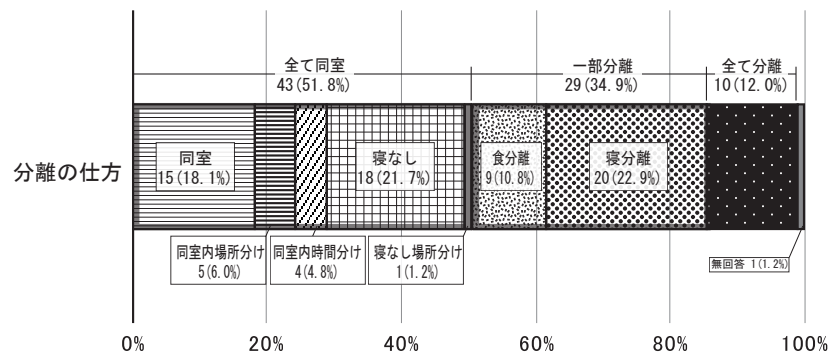


図 3.4 食寝遊の分離

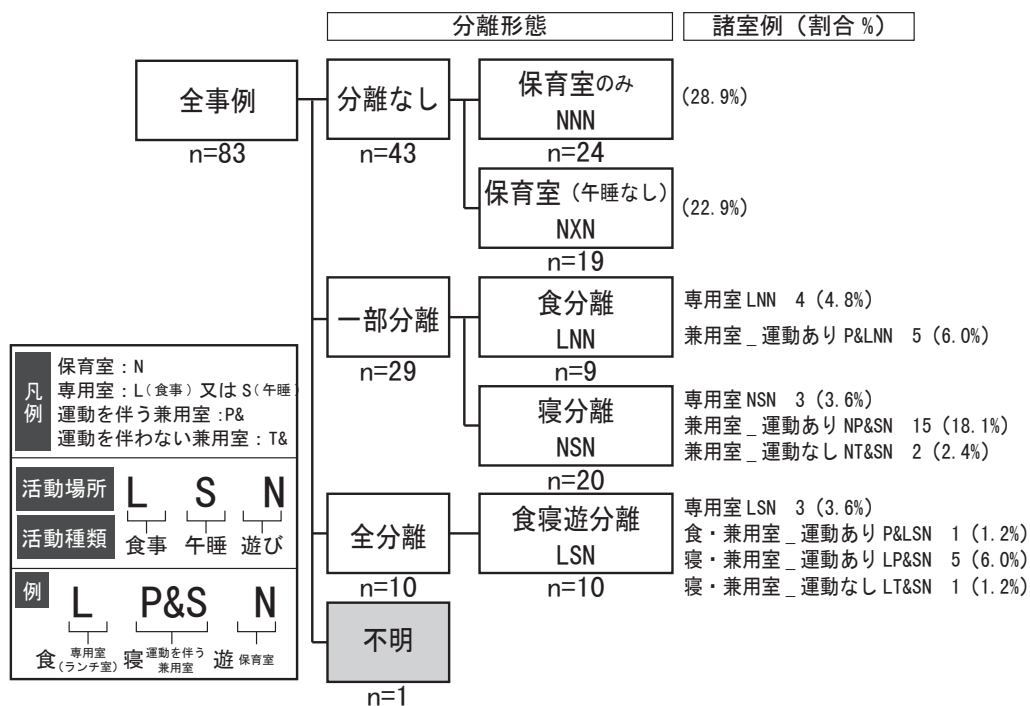


図 3.5 食寝遊の分離別の生活行為の活動場所

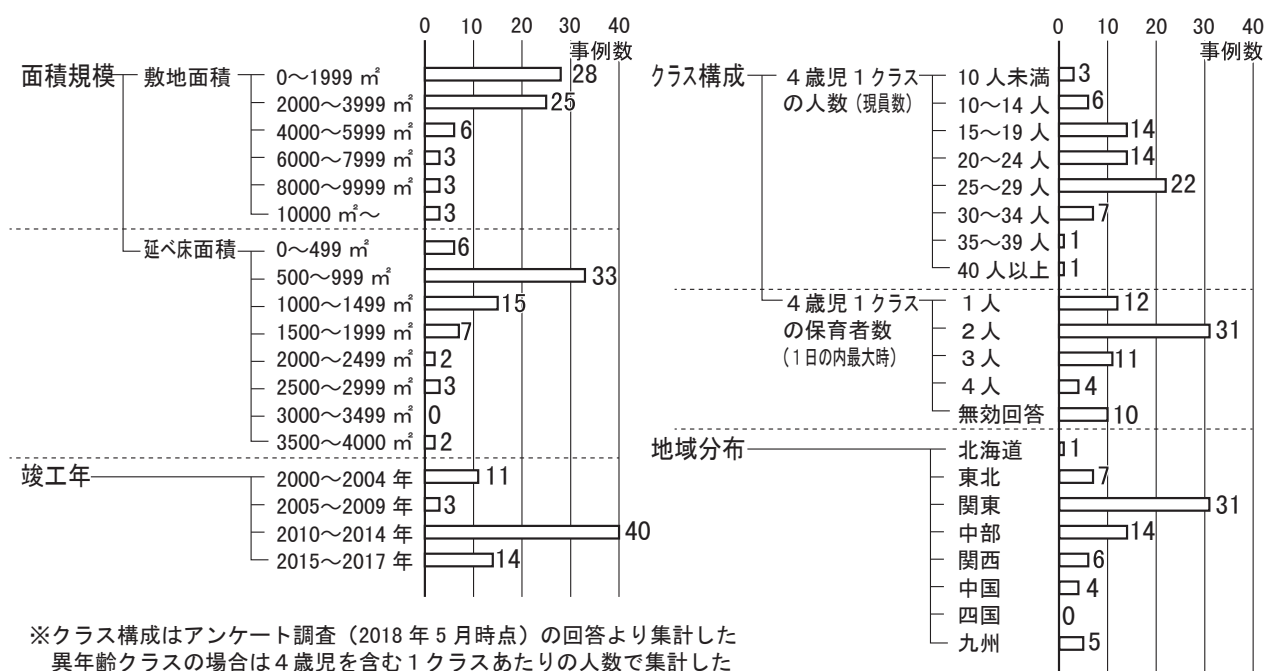
### 3.4 付帯諸室の構成と子どもの活動場所

保育施設内の諸室の内、保育時間中の子どもの活動場所となる付帯諸室は様々あり、施設毎に整備状況が異なる。本章では、平時の保育時間中に子どもの活動場所として想定される保育室と付帯諸室に着目し、分析をおこなう。分析は、アンケート回答と建築図面の両方が不足なく揃った 68 事例を対象とする。68 事例の施設概要を図 3.6 に示す。

#### 3.4.1 付帯諸室の種類

付帯諸室の種類は、室内運動場に代表される「多目的室」（保育室と比較して大規模の部屋と小規模の部屋）<sup>註3.3</sup>、専用室として「生活室」（食事室と午睡室）、「遊び室」（図書室や造形室等）、廊下のデンや壁で仕切られた空間やオープンスペースを「廊下のスペース<sup>註3.3</sup>」とし、平面図から判断し整理した。

その結果、68 事例より付帯諸室 156 室を抽出した（図 3.7）。内訳は、遊戯室や室内運動場を含む「多目的室（52 室）」、食事室や絵本室などをおこなう為の「専用室（42 室）」、多目的室を室内運動など



※クラス構成はアンケート調査（2018 年 5 月時点）の回答より集計した  
異年齢クラスの場合は 4 歳児を含む 1 クラスあたりの人数で集計した

図 3.6 分析対象の 68 事例概要

註 3.3) 廊下に設えられた特定の遊びを想定したコーナー、OS、デン等は、重要な保育空間であるため、それらを「廊下のスペース」と総称した。

遊び活動と、午睡や食事などの生活行為によって兼用している「兼用室（34 室）」、デンや絵本コーナーなど廊下に整備された「廊下のスペース（29 室）」である。

付帯諸室の面積分布（図 3.8）をみると、全ての付帯諸室では 10 m<sup>2</sup>以下から 420 m<sup>2</sup>まで広く分布し、特に廊下のスペースは 30 m<sup>2</sup>以下の事例が多かった。種類別にみると、多目的室は保育室より広い多

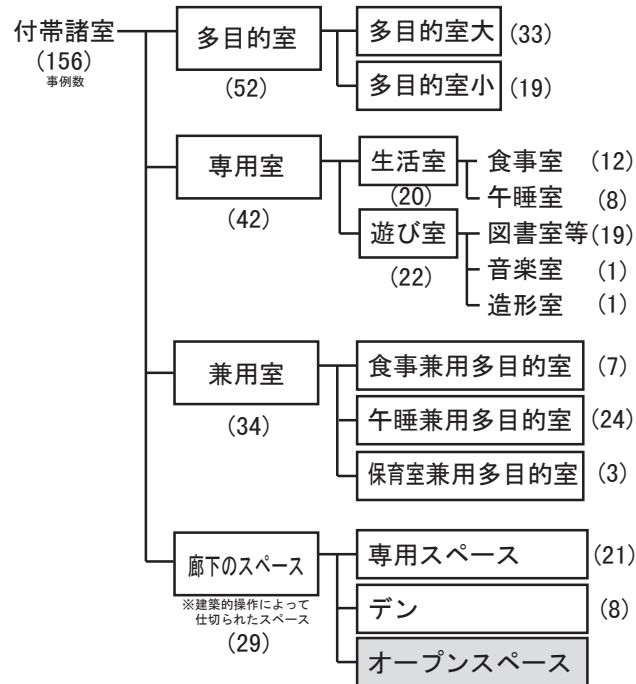


図 3.7 付帯諸室の種類

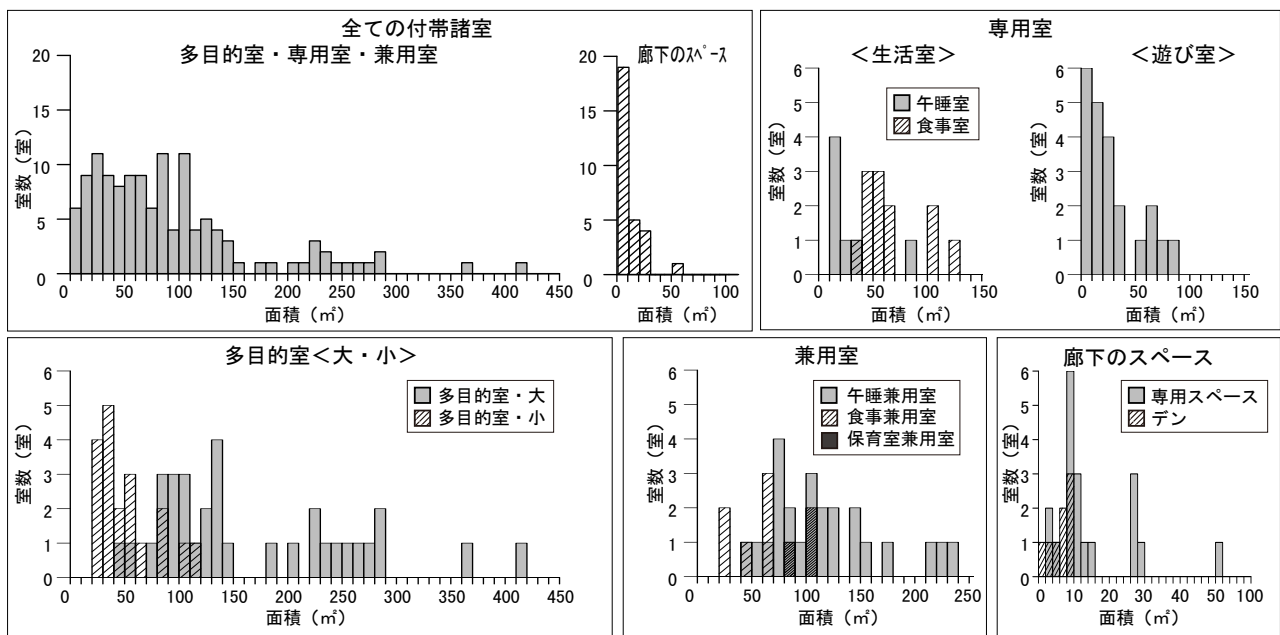


図 3.8 付帯諸室の面積分布

目的室大<sup>註3.4</sup>の面積分布が広く、事例間の差が大きい。多目的室小は、20 m<sup>2</sup>から 39 m<sup>2</sup>までが多い(9 室)。専用室<生活室>は、午睡室の面積が小さく食事室の面積が広いが、兼用室では、午睡兼用室が 100 m<sup>2</sup>から 240 m<sup>2</sup>までに 14 室該当し、食事兼用室よりも広い。午睡場所は、専用室と兼用室の面積差が非常に大きい。兼用室での午睡は、保育者にとって準備が容易であることや見守り易さがあるが、空間的には運動や行事に合わせた空間設定であるといえるため、兼用室での午睡の効果については検証の必要がある。食事場所は、専用室と食事兼用室で、大きな面積の差は生じていなかった。専用室<遊び室>は、40 m<sup>2</sup>以下に多い(17 室)。廊下のスペースは、16 m<sup>2</sup>以下に多かった(22 室)。

### 3.4.2 付帯諸室の構成

保育室と廊下、付帯諸室を組み合わせ、事例毎の構成を整理した(図 3.9)。結果、付帯諸室を持たない保育室と廊下のみ型には 4 事例が該当した。付帯諸室を持つ型は 8 種あり、最も多いのは保育室と廊下に付帯して多目的室(大)等の大規模諸室を有する「大規模諸室のみ」24 事例である。また、大規模と小規模の付帯諸室が各 1 室ずつある「大+小」は 16 事例であった。付帯諸室構成の多様性を比較すると、保育室よりも大規模の付帯諸室を整備した施設に比べ、小規模の付帯諸室を整備した施設が少なく、多くの施設で様々な活動のために大規模諸室を多目的に使用していることが予想される。一方で大小様々な規模の付帯諸室を有する「複数」事例(19 事例)は、多目的に使用できる大規模諸室以外に、活動に合わせた専用室や多目的に活用可能な小規模の部屋を整備している。

### 3.4.3 子どもの活動と活動場所

図 3.10 をみると、遊び行為の内、絵本を読む行為は、保育室内の専用スペース(9 事例)、廊下の専用スペース(23 事例)、専用室(6 事例)でおこなわれている。本を読む場所は、本棚を置く、椅子を置く等の設えの容易さや危険を伴わない活動であること、比較的少人数での活動を想定しやすいことから、保育者が子どもの活動を予想しやすいため最も容易に専用スペース化されやすいと考えられる。

一方、工作・制作行為は、保育室全般(58 事例)や廊下の OS(7 事例)、多目的室及び兼用室(9 事例)

---

註 3.4) 多目的室の面積が、保育室の面積より広い場合は「多目的室大」、同等または狭い場合は「多目的室小」と称した。多目的室大の場合は、年間行事など施設内の多数の子どもが集まったり、雨天時などに運動する場所として使われ、多目的室小の場合は、予備の保育室や子育て支援サービスのための諸室など事例毎に様々な使い方が推察される。

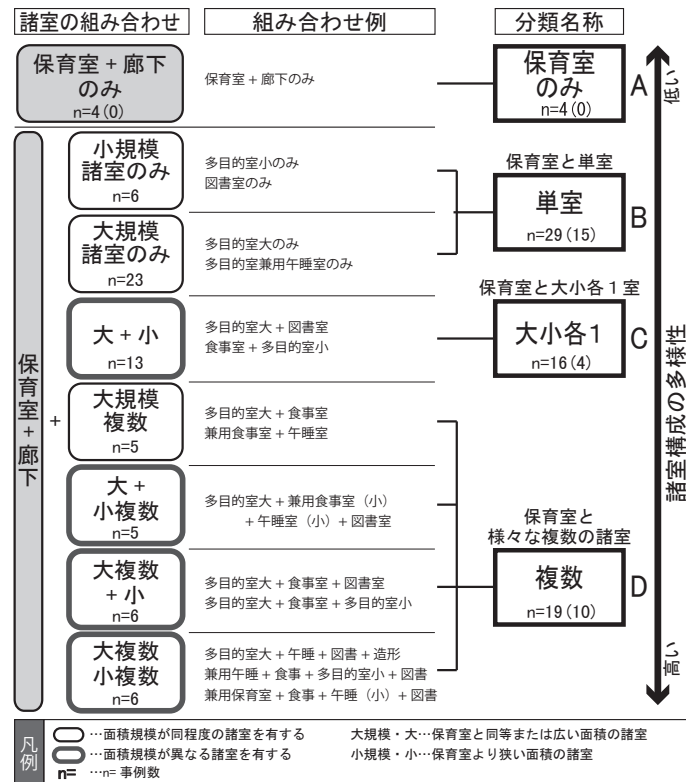


図 3.9 付帯諸室の組み合わせ

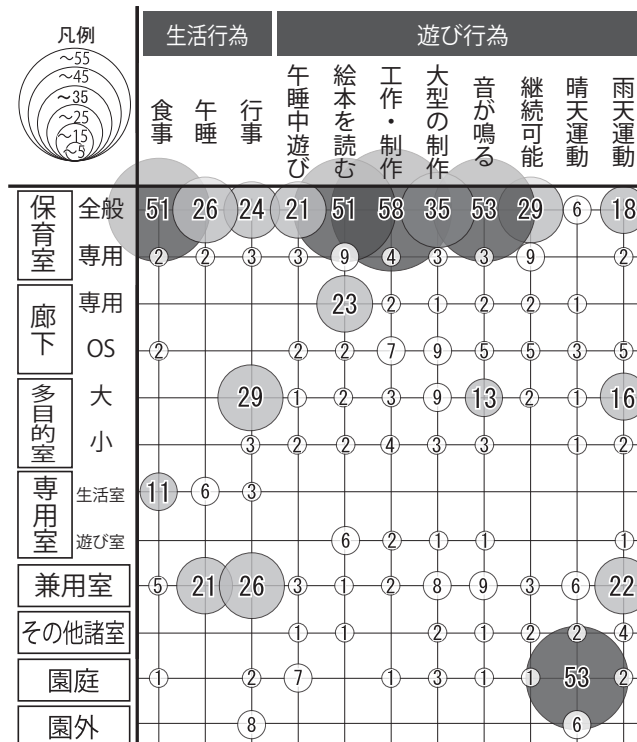


図 3.10 子どもの活動別の活動場所

でおこなわれている。特定の材料や道具を出すことが必要となるが、怪我の危険を伴う場合があることから、保育者の見守りやすい時間や場所で適宜おこなわれていると考えられる。また、多目的室（兼用室を含む）が行事や雨天運動場所という臨時的な使用に限らず、恒常的に生活行為および様々な遊び行為の場所として兼用されていることが改めて確認された。

#### 3.4.4 整備済みの食事室を食事で使用しない事例

食事室を整備しながらも、食事で使用せず、食事は保育室でおこなう事例が 12 事例みられた。食事室は近年整備が進む諸室であるが、食事室の有用性について保育者の評価を検証した研究は少ない。そこで現状整理のために、食事室を整備したにも関わらず、現在は使用していない事例を対象に、保育者へのヒアリング調査より食事室を使用しない理由と現在の元食事室の使われ方を報告する（表 3.5）。

使用されていない食事室の現在の用途は、5 事例で遊び場所となっている。整備時につくられたミニキッチンや手洗い場は、食育のための簡単な調理の際や制作活動の際に使用されている。また、事例 11 については、元食事室に併設した手洗い場を、食物アレルギーを持つ子どもの専用手洗い場として活用しており、子ども同士や器具を介しての誤飲を防ぐ安全対策として活用されていた。

食事室を食事で使用しなくなった理由として、事例 11, 85 が運営上の人員不足を挙げた。食事室を使う際にクラス担任は食事室で見守りをおこなうと想定されるが、早めに食事室へ来た子どもや早く食べ終えた子どもに対応する保育者を配置できないという懸念からである。また、事例 36, 76 は、食事室の利用によって食事室と保育室間の移動や食事行為がクラス単位での一斉活動になるため、子どもの主体的な活動を損なうという懸念を示した。事例 88, 100, 130 は、音・熱環境の不備、動線の混同、狭さといった建築計画上の問題点を指摘した。また、3 事例（39, 88, 100）は食事室の必要性を感じており、上記の課題が解決できれば食事室を利用したいとの意向を示したが、他の 5 事例については、必要性を感じておらず、保育室の中で食事と遊びをおこなう現状を満足と回答していた。

表 3.5 食事室を整備しながら食事で使用していない事例

事例番号	11		36		39		76		85		88		100		130	
	計画時の 食事室名称	食堂	遊戯室 (アンケート回答: ランチ室)	ダイニング	ホール (食事風景の写真あり)		ランチルーム		ランチルーム		ランチルーム		年長C (アンケート回答: 食事室 兼保育室)		ランチルーム	
概要	食事室 の分離	活動場所 (食・寝・遊)	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離
	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離	食事室 の分離
ヒアリング結果	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途
	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途
	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途
	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途
	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途	現在の 食事室の用途
写真記録	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子	現在の食事室の様子
	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)	現在の食事室の様子 (保育室)

### 3.4.5 自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲

自由遊びの時間に子どもが自由に出入りできる付帯諸室を集計し、付帯諸室の構成を分析した（図 3.11）。

全体を通してみると、全ての部屋が出入り自由な施設は 7 事例あり、廊下の OS の出入りが自由である事例が 49 事例ある。廊下が単なる通路ではなく重要な遊びの場所を担っていると思われる。また、他クラスへの出入りは自由ではない事例が 33 事例あった。異年齢の子どもの活動をみることで、自分の行動を省みたり他者との関わりを学ぶ効果があると考えられるため、隣接する保育室の様子がうかがえたり、廊下から眺めることができる配慮が望ましいと思われるが、普段の保育上はおこなわれていない。

次に付帯諸室の構成別に分析する。

- 1) A. 保育室のみ（4 事例）：廊下や他クラスも自由に出入りができず非常に限定的な範囲で子どもが活動している事例が多い。
- 2) B. 単室（29 事例）：小規模のみの事例 75、大規模のみの事例 59, 76, 103 において、全ての付帯諸室で出入りが自由である。事例 59 を除く 3 事例は、延床面積が 1000 m<sup>2</sup>以下の各学齢 1 クラスを想定した事例であり、特に事例 75, 103 は廊下での遊びを想定したデンや OS など多様なスペースが整備されている。
- 3) C. 大小各 1（16 事例）：1500 m<sup>2</sup>を超える事例 37, 105, 107, 113, 128 で自由に行き来できる付帯諸室が少ない。施設規模が大きくなることで子どもの活動範囲への制限が強くなる傾向が読み取れる。
- 4) D. 複数（19 事例）：最も多様な付帯諸室の組み合わせを持つ事例であるが、全ての付帯諸室で出入りが自由なのは事例 39 のみであった。多目的室小と遊び専用室に出入りできない事例は 12 事例で、反対に多目的室大や食事室（いずれか一室以上）に出入り自由な事例が 11 事例ある。大小様々な付帯諸室を複合的に複数整備していても、実際には小規模の付帯諸室に出入りできる事例は限られていることが分かった。つまり付帯諸室の多様性が、子どもが自由に過ごす場所の多様性を確保することにつながっていない。理由として、付帯諸室が多くなれば、保育者間の連携と子どもの行動予測が必要となるため、保育者に高度な能力が求められるためではないかと考えられる。

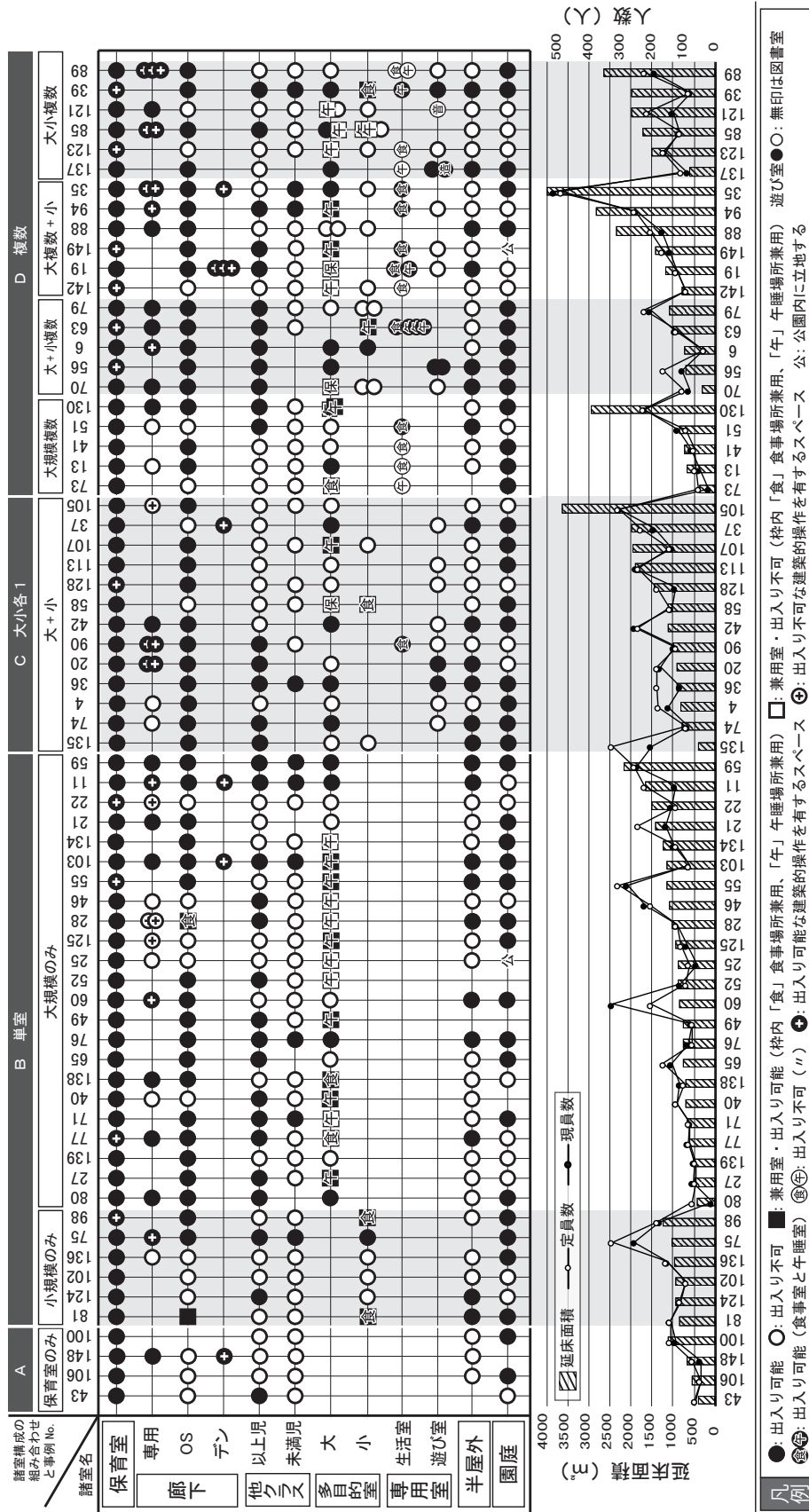


図 3.11 付帯諸室の整備構成と子どもが自由に出入りできる範囲

### 3.5 小結

#### 3.5.1 付帯諸室の構成と子どもの活動

保育室と廊下の他に様々な付帯諸室を持つ事例を分析し、付帯諸室構成の型を明らかにした後、付帯諸室と子どもの活動場所の関係から専用室・スペースとして設えられやすい遊び活動（絵本）と、管理の視点から活動の都度設えられている遊び活動（制作・工作）を示した。また、食事室を整備しながらも現在は食事で使用していない事例に関する分析より、食事室を使用しない理由として①人員確保や連携体制の難しさ、②子どもの主体性を損なうとの保育者の認識、③建築的な不備や配慮不足が挙げられた。

#### 3.5.2 子どもが自由に出入りできる活動場所

多目的室大と食事室は出入りが自由な事例が多いが、多目的室小と遊び専用室は逆に出入りができない事例が多い。つまり、付帯諸室構成の多様性が、子どもが自由に過ごす場所の多様性を確保することにつながっていない。また多くの保育者が死角を嫌厭する傾向がある一方で、比較的、施設規模が小さい事例では、自由に出入りできる付帯諸室が多い傾向がある。規模が小さい事例では、狭い範囲に子どもも保育者も集まるため、保育者にとって子どもを見守りやすい環境であることが影響していると推察される。

#### 3.5.3 次章への課題

本稿では、図面調査と保育者へのアンケート調査に基づいて、各事例が整備する付帯諸室や出入りできる範囲など事例の現状整理をおこなったが、事例全体の傾向を捉えることに留まり、保育空間と保育方法を横断的に捉えた類型化や、その際に生じる保育者の意識の違いについては明らかにできていない。特に、付帯諸室構成の多様性が子どもが自由に過ごす場所の多様性に繋がっていない点は注目すべき点である。そこで、次章では、子どもの主体的な活動を支援する場所の選択可能性や活動の多様性について検証するために、自由保育の時間中に子どもが自由に出入りできる範囲を分析の視点にし、自由に出入りしやすい諸室やスペースと保育室との配置関係を中心に分析をおこなう。

## Chapter4

---

### 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型とその空間構成

## 4.1 本章の概要

### 4.1.1 目的

本章では、子どもの主体的な活動を支援する場所の選択可能性や活動の多様性について検証するために、3章で整理した68事例の自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲（以下、自由活動範囲と称する）を分析の視点に、自由活動範囲内にある付帯諸室と4歳児保育室の配置関係を考察し、自由活動範囲内に含まれる付帯諸室の特徴を明らかにする。また、自由活動範囲を類型化し、その範囲の特徴と付帯諸室の組み合わせを明らかにする。

### 4.1.2 分析方法

分析方法は、まずアンケート調査によって得られた68事例それぞれの自由活動範囲内にある付帯諸室を「自由活動室」と定義し、自由活動室と4歳児保育室の配置関係から、自由活動範囲内に含まれやすい付帯諸室の種類や空間的な特徴について分析する。分析において、各付帯諸室数に対する自由活動室数の割合<sup>註4.1</sup>を算出した。

次に、自由活動範囲に含まれる場所の種類から、類型化する。また、事例毎に整備された付帯諸室数や付帯諸室の組み合わせが異なるため、その傾向を分析する。

## 4.2 保育室と付帯諸室の配置と自由活動室

本項では、子ども自らの意思で自室の保育室以外の場所を選択できることが、子どもの主体的な活動を誘発する可能性があると考え、付帯諸室を分析する。

### 4.2.1 4歳児保育室と付帯諸室の配置

まず、付帯諸室156室の付帯諸室の内、4歳児保育室<sup>註4.2</sup>との配置関係が明らかな155室を対象に、

---

註4.1) 4歳児保育室に対する付帯諸室の配置と、自由活動範囲内に含まれる付帯諸室数を評価するため、付帯諸室の配置別に以下の公式を用いて自由活動室の割合（％）を算出した。

$$\text{自由活動室の割合（％）} = \frac{\text{付帯諸室の種類別又は配置別の自由活動室の室数}}{\text{付帯諸室の種類別又は配置別の付帯諸室の室数}} \times 100$$

註4.2) 本研究では、アンケート調査で4歳児（又は4歳児が含まれる1クラス）の保育環境および保育実践について回答を得ている（3章，註3.1参照）。

その配置関係を分析する。まず、4歳児保育室に対する付帯諸室の断面配置として「同棟」と「別棟」に大別した後、同棟を「同階」と「別階」に分けた。さらに保育室の配置関係から「同階」を「1フロア（平屋）」、「3-5歳児同階」、「4歳児と一部学齢同階（3・4歳児が同階等）」に、別階を「別階独立（付帯諸室と同階に保育室がない）」、「未満児同階」、「4歳児以外の一部学齢同階（未満児と5歳児保育室が同階等）」に分けて、計6つに分類した（図4.1）。

付帯諸室155室の内、同棟は151室（97.4%）、別棟は4室（2.6%）である。同棟の内、同階は111室（71.6%）で別階は40室（25.8%）であった。最も多いのは、同階・1フロア配置74室（47.7%）であった。種類別にみると、多目的室大は1フロア配置が最も多く（17室）、次いで未満児同階の事例が多かった（5室）。遊び室は1フロア配置が最も多く（15室）、4歳児保育室と別階の事例は2室と少ない。理由として遊び室の主な利用者が3歳児から5歳児のためと考えられる。

#### 4.2.2 4歳児保育室と付帯諸室配置の細分類

前項で整理した付帯諸室の配置関係の内、同階配置を更に細分類し、保育室に近い配置を「中心部」として「対面」「中央」「取込」「一体」「広場」に分け、離れている配置を「端部」として「端・学齢分節（2つの保育室群の間を隔てる位置にある）」「機能分節（保育室群と職員室や倉庫等の中間に位置している）」「建物端部」に分けた（表4.1）。

#### 4.2.3 同階配置の付帯諸室

同階配置の111室は、中心部配置（61室）と端部配置（50室）に分けられ、室数の偏りは小さい。中心部配置では対面配置が多く（29室）、その内半数の14室は廊下のスペースである。次に多い広場配置（13室）では、廊下の専用スペース（4室）と食事兼用室（4室）が多い。端部配置では、建物端部配置が最も多く（19室）、その内多目的室大が9室である。別階配置（40室）では、多目的室大（10室）と午睡兼用室（7室）が多く、いずれも面積が大きい付帯諸室である。

#### 4.2.4 付帯諸室と自由活動室の割合

##### 4.2.4.1 種類毎の割合

付帯諸室の種類別にみると、廊下のスペースの自由活動室の割合が高く、専用スペースは76.2%（21室中10室は図書スペース）、デンは100%であった。一方で、遊び室の自由活動室の割合は33.3%と低い。

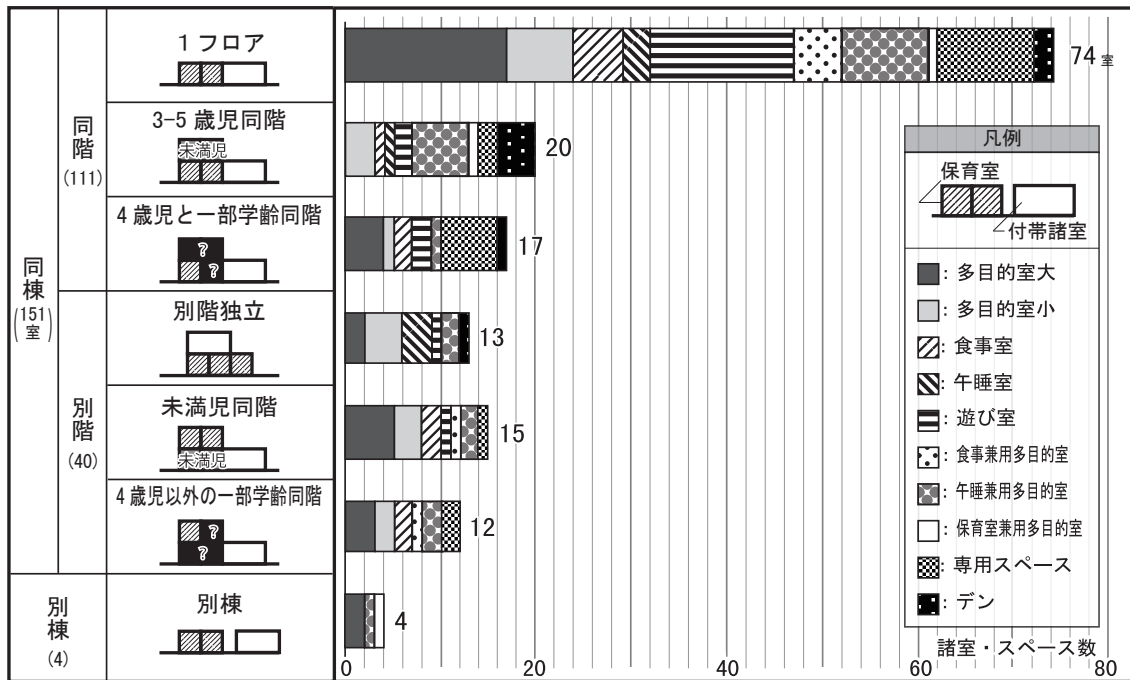


図 4.1 4 歳児保育室と付帯諸室の配置

表 4.1 付帯諸室の種類及び配置と自由活動室数

				付帯諸室の種類										室数	配置別 自由活動室 の割合							
				多目的室		専用室			兼用室			廊下のスペース		整備済室数 自由活動室 室数								
				多目的室大	多目的室小	食事	午睡	遊び	食事兼用	午睡兼用	保育室兼用	専用スペース	デン									
付帯諸室の配置	同階 (111室)	中心部 (61)	対面			3	3	0	-		5	1	-		4	2	-		8	6	29	58.6%
			中央			3	1	0	1	0		3	2	-	-	-	-	-	-	3	37.5%	
			取囲			2	1	-	-	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	3	33.3%	
			一体			1	-	1	-	3	-		3	-	3	2	-	-	-	8	87.5%	
			広場			1	1	-	-	1	0		4	3	2	-		4	3	-	13	76.9%
		端部 (50)	端			1	0	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	5	3	13	69.2%	
			学齢分節			3	2	0	4	3	-	0	-		4	1	-		1	1	7	46.7%
			機能分節			2	-	-	-	-	1	0	-	-	-	-	-	-	-	3	33.3%	
			建物端部			9	4	2	0	1	1	0	-		2	1	2	1	1	19	36.8%	
			別階(40)			10	8	0	4	0	3	0	2		7	3	-		3	1	40	32.5%
	別棟(4)	別棟(4)			2	0	-	-	-	-	-		1	1	0	-	-	-	4	25.0%		
		不明(1)			0	-	-	-	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0%		
		室数				33	19	12	8	21	7	24	3	21	8	156	48.7%					
	付帯諸室の種類別 自由活動室の割合				45.5%	10.5%	50.0%	62.5%	33.3%	57.1%	50.0%	33.3%	76.2%	100.0%								
				32.7%		43.9%				50.0%		82.8%										

凡例

室配置の模式図

付帯諸室

保育室

倉庫・事務室等

付帯諸室

整備済付帯諸室の室数 - 5

自由活動室の室数 (内数) - 2

該当なし

自由活動室の割合 (%)

=

付帯諸室の種類別 (横軸) 又は配置別 (縦軸) の自由活動室の室数

付帯諸室の種類別 (横軸) 又は配置別 (縦軸) の整備済付帯諸室の室数

× 100

遊び室 21 室の内、13 室は中心部配置であるが、対面配置といった極めて近い配置でも自由活動室ではない。「静かに本を読む」等の行為のイメージから、開口部が小さい等、独立性の高い諸室として整備されていることが、保育者には死角が生じやすく見守り辛いと認識され、自由活動室になりにくくなっている可能性がある。つまり、廊下のスペースのように諸室として区切られて無いことが、保育者の視認性確保がし易く、集団としての一体感を感じられるため、自由活動室になり易いと考えられる。

また、多目的室小の自由活動室の割合は 10.5% と最も低く、また別階配置が多い。現員数の減少等で余剰となった保育室を多目的室小に転用した事例（3 室・2 事例）や、元々保護者や保育者の為のスペースとして整備されていた事例（3 室・2 事例）など、計画時には子どもの自由な活動場所ではなかったことが影響していると考えられる。

#### 4.2.4.2 配置毎の割合

保育室と付帯諸室の配置別にみると、同階の中でも、端部配置に比べて中心部配置の方が自由活動室の割合が高い。特に自由活動室の割合が高いのは、一体配置の 87.5%、広場配置の 76.9% である。対面配置は該当する付帯諸室が 29 室と全ての配置の中で最も多いが、自由活動室の割合は 58.6% で、廊下の専用スペースとデンの多くが自由活動室である一方、多目的室小や遊び室の自由活動室は少ない。

一方、対面配置では遊び室 5 事例中、1 事例のみが自由活動室であり、保育室の至近に遊び室があっても自由活動範囲内に含まれない事例が多い。端部配置では、端配置の自由活動室の割合が高い（69.2%）。保育室群の端の行き止まりの場所は領域として捉えやすく、また建具を開けて保育室と一体的に活用できる事例があり、子どもの自由活動範囲として活用しやすいものと考えられる。別階配置では、自由活動室の割合が 32.5% と低い。保育者や子どもにとって階段が自由活動範囲の広がり制限する要因になっていると考えられる。

#### 4.3 自由活動範囲のタイプ

本項では、保育方針と空間の相乗的關係が生み出す子どもの活動場所の広がりを捉えるため、68 事例の保育室や廊下、付帯諸室の構成と自由活動室を分析し、自由活動範囲を以下の 4 段階に類型化した（表 4.2）。

- ・保育室完結型（N 型）：自室の保育室のみが自由活動範囲

- ・完全自由型 (F 型) : 自由活動範囲に制限がない

自由活動範囲の類型別に付帯諸室の数の分布をみると（図 4.2）、付帯諸室や廊下のスペースの整備数と、自由活動範囲の広がりとの関係は低い（3.4.5 に同じ）。全体としては、付帯諸室を 1 または 2 箇所整備した事例が多いが、S 型や C 型が多いことから、自由活動室となるのは整備された付帯諸室の一部である。また、4 つの類型の内、S 型が最も付帯諸室の数のばらつきが大きい。

表 4.2 自由活動範囲の類型

自由活動範囲の程度		自由なし		制限あり						自由あり			
活動場所		自室のみ 保育室と廊下や廊下のスペース		保育室・廊下（廊下のスペース含む）と付帯諸室						敷地内全て			
型名		保育室完結型		範囲制限 C 型		範囲制限 S 型						完全自由型	
		N 型		C 型		S 型						F 型	
事例数		5		29		24						10	
自由活動範囲の空間構成	屋外												
	保育室												
	自室 他C												
	廊下・廊下の入へ入												
	付帯諸室												
説明		自室の保育室のみで活動する。トイレの出入りは自由な事例もある。		自室のみ (18) 自室と他がス(11)		自室のみ (10)		自室と他がス(14)		活動範囲に制限なし。倉庫・活動範囲に含めない事例もある。			
				保育室に加えて、廊下等の移動空間と付帯諸室の内の廊下のスペースに入り出できる。29 事例中、廊下のスペースは 5 箇所 (3 事例) 該当する。		保育室と廊下・廊下のスペースに加えて、付帯諸室に入出ができるが、未満児など一部の保育室や特定の付帯諸室に入出できない。24 事例中、自由活動範囲に含まれる付帯諸室は 32 室、加えて廊下のスペースは 16 箇所 (8 事例) 該当する。							

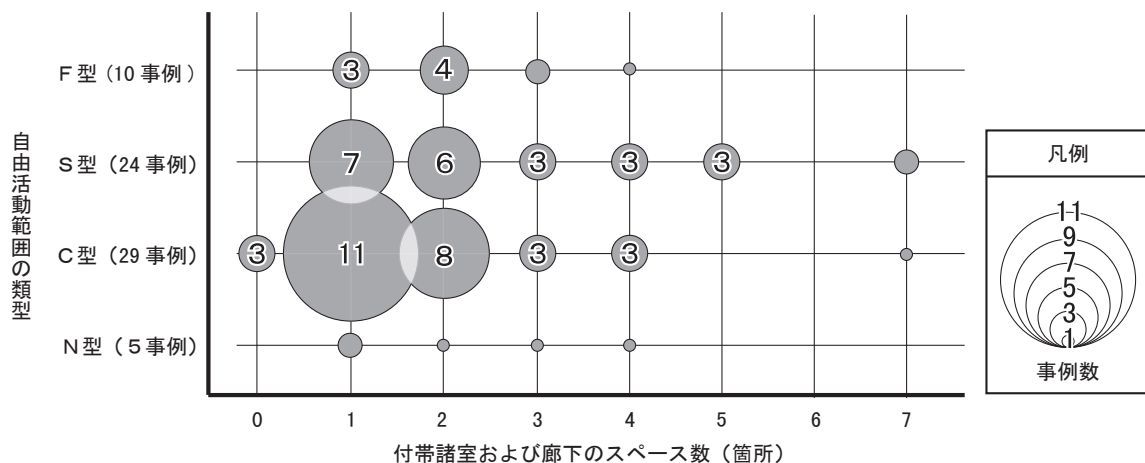


図 4.2 自由活動範囲と付帯諸室および廊下のスペースの数の分布

## 4.3.1 保育室完結型（N型）

保育室完結型（以下、N型。5事例）は、最も自由活動範囲が狭く、子どもが自室の保育室のみで活動するタイプである。自由保育の時間中、基本的に保育室の中で過ごし、排泄のためトイレに行くこと以外に廊下等には出ない。子どもの活動場所の選択肢は保育室内に限られる。N型の事例の平面構成を付帯諸室数にみると（図4.3）、4歳児保育室と同階に付帯諸室がない事例が2事例（40%）ある。他の3事例は、事例123, 142の2事例が同階に付帯諸室を持つが、いずれも午睡兼用多目的室で、事例22では、同階にその他の廊下のスペースがあるが、いずれも自由活動範囲には含まれていない。付帯諸室数が比較的多い、事例123（4箇所）、142（3箇所）では、食寝遊が完全分離しており、食事専用室と午睡兼用多目的室が整備されている。生活行為が保育室の外でおこなわれることにより、保育室を遊び専用に使うことができるため、保育室内のコーナーや継続した遊びが可能な場所の設定などによっては、遊びが充実した保育がおこなわれている可能性もある。

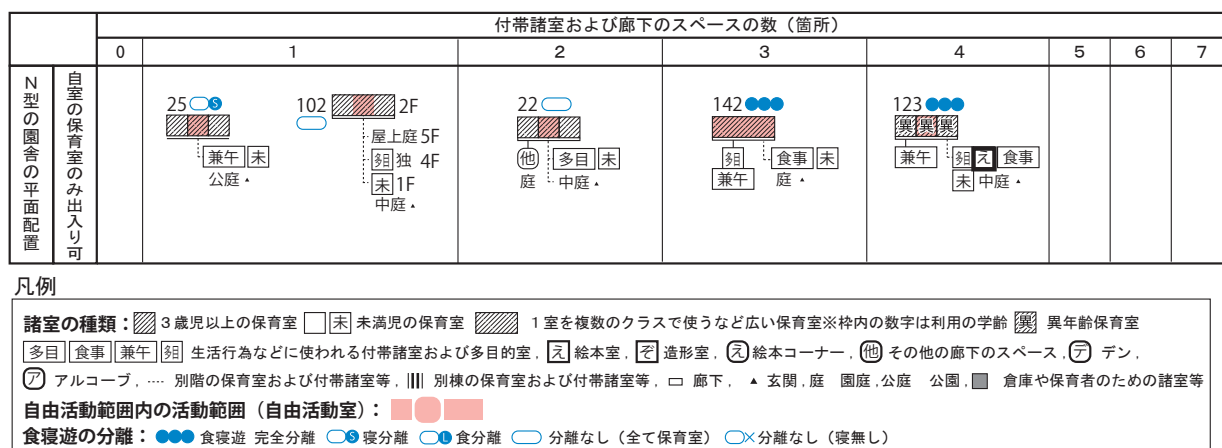


図 4.3 自由活動範囲 N 型の平面構成

#### 4.3.2 範圍制限 C 型 (C 型)

範囲制限C型（以下、C型。29事例）は、自室に加えて、移動空間である廊下（廊下のスペースを含む）や園庭を自由活動範囲とするタイプである。事例数が最も多い。C型の事例の平面構成を付帯諸室数にみると（図4.4）、保育室の範囲を自室のみとする18事例と、他の保育室も自由活動範囲に含む11事例がある。保育方法は、食寝遊の分離がなく全ての活動を保育室内でおこなう事例が11事例（37.9%）ある。空間構成は、付帯諸室を持たない小規模な施設や多目的室が保育室とは別階配置の事例が多い。C型は、廊下が遊びの重要な場所に位置付けられていると考えられ、保育室からの家具のはみ出し等が考えられるが、廊下のスペースは5箇所（3事例）に留まる。園舎と庭の配置をみると、15事例（51.7%）は園庭に対し園舎がL字またはコの字型に配置されている。4歳児が園庭へ出やすいだけでなく、園庭を介して他の保育室と向き合う配置は、他学齢の活動がみえやすく、互いが意識しやすい構成だ

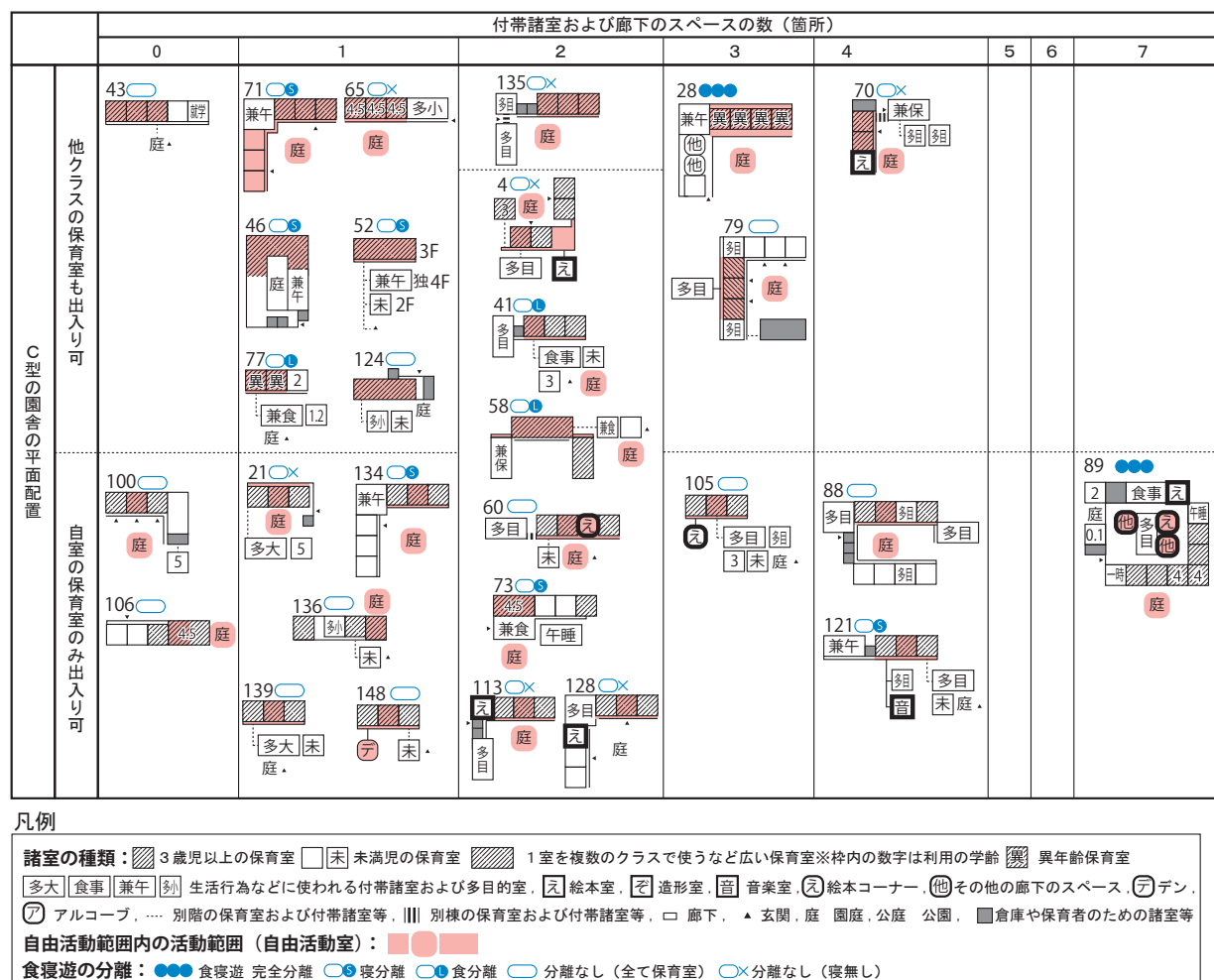
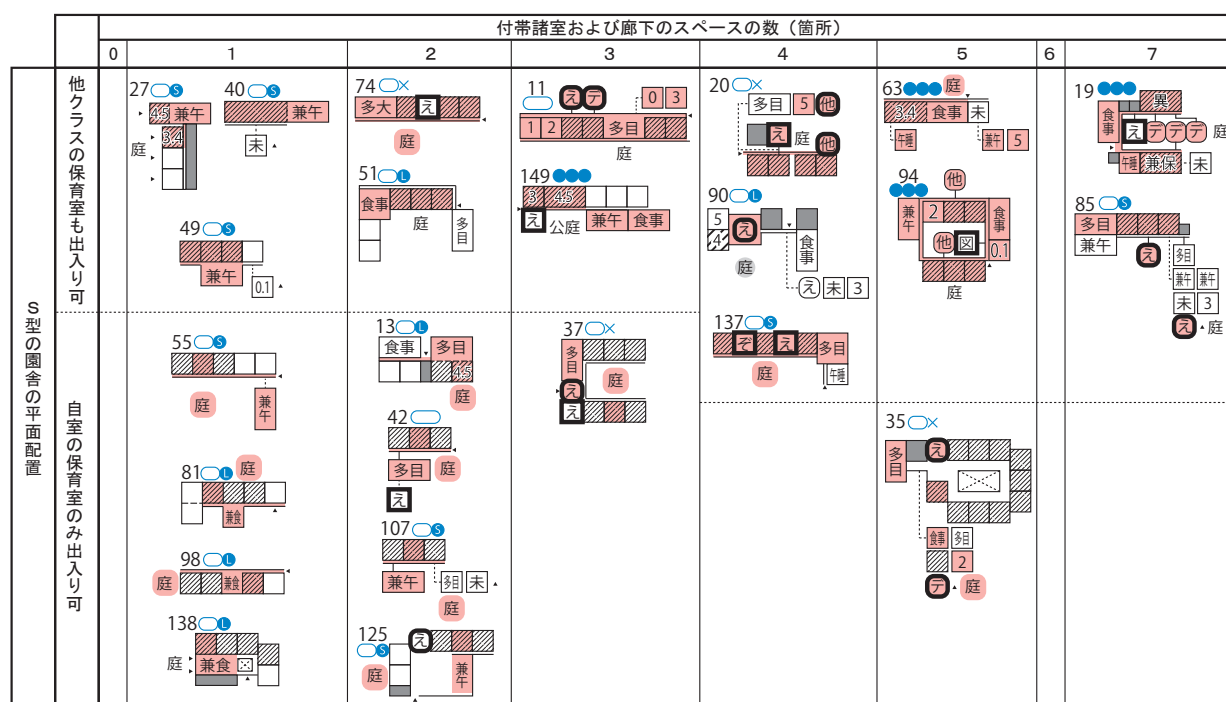


図 4.4 自由活動範囲 C 型の平面構成

と考えられる。また、保育室と園庭が互いに見通しやすいため、保育者にとって、他クラスの活動や他の保育者の動きが捕捉しやすいと考えられる。

### 4.3.3 範囲制限 S 型（S 型）

範囲制限 S 型（以下、S 型。24 事例）は、保育室と廊下に加えて一部の付帯諸室が自由活動室として自由活動範囲に含まれるタイプである。S 型の事例の平面構成を付帯諸室数にみると（図 4.5）、付帯諸室が 7 室（廊下のスペースを含む）整備された事例が、2 事例あった。保育室の範囲を自室のみとする 10 事例と他の保育室も含む 14 事例があった。保育方法は、食寝遊のいずれか一部が保育室外に分離した事例が 14 事例（58.3%）、全て分離の事例は 4 事例（16.7%）と、他の型の中で最も事例数が多かった。生活行為と遊び活動に対し、活動に適した場所を設えるという使い分けの意識が高いタイプであると考えられる。自由活動範囲内の付帯諸室をみると、8 箇所ある絵本室の内、活動室になっているのは事例 20, 137 の 2 事例のみと少ない。一方、23 事例で整備されている多目的室および兼用



凡例

諸室の種類：3 歳児以上の保育室 □ 未満児の保育室 1 室を複数のクラスで使うなど広い保育室※枠内の数字は利用の学齢 異年齢保育室  
多大 食事 兼午 生活行為などに使われる付帯諸室および多目的室、絵本室、造形室、絵本コーナー、その他の廊下のスペース、デン、  
アルコーブ、別階の保育室および付帯諸室等、別棟の保育室および付帯諸室等、廊下、玄関、庭 園庭、公庭 公園、倉庫や保育者のための諸室等  
自由活動範囲内の活動範囲（自由活動室）：  
食寝遊の分離：●●● 食寝遊 完全分離 ●● 食寝分離 ● 食分離 ○ 分離なし（全て保育室） ○× 分離なし（寝無し）

図 4.5 自由活動範囲 S 型の平面構成

室は、事例 20, 51 の 2 事例を除く 21 事例で活動室になっている。多目的室の使い方は、行事や一斉活動の室内運動以外にも、自由な運動遊びや、複数の遊び道具を出したりコーナーを作ることによって自由な遊びに活用されていると考えられる。しかし、多目的室および兼用室を整備した 23 事例の内、11 事例は、午睡または食事との兼用室であることから、生活行為の準備や片付けなどにより、遊びが中断することが考えられるため、継続した遊びの場所になってはいないと推察される。

#### 4.3.4 完全自由形（F 型）

完全自由型（以下、F 型。10 事例）は、自由活動範囲の制限がない自由なタイプである。敷地内を自由に活動できるが、「行き先を保育者へ伝える」等のルールをもつ事例がある。子どもの活動が保育者間で共有され、複数の保育者がチームで子どもを見守る保育がおこなわれていると推察される。F 型の事例の平面構成を付帯諸室数にみると（図 4.6）、比較的、付帯諸室数が少ない。また、食寝遊の分離は、分離なしが 7 事例（70.0%）、午睡を分離しているのが 3 事例（30.0%）である。子どもにとっての活動範囲は、制限がなく自由である反面、食寝遊の分離はされていない事例が多かった。

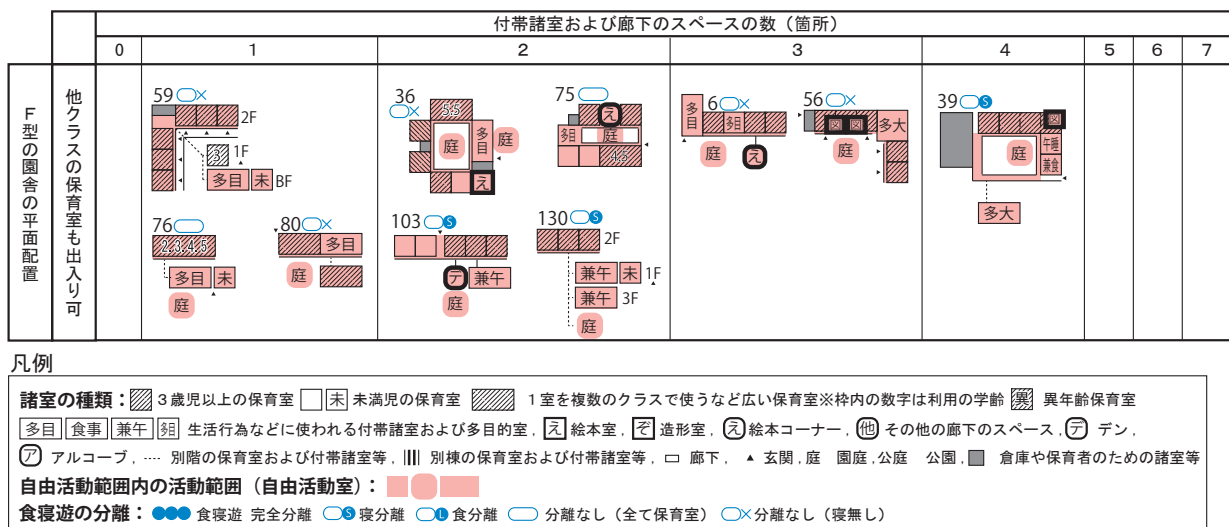


図 4.6 自由活動範囲 F 型の平面構成

## 4.4 小結

### 4.4.1 自由活動範囲内にある付帯諸室の特徴と保育室との配置

付帯諸室の種類では廊下のスペースの自由活動室の割合が高い（82.8%）一方で、遊び室の自由活動室の割合は低い（33.3%）。特に、遊び室は保育室に隣接した配置関係の場合でも自由活動室の割合が低かった。廊下のスペースが自由活動室になりやすく、遊び室はなりにくいことから、自由活動室は、保育室からの高い視認性や一体性が感じられる物理的特性が必要であると推察される。

### 4.4.2 自由活動範囲の類型化

自由活動範囲をその範囲の広がりから4段階に分類し、それぞれの型に含まれる空間の構成等の特徴を考察した。特にS型は、保育室と自由活動室の組み合わせが多様で、活動に適した場所を設えるという意識が高い一方で、整備された付帯諸室の一部は自由活動範囲に含まれていない。このことから、4つの類型の中で最も保育方針と空間の関係性が多様であると推察される。最も自由なF型は保育者の情報共有やチーム保育の態勢作りがおこなわれているタイプと考えられる。

自由活動範囲は、保育方針や方法と保育空間の相乗的關係を端的に表したものであると解釈できる。つまり、保育方法と保育空間をどのように相互作用させ、保育環境を構成するかという指標の一つであり、保育者と子どもが園舎全体の空間をどのように使いこなしているかをみることができ、園舎に対する保育者の評価の1つとしても位置付けられよう。

## Chapter5

---

### 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型と保育者の空間評価

## 5.1 本章の概要

### 5.1.1 目的

本章では、保育者による園舎の空間評価について分析をおこなう。まず、保育施設内に整備された各場所の有無による評価を比較し、保育施設において保育者が重視する場所や空間の要素を分析し、4章で分析した自由活動範囲の類型別に、保育者による園舎の空間評価の傾向を明らかにする。

### 5.1.2 分析方法

まず、保育室に関する設問 14 問と付帯諸室に関する設問 22 問について、重要度と満足度の 2 軸で評価を得た。次に、各設問について保育方法や保育者の行動に関する設問を「保育者の視点」とし、①場所の有無、②管理のしやすさ、③場所の設えやすさに整理し、子どもの過ごし方や活動に関する設問を「子どもの視点」とし、①視認性の高さ、②集団から離れた活動、③主体的な活動に整理して分析した（表 5.1）。また、各設問において該当する場所や使い方の有無を分けた。

表 5.1 保育者による園舎の空間評価の設問

空間的特性		設問番号	内容	事例数 ある ない
保育者の視点	①場所の有無	a2	保育室内の保育者や子どもが制作した物を掲示・展示するスペース	68 0
		b1	多様な用途に利用できるスペース	64 4
		b2	専用のコーナー（絵本コーナーなど）	59 9
		b4	保育者や子どもが制作した物を掲示・展示する場所	60 8
		b6	回廊状に回遊できる	52 16
		c2	多様な用途に利用できる使い方を限定しない部屋	63 5
		c3	屋内運動場	61 7
		c4	特定の遊びや活動のための専用室	53 15
		c8	地域住民が気軽に立ち寄れる部屋やスペース	51 17
	②管理のしやすさ	a11	保育室内で保育者が保育室全体を見通すことができる	67 1
		a14	保育室内で保育者が他クラスの保育者の動きを覗き見ることができる	62 6
		c1	職員室（事務室）から園庭が見える	62 6
		d6	保育者の動線が短い	63 5
		d7	主導線とは別に保育者専用の副動線がある	61 17
	③場所の設えやすさ	a1	保育室内の柱や床材・床高による活動領域の区切りやすさ	67 1
		a3	保育室内で周囲と明るさや床材・天井高など雰囲気異なるスペース	68 0
		b7	保育室と一体型に使えるように間仕切りを容易に撤去・設置できる	56 12
		c6	周囲と明るさや床材・天井高など雰囲気異なる部屋	55 13
		d2	家具や間仕切りが容易に動かせる	59 9
		d3	部屋の広さや形状を容易に変更できる仕組みがある	55 13
		d5	段差のない床・バリアフリーである	61 7
子どもの視点	①視認性の高さ	a7	保育室内のロフトなど視線の高さが異なるスペース	48 20
		a10	保育室内で子どもが保育室全体を見通すことができる	66 2
		a12	保育室内で子どもが他クラスの活動を覗き見ることができる	65 3
		a13	保育室内で子どもが未満児の子どもの様子を見ることができる	57 11
		c5	調理室の調理の様子が廊下から見える	60 8
	②集団から離れた活動	a4	保育室内の子ども数名が身を隠せるようなデンなどの小さなスペース	59 9
		a5	保育室内の子ども数名が集中して活動できるような区切られたスペース	57 11
		a6	保育室内の子どもが一人で活動できる机やスペース	58 10
		a8	保育室内のゴロゴロと横になれるカーペットや畳敷きのスペース	54 14
		b3	子どもが数名で身を隠せるようなデンなどの小さなスペース	54 14
		b5	ベンチや壁に窪みがあり滞在を促す仕掛け	56 12
		c7	保育者と子どもが一对一で話すための小部屋	50 18
	③主体的な活動	a9	保育室内の制作材料や道具は子どもが自由に手に取れるよう収納されている	64 4
		d1	数日間、片付けずに継続した遊びを展開できるスペース	54 14
		d4	午睡時に一部の子どもが利用できる遊びスペース	51 27

設問番号に関する凡例：a. 保育室内 b. 廊下および廊下のスペース c. 付帯諸室 d. 場所を限定しない

## 5.2 該当箇所の有無による評価の比較

各設問に対する場所や使われ方の有無によって事例を分け、重要度の評価の平均値を比較した（図5.1）。両群の平均得点の差に有意差があるかをT検定を用いて分析した。

### 5.2.1 重要度が両群で高い設問

両群において、重要度が3.0以上で評価に有意差が無い設問の内、特に「多様な用途に利用できるスペース（b1）」、「多様な用途に利用できる部屋（c2）」、「保育者の動線が短い（d6）」、「保育室内で子どもが未満児の子どもの様子を見ることができる（a13）」の4つは、重要度の差が無い又は無い群の評価が高かった。場所の有無に関わらず基本的な園舎の物理的環境として重視されているといえる。

次に、重要度が3.0より高く評価に有意差がある設問は、「屋内運動場（c3）」（ $p<0.01$ ）であった。無い群では、屋内運動場を整備する為の十分な面積が確保できない等の課題が考えられ、その代用として、多様な用途に利用できるスペース（b1）の重要度が高くなったと考えられる。

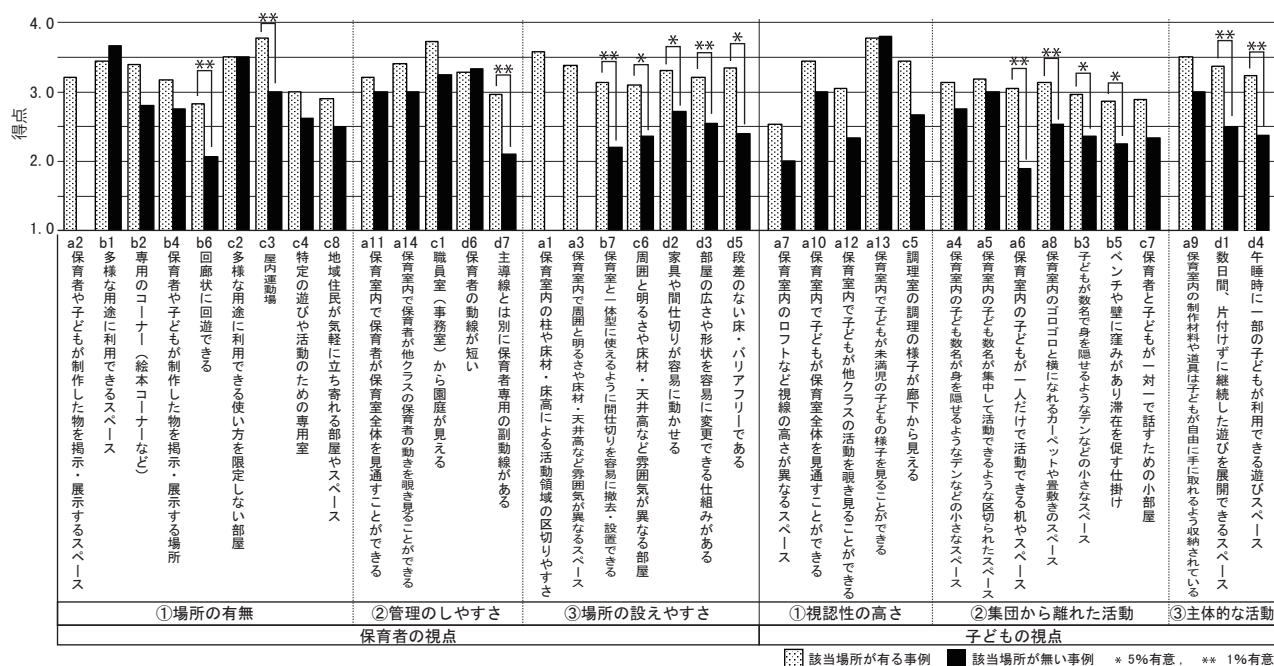


図 5.1 場所の有無による評価の比較

### 5.2.2 重要度が両群で差がある設問

該当場所の有無で両群の評価に差が現れた設問として、該当場所が有る群の評価が3.0以上で、無い群の評価が3.0より低い設問の内、評価の差に1%の有意差が認められた設問を抽出すると、「保育室と一体的に使えるように間仕切りを容易に撤去・設置できる (b7)」( $p<0.01$ )、「部屋の広さや形状を容易に変更できる仕組みがある (d3)」( $p<0.01$ )、「保育室内の子どもが一人だけで活動できる机やスペース (a6)」( $p<0.01$ )、「保育室内のゴロゴロと横になれるスペース (a8)」( $p<0.01$ )、「数日間、片付けずに継続した遊びを展開できるスペース (d1)」( $p<0.01$ )、「午睡時に一部の子どもが利用できる遊びスペース (d4)」( $p<0.01$ ) の6つであった。

特に、「一体的に使えるよう間仕切りを撤去できる (d7)」、「部屋の広さ等を変更できる (d3)」を含む「③場所の設えやすさ」では、7問中5問で、場所の有無と重要度の差に有意差が認められた。無い群では重要度が低いことから、保育者に使用経験がないとメリットが感じられにくい、有ると重視される項目であるといえる。

また、「子どもが一人で活動できるスペース (a6)」、「継続した遊びのスペース (d1)」、「午睡時の遊びスペース (d4)」は、場所の有無で重要度の差が特に大きい。いずれも建築的な設えを必要としないが、専用のスペースを整備しルールを作って運用する必要があるため、保育室の内外に、面積的な余剰スペースを必要とする。つまり、有る群では、面積的な余裕があり、且つ子どもの個人活動や継続的な遊びを重視している運営方針を掲げる事例であると考えられる。

### 5.3 自由活動範囲の類型による評価の比較

次に、自由活動範囲の類型毎に重要度と満足度の得点を標準化<sup>註5.1</sup>して整理し、6つの視点、それぞれについて類型間の差<sup>註5.2</sup>に着目して分析した。

#### 5.3.1 類型によって差が生じない普遍的項目

保育者による空間評価から、評価に差がない普遍的な項目について分析する（図5.2）。

類型間の重要度と満足度に差がない設問として、特に重要度と満足度が共に高い設問は、「屋内運動場がある（c3）」、「保育者が他クラスの保育者の動きを覗き見ることができる（a14）」、「子どもが未満児の子どもの様子を見ることができる（a13）」、「調理室内部の様子が廊下から見える（c5）」である。既に、園舎に重要な空間及び物理的特性として認知され、適切に整備されているといえる。

一方、重要度と満足度が共に低い設問は、「特定の遊びや活動のための専用室（c4）」、「子どもが数名で身を隠せるようなデンなどの小さなスペース（b3）」、「午睡時に一部の子どもが利用できる遊びのスペース（d4）」である。さらに、類型間の差があるものの、いずれの類型タイプにおいても重要度と満足度が共に低い設問では、「地域住民が気軽に立ち寄れる部屋やスペース（c8）」、「保育者専用の副動線（d7）」、「子どもが一人だけで活動できる机やスペース（a6）」、「保育者と子どもが一对一で話すための小部屋（c7）」、「滞在を促す仕掛けがある（b5）」がある。これら8つの設問を、前節の該当場所の有無による評価（6.1）と比較すると、「特定の遊びのための専用室（c4）」、「地域住民が立ち寄れる部屋（c8）」、「保育者と子どもが一对一で話す小部屋（c7）」の3つは、該当場所が有る群でも重要度が低く、保育者には評価されていない。一方、「保育者の副動線（d7）」、「保育室内の子どもが一人で活動できるスペース（a6）」、「デンなどの小さいスペース（b3）」、「滞在を促す仕掛け（b5）」、「午睡時の遊びスペース（d4）」の5つは、有る群の重要度に有意差があるため、施設の運営方針や保育方法と照らし合わせながら、整備の必要性を検討する必要があるといえる。

註5.1) 得点化した数値を元に以下の数式で標準化をおこなった。

$$Ti = 10 \times \frac{x_i - \bar{x}}{s} + 50$$

Ti：問nの任意グループの偏差値    x：問nの任意グループの平均値

x：全問の任意グループの平均値    s：標準偏差

註5.2) 便宜上、比較しやすくするために、偏差値の差が10以内の場合は「差がない」、10以上の場合は「差がある」として整理した。

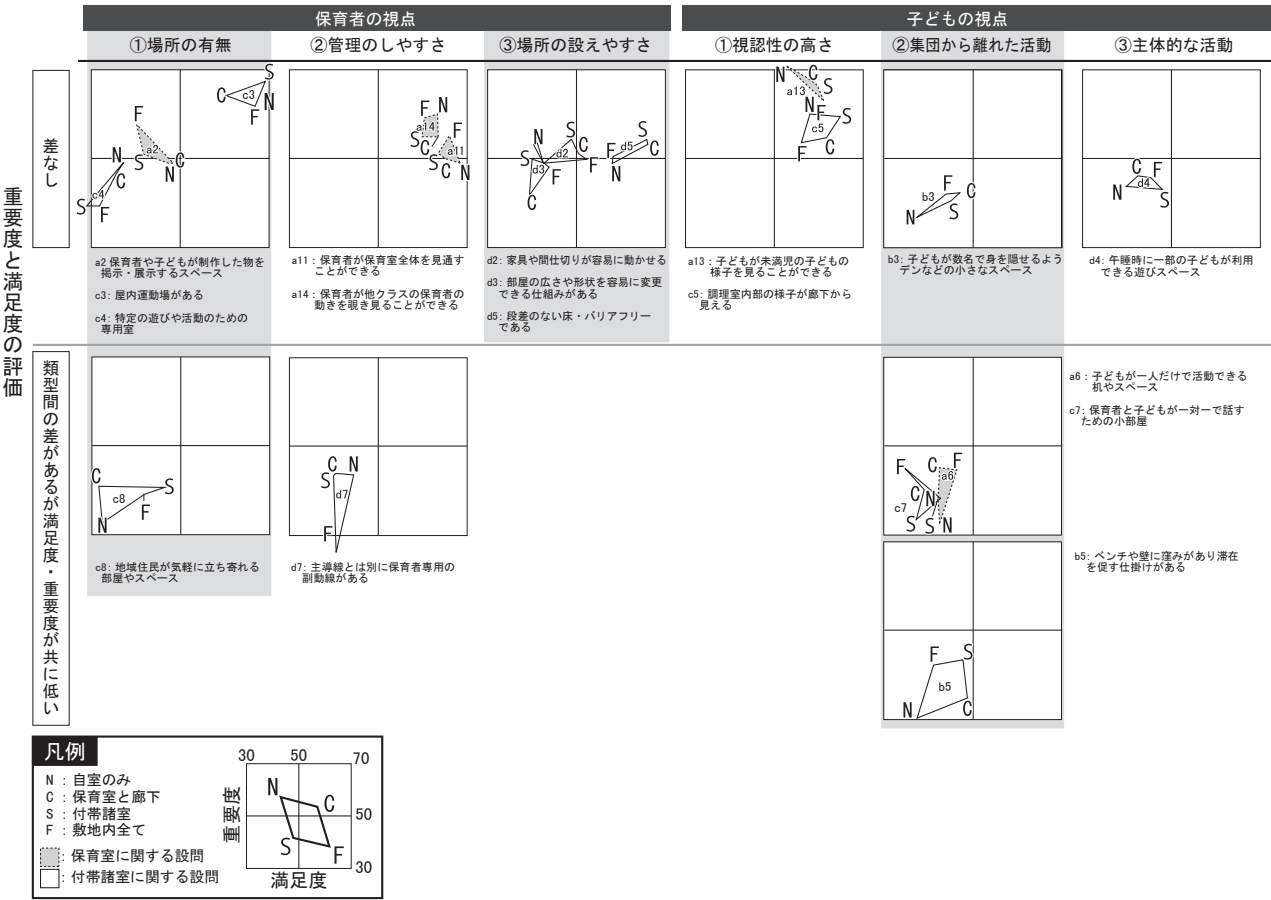


図 5.2 園舎の空間評価 普遍的項目

### 5.3.2 類型によって差が生じる特徴的項目

#### 5.3.2.1 保育者の視点

保育者による空間評価から、評価に差が生じた特徴的項目の内、保育者の視点について分析する（図5.3）。

①場所の有無： 遊び場所に関する設問をみると、「多様な用途に利用できるスペース（b1）」、「専用のコーナー（b2）」、「多用途に活用できる部屋（c2）」では、満足度と重要度の両方に差がある。保育室のみで活動するN型は、「廊下の専用コーナー（b2）」の重要度が高いが、保育室と廊下で活動するC型では、「多用途に利用できる部屋（c2）」の重要度が高い。C型・S型・F型では、専用の部屋より多用途に利用できる部屋やスペースが重視されている。

重要度と満足度の両方に差がある、「廊下の展示場所（b4）」と「保育室内の展示場所（a2）」を比較すると、F型は展示場所が保育室内にあることが重視され、N型は廊下にあることが重視されている。しかし、「回廊状に回遊できる（b6）」では、C型とS型の重要度が著しく低い。C型とS型では、一般的に重要な遊び場所である廊下が回廊状であることで運動遊びが活発になり、落ち着いた遊び場所が設えにくいことから、重要度が低く評価されたと考えられる。

②管理のしやすさ： 重要度に差がある設問は、「保育者の動線が短い（d6）」と「保育者の副動線（d7）」で、いずれもF型は重要度が低く、特に後者については著しく低い。満足度に差がある設問は、「職員室から園庭が見える（c1）」で、C型では重要度と共に高いが、N型・F型の満足度が低い。

③場所の設えやすさ： 満足度に差がある設問は、「保育室の柱や床材による活動領域の区切りやすさ（a1）」と「保育室と一体的に使えるよう間仕切りを撤去できる（b7）」である。自由活動範囲が狭いN型では、「活動領域の区切りやすさ（a1）」の満足度が高いが、「（廊下と）保育室の一体的な利用（b7）」は満足度が著しく低い。

重要度と満足度の両方に差がある「保育室内にある周囲と明るさなどの雰囲気異なるスペース（a3）」と「周囲と明るさなど雰囲気が異なる部屋（c6）」は、いずれもF型で重要度が最も高く、満足度はN型で高かった。F型のように自由活動範囲が広い場合、単に複数の付帯諸室を整備するだけでなく、明るさや床材・天井高といった空間の性質が異なる場所やスペースが重視されていると考えられる。

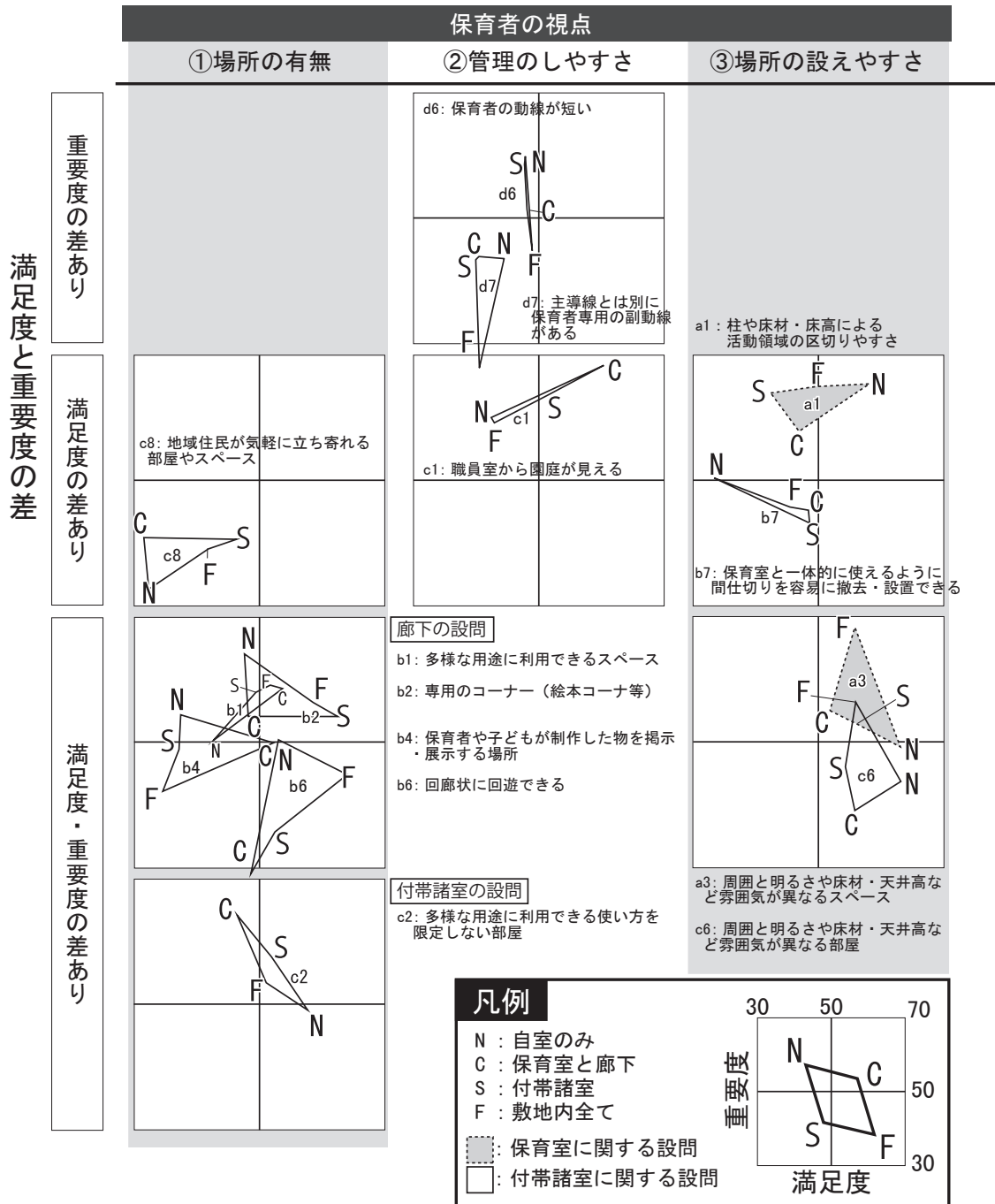


図 5.3 園舎の空間評価 保育者の視点

### 5.3.2.2 子どもの視点

保育者による空間評価から、評価に差が生じた特徴的項目の内、保育者の視点について分析する（図5.4）。

①視認性の高さ： 重要度に差がある設問は、「子どもが保育室を見通すことができる（a10）」で、いずれの類型でも満足度は高いが、F型の重要度がやや低い。重要度と満足度の両方に差がある設問は、「ロフトなどのスペース（a7）」と「子どもが他クラスの様子を見ることができる（a12）」である。ロフトは、C型・S型・F型で重要度が著しく低い。

②集団から離れた活動： 重要度に差がある設問は、「子どもが一人だけで活動できる机やスペース（a6）」、「横になれるカーペットや畳敷のスペース（a8）」、「保育者と子どもが一对一で話すための小部屋（c7）」である。C型・S型・F型では、「子どもが一人で活動できるスペース（a6）」と「横になれるスペース（a8）」の重要度が同程度に低い。N型では、「一人のスペース（a6）」の重要度が低い、「横になれるスペース（a8）」は高い。

重要度と満足度の両方の評価に差がある設問は、「ベンチや窪みなどの滞在を促す仕掛け（b5）」である。特にN型では重要度が低い、自由活動範囲の広いS型とF型では、N型より高い。S型とF型では廊下が単なる移動空間ではなく、子ども同士の少人数の交流や遊び、休息などのための場所として評価されていると考えられる。

③主体的な活動： 満足度はいずれの設問もやや低い。特に類型間の差があるのは、「数日間継続した遊びを展開できるスペース（d1）」で、C型の満足度が著しく低い。重要度と満足度の両方で評価に差があるのは、「制作材料や道具は子どもが自由に手に取れるよう収納されている（a9）」である。N型は重要度が低い、C型・S型・F型は高い。満足度はF型が最も低い。自由活動範囲が広く面積的な余裕があると考えられる類型タイプでも、子どもが自由に道具を手にするための空間評価は満足度が低いことから、場所を確保するだけでなく、制作材料や道具を手に取りやすく収納するなど、設え方や家具にも課題があると考えられる。

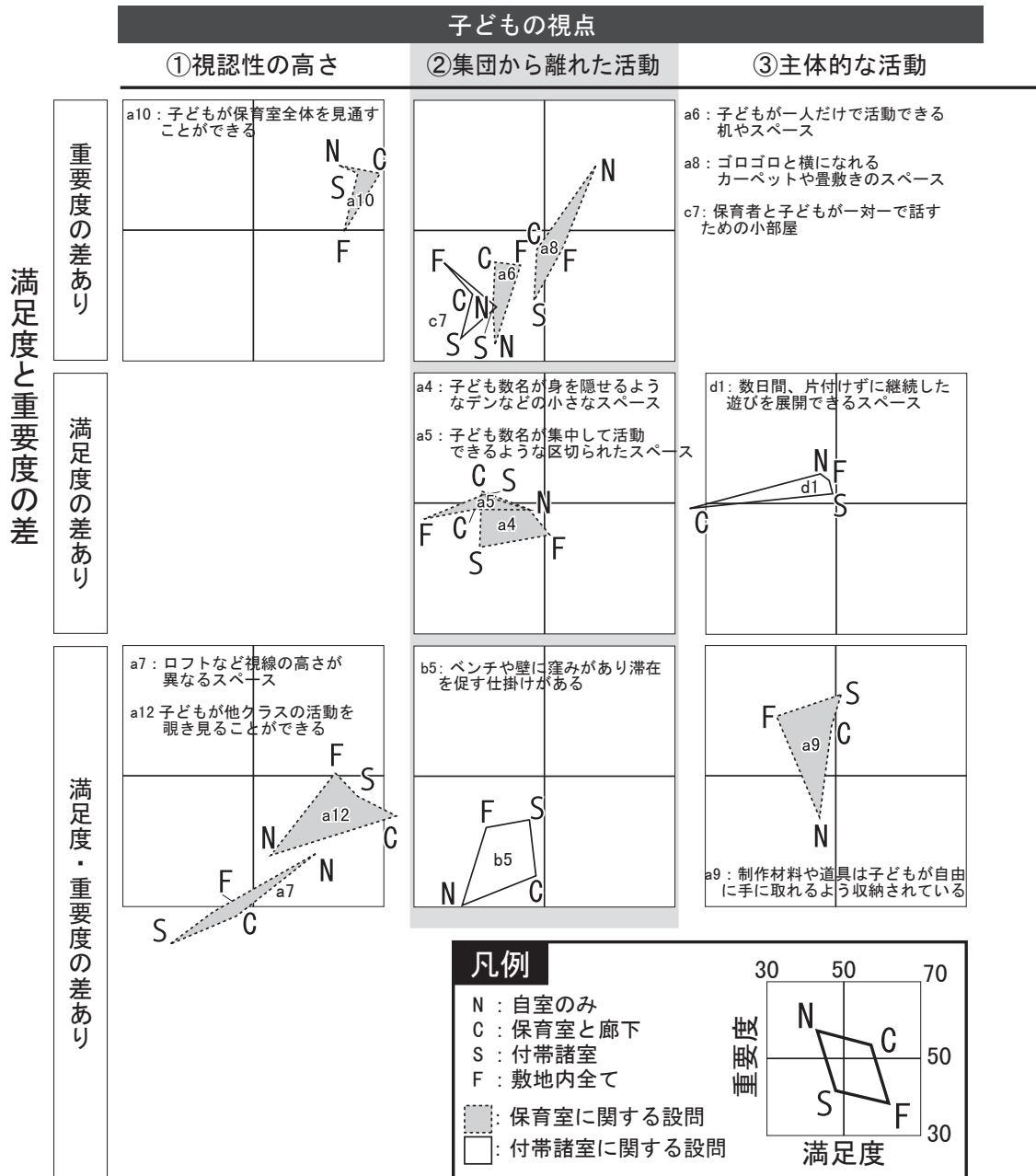


図 5.4 園舎の空間評価 子どもの視点

## 5.4 小結

### 5.7.1 保育空間として重視される物理的特徴

保育者による空間評価から、共通して重視されている物理的特性は、屋内運動場がある（c3）ことと保育室内で子どもが未満児の様子を見ることができる（a13）ことである。また、重要度と満足度が共に低い、一人の活動スペース（a6. b3）、滞在を促す仕掛け（b5）、午睡時の遊びスペース（d4）、保育者の副動線（d7）は、該当場所の有無による重要度に有意差があるため、施設の運営方針や保育方法に照らして整備を検討する必要がある。

### 5.7.2 自由活動範囲の類型別に差異のある空間的特徴

以下に、各類型の空間評価の特徴をまとめる。

- ① N 型：廊下のスペースを重視する傾向がある。具体的には、廊下の専用スペース（b2）は評価が高い一方で、子どもが少人数で活動するスペース（a6. b3）や滞在を促す仕掛け（b5）、制作材料を子どもが自由に手に取れる（a9）設えは重要度の評価が低い。N 型は自由活動範囲が狭いだけでなく、少人数の活動環境が評価されていないと思われる。
- ② C 型と S 型：評価傾向が似た項目があり、専用室（c4）よりも多用途に活用できる部屋やスペース（b1. c2）が重視されている。制作材料についても子どもが自由に手に取れる（a9）設えが重視されているが、回廊（b6）は重視されていない。
- ③ F 型：空間の性質が異なるスペース（a3. c6）や、制作材料について子どもが自由に手に取れる（a9）設えは重要度が高い。自由活動範囲が広いのみならず、多様な性質の空間や、子どもの自由な行動を支援する環境を重視する傾向がある。

## Chapter6

---

### 遊びに関する付帯諸室の使われ方と役割

## 6.1 本章の概要

5章までに、68事例における付帯諸室の整備状況の概観（3章）を捉え、子どもの自由活動範囲と自室の保育室との配置関係から、子どもの主体的な活動場所となりやすい付帯諸室の空間条件と、自由活動範囲の類型化（4章）、さらに自由活動範囲の類型別に保育者による園舎の空間評価の傾向（5章）を明らかにしてきた。自由活動範囲は、保育方針と保育空間の相互関係から定められているため、園舎に対する保育者の評価の1つとしても位置付けられよう。

それを踏まえて、本章では、子どもの主体的な活動と保育室の外に整備された付帯諸室の分析をさらに進める。子どもの主体的な活動には、遊び活動に関するものと、食事や午睡など生活行為に関するものがある。本来であれば、保育施設における遊び活動と生活行為は、連続性のある活動であり、それを区分して考えることは避けたい。しかし、本研究3章の分析<sup>註6.1</sup>において、食事室を整備しながら食事室を食事で使用しない事例では、食事室を使用することが、子どもの主体性を損ねる一斉活動的な集団行動を招いていることが明らかになった。これは、食事室の建築的な整備の不備以外にも、保育者のスキルや配置人数、連携の難しさに原因があった。食事室での食事は、今後、保育施設の計画を考える上で最低限必要となる計画上の要件であろうが、本研究では、子どもの主体的な活動を分析の視点にしているため、生活行為のための付帯諸室については、その議論を今後の研究課題とし、まずは、遊びのための付帯諸室及びスペースについての分析をおこなうこととする。

### 6.1.1 目的

本章では、子どもの主体的な活動の中でも遊び活動に着目し、自由活動範囲内にある付帯諸室の中で、遊びのために整備された遊び室と廊下のスペース（以下、遊びスペース）を対象に、遊びスペースの使われ方と設えの特徴を比較分析し、さらに保育者による評価から、保育者にとっての見守りやすさと、子どもの活動の多様性から、保育室外に整備された遊びスペースが担っている役割を考察し、子どもの主体的な活動を支援する建築的な知見を得ることを目的とする。

### 6.1.2 調査方法

図面調査及びアンケート調査より抽出した68事例の内、遊びスペースを整備した事例を抽出する。さらに、自由活動範囲内に1つ以上の遊びスペースをもつ事例の内9事例に対し、訪問ヒアリング調査と写真記録を実施し、さらに許可が得られた2事例には終日観察調査をおこなった。

註6.1) 詳しくは、3章. 研究対象事例の保育空間と保育方法の3.4.4を参照。

### 6.1.3 分析方法

自由活動範囲内に1つ以上の遊びスペースをもつ事例を対象とした分析では、次の5つの視点から分析をおこなう。

- 1) 保育全体の活動と活動場所の対応関係や活動のルールと自由活動範囲の広さから、事例を概観する。
- 2) 遊びスペースの平面構成と家具の配置および家具の可動性から、遊びスペース内の環境の可変性を評価する。
- 3) 遊びスペースの視認性と保育者におけるヒアリング調査の結果から、遊びスペースの見守りやすさを評価する。
- 4) 遊びスペースに対する場所選択の自由度と保育者におけるヒアリング調査の結果から活動の多様性を評価する。
- 5) 遊びスペースの見守りやすさと、子どもの場所選択の自由度、活動の多様性の3つの軸から、子どもの主体的な活動について考察し、遊びスペースの役割を考察する。

### 6.2 遊びスペースの種類と自由活動範囲の関係

図面調査及びアンケート調査から抽出した全68事例の保育施設の内、遊びスペースをもつのは27事例(39.7%)で、遊びスペースは45箇所あった。建築的な設え別にみると(図6.1)、壁と扉で区切られた部屋型が37.8%(17箇所)、廊下のスペース型が51.1%(23箇所)ある。デンは、室名(及びスペース名)を元に抽出するつと、部屋型と廊下のスペース型が混在している(5箇所, 11.1%)。内訳では、絵本室と絵本コーナーがそれぞれ15箇所と最も多く、合計30箇所遊びスペース全体の66.7%を占める。

27事例の遊びスペースの内、1ヵ所以上の遊びスペースが自由活動範囲内にあるのは17事例である(表6.1)。17事例には34箇所の遊びスペースがあり、その内、自由活動範囲外にも遊びスペースがあるのは、5事例6箇所である。2.1で整備数が多かった絵本室と絵本コーナーをみると、絵本室15箇所の内、自由活動範囲内にあるのは4箇所(26.7%)のみである。一方、廊下型の絵本コーナー15箇所では、自由活動範囲内に12箇所(80.0%)ある。つまり、絵本室と絵本コーナーはいずれも整備数が多いが、絵本室は、子どもの自由な利用は制限されている事例が多い。

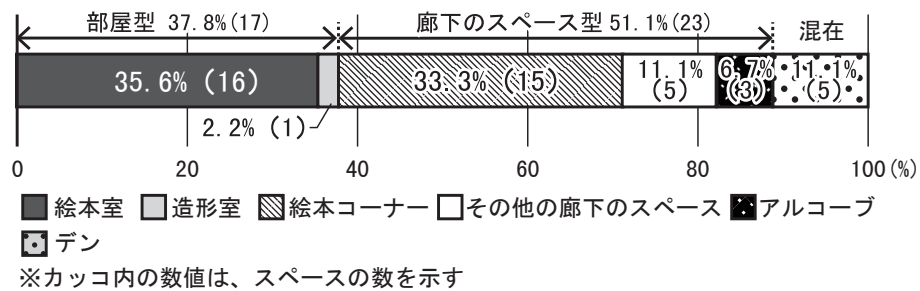


図 6.1 27 事例における遊びスペースの種類

表 6.1 自由活動範囲と遊びスペースの関係

		自由活動範囲内に1箇所以上の遊びスペースがある事例																自由活動範囲内に遊びスペースがない事例											
事例名		SS	SH	MK	RB	EG	AN	SB	AS	SA	NG	WZ	SK	SR	KI	NT	KD	TG	HK	HS	AY	SG	KT	TY	AM	KK	HG	NM	
事例名	自由活動範囲に対する付帯諸室の位置	え	え	デ	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	他	デ	え											
	範囲内		ア	デ	ア	デ		え		え			え	他		他		ぞ											
	範囲外			え	ア									え	え	え			え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	
保育方針		F		M			F		F	F		F					F												
スペースの内訳		え 絵本室    ぞ 造形室    え 絵本コーナー    デ デン    ア アルコーブ    他 その他の廊下のスペース																											
スペースの位置		□ (無印) 4歳児保育室と同階    ▤ 4歳児保育室より上階    ▥ 4歳児保育室より下階																											
保育方針		無印 自由活動範囲が限定されている    F 自由活動範囲が園全体にわたる    M モンテッソーリ																											

### 6.3 自由活動範囲内の遊びスペースの種類と活動

自由活動範囲内に遊びスペースがある 17 事例の中で、自由活動範囲が園全体にわたる<sup>註6.2</sup> 6 事例を除いた 11 事例を選出し、その中で許可が得られた 9 事例に対し、施設訪問及び保育者へのヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査を実施した施設の概要を表 6.2 に示す。

#### 6.3.1 種類

9 事例に整備された遊びスペースは 23 箇所<sup>註6.4</sup> ある（図 6.2）。内訳は、部屋型が 30.4%（7 箇所）、廊下型が 52.2%（12 箇所）で、部屋型と廊下型が混合するデンは 17.4%（4 箇所）である。ある。種類として多いのは、部屋型の絵本室 6 箇所（26.1%）、廊下型の廊下のスペース 6 箇所（26.1%）、絵本コーナー 5 箇所（21.7%）である。

表 6.2 ヒアリング調査対象の事例概要

自由活動 範囲の種類	範囲制限 S 型								範囲制限 C 型
事例番号	11	19	20	35	85	90	94	137	89
事例名	SH	MK	RB	EG	SK	KI	NT	TG	SR
調査日	2018. 12. 21	2016. 10. 27	2020. 1. 31	2020. 2. 4	2018. 11. 12	2020. 1. 20	2020. 1. 22	2019. 4. 23	2019. 12. 24
調査対象	施設長	施設長	主任保育者	施設長	施設長	施設長	副施設長	施設長	施設長
施設形態	こども園	こども園	こども園	幼稚園	こども園	保育所	こども園	こども園	こども園
食寝遊 の場所	NNN	LSN	LXN	NXN	NTN	LNN	NTN	NSN	NSN
延べ床面積 (㎡)	1636.00	1156.00	1876.94 <sup>註6.3</sup>	3942.94	1672.29	968.07	2785.51	591.46	2611.61
定員数 (人)	160	120	270	480	107	120	240	105	200
保育室面積 (㎡)	72.21	1室複数クラス	50.46	49.9	33.73	55.01	72.48	50.26	77.26
1クラスの人数 (人)	14	26	30	33	15	24	35	29	29
ヒアリング 内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育活動の流れ 1 日の保育の流れ、保育室の設え、子どもの動線、出入り口・靴箱の位置など</li> <li>・ 食寝遊の分離 食事・午睡・遊びの場所（確認）と準備の内容、使い勝手、専用室と兼用室についてなど</li> <li>・ 付帯諸室の使い方 付帯諸室の種類、現状の使い方、保育室との使い分け、意義など</li> <li>・ 自由活動範囲 自由保育時間中の活動範囲（確認）、自由保育中のルール、範囲の決め方</li> </ul>								

食寝遊の場所：N 保育室、L 食事室、S 午睡室、T 多目的室（兼用）

註 6.2) 自由活動範囲の分類「完全自由形 (F 型)」である。子どもの自由活動範囲に制限がなく、子どもは敷地内を自由に活動できるという活動方針をもつ。複数の保育者で連携しながら子どもを保育するチーム保育の体制があるなど、保育方法に工夫が見られると推察される事例であるため、本研究の対象からは除外した。

註 6.3) 事例 RB は、2019 年より幼稚園から認定こども園に変更された為、園舎の増築及び未満児の保育を実施している。それに伴い、2018 年実施のアンケート調査より「食寝遊の場所」「延床面積」「定員数」に変更があった。

註 6.4) 事例 KI の絵本コーナーは、図面調査及びアンケート調査時では、2 箇所あったが、訪問調査により 2 階の絵本コーナーが使用されていないことから、6 章以降の分析対象から除外した。そのため、9 事例に整備された遊びスペースは 23 箇所である。

6.3.2 活動ルール

9事例の主な保育活動の場所と部屋配置を表6.3に示す。

まず、各事例の自由活動範囲についてみると、遊びスペースの全てが自由活動範囲に含まれる事例はTG, SK, SH, EGの4事例、一部の遊びスペースが自由か都合範囲外にある事例は、MK, RB, SR, KI, NTの5事例である。また、保育室の範囲は、全ての保育室が自由活動範囲内である事例は、TG, MKの2事例、自室の保育室と一部保育室が自由活動範囲である事例は、SK, RBの2事例、自室の保育室のみが自由活動範囲である事例はSH, EG, SR, NTの4事例である。このことから、最も自由活動範囲が多いのは事例TGであり、対して自由活動範囲が最も限定されているのは、事例SR, KI, NTである。一部の保育室や遊びスペースが自由活動範囲外である事例の内、事例SK, RBでは、4歳児保育室がある階数と異なる

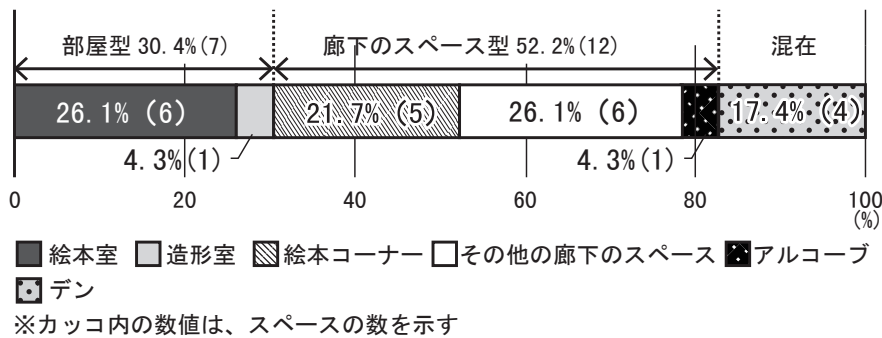


図 6.2 9 事例における遊びスペースの種類

表 6.3 保育活動の場所と活動上のルール

事例名	NT	SR	RB	MK	KI	EG	SH	SK	TG
室名	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2 デン(3カ所)	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2	保育室 食事室 多目的室 絵本室 廊下 廊下のスペース1 廊下のスペース2
活動とルール	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡	遊び 行事 食事 午睡
平面配置の模式図									
活動範囲	遊びスペース 保育室	一部の遊びスペース 一部の保育室	一部の遊びスペース 一部の保育室	全ての遊びスペース 全ての保育室	全ての遊びスペース 全ての保育室	全ての遊びスペース 全ての保育室	全ての遊びスペース 全ての保育室	一部の遊びスペース 一部の保育室	全ての遊びスペース 全ての保育室

活動場所と活動ルール：●子どもだけの利用、○保育者と一緒利用、▲月に数回利用する、●条件によって利用を制限する、■子どもだけの利用は想定されない活動（行事での利用）。

平面配置の模式図：[3]保育室（数字はクラスの学年、異なる年齢クラス）、[多目]多目的室、[食事]食事室、[午睡]午睡室、[兼午]多目的室兼午睡室、[未]未就園児クラス、[職員]職員室・調理室等。

[引]一時預かりの保育室、[食]食事コーナー、[絵]絵本室、[造]造形室、[絵コ]絵本コーナー、[他]その他の廊下のスペース、[デ]デン、[ア]アルコーブ、[X]自由保育の時間中に子どもが自由に出入りできない範囲（由活動範囲外）

る階に整備された保育室や遊びスペースを自由活動範囲外と設定していることから、階段が子どもの活動範囲を制限する要因であると示唆される。

次に、遊びスペースの活動ルールをみると、自由活動範囲内にある遊びスペースの内、事例 TG の絵本室と造形室、事例 SK の絵本コーナー 2 箇所、事例 SH の絵本コーナーとアルコーブ、事例 MK のデン 3 箇所、事例 RB の廊下のスペースの 10 箇所では、子どもだけの利用が可能である。一方、事例 RG の絵本室とデン、事例 RB の絵本室、事例 KI の絵本コーナーの 4 箇所では、原則として保育者がいる状況で使うというルールがある。しかし、前述の事例 RB の絵本室と事例 KI の絵本コーナーでは、実際には子どもだけの利用があり、保育者がいない状態での利用が容認されている。具体的には、事例 RB では、絵本室という場所の用途に合致した活動（読書や本を選ぶ等）であれば、そのまま見守り、事例 KI では、トイレから自室へ戻る途中の子どもが絵本コーナーに滞在する例が挙げられた。さらに、事例 SR の絵本コーナーと廊下のスペース 2 箇所と、事例 NT の廊下のスペース 2 箇所の 5 箇所は、通常は子どもが自由に活動できる遊びスペースであるが、保育者の人数が十分確保できない時間帯や季節によって、スペースを閉鎖するといった制限を設けている。つまり、保育者の都合や温熱設備の不備によって、子どもの意思による自由な活動が抑制されている。

また、図面調査で得た平面図に示された室名と現在の用途についてみると、事例 TG, SK, SH, NT では保育室の学齢が変更され、事例 MK のデンでは、遊びスペースとロッカールームを兼用する場所として使われていた。一方、事例 TG の造形室、事例 TG, MK, NT の絵本室 3 箇所、事例 SK, SH, EG, SR, KI, の絵本コーナー 6 箇所では、用途の変更はなかった。遊びスペースでみられる具体的な活動については、6.5 で述べる。

## 6.4 遊びスペースの家具配置と家具の可動性

9 事例 23 箇所の遊びスペースの多くは、使用開始後から、その用途を大きく変更していない。そのため、用途に合わせた設えとして、造り付け家具や置き家具、床材など様々な物によってスペースの環境が作られている。本章では、遊びスペース別に設えの比較をおこない、その特徴を分析する（表 6.4）。遊びスペースの用途の種類は、造形室が 1 箇所、絵本室が 5 箇所、絵本コーナーが 6 箇所、廊下のスペースが 6 箇所、デンが 4 箇所、アルコーブが 1 箇所である。

表 6.4 遊びスペースの家具の可動性と建築条件

室名		造形室			絵本室			絵本コーナー						廊下のスペース						デン		アルコーブ
事例名	TG	NT	SR	RB	MK	TG	SR	KI	EG	SH	SK1	SK2	NT1	NT2	SR1	SR1	RB1	RB2	MK	EG	SH	
家具の種類と可動性	A. 壁の棚	■	■	■	■	■	■			■	■								■			
	B. 独立した棚	●			■			■	■			■		■								
	C. 絵本棚								●	●												
	D. 机やテーブル	●	●		●	●						●						●		○	■	
	E. ベンチや椅子		■●		■		○	■●	○	■	■	■	■	■			■	■	■	○		■
	F. その他	○ ゴミ箱														● 荷台		● タオル掛け		● コート掛け	■ 窪み	
床材		板張り	カーペット	板張り	板張り	板張り カーペット	長尺 シート	カーペット	カーペット	板張り	板張り	コルク	板張り	板張り	長尺 シート	長尺 シート	板張り	ゴム	タイル	カーペット	板張り	
天井高 (mm)		2100	Unknown	2500	2200	2560	2100	2500	2600	3000	2650	2400	2400	2100~ 3600	2100~ 3600	2500	2500	2230	2230	2560	2400	1400
床面積 (㎡)		16.14	75.16	87.54	16.28	10.00	16.14	14.94	9.08	18.69	5.75	3.85	11.70	26.02	26.02	26.22	9.48	9.08	9.08	10.00	8.61	6.89

可動性：■造り付け家具（動かせない家具）、●置き家具（保育者は動かせる家具）、○子どもが動かせる家具。

#### 6.4.1. 造形室

造形室は（図 6.3）、事例 TG の 1 箇所のみである。造り付けの壁面棚（A）は 2 つあり、一方は扉付きで保育者が使用し、他方は制作材料やセロテープなど道具が収納され、子どもが自由に手に取ることができる。置き家具は、制作のためのテーブルが 2 台（状況によって 3 台、D）あり、子どもは台の周りに集まり、立ったまま制作する。また、TG では、子どもが家庭から持参した材料を寄付する取り組みがあり、制作材料の保管場所は棚だけでなく、必要に応じて保育者が追加で作成した収納箱（G）を活用している。造形室の家具配置は、子どもの作業のしやすさや集中しやすさを考慮して保育者によって都度、変更されている。造形室を利用する子どもは、他の遊びに使う小道具等を制作して直ぐに退室する子どもと、長時間、集中して制作活動が続ける子どもがいるが、立って制作する環境が、利用する子どもの人数に対応しやすく、子どもの往来に柔軟に対応できる要因と考えられる。また、造形室は、4 歳児と 5 歳児保育室にそれぞれ隣接している。造形室の出入り口は、半屋外廊下に接した掃き出し窓 1 箇所と、各保育室に出入りできるドアが各 2 箇所ずつあり、日常的に保育室間の通過動線としても利用されているため、人の流動がある。

#### 6.4.2 絵本室

絵本室は（図 6.3）、事例 SR, MK, RB, NT, TG の 5 箇所である。本棚は全ての事例に造り付けのものがあり、事例 RB を除いて壁面に沿って設えられている。事例 SR は、この部屋が保護者や保育者の会議室として使われ、子どもの自由な活動には使用されないこともあって、造り付けの本棚以外に家具はない。また、事例 RB, NT, TG にはベンチ（E）があるが、RB と NT は造り付けのため動かすことができない。一方、TG の 3 つのベンチ（E. 3 人掛け）は、子どもの力で移動させることができる。事例 TG は、子どもが自由に利用できる絵本室であるが、保育者へのヒアリングから、ベンチは、子どもが好きな向きに移動させて本を読んだり、他の遊びに活用されるなど、子どもの手による設えの変更が日常的に生じているという指摘があった。実際に訪問時にはベンチを用いて絵本室の隅に小さいスペースを作り、ごっこ遊びをおこなう子どもの姿がみられた（6.6 詳細）。このことから、子どもが動かすことができるベンチによって、子ども自らが遊び場所を設える事が可能になり、より小さなスペースを作ったり、遊びの装置として活用されることで、遊びの展開に影響を与えていると考えられる。また、TG では、6.4.1 で述べた造形室と同様に、部屋が保育室に隣接しており、直接保育室へ入るドアが各 2 箇所と、廊下から出入り可能な掃き出し窓があり、通過動線として頻繁に人が行き来している。

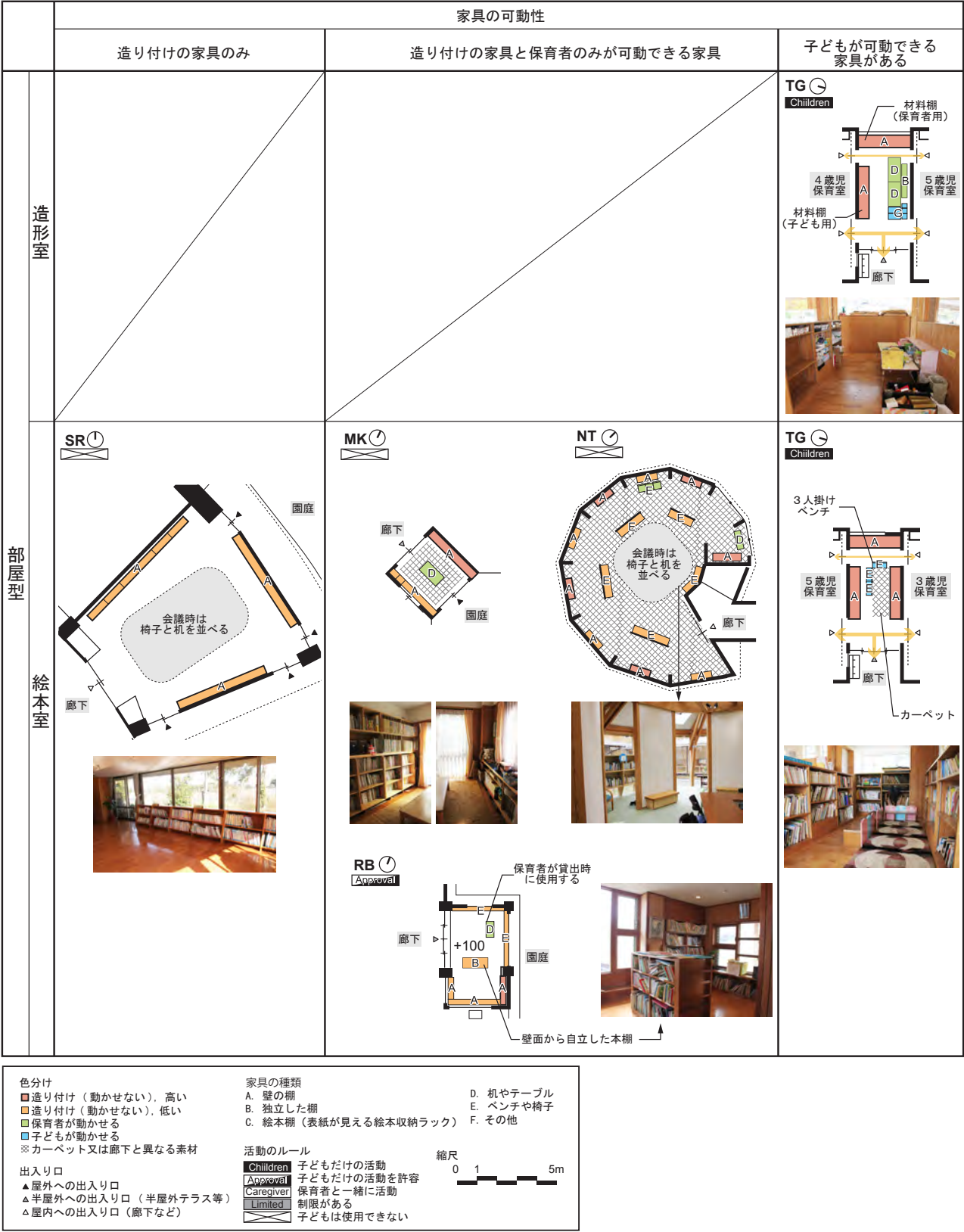


図 6.3 遊びスペースの家具配置と可動性 <造形室と絵本室>

## 6.4.3 絵本コーナー

絵本コーナーは（図 6.4）、事例 SK1, SH, SK2, SR, KI, EG の 6 箇所ある。事例 SK1, SH, SR では、アルコーブのように壁面の窪みを利用して本棚（A）やベンチ（E）が整備されコーナーを形成している。一方、事例 SK2, KI, EG では、造り付けの本棚と床材の変化によって空間が区切られコーナーを形成している。子どもだけでの利用が可能（または容認されている）SK1, SH, SK2, KI は、保育室からトイレや下駄箱への主要動線上にあり、低い棚によって空間が区切られているため、保育者の目が届きやすく、コー

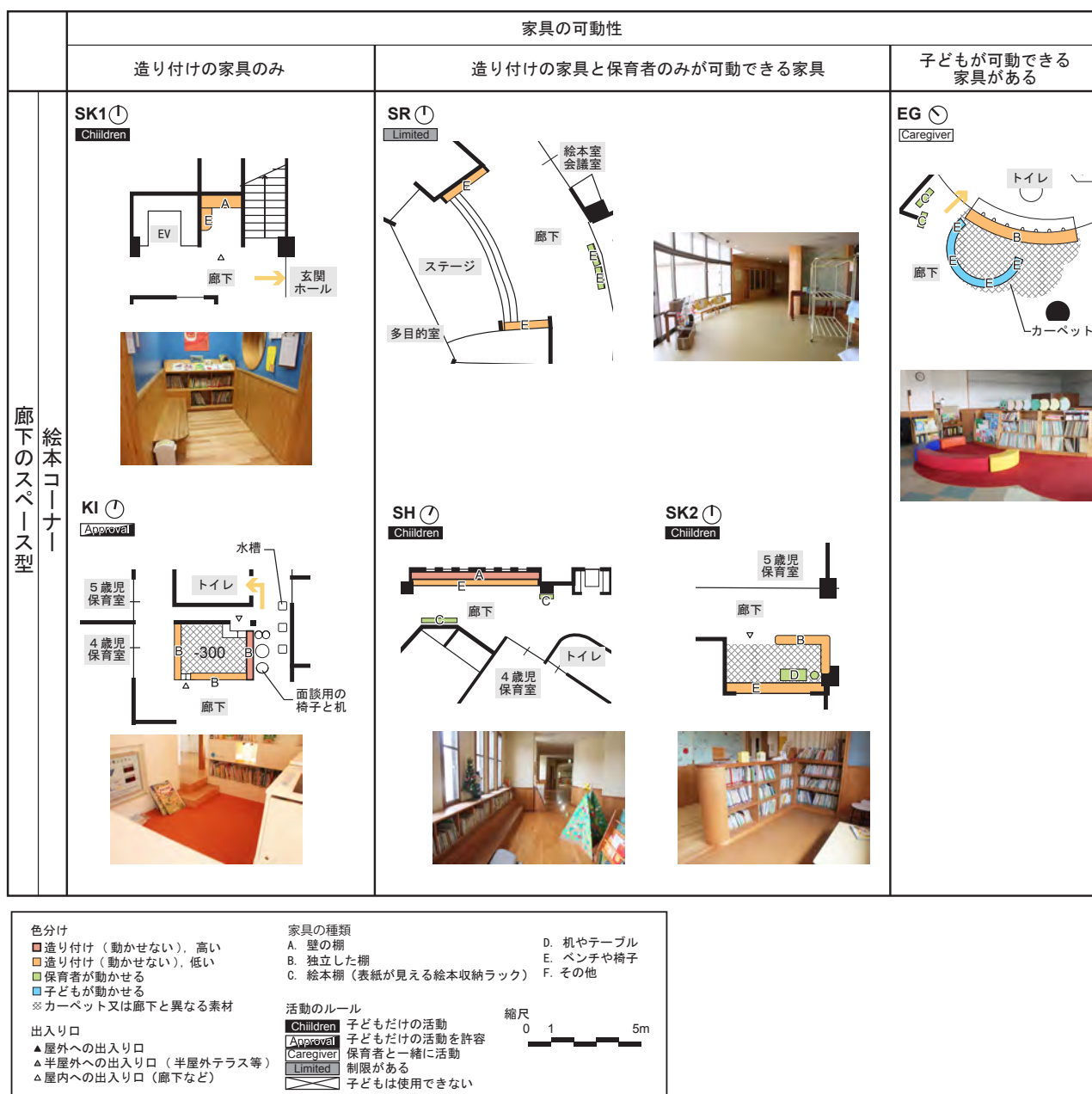


図 6.4 遊びスペースの家具配置と可動性 &lt;絵本コーナー&gt;

ナー内からでも周囲の気配が感じやすい。また、事例 SK1, KI では、降園時に親子で本を読む場所としても利用されている。

6.4.4 廊下のスペース

廊下のコーナーは（図 6.5）、事例 RB1, RB2, SR1, SR2, NT1, NT2 の 6 箇所である。RB1, RB2, SR1, SR2 の 4 箇所は、アルコーブのように壁面の窪みを利用したベンチ（E）が整備されており、それが廊下の



図 6.5 遊びスペースの家具配置と可動性 <廊下のスペース>

コーナーの一部になっている。子どもが自由に活動できるのは、事例 RB のみであるが、ここは廊下の突き当たりの3歳児保育室の前面という空間の特徴から、保育室から物のはみ出しがあり、タオル掛け (F) や机 (D) が設置されているため、3歳児の使用が多い。造り付けベンチ (E) では、お茶を飲んだり子ども同士が話し込むなど、遊びと生活行為の両面で保育室を延長した場所として使われている。また、SR1, SR2 は、それぞれブロック遊びのコーナーと電車ごっこの「駅」という設定を保育者が定めているが、いずれ也多目的室の出入り口という動線上にあるため、落ち着いて遊ぶ環境が設えにくく、遊びの展開が制限されている。一方、NT1, NT2 は多目的に使えるスペースとして整備されたが、中央の造り付けの棚 (B) が可動できないため、保育者にとっては、遊び方を制限する要素になっていた。

#### 6.4.5 アルコーブ

アルコーブは (図 6.6)、SH の 1 箇所である。隣接した絵本コーナーから本を持参して読んだり、子ども同士が会話をしたり、親子で本を読む場所として、様々な用途に使われている。スペースは 3 つの独立した個室のように設えられており、中に入ると囲われた小さなスペースであるが、廊下や保育室からは比較的よくみえているため、保育者にとっても、子どもを遊ばせやすい場所である。窓から外をみると、隣接する小学校を眺めることができる。机 (D) と椅子 (E) は造り付けのため、移動させることはできない。

#### 6.4.6 デン

デンは (図 6.6)、MK に 3 箇所と EG に 1 箇所の合計 4 箇所ある。MK は、設えの変更を繰り返している事例で、調査時は、子どものロッカー兼音遊びの場所として使われ、子どもが自由に遊べる場所として位置付けられていた。それぞれのデンには、子ども用の椅子 (E) と机 (D) と、保育者が作成した背の低いコート掛け (G) がある。机と椅子は子どもによって自由に動かされ、活用されている。また、室内からは、それぞれ園庭を眺望することができる。MK のデンは、子どもにとって少人数の活動がしやすい空間であると考えられる。一方、EG は階段の下のスペースを利用して整備されたスペースで、大型ブロックを収納する窪み (F) があるため、ブロック遊びの場所として使用されていた。デン内部はブロック以外の物が無いシンプルな空間で、保育室からも離れているため、ブロック遊び以外の遊び方はみられない。

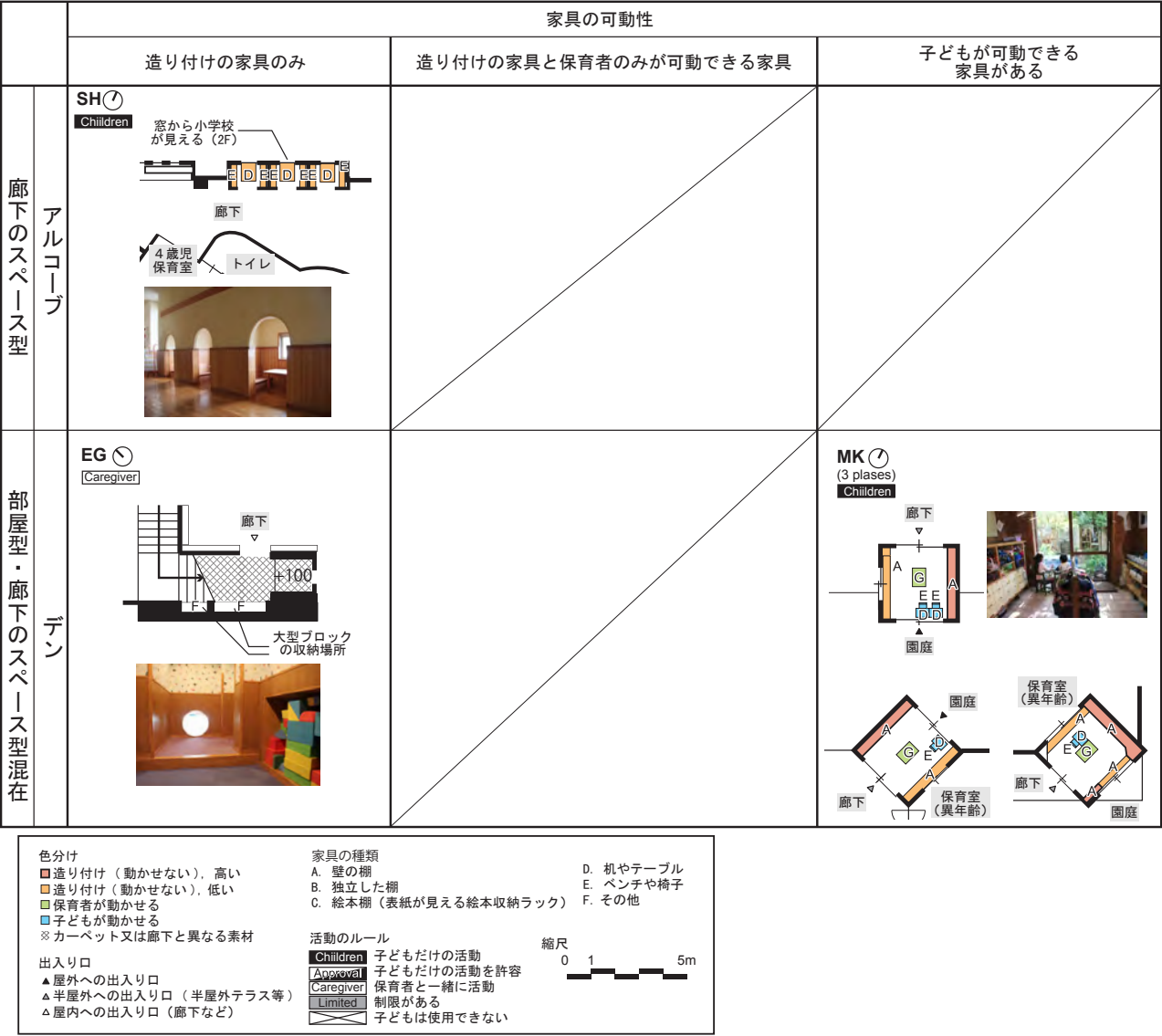


図 6.6 遊びスペースの家具配置と可動性 <デンとアルコーブ>

## 6.5 遊びスペースの視認性と保育者による見守りやすさ

6.4 で分析した遊びスペースの物理的要件と、保育者に対するヒアリング調査で得られた発言から、9 事例 23 箇所の遊びスペースの内、主に 4 歳児以外が使用していた 2 事例（事例 NT の廊下のスペース 2、事例 RB の廊下のスペース 2）を除く 21 箇所の遊びスペースを対象に分析をおこなう。分析の視点は、6.5. では、保育者の見守りやすさの指標として、遊びスペース内の視認性と部屋の使い方について分析する。

### 6.5.1 遊びスペースの視認性

遊びスペースの視認性と使われ方から、保育者にとっての見守りやすさについて評価する。分析では、事例毎に 4 歳児保育室と遊びスペース（図中の桃色<sup>註 6.5)</sup> の配置関係を表すための平面図を示し、さらに保育者から得られた遊びスペースの評価や動線（黄線）を追記している。保育者の発言については、「空間」と「管理」に分けて抜粋し、視認性に関する発言を赤字、空間の広さ感に関する発言を青字で示して、事例毎に表にまとめた。写真は、遊びスペースの様子や廊下や園庭からの見え方を補足する目的で示す。

#### 6.5.1.1 遊びスペースの一部が自由活動範囲の事例

##### 1) 事例 NT

事例 NT は（図 6.7、写真 6.1、表 6.5）、絵本室と廊下のスペースを整備しているが、絵本室は自由活動範囲外にあり、廊下のスペースは季節によって利用しない時期がある事例である。絵本室は、元食事室（2019 年 4 月より食事場所としての使用を中止）や未満児保育室が並ぶ廊下にあり、4 歳児保育室からは離れているため、絵本室の入り口や室内はみえない。また、絵本室は園庭（中庭）に面しているが、室内の様子を容易にみることはできない。保育者の発言からは、保育室から離れている点が「隔離されている」と称され、会議場所として評価されていた。

一方、廊下のスペースは、4 歳児保育室に対して廊下を介した対面にあるため、距離も近く見えやすい。保育者の発言からは、「保育室外に遊びスペースがある」ことを評価する一方で、温熱環境の

---

註 6.5) 平面図上の遊びスペースにおいて、自由活動範囲内にあるものを桃色で表し、自由活動範囲外にあるものを灰色で表した。本項の分析から除外した、「4 歳児以外が利用している遊びスペース」が平面図に現れている場合は、自由活動範囲外として、同様に灰色で示している。

厳しい季節では、遊ぶ場所として適していない点に問題意識がある。また、造り付けの棚が、スペース内の視認性を悪化させ、見守りにくさを感じる要因となっていた。

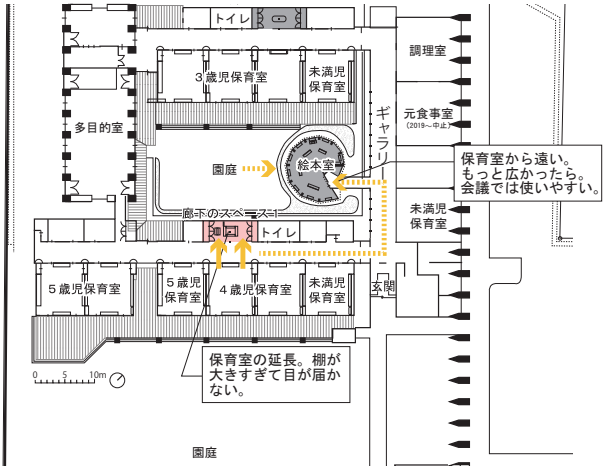


図 6.7 事例 NT の平面図



写真 6.1 事例 NT の遊びスペース

表 6.5 事例 NT の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
絵本室	保育室から遠いので、子どもは自由に使えない。同じ学年の3クラスが同時に使うことができないので、 <u>もっと広かったら良かった</u> 。逆に <u>保育室が遠いから</u> 、隔離されていて、今日みたいに保育者や市の人（市役所の職員）との会議とかで使いやすい。暖房も入るし。	
廊下のスペース1	（廊下と廊下のスペースには）冷暖房設備がないので、夏と冬は子どもの遊びに使うことができないため物置状態で、春と秋限定の遊び場所になってしまっている。保育室外に遊べるスペースがあることは意義があると思うが、現状では環境の悪さ（暑さと寒さ）から限定的な使い方になっている。（春と秋は） <u>廊下の延長</u> として遊ぶことができる。	（造り付け） <u>棚が大きすぎて、目が届かない</u> 。邪魔だと思うけど、どうしようもない。

## 2) 事例 SR

事例 SR は（図 6.8, 写真 6.2, 表 6.6）、自由活動範囲外にある絵本室と、絵本コーナー、廊下のスペース 1、2 を整備した事例である。遊びスペースを整備した事例の中で、最も多い 4 箇所の遊びスペースを整備しているが、自由活動範囲内にある遊びスペースでも、保育者の配置や子どもの様子など、その日の状況に合わせて遊びスペースが閉鎖されるなど、制限がある事例である。

絵本室は、食事室と午睡室に隣接し、保育室から離れている。また、他の事例と比較しても絵本室が広い特徴があるが、保育者の発言からは、その広さによって「遊びが散らばりすぎたり、他の遊びに気が付きにくい」ため、子どもの遊び場所としての評価は低い。

絵本コーナーは、絵本室に対して廊下を介し対面にある。多目的室の舞台裏と造り付けのベンチを利用したコーナーであるが、4 歳児保育室からの視認性は悪く、自由な遊びが制限されやすいスペースであると考えられる。保育室から見守りやすさと場所の有効活用を目的として、現在は、玄関横のエントランス部分に仮設の絵本コーナーが設えられている。

廊下のスペース 1 と 2 は、それぞれ多目的室の出入り口に隣接して整備された遊びスペースである。廊下のスペース 1 は、4 歳児保育室から見えやすく、多目的室側にはみ出した遊び方がある一方で、廊下のスペース 2 は 4 歳児保育室から遠く、視認できないことや、スペースが多目的室の出入り口を兼ねている点に、保育者は使いづらさを感じている。保育室が円形に配置されている中心に、多目的室があることは、廊下の回遊性を生じさせる一方で、湾曲した廊下が死角を生じさせ、保育者の不安や子どもの遊び方の制限に繋がっていると考えられる。

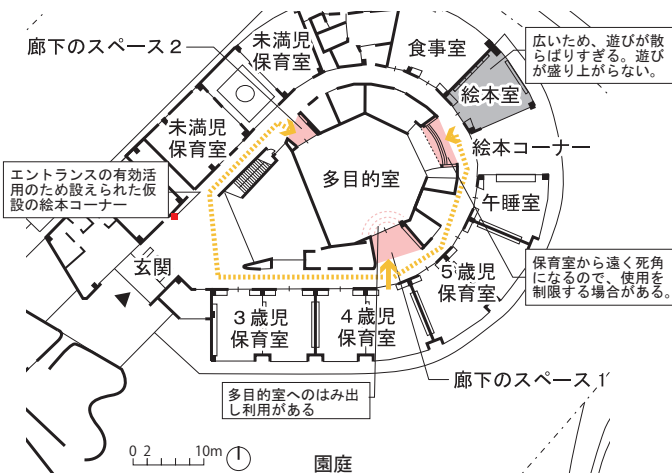


図 6.8 事例 SR の平面図



写真 6.2 事例 SR の遊びスペース

表 6.6 事例 SR の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
絵本室	(部屋が) <u>広い</u> ため、遊びが散らばりすぎたり、他の遊びに気が付きにくく、遊びが盛り上がらないと感じる。広ければ良いというものではない。会議室兼用の場所としては使いやすいので、最近では役員さん(保護者)が良く会議をしている。	複数担任制(1クラスを2人以上の保育者が担当する)なので、まだ対応できているが、 <u>死角が多くて見渡せない</u> 。基本的には、(子どもに)「どこに行っても良い」と言いたい、保育者の人数が足りない場合には「ここは今日はお休み」などと(閉鎖して)、調整している。 <u>先生の立ち位置を決めて見守る体制としているが、子どもの様子によって変更</u> している。
絵本コーナー	絵本室から本を持ってきて読んだり、発表会前後の時期に「舞台ごっこ」をしている。 <u>保育室から遠く死角になるので、使用を制限する場合がある。</u> 広いエントランスを使いこなすのが難しく、今はそこに絵本コーナーを仮設して様子を見ている。	
廊下のスペース1	多目的室との間の扉は常に開けてある。ブロック遊びが、 <u>多目的室にはみ出して広く場所を使っている</u> 。	
廊下のスペース2	<u>廊下と多目的室との動線上にあり、重なっている</u> のであまり使っていない。北側なので暗い(廊下も同様)。	

### 3) 事例 RB

事例 RB は（図 6.9、写真 6.3、表 6.7）、絵本室と廊下のスペースを整備した事例である。絵本室は、職員室から近く、園庭や廊下からの視認性も良いため、絵本室で過ごす子どもの様子が良くみえるが、利用ルールとして、絵本を読む以外の活動がみられた場合は、保育者が「声をかける」ため保育者の目が届きやすい反面、より監視の目が厳しい場所であると推察される。造り付けの棚は、壁面から独立したものもあるが、絵本室内に死角はないため、保育者は不安を感じていない。

廊下のスペースは、保育室が並ぶ廊下の突き当たりで、3歳児保育室の廊下の一部にあるため廊下からの視認性が高く、3歳児保育室からも見えやすい。実際に、3歳児保育室からはみ出し家具がみられたり、保育者は保育室の延長であると捉えている。主に、3歳児の利用が多いと考えられる。

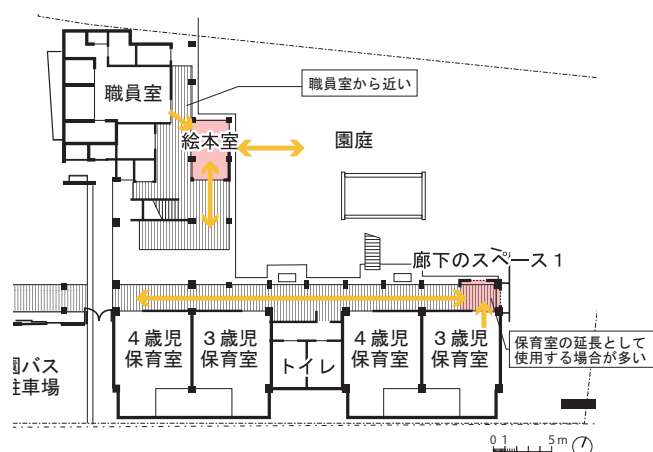


図 6.9 事例 RB の平面図



絵本室を半屋外テラスから見る



絵本室入口から園庭を見る



4歳児保育室から廊下のスペース

写真 6.3 事例 RB の遊びスペース

表 6.7 事例 RB の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
絵本室	狭い空間は子どもにとって都合がいい。子ども同士の親密な関係が作りやすいと思う。絵本が好きな子どもが入り浸ったり、保育室にいろいろな子どもが落ち着ける場所。小ぢんまりした空間が良い。少し狭い。	騒いでいたり、絵本以外の遊びをしていたら声をかける様になっている。4歳児以上は、子どもだけの利用でも滅多に危険は生じない。全ての保育者が、子どもを見ている。
廊下のスペース1	3歳児（レンゲ組）から近いいため保育室の延長として利用されることが多い。ベンチに座って、泣いたりクールダウンができるのは良い。	廊下の突き当たりなので見えやすいし、保育室からもよく見えている。保育室の延長として使っている。

4) 事例 MK

事例 MK は（図 6.10, 写真 6.4, 表 6.8）、自由活動範囲外の絵本室とデンを 3 箇所整備した事例である。絵本室は、食事室に近く、園舎の中央に位置するが、保育者には「子どもの遊び場所として必要性を感じ」られていない。

一方、デンは子どものロッカーを兼ねた、子どもの自由な遊び場所として位置付けられている。いずれのデンも保育室に隣接または対面して整備され、保育室や廊下、園庭からデン室内の様子がみえる。保育者の発言には、「死角は、一中略一工夫し、保育者は遠くから見守る」とあり、デン室内に入らず、一定の距離を保った状態で、デンの外から見守ることを重視している姿勢がみられる。また、子どもにとって「隠れ家的な陰になる場所を設えることが重要」との発言から、死角を意図的に作ることで、子どものための場所を創出している事例といえる。そのための見守り方の工夫として、保育者が高いスキルをもち、保育者間の積極的な情報共有がおこなわれている。

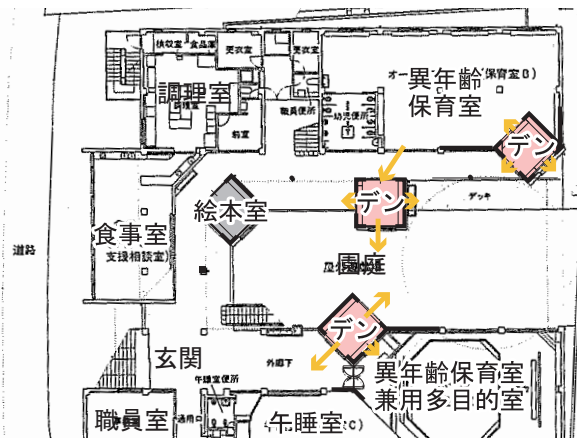


図 6.10 事例 MK の平面図



写真 6.4 事例 MK の遊びスペース

表 6.8 事例 MK の遊びスペースにおける保育者の発言

空間		管理
絵本室	子どもの遊び場所として必要性をあまり感じていない。	保育者には、 <b>死角で起きそうな事を想定できる保育スキルが必要</b> で、それを保育者間で共有している。子どもの発達段階や性格によって、行動範囲が違うので、普段と違う行動をしていたら注視する。 <b>死角は、鏡の反射を利用して見るなど工夫し、保育者は遠くから見守る</b> 様にしている。
デン	子どもにとって、 <b>隠れ家的な陰になる場所を設えることが重要</b> だと思う。 <b>死角もより良く使える様に心がけている</b> 。保育に対応できる様に可動式の家具が良い。最近だと、下駄箱を（デンの外に出した。服掛けは職員の手作りです。	

6.5.1.2 全ての遊びスペースが自由活動範囲の事例

1) 事例 KI

事例 KI は（図 6.11、写真 6.5、表 6.9）、絵本コーナーを整備している事例である。絵本コーナーは、4 歳児保育室と 5 歳児保育室の出入り口の前面廊下であり、保育室側の棚が低いいため、比較的スペース内がみえやすいと考えられる。この絵本コーナーでは、子どもの利用は、原則、保育者が一緒にスペース内に入って活動するルールであるが、トイレへの動線上にあることから、トイレ帰りの子どもが自らの意思で自由に利用することを制限していない。保育室からの近さやみやすさが、一時的な子どもの自由な利用を容認していると考えられる。また、保育者の発言から、絵本コーナーのような場所が、「小グループで使える場所」とであると認識した上で、「保育者や友人との関係性を作りやすい」場所と評価している。

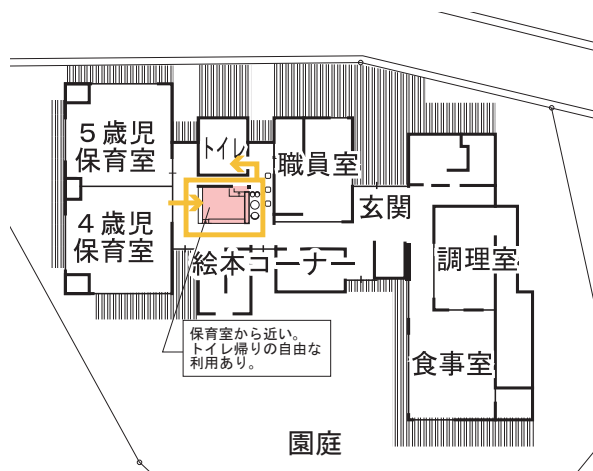


図 6.11 事例 KI の平面図



写真 6.5 事例 KI の遊びスペース

表 6.9 事例 KI の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
絵本コーナー	子どもにとっては、広い保育室一室でなく、 <b>小グループで使える場所の方が、保育者や友人との関係性を作りやすい。保育室から近い</b> ので、活動の切り替えや保育室の設え変更の際に待機場所として活用できる。保育室内で待たせるより良いと思う。トイレ帰りに（近くの）水槽を覗いたり、本を見たりして帰ってこない事もある。トイレの出入り口を反対にすればよかった。長い時間、お母さんと本を読んだりおしゃべりしている子がいて、結構親子で使っている。	基本的には、 <b>スペース内に保育者が一人いて見守る様</b> にしているが、トイレ帰りなど自由な利用もあり、そこは自由にさせている。

2) 事例 EG

事例 EG は（図 6.12、写真 6.6、表 6.10）、絵本コーナーとデンを整備している事例である。絵本コーナーは4歳児保育室と同階にあり、保育室と共に円形に配置されているため、見通しが良い。保育者の発言からは、子ども同士が他クラスや他年齢の子どもの様子をみることを高く評価し、同時に「見渡せる」ことによって安心感を感じている。デンは、3歳児保育室がある1階にあり、階段下を利用したスペースである。デン内部には、小さな窓があるが、子どもが外を覗くことはできない。

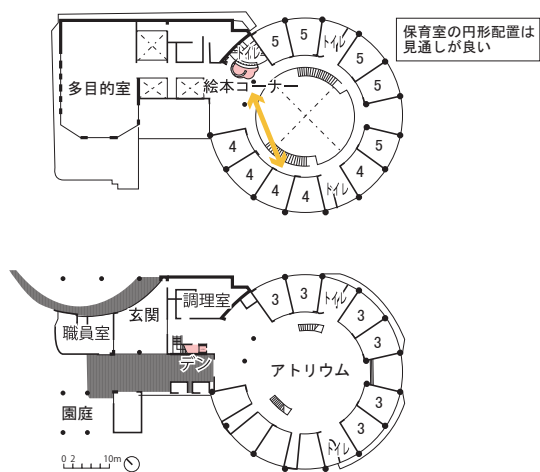


図 6.12 事例 EG の平面図



デンの内部



保育室は円形配置で見渡しやすい



デンの全体



絵本コーナーと背面のトイレ

写真 6.6 事例 EG の遊びスペース

表 6.10 事例 EG の遊びスペースにおける保育者の発言

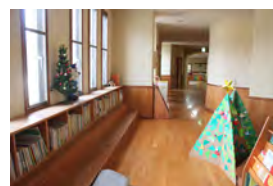
	空間	管理
コ絵 ー本 ナ ー	保育室や絵本コーナーは円形に配置されているので、 <b>子ども同士が他クラスの活動をお互いに見ることができる。</b> 年中（4歳児）が、年長に対し憧れたり、年少に対して懐かしさを感じることができる。	保育室などが円形に配置され、 <b>見渡せるため安心感がある。</b>
デ ン	壁紙にキャラクターが描かれているので、そのキャラクターの部屋として、子どもに人気がある。	

### 3) 事例 SH

事例 SH は(図 6.13, 写真 6.7, 表 6.11)、絵本コーナーとアルコーブを整備した事例である。絵本コーナーとアルコーブは隣接し、4 歳児保育室の対面にあるため、遊びスペースの様子がよくみえる。特に、アルコーブは、3つの個室状に分かれているため、その「囲われた設えが、子どもが遊び込むのに良い」、「子どもが活動を邪魔されにくい場所」と保育者から評価されている。さらに、アルコーブ内の窓から外をみることができることも評価が高い。アルコーブの囲われた小さなスペースが、子どもの遊び方や過ごし方にとって、保育室とは異なる空間として評価されている一方で、「保育者からはみえているので、声がかけやすく」という意見があるように、見守りやすい場所であるといえる。



図 6.13 事例 SH の平面図



絵本コーナーから元食事室を見る



アルコーブの窓と小学校



アルコーブの内部

写真 6.7 事例 SH の遊びスペース

表 6.11 事例 SH の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
絵本コーナー	アルコーブとの狭さの対比が良いと思う。	
アルコーブ	アルコーブの囲われた設えが、子どもが遊び込むのに良い。保育室では気分転換することができないが、ここでは気分転換やクールダウンができるので重宝している。子どもが活動を邪魔されにくい場所だと思う。窓があり、小学校を覗けるのも良い。	

4) 事例 SK

事例 SK は（図 6.14, 写真 6.8, 表 6.12）、各階に絵本コーナーを整備した事例である。いずれの絵本コーナーも、4 歳児保育室から絵本コーナー内はみえないが、子どもが園庭へ出るための玄関から、保育室までの動線上に整備されているため、子どもにとっても身近に感じられるスペースであると推察される。特に、1 階の絵本コーナー 1 では、親子での利用があることは、絵本コーナー 1 が、親子のお迎え動線上にあることが要因であると考えられる。また、保育者の発言から、絵本コーナーの利用によって、「活動の切り替えが子ども自身でできる力」を身に付けることが期待されている。

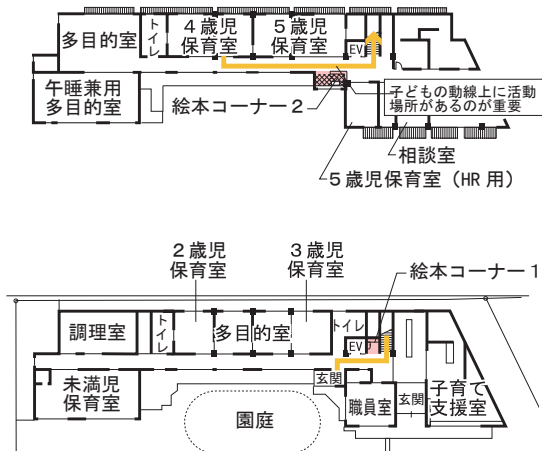


図 6.14 事例 SK の平面図



写真 6.8 事例 SK の遊びスペース

表 6.12 事例 SK の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
コ絵 ー 本 2	床高を下げたかったが予算の問題で叶わず、床材をコルク（シート）にして廊下と区別した。窓に格子状戸を後から付けた（登ると危険）。	子どもの動線上に活動場所があるのは重要で、保育者の指示ではなく、活動の切り替えが子ども自身でできる力をつけていく事に繋がると思う。
コ絵 ー 本 1	専用ではなく、いろいろな用途でフレキシブルに使える方が良く、帰りに寄りやすいからか、よく親子で本を読んでも、短時間だけ。	

5) 事例 TG

事例 TG は (図 6.15, 写真 6.9, 表 6.13)、保育室に挟まれるような配置で、造形室と絵本室を整備した事例である。造形室と絵本室のいずれも隣接する保育室へのドアが、左右 2 箇所と、廊下へ繋がるドアが 1 つの合計 5 箇所ある。また、保育室と造形室と絵本室を隔てる壁は、上部がガラス張りのため、ドアが閉じていても隣の部屋の様子を把握しやすい。そのため、造形室と絵本室は、部屋としてそれぞれが独立しつつも、隣接する保育室や廊下または園庭から、みやすく、様々な位置から室内の様子を確認することが可能である。

また、保育者の発言からは、「保育者もふらっと入室して用事をすますような場所」として使われていることから、造形室と絵本室が、子どもの遊び専用場所ではなく、子どもに限らず保育者の出入りがあり、一定程度の人の流動性が確保された空間であると推察される。このことは、子どもの活動が単にみえているという、保育者にとっての安心感以上に、子どもと保育者が一定の距離感を保ちつつ、子どもが支援を必要とする時に、保育者が適切なタイミングで支援できる場所としての要点であると考えられる。

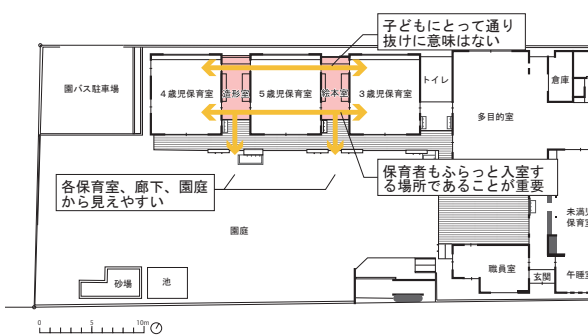


図 6.15 事例 TG の平面図



写真 6.9 事例 TG の遊びスペース

表 6.13 事例 TG の遊びスペースにおける保育者の発言

	空間	管理
造形室	自分の発想を叶えられる場所が大切だと思う。材料は常に手に取れるようにしておいて、片付けの仕方（収納方法）は工夫している。作りたいものを作る（発達段階の）子は利用時間が長い。短い子はまだ作れない。子ども同士で考えながらやっていて、子どもの成長が見える。	保育者もふらっと入室して用事を済ますような場所であることが必要だと思う。(保育者の存在や声かけが)子ども遊び(の世界)を壊さない様に気を付けている。楽しんでいる時は声をかけず見るだけにして、2回目に見た時、困っていたり、煮詰まっていたら声をかけてアイディアを足すなど支援する。保育者は特定のクラスだけを見ない、チームで複数で情報交換して、子どもが視界に入っている様にしている。あまり神経質に見ていない。
絵本室	落ち着いて一人で絵本を選んだり、読める空間。保育室（自室）以外の部屋で年長さん（5歳児）を見て刺激をもらうことができる。棚の影や自分たちで椅子を動かして、寝たり、手紙交換などコソコソ遊んでいる。子どもにとっては部屋が通り抜けられる事に意味はないと思う。	

## 6.5.2 保育者による見守りやすさ

事例毎に分析した遊びスペースの見え方の評価と保育者による評価を遊びスペース毎にまとめ、表 6.14 に示す。遊びスペースを自由活動範囲内か否かで整理すると、自由活動範囲外にある遊びスペースと、制限がある遊びスペースでは、事例 MK の絵本室と NT の廊下のスペース 1 の 2 箇所を除き、遊びスペースの視認性が低いことが、保育者の空間評価に影響し、子どもの自由な遊び場所として使われない要因であるといえる。また、自由活動範囲内にある遊びスペースの内、事例 SK の絵本コーナー 1 と 2 は、4 歳児保育室からは直接みえないが、保育室と園庭を行き来するための動線上に、遊びスペースが整備されていることが評価され、同様に事例 KI では、保育室からトイレの動線上に絵本コーナーがあることが、子どもの自由な利用を許容する要因であるといえる。

さらに、事例 RB の廊下のスペース 1、絵本室、KI の絵本コーナー、MK のデン、TG の造形室と絵本室は、保育室以外にも園庭や廊下から遊びスペースがみえ、複数の場所からの視認性が良い。つまり、保育室内の保育者のみならず、複数の保育者が、園庭や廊下から遊びスペースを見守ることが可能であるため、物理的な空間配慮が保育者間の情報共有をおこないやすくし、チーム保育がおこないやすい環

表 6.14 遊びスペースの物理的な見え方の評価と保育者の見守り方

自由活動範囲	事例名と室名	物理的な見え方の評価			保育者による評価		見守りやすさ
		保育室から	その他の場所から	視認性	空間の評価	見守り方の工夫	
範囲外	NT 絵本室	×	×	×	保育室から遠いため、子どもは自由に使えない		×
	SR 絵本室	×	△ 園庭の端	×	広いため、他の遊びに気がつきにくく、盛り上がらない		×
	MK 絵本室	×	● 園庭	△	必要性を感じない		△
(制限あり 閉鎖等)	SR 廊下のスペース 1	●	×	△		複数担任制（1 クラスを 2 人以上の保育者）で見る	△
	SR 廊下のスペース 2	×	×	×	死角が多く見渡せないため、利用制限をせざるを得ない		×
	SR 絵本コーナー	×	×	×			×
	NT 廊下のスペース 1	●	×	△ 造り付け家具	保育室外に遊べるスペースがあることは意義がある、造り付け家具が不便		△
	KI 絵本コーナー	●	● トイレへの動線上	●	保育者や友人との関係性を作りやすい		○
範囲内	EG デン	×	×	×			×
	EG 絵本コーナー	●	×	△	保育室から見渡せるため安心感がある		△
	SH 絵本コーナー	●	×	△	アルコーブとの対比が良い		△
	SK 絵本コーナー 2	×	● 園庭への動線上	△	子どもの活動の動線上にあるのが重要		△
	SK 絵本コーナー 1	×	● 園庭への動線上	△	お迎え動線上にあるので親子利用が多い		△
	RB 廊下のスペース 1	●	● 廊下の突き当たり	●	3 歳児保育室の延長		○
	SH アルコーブ	●	△ 小学校が見える	●	子どもが遊び込むのに良い、子どもが邪魔されない場所	子どもは隠れられるが、保育者からは見えている	○
	RB 絵本室	△	● 職員室・園庭	●	子ども同士の親密な関係が作りやすい	複数の保育者で見る 絵本以外の行動は制止する	○
	MK デン（3 カ所）	●	● 園庭	●	隠れ家的な陰が子どもにとって必要	保育者のスキル向上 保育者間の情報共有	○
	TG 造形室	●	● 園庭	●	子どもの発想を叶えられる場所として設える	保育者間の情報共有 複数の保育者で見る	○
	TG 絵本室	△ 5 歳児保育室を介して	● 園庭	●	落ち着いた過ごす場所、コソコソ遊ぶ場所	保育者もふらっと入る場所にする 子どもが困っていたら声をかける	○

境を構成していると推察される。一方で、自由活動範囲内の遊びスペースに対する保育者の空間評価からは、遊びスペースの小空間が、子どもの人間関係形成を助け、遊び込みに寄与していると評価し、子どもが集団で過ごし保育者の目が届きやすい保育室とは異なる空間として、重視しているといえる。

つまり、遊びスペースの視認性が低いと、保育者にとって見守りにくい空間として子どもの自由な活動が制限されるため、まず①保育室からの視認性が高い、または、保育活動の動線上に整備されているという計画上の配慮が必要である。さらに②園庭や廊下からも遊びスペース内がみえることで、複数の保育者での見守りが可能になるため、相対的に一人の保育者にかかる負担感を軽減できる可能性がある。そして、空間の質として③囲まれたり、陰がある小空間であることが、子どもの人間関係の形成や遊び込みに及ぼす影響があると評価されていることから、家具の種類や家具の配置などで、スペース内の見え方や囲み方を調整することが重要である。また、事例 MK のデン、SH のアルコーブ、TG の造形室や絵本室にみられたように、子どもの活動を阻害しないよう、子どもと保育者の適切な距離感を保ちながらも、子どもが支援を必要とする時に保育者が対応できるように、④遊びスペースを子ども専用の場所にしないなどの、使い方や用途の工夫によって、より見守りやすい環境設定をおこなうことが求められる。

## 6.6 遊びスペースの場所選択の自由度と活動の多様性

次に、遊びスペースの普段の使われ方から子どもの活動を中心に考察する。遊びスペースでみられる遊びや、過ごし方についての発言を抜粋し（表 6.15）、その遊びスペースが、自由活動範囲に含まれるか否かで整理した（表 6.16）。

表 6.15 遊びスペースでみられる活動についての発言

自由活動範囲	事例名と室名		活動
範囲外	NT	絵本室	子どもが自由に出入りできる場所ではない。複数クラスが一緒に使えないので、「保育者と絵本を選ぶ場所」や「保育者だけが利用する場所」になっている。保育者が外部の人（他園の職員や市役所の職員）と会議する際に使う。
	SR	絵本室	自由保育の時間は、子どもは自由に出入りできない場所。保育者や保護者の打ち合わせや会議に使っている。
	MK	絵本室	子どもだけの利用はない。クラス単位または保育者の研修で利用している。教材置き場にもなっている。
(制限あり 閉鎖など)	SR	廊下のスペース 1	大型ブロックで遊ぶ場所。
	SR	廊下のスペース 2	あまり使わないが、休憩場所や電車ごっこなどの設定をして遊ぶことがある。
	SR	絵本コーナー	絵本を読むスペース。（ステージがあるので）舞台ごっこをすることもある
	NT	廊下のスペース 1	子どもの発達に合わせて設えを工夫して使っている。保育室に入れない子ども（4月の3歳児等）が保育者と一緒に絵本を読んだりするなど、気持ちを落ち着かせる場所。期間限定で特別な遊び（お化け屋敷）を仕掛けることもある。利用は春と秋のみ。
範囲内	EG	絵本コーナー	先生と一緒に本を読んだり、本を借りるために来る場所。子どもが自由に本を読むスペースではない。
	EG	デン	大型ブロックで遊ぶ場所、それ以外の遊びはない。自由に出入りすることができる。
	SH	絵本コーナー	本を読む場所。
	SK	絵本コーナー 2	子どもが自由に出入りできる。絵本を読んだり、借りる場所
	RB	廊下のスペース 1	3歳児（レンゲ組）保育室の前なので、3歳児の利用が多い。子どもが座ってお茶を飲んだり、話し込んでいることがある。年度始めは、保育室に入れない子や支援が必要な子が座って落ち着く場所として、普段は子ども同士の喧嘩後等にクールダウンの場所になっている。活動の切替場所。
	RB	絵本室	本を読んだり、本を借りる場所として使う様に指導している。保育者主導で「身体測定」の場所として活用することがある。落ち着きたい子がおもちゃを持ち込んで遊んでいる場合がある。
	KI	絵本コーナー	基本的には保育者と一緒に使う場所だが、トイレ（の動線上にあるので）帰りに立ち寄って帰ってこないこともある。保育者が声をかけて、本を見に行くなどクラス単位の活動が基本。散歩帰りや昼食後の活動の区切りや保育室内の設えを変更する際に子どもが待機する場所として活用している。朝夕に親子で絵本を読んだり、貸本をする憩いの場所。
	MK	デン（3カ所）	最近では、ロッカールームと兼用している。何をするかは子どもの自由にさせていて、制限はない。音遊びのピアノはこの部屋で行っている。
	SH	アルコーブ	子どもは、本を持ち込んで読んだり、窓から外の小学校をみている。特定の子どもが好きな場所でもある。気分転換やクールダウンする場所として重宝している。降園時に親子で座って本を読む姿も見られる。
	SK	絵本コーナー 1	降園時に親子で絵本を読んだりする場所としても使われている。比較的短時間の滞在が多いと思う。本を読んだり借りる他に、リセットルームとしても日常的に使っている。
	TG	造形室	制作活動を中心に、制作物を付けたり、見せ合うなど。
	TG	絵本室	絵本を読む、絵本を借りる、ごっこ遊び、手紙交換、隠れたり逃げる場所。指導の場所として使う場合もある。

### 6.6.1 自由活動範囲外にある遊びスペース

自由活動範囲外にある遊びスペースの事例 NT, SR, MK の絵本室では、子どもの自由な活動はないが、保育者のみの活動として、園内の会議や研修の場所として使用されている。保育室から離れていることが自由活動範囲外になる理由として考えられるが、反対に保育室から離れているからこそ、保育から隔離された空間として保育時間中の会議などの場所として評価されている。

### 6.6.2 自由活動範囲に制限がある遊びスペース

自由活動範囲内にあるものの、保育者の配置人数や季節などによって自由な活動を制限される遊びスペースは、4箇所ある。制限がなく自由に遊ぶことができる時は、事例 SR の絵本コーナーでは、絵本を読む以外に、ステージ状に作られた高さの異なる床を利用した「舞台ごっこ」など自由な遊びがみられる。また、事例 NT の廊下のコーナー 1 では、保育者による「お化け屋敷」など特別な遊びコーナーが設えられるなど、保育室の延長として積極的な利用がある。また、日常的に、この場所が子どもの気持ちを落ち着かせる場所としても活用されている。

表 6.16 遊びスペースで見られる活動のまとめ

自由活動範囲	事例名と室名		遊び方と使い方					活動の多様性
			設定や想定通りの遊び	想定以外の自由な遊び	気持ちを落ち着かせる行為	親子の利用	保育者のみの利用	
範囲外	NT	絵本室	○				会議・研修	×
	SR	絵本室	○				会議・研修	×
	MK	絵本室	○				会議・研修	×
(制限あり 閉鎖等)	SR	廊下のスペース 1	●					×
	SR	廊下のスペース 2	●					×
	SR	絵本コーナー	●	●				△
	NT	廊下のスペース 1	●		●		収納(夏冬)	○
	KI	絵本コーナー	●		○	●		○
範囲内	EG	絵本コーナー	○					×
	EG	デン	●					×
	SH	絵本コーナー	●					×
	SK	絵本コーナー 2	●					×
	RB	廊下のスペース 1			●			×
	RB	絵本室	●		●			○
	MK	デン(3カ所)	●	●				○
	SH	アルコーブ		●	●	●		○
	SK	絵本コーナー 1	●		○	●		○
	TG	造形室	●	●				○
	TG	絵本室	●	●	●			○

凡例：●子ども自らの意思による活動，○保育者の判断による活動

### 6. 6. 3 自由活動範囲内にある遊びスペース

自由活動範囲内にある遊びスペースは12箇所ある。保育者の設定や想定通りの遊びしかみられない遊びスペースは4箇所、その他では、事例RBの廊下のスペース1を除く、7箇所では複数の活動がみられる。保育者によって、遊びスペースの遊び方が制限されず、子どもが自由に遊ぶことができる場所として多様な遊びがみられるのは、事例MKのデン（3箇所）、SHのアルコーブ、TGの絵本室と造形室の4箇所である。特に、事例SHのアルコーブを除く3箇所の遊びスペースでは、6.4の家具の分析においても、子ども自らが場所を設えることができるよう、家具の種類に特徴があった。このことから、特にこの3箇所の遊びスペースは、子どもが自由に場所を選んで遊ぶことができるだけでなく、子どもの活動の多様性がみられ、主体的に遊ぶことができる場所であるといえる。

また、気持ちを落ち着かせる行為は、事例RBの廊下のスペース1と絵本室、SHのアルコーブ、TGの絵本室では子ども自らの意思によっておこなわれ、事例KIの絵本コーナー、SKの絵本コーナー1では保育者の判断によって使われている（計6箇所）。いずれも発達特性等で保育室に居づらい子どもや、喧嘩などの後に落ち着く必要がある子どもによって日常的に利用されていた。保育室と異なり、遊びスペースの狭さや囲まれた設えが、子どもが落ち着いたり他者との親密な関係を築く場所として機能していると考えられ、単なる遊びのための場所ではなく、子どもの精神面に寄り添うスペースであると推察される。

親子の利用は、事例KIの絵本コーナー、SHのアルコーブ、SKの絵本コーナー1の3箇所でみられた。遊びスペースが、降園時の動線上にあることと、囲われた小スペースという空間的な特徴が、他者の気配を感じながらも親子が寛ぐことができるスペースとなっていると推察される。

### 6. 6. 4 遊びスペースの活動の多様性

以上から、自由活動範囲内にあり（かつ利用制限がない）、活動内容が2つ以上ある遊びスペースを「多様な活動が可能」と判断すると、9箇所（42.9%）の遊びスペースが場所選択の自由度が高く活動の多様性がある遊びスペースであるといえる。特に、事例MKのデン（3箇所）やSHのアルコーブを除く5箇所には、それぞれ活動を示唆するスペース名が付けられているが、実際には想定された遊び以外の遊びや、気持ちを落ち着かせるためのスペースになるなど、フレキシブルな活用がされている。

## 6.7 絵本室でみられた活動の実態

6.5.2 で分析した、各事例の遊びスペースでみられる子ども活動は、保育者の発言から整理したものである。そのため、保育者が認識している子どもの活動の代表例や、印象的なエピソードを取捨選択していると想像されることから、実際の活動の頻度や活動場所を正確に示したものではない点には、留意する必要がある。そこで、本項では、2 事例の絵本室を対象にした終日行動観察調査によって、絵本室の活動実態から、遊びスペースの位置付けについて考察をおこなう。

### 6.7.1 調査概要

調査は、分析対象の 9 事例 21 箇所の遊びスペースから、2 事例の絵本室を選出し、二日間の終日行動観察調査を実施した（表 6.17）。対象事例は、事例 RB（図 6.16）と事例 TG（図 6.17）である。この 2 事例の絵本室は、前項までの分析より、保育者にとっての見守りやすさが高く、「複数の保育者で子どもを見守る」などの見守り方の工夫に類似例があり、子どもの活動の多様性と場所選択の自由度も高いと評価した事例である。

調査方法は、行動観察調査として、4 歳児の 1 クラスを対象に 15 分毎の活動場所と活動の種類の記録により、事例における 1 日の保育の流れを把握し、同時時間帯に絵本室に設置したビデオカメラ（GoPro HERO7 Black）による動画撮影により、絵本室の入退出記録と子どもの活動内容の記録をおこなった。

表 6.17 行動観察調査の実施概要

事例名	調査日		調査時間	天気	外気温	4 歳時クラスの 現員数（人）	絵本室を利用した子ども及 び保育者の総数（人）
RB	1日目	2020/2/26	9:00～15:00	晴	20.4℃	19	子ども：70 保育者：7
	2日目	2020/2/27	9:00～15:00	雨のち 晴	15.1℃	20	子ども：69 保育者：7
TG	1日目	2020/2/18	9:00～14:00	晴	21.7℃	21	子ども：38 保育者：12
	2日目	2020/2/19	9:00～14:00	晴	18.8.℃	21	子ども：55 保育者：11

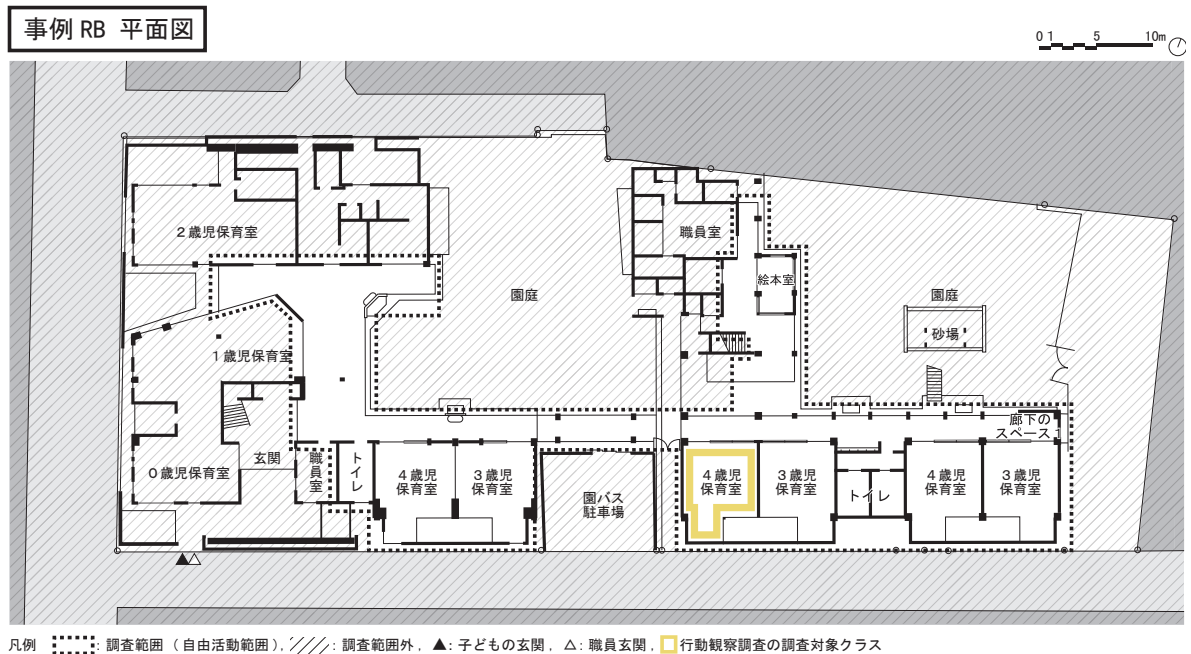


図 6.16 事例 RB の平面図と調査範囲

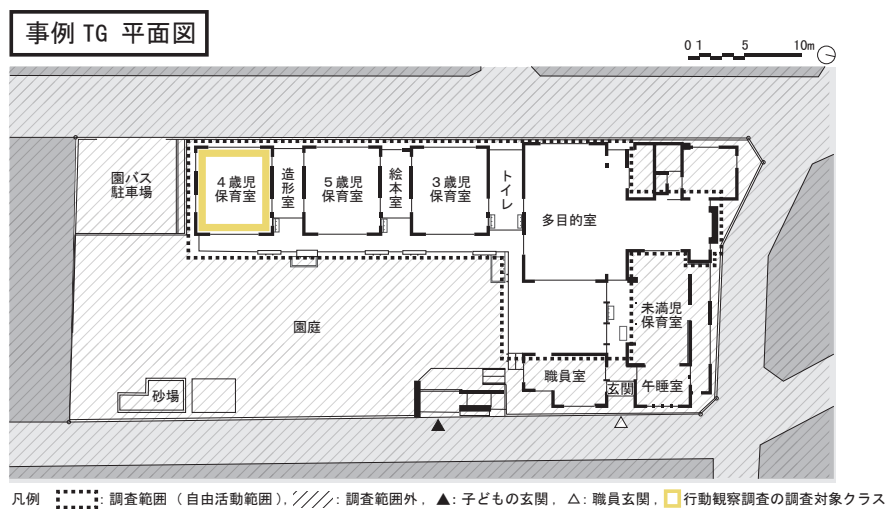


図 6.17 事例 TG の平面図と調査範囲

### 6.7.2 保育室のゾーニングからみた絵本室の位置付けの違い

初めに、事例 RB と TG の保育空間の違いを明確にするために、4 歳児保育室と絵本室の空間構成と、1 日を通した園舎全体における 4 歳児の活動分布をに示す。図中では、4 歳時 1 クラスの動静と場所毎の子どもの人数を丸記で示した。

#### 1) 事例 RB

保育室と絵本室の配置は、半屋外の渡り廊下を挟んで対面にある（図 6.18, 写真 6.10）。保育室内

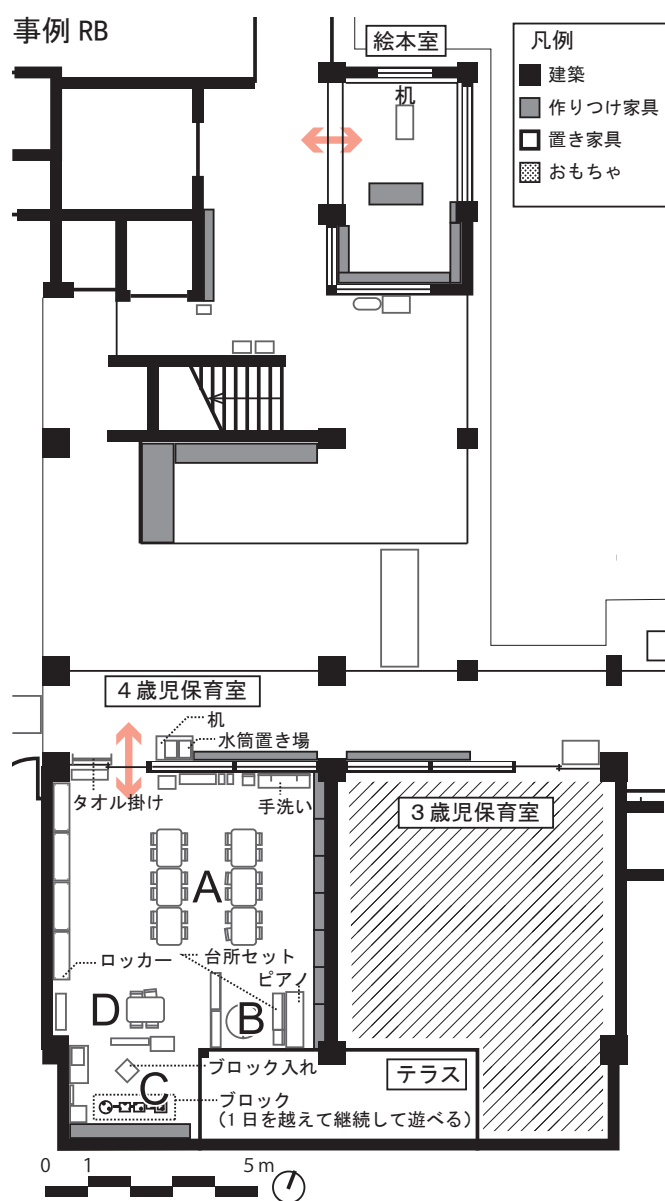


図 6.18 事例 RB の保育室と絵本室の概要



RB-1. 保育室 地点 A



RB-2. 保育室 地点 B



RB-3. 保育室 地点 C

写真 6.10 事例 RB の保育室

の構成は、特定の遊びが想定されたコーナーと机と椅子が常時設置されている場所があり、保育室内に明確なゾーニングがある。領域は、中央に椅子と机が並んだ地点A、台所セットとテーブルが設えられたままごとコーナー（地点B）、積木遊びのコーナー（地点C）に分けられる。地点Aでは、机を囲んで2～5人が集まり、編み物や制作、絵本を読むなど活動の種類毎に遊ぶ様子がある（写真RB-1）。地点BやDでは、子どもが棚を移動させたり椅子を使って設えを変更する遊び方がみられた。

園舎全体の活動分布をみると（図 6.19）、1日目の10時15分から昼食、昼食後から帰りの会の13時15分まで、殆どの子どもが保育室の中で活動している。午前中の早い時間に室内外で自由に過ごし、午前中の後半には保育室内での活動、帰りの会からクラスの再編成がある時間までの外遊びの時間と、活動と時間の区別がはっきりしている。保育室内の遊びは、複数の遊びコーナーと常時設置された机と椅子で複数の遊びがおこなわれているため、保育者の目が届きやすい範囲に子どもが留まり、子どもが遊びを選択しやすい環境であると考えられる。また、子どもが自主的に棚や机、椅子などの家具を移動させて、新たな領域を形成し、籠ったり隠れるといった遊び方もみられた。しかし、保育室の中で遊びが完結しているため、絵本室への行き来や、異年齢の交流は、園庭以外で自然に発生する環境が少なく、閉鎖的ともいえる。異年齢交流の場面は、2日目のように保育者が意図して交流機会を持っていた。

### 事例 RB

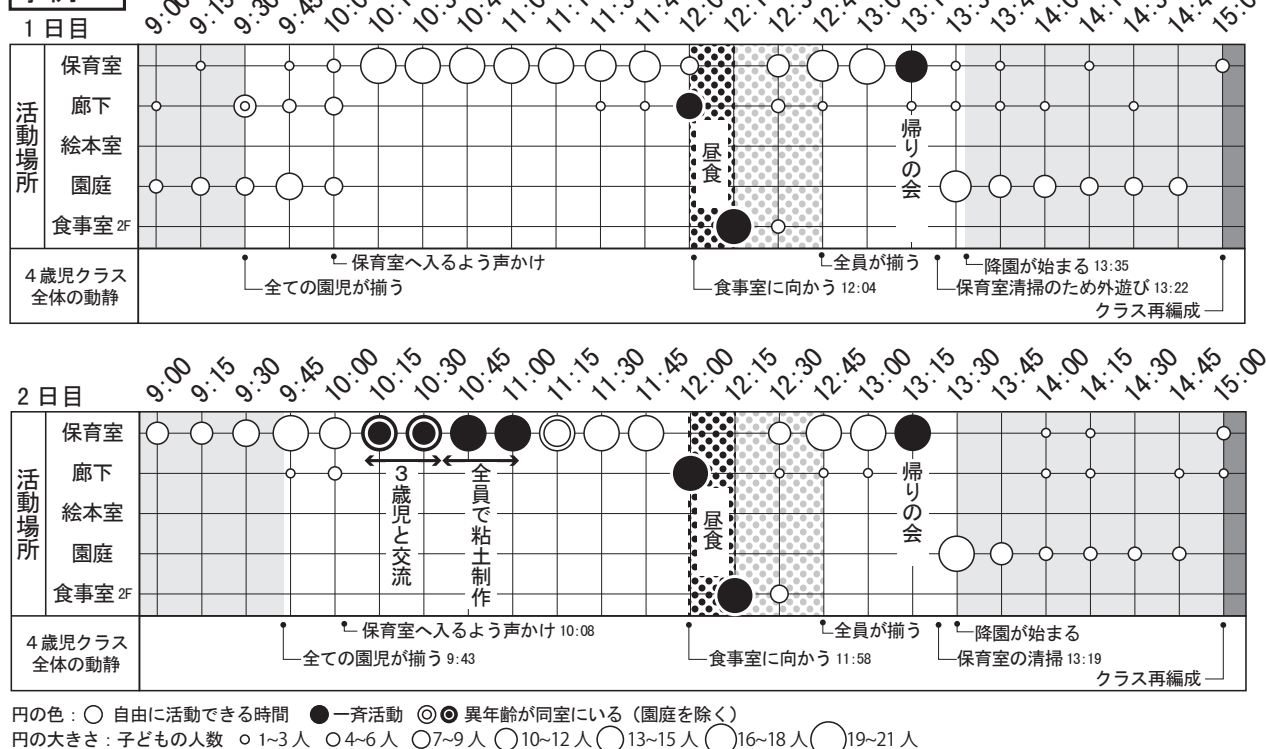


図 6.19 事例 RB の 1 日の保育の流れ

## 2) 事例 TG

事例 TG の保育室は、各保育室の間に絵本室と造形室を挟む配置である（図 6.20, 写真 6.11）。絵本室と造形室には、直接廊下に出られる掃き出し窓の他に、各保育室へ繋がるドアが南北に 2 箇所ずつあり、保育室間の通過動線としても利用されていた。保育室内の構成は、壁際に机やおもちゃが寄せられ、中央部分が広く空いている。必要に応じてブロック遊び（地点 G）やお絵かきの場（地点 F）が設えられていた。保育室内のゾーニングは、ある程度定められているが常設ではない。一方、造形室では、2 台のテーブルを囲うように子どもが制作に取り組み、背面の棚から空き箱や廃材を手にとって黙々と集中する場面がみられた（写真 TG-2）。絵本室は、一度に入室する子どもは造形室に比べて少ないが、1 人で本を読んだり、3 人でままごとをする様子があった。また、喧嘩をした子どもの指導（5 歳児）や、保育室で落ち着くことが困難な子ども（3 歳児）が保育者と昼食を摂るなどの遊び以外の使い方もみられた。

園舎全体の活動分布をみると（図 21）、1 日目の誕生日会や二日目の演劇の練習といった一斉活動以外は、保育室や廊下に限らず、造形室や絵本室といった遊びスペースや園庭に分散して活動している。造形室と絵本室は、各保育室間の通過動線としても利用しやすいため、子どもや保育者の往来が頻繁にある一方で、絵本室と造形室がそれぞれ専用の設えによって、場所と活動の関係性が強く、子どもが遊びに集中しやすい環境であると考えられる。さらに、遊びスペースは、日常的に異年齢交流が活発な場であった。これらのことから、造形室と絵本室は、園庭や廊下側から室内を覗きやすく、保育室からも通りやすいため、人の気配が途切れず、結果として、保育者にとっては見守りやすく、子どもにとっては誰でも使いやすい場所として認識されてると推察される。

### 6.7.3 絵本室の使われ方と滞在人数の変化

絵本室の使われ方の実態を図 6.22 に示す。事例毎に、子どもと保育者の滞在者数をグラフで示し、一斉活動の前後や、ままごとなど 1 つの遊びが発生してから終息するまでの時間を区分して、その時間のまとめり毎に行為の種類と場所を示した。

## 1) 事例 RB

1 日毎の述べ利用人数は、1 日目が 70 名、2 日目が 69 名である。いずれも 5 歳児の利用が最も多い。行為は、立って話す（会話する・立位）や、立って本を読む（本を読む・立位）、床に座る（座る・

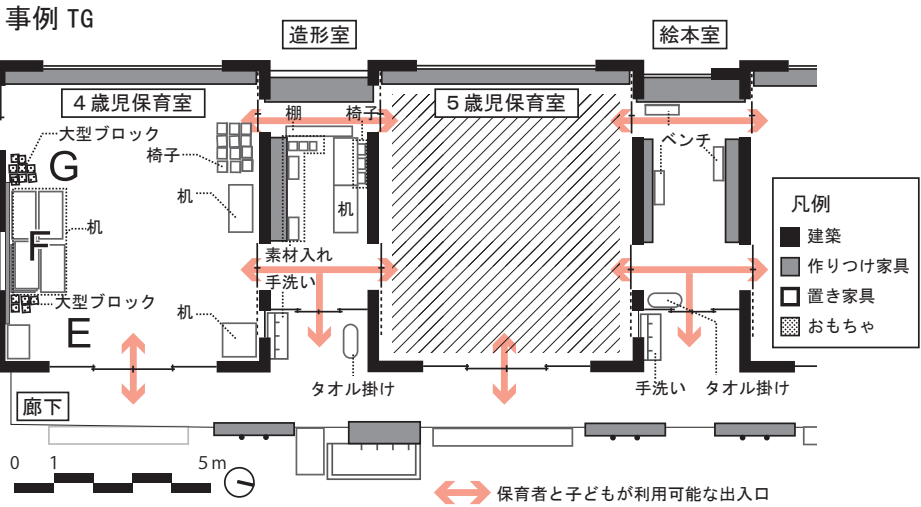


図 6.20 事例 TG の保育室と絵本室の概要



写真 6.11 事例 TG の保育室

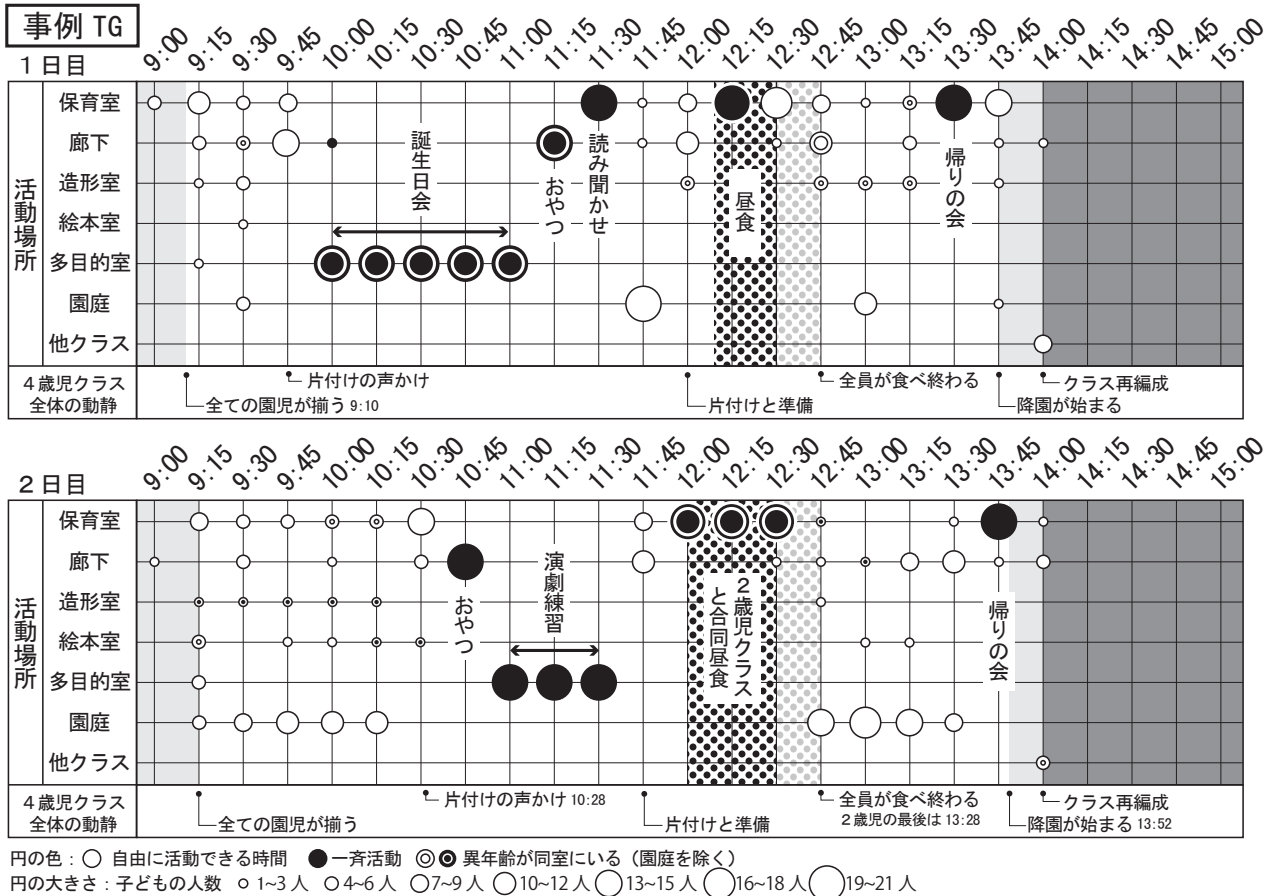


図 6.21 事例 TG の 1 日の保育の流れ

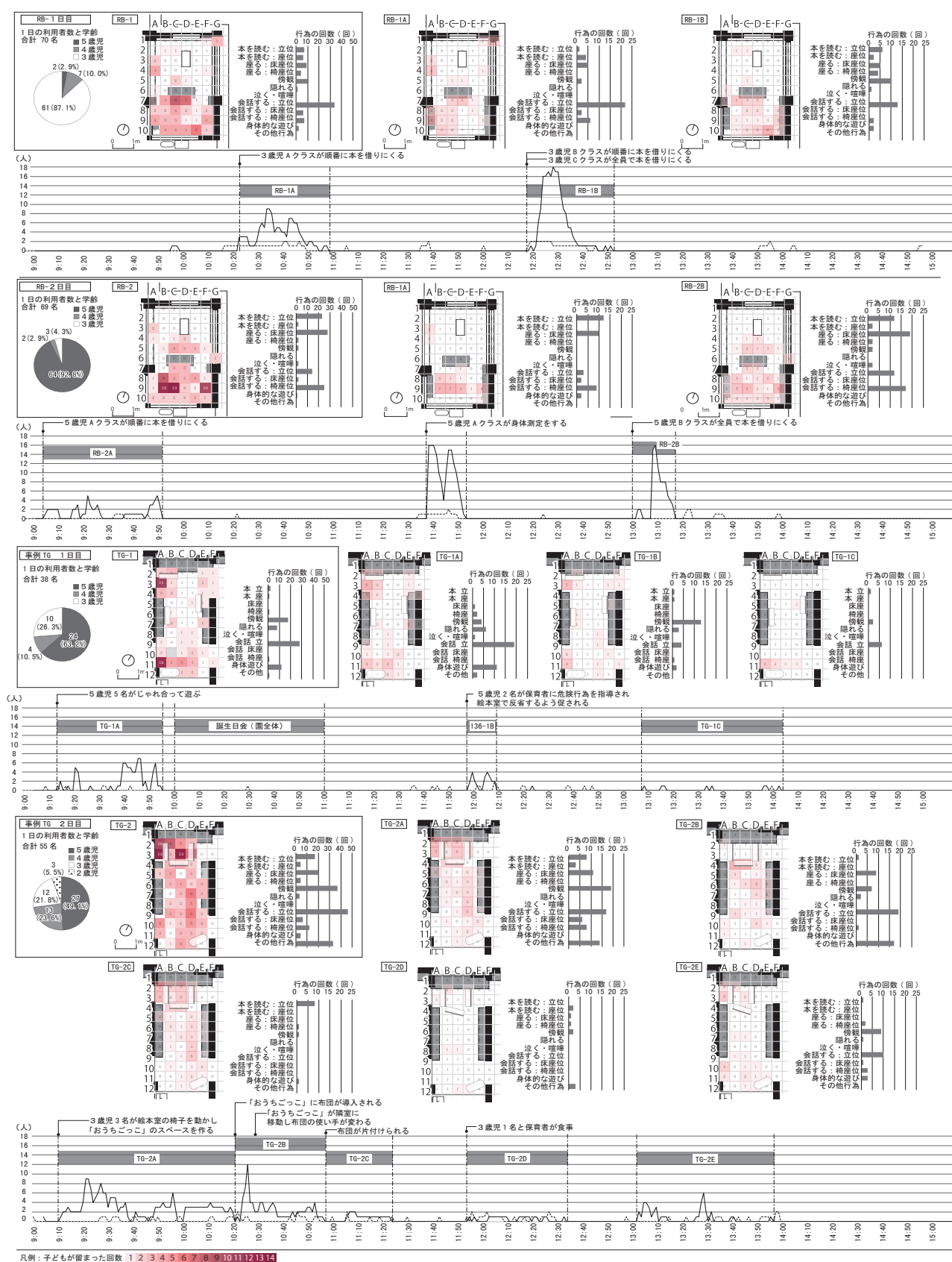


図 6.22 絵本室の使われ方の実態

床座位)が多い。1日目と2日目の様子から、絵本室の利用は、クラス毎に来室し、本を借りるために利用している子どもがほとんどである。そのため、一定時間中に絵本室内の子どもの人数が一気に上昇し、本を選び終わった子から順番に退出し、徐々に人数が下降する。室内の子どもの密度が高いことは、1日目では「本を読む」行為自体が少なく、2日目でも座って本を読む子どもは少ないことにも影響を与えていると考えられる。つまり、ほとんどの子どもは、保育者が定めた時間内に、絵本を選ぶためだけに来室し、絵本をじっくり選んだり、絵本を開いて読む場所としては認識されていない。事例RBにとっての絵本室は、保育室外に整備された、特定の活動(絵本や身体測定などのクラス活動)のための専用室ではあるが、子どもの主体的な活動や、6.5.2で得られたような気持ちを落ち着かせるためのスペースとしての活用頻度は低いと推察される。

## 2) 事例 TG

1日毎の延べ利用人数は、1日目が38名、2日目が55名である。いずれも5歳児の利用が最も多い。また、絵本室が3歳児と5歳児の保育室に挟まれていることから、保育者の入退室も多かった。行為は、絵本室から5歳児保育室を覗く「傍観」や「立位で話す」が多かったが、「本を読む」行為は1日目はほとんどみられなかった。

1日目では、TG-1Aの約50分間に5名の5歳児が繰り返し入室し、取っ組み合い(「身体的な遊び」)をしていた。その遊びに関係して同じ子どもによる「隠れる」や「立位で話す」が発生した。また、この遊びがおこなわれている間は他の子どもが絵本室に滞在することは無く、5人だけの遊び場所であった。また、昼食前のTG-1Bでは、外で遊んでいた2名の5歳児が、保育者に連れられて絵本室に入室し、遊び中の危険行為について指導されていた。その後、保育者は退室するが、子どもは絵本室に留まり二人で話し合った後、深刻な雰囲気から一転して、5歳児保育室を覗いたり二人でふざけて隠れたりするなど、活発な活動がみられた。

2日目は、TG-2Aの約1時間の間に3名の4歳児による「おうちごっこ」が継続して展開されたことが、結果的に1日目に比べて利用者が多くなった要因である。「おうちごっこ」では、室内の3つのベンチを子ども自らが移動させ、コの字型に組み合わせた「おうち」を作り、その内側と外側の設定でごっこ遊びを展開させていた。TG-2Bでは、「おうちごっこ」を盛り上げるアイテムとして保育者から布団の導入を提案され、午睡室から布団を運んでごっこ遊びを続けるが、布団の上に5歳児が集まって来たため、「おうちごっこ」の継続が困難になる。そのため、保育者の提案により、ごっこ遊びを隣室の3歳児保育室へ移動させて続けた。ごっこ遊びの終息後、残された布団は、5歳児と2歳

児によって使われ、二人で並んで寝たり、隠れたりする行為がみられた。また、ベンチで区切られた「おうち」スペースは、別の子どもがごっこ遊びや本を読む際に中に入ったり、3歳児1名と保育者が昼食を取るスペースとして、繰り返し、様々な子どもによって活用されていた。

#### 6.7.4 絵本室での活動場所と頻度

子どもの行為と場所の関係を図6.23に示す。事例RBとTGを比較すると、事例RBでは、2日間を通して絵本室中央の本棚から奥へ入った場所での活動が多く、「本を読む」、「座る」、「話す」の3種類の活動がみられる。一方、事例TGでは、1日目は一部で「隠れる・泣く」、「話す」、「身体的な遊び」がみられたのに対し、2日目は子どもがベンチを移動させて設えた奥のスペースを中心に「本を読む」、「話す」、「その他の遊び（寝る模倣遊び）」が多く発生した。絵本を借りる場所として使われている事例RBは、保育者の管理の元で複数のクラスが順番に絵本室を「本を選ぶ場所」として利用する一方で、子どもの自由な遊び場所として使われている事例TGでは、日によって絵本室でおこなわれる活動や頻度に差がみられる。より、活動数と活動の種類数が多かった2日目をみると、子どもの行為を誘発しているのは、子ども自身が「おうちごっこ」のために設えた、囲われたスペースであると推察される（写真6.12）。子どもが自らが設えた場所は、保育者からも子どもからも視覚を遮るほどの遮蔽物にはなっていないため、子どもが隠れることはできないが、身体的に囲われることによって得られる安心感や、居心地の良さに繋がっていることが推察された。

#### 6.7.5 保育者の発言と活動実態の比較

事例RBでは、保育者が「絵本を選んだり読んだりする場所として指導」（6.5.1.1. 事例RB, 表6.7）している通り、実態も子どもの活動に多様性はみられない。2日間の調査では、子どもが主体的に入室した例も数例みられたが、ほとんどはクラスの一斉活動の延長として使われる場所で、室内の子どもの密度が高すぎるために、座ったり絵本を読んだりする活動さえも制限されている。保育者の「子ども同士の親密な関係が作りやすい」という評価は、心理的な距離が近い個人的な関係性を構築するという意味の「親密さ」ではなく、保育者の目がない、又は届きにくい状況下での、子ども同士の協力や自立を促す、「社会性の獲得」という意味合いが強いと推察される。これには、各保育室内のゾーニングが明確で、遊びに合わせた場所が十分確保されているため、保育室から離れた絵本室で活動する利点を保育者が感じていないことが、子どもの活動にも影響していると考えられる。

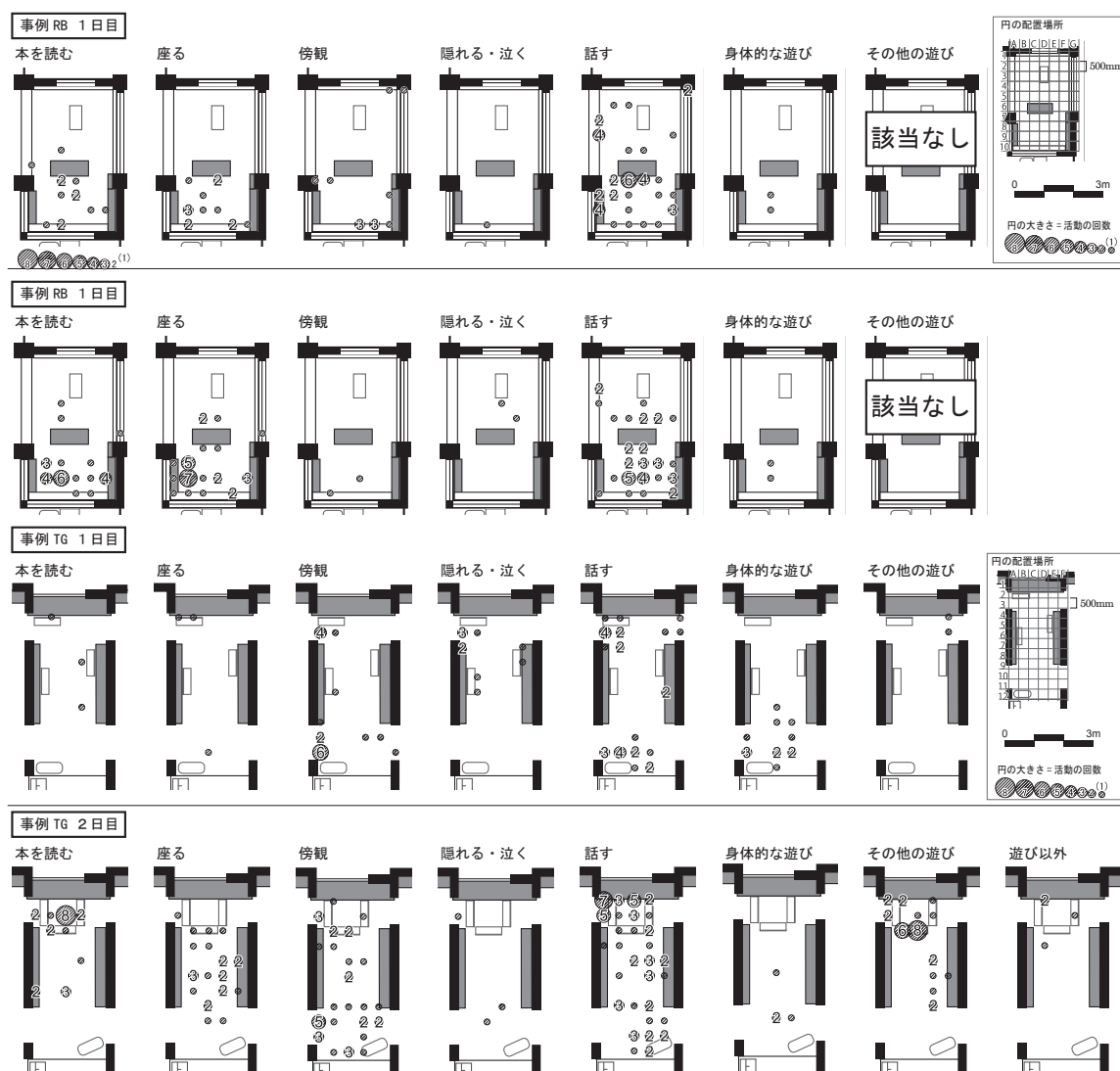


図 6.23 絵本室での活動場所と頻度



写真 6.12 「おうちごっこ」スペースでみられた活動例

事例 TG では、「落ち着いて過ごす場所、コソコソ遊ぶ場所」（6.5.1.2. 事例 TG, 表 6.13）と評価されている通り少人数で過ごす子どもが多い。2 日間の調査では、みられる活動や利用する子どもの人数に違いがあるため、絵本室に限らず、子どもが日常的に自由に遊び場所を選び主体的に活動できる場所が複数あると推察された。また、「保育者がふらっと入る場所にする・子どもが困っていたら声をかける」という見守り方の工夫の通り、保育者の往来が多い一方で、声をかける場面は少なく、子どもの遊びに介入する場面は限られていた。絵本室の位置付けは、複数人で遊んでいる場合は、内緒話やごっこ遊びといった、共感性が高く相手との親密な関係が作りやすい場所であるが、一人で利用する子どもにとっては、自分が好きなことを黙々とおこなう場所として活用されていると考えられる。

## 6.8 子どもの主体的な活動と遊びスペースの役割

遊びスペースについて、保育者にとっての見守りやすさと子どもの活動の多様性の関係を分析し、子どもが主体的に活動できる遊びスペースの要件を考察するために、これまで得られた結果を総合して、各遊びスペースの役割を考察する。遊びスペースでみられた活動内容から、遊びスペースの役割を 4 つに整理した。A. 遊びや人間関係を深める場所、B. 子どものセルフケアの場所、C. クラス活動または保育者の活動場所、D. 活動の切り替え場所、の 4 つである。各遊びスペースの、遊びスペース内に対するスペース外からの視認性と場所選択の自由度（表 6.18）と、視認性と活動の多様性の有無（表 6.19）について分析し、4 つの役割の空間的な特徴について考察する。

### 6.8.1 遊びや人間関係を深める場所（A）

視認性が高く保育者による見守り方に工夫があって、子どもの活動の多様性と場所選択の自由もある事例（A）は、保育室に比べて小規模な遊びスペースの空間によって、集中しやすい環境や少人数の相手と親密な関係が作りやすい空間であると同時に、子どもと保育者の距離感を適切に保つための家具配置の試行錯誤や使い方の工夫がされているため、子どもが最も主体的に活動できる場所であると推察される。集団で過ごす保育室では、複数の遊びをみつけやすい反面、他の遊びとぶつかって制約が生じたり、子どもの気が逸れたりする場合があるが、遊びスペースでの活動では、他者の介入が少ないからこそ、遊びが深まりやすいと考えられる。

### 6.8.2 子どものセルフケアの場所（B）

遊びスペースの視認性が比較的高く、子どもの場所選択の自由がある事例（B）は、保育室に隣接

表 6.18 遊びスペースの視認性と場所選択の自由度からみる遊びスペース

		遊びスペースの視認性			
		低い			高い
		視認性が低く 見守りにくい	保育室または園庭・廊下 からの視認性が高い	複数の場所からの 視認性が高い	複数の場所からの 視認性が高く 見守り方の工夫がある
子どもの 場所選択の自由	あり	EG：デン	SK：絵本コーナー 1 SK：絵本コーナー 2	SH：アルコーブ RB：廊下のスペース 1	RB：絵本室 TG：絵本室 MK：デン TG：造形室 A
	制限付	SR：絵本コーナー SR：廊下のスペース 2	NT：廊下のスペース 1 SR：廊下のスペース 1	B KI：絵本コーナー D	
	なし	NT：絵本室 SR：絵本室	MK：絵本室 C EG：絵本コーナー		

※未配置 SH：絵本コーナー

表 6.19 遊びスペースの視認性と活動の多様性からみる遊びスペース

		遊びスペースの視認性			
		低い			高い
		視認性が低く 見守りにくい	保育室または園庭・廊下 からの視認性が高い	複数の場所からの 視認性が高い	複数の場所からの 視認性が高く 見守り方の工夫がある
活動の 多様性	3つ以上	C	B SK：絵本コーナー 1	SH：アルコーブ	TG：造形室 TG：絵本室
	2つ	SR：絵本コーナー▲	NT：廊下のスペース 1▲	KI：絵本コーナー▲ D	RB：絵本室 MK：デン A
	なし	EG：デン SR：廊下のスペース 2▲ SR：絵本室 × NT：絵本室 ×	SK：絵本コーナー 2 SR：廊下のスペース 1▲ D MK：絵本室 × EG：絵本コーナー ×	RB：廊下のスペース 1	

※活動範囲の自由度が「制限あり」は▲、「なし」は×を各遊びスペース名の文末に追記 ※未配置 SH：絵本コーナー

した場所であることも影響して、子どもが気持ちを落ち着かせたり、気分転換のために、集団から離れて過ごすことができる場所として、子ども自身が選択することができる場所である。Aと比較すると活動の発展性は低い、保育室からの適度な距離と視認性により、子どもが主体的に選択できる場所で、単なる遊びのための場所としてだけでなく、集団から一定の距離を必要とする子どもの精神面

に寄り添う、ケアを担う場所であるといえる。子どもにとっては、囲まれた一人になれる場所という心理的な安心感を確保しつつ、保育者にとってはみえているような仕掛けや、子ども専用の場所にせず日常的に保育者が出入りする場所として設えることで、声はかけなくても見守られていることが感じられ、子どもに支援が必要な時には、保育者が即座に対応できるような空間的配慮が必要である。

### 6.8.3 クラス活動や保育者の活動場所（C）

遊びスペースの視認性が低く、場所選択の自由度が低い事例（C）は、子どもの活動の多様性も低く、子どもの自由な活動場所ではない。視認性の低さが、保育者にとっては予期できない、子どもの怪我やトラブルの発生など不安に繋がり、子どもの自由な活動場所として使用されないため、クラス単位の一斉活動に使用される場所である。保育室に比べて、場所と行為を合わせて切り替えられることや、保育室より狭いスペースであるため集団をまとめやすいこと、「本を借りた子から保育室へ戻る」など、流れのある活動に利用しやすいという利点がある。また、保育室からの視認性の低さは、保育時間中に子どもの目の届かない場所であるともいえるため、保育者や保護者のための会議室として転用されている事例もある。本来の遊びスペースの用途ではないが、保育者が休憩したり、子どもから離れて業務にあたる空間が乏しい保育施設の中で、潜在的に必要とされる諸室の課題を示している。

### 6.8.4 活動の切り替え場所（D）

視認性が比較的良いが、子どもの場所選択の自由度に制限がある事例（D）は、子どもの主体性は低く、特定の活動や時間に利用される限定的な使われ方であるが、活動の切り替えや待機場所としての役割を持つ。保育室内では、生活行為や遊びが重複して展開することが、子どもの行動の切り替えにくさや見通しの持ちにくさに繋がっているため、円滑な集団生活をおこなうための補助的な場所や、「待機」を他の遊びの時間に置き換えることを容易にする点で、子どもの負担を軽減させることが可能であると推察される。

### 6.8.5 スペースの物理的評価からみた遊びスペースの位置付け

遊びスペースが自由活動範囲内に設定されていても、事例によっては、保育者が主体となって活動している事例から、子どもの自由で多様な活動がおこなわれている事例が様々ある。自由活動範囲内に保育室と異なる規模や雰囲気のある場所があることは、子どもが自由に遊び場所や滞在場所を選択できるという場所選択の自由度に繋がるが、子どもの活動の多様性には、場所が整備されているだけでな

く、保育者が遊びスペースの必要性を認識し、子どもの自由な活動場所として位置付ける必要がある。そのためには、遊びスペースが見守りやすく、子どもが保育者の支援を必要とする時に適切に支援が受けられるよう、保育者と子どもの適切な距離を保てるような空間的配慮が不可欠といえよう。

具体的には、場所選択の自由度とスペース外からの視認では（6.8. 表 6.18 より）、保育室や園庭などからの視認性が高いスペースは、場所選択の自由度も高いため、子どもの遊びや人間関係を深めたり、一部では子どものセルフケアのスペースでもある。セルフケアは、場所選択の自由度が高いが、やや視認性が低いスペースであることから、保育室からの視認性は確保されながらも、他者から距離を保てる場所であると推察される。また、視認性が低い遊びスペースは、クラス一斉活動や保育者の活動場所である。

次に、活動の多様性とスペース外からの視認性では（6.8. 表 6.19 より）、視認性が高く、活動の多様性も高い場所で、子どもの遊びや人間関係を深めるスペースとして位置付けられる一方で、セルフケアの場所は視認性は比較的高いものの、活動の多様性には幅がある。これは、セルフケアの場所が、特定の遊びだけでなく、多用途に活用されている事例と、遊びスペース内で許容される活動が特定され、一人または少人数で使用する専用スペースとして位置付けられている事例の双方が混在しているといえる。また、場所選択の自由度が低い場所でも、活動の多様性がある事例もあることから、子どもの活動の自由度には、スペース外からの視認性よりも、保育者による多様な活動の許容の程度が、大きく影響している。

さらに、活動の多様性とスペース内の設えの可変性では（表 6.20、場所選択の自由度がある事例のみ抜粋）、そのほとんどが、遊びや人間関係を深める場所と、セルフケアの場所であるが、スペース内の設えの可変性はいずれの程度にも広く分布する。しかし、事例 SH のアルコーブは、家具の可変性がない反面、同様のスペースが個室の様相で3つ並列し、保育室からの距離に合わせて選択するこ

表 6.20 遊びスペースの家具の可動性と活動の多様性からみる遊びスペース

		スペース内の設えの可変性		
		低い ←		→ 高い
		なし	保育者のみ可変可能	子どもも可変可能
活動の多様性	3つ以上	SH : アルコーブ SK : 絵本コーナー 1		TG : 絵本室 B TG : 造形室
	2つ		RB : 絵本室	MK : デン A
	なし	EG : デン C	RB : 廊下のスペース 1 NT : 廊下のスペース 1 SK : 絵本コーナー 2	

とができる特異性を持つ（6.4.5, 図 6.5 より）。また、同じく家具の可動性がない事例 SK の絵本コーナー 1 は、保育者の利用と「保育者主導による」気持ちを落ち着かせる行為で使われているスペースである（6.6, 表 6.16 より）。そうした状況を鑑みると、子どもの活動の多様性がある遊びスペースは、保育者と子どもの双方が家具を可変できるスペースが多いといえよう。

## 6.9 小結

### 6.9.1 遊びスペースと自由活動範囲

図面調査及びアンケート調査から抽出した 68 事例の内、遊びスペースを整備した事例は 27 事例あったが、その内、自由活動範囲内に遊びスペースを持つ事例は 17 事例（約 4 割）である。また、その内、9 事例の遊びスペースの使い方を比較すると、子どもが自由に活動し活動内容が制限されていない事例から、クラス単位での活動を原則としている事例まで、子どもの活動の自由度には差がみられた。

### 6.9.2 遊びスペースの設えの比較

遊びスペースに設えられた家具等を比較すると、23 箇所全ての遊びスペースで、造り付けの本棚やベンチが整備されているが、子どもの活動の自由度が高い事例では、造り付け家具以外にも、置き家具や、子どもが動かすことができる家具など家具の種類と数が多い傾向がみられた。これらの事例では、保育者による家具の移動や設えの変更がおこなわれており、子どもの様子や保育者の意図によって遊びスペースを使いこなす工夫がなされているといえる。毎年、一定数の子どもが入れ替わるという保育施設の性質上、子どもや保育者の様子から、空間の設えを調整する必要があることを踏まえて、建築が、その臨機応変な変更に対応できる余地を残す必要があると考えられる。

### 6.9.3 遊びスペースの役割と空間的配慮

保育者の空間評価より、遊びスペースを子どもの場所選択の自由度と活動の多様性、視認性から整理し、A．子どもの遊びや人間関係を深める場所、B．セルフケアの場所、C．クラスの一斉活動または保育者のための場所、D．活動の切り替えをおこなう場所、という 4 つの役割について考察した。

各遊びスペースの物理的評価と、4 つの役割についての関係をみる。

まず、子どもの場所選択の自由度と遊びスペースの視認性を比較すると、子どもの遊びや人間関係を深める遊びスペースは、複数の場所からの視認性が高く、保育者にとって見守りやすいことで、子

どもの場所選択の自由度も高いスペースである。また、視認性の高さは、子ども同士の遊びの発見のしやすさにも繋がっている。反対に、視認性の低いスペースは、保育室から離れていて保育者の目が届かず、怪我やトラブルへの対応の難しさから、子どもの自由な遊び場所として位置付けられないが、代わりに、保育室では得られないクラスの一体感を感じる一斉活動の場所や、保育者の活動場所として使われている。

次に、子どもの活動の多様性と遊びスペースの設えの可変性を比較すると、子どもの遊びや人間関係を深めるスペースは、子どもが家具を動かせるなど設えの可変性が高く、活動の多様性も高い事例が多いが、セルフケアの場所は、活動の多様性に関係なく使われている。

#### 6.9.4 子どもの主体的な活動を支援する遊びスペース

保育施設における、子どもの主体的な活動の程度を段階的に表し、本章の事例分析<sup>註6.5</sup>より遊びスペースの使われ方から整理した役割と比較すると、子どもの主体性を支援する要素の関係は図 6.24 のように整理される。

段階1は、保育者の見守りやすさの確保である。保育室及び園庭や廊下からの視認性が低かったり、スペース内にある家具によって死角が多く、設えが不変の場合は、保育者にとって見守りにくい場所となり、子どもの自由な活動場所として位置付けられないため、子どもの主体的な活動が生じにくい、

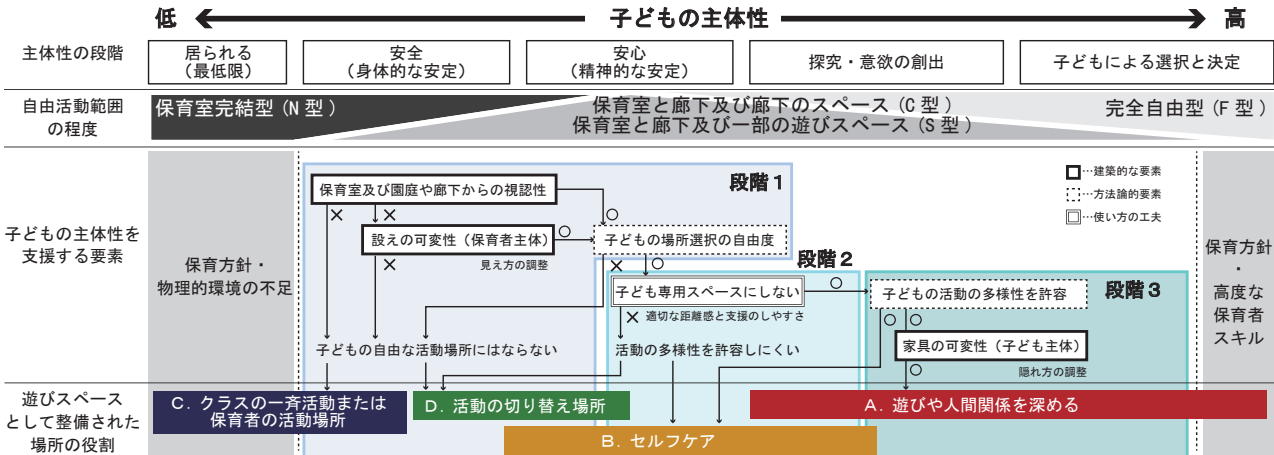


図 6.24 子どもの主体性を支援する要素と主体性の段階

註 6.5) 遊びスペースを持つ事例の内、本章で分析した事例では、自由活動範囲が保育室と廊下及び廊下のスペース（C 型）と、保育室と廊下及び一部の遊びスペース（S 型）があるが、その類型間で、子どもの主体性に差はなく、自由活動範囲が広く多数の遊びスペースが自由活動範囲内でも、子どもの主体性が高いとはいえないため、C 型 S 型を区別せず、図示する。

クラスの一斉活動や保育者の活動場所になる。スペース内の視認性が高い場合でも、保育者や施設の保育方針により、子どもの自由な活動場所にならず、保育者主導で使われる、活動の切り替え場所としての役割を担う。

段階2は、適切な距離感と支援のしやすさの工夫である。子どもの自由な活動場所を、子ども専用のスペースにしない使い方の工夫によって、スペース内の人の流動性を一定程度確保することができる。これにより、子ども同士が他の遊びを発見しやすくなったり、保育者が近くにいることで子どもも安心感を感じ挑戦的な遊びや意欲が生じると考えられる。また、保育者も子どもの様子を把握しやすくなる事で、適切な距離を保ちつつ、必要なタイミングで声かけ等の支援が可能になる。保育者の支援により、さらなる活動の多様性や遊びの新しい展開が保証されると考えられる。

段階3は、子どもの居方の調整である。子どもの活動の多様性が許容された上で、子ども自身の手によって設えを変更したり、家具を移動させることで、空間を見立てたり、より小さいスペースを創造することができる。これにより、スペース内での隠れ方や居方を調整することができ、遊びの発展性や、親密な人間関係を築きやすいスペースの構成に寄与していると考えられる。

## Chapter7

---

### 研究の総括と今後の課題

## 7.1 各章のまとめ

これまで論じてきた各章の研究内容と得られた知見を簡潔に整理する。

## 第2章 研究の論理的背景と本研究の位置付け

この章では、保育施設を取り巻く社会的背景や課題を整理し、保育方法と建築空間の相互関係や、保育学と建築学の双方における既往研究の系譜を概観し、本研究の視点と位置付けを明らかにした。

まず、保育施設の誕生から施設の位置付けと空間構成の歴史的変遷を通し、初期の園舎に対し、空間構成に大きな変化がないことを踏まえた上で、その要因の一つとして、社会制度的な問題点を挙げた。具体的には、待機児童の解消のため、量的充足を第一の目標におこなわれてきた背景から、子どもが落ちついて過ごしたり、居心地よく過ごせるなど、子どもの精神面に寄り添うような空間の質が保たれていない点が挙げられる。特に、1990年より30年に渡って実施されてきた規制緩和により、物理的な環境のみならず、人的資源についても削減されている点は、保育の質低下に直結する要因であるといえる。

次に、本研究の主題でもある「子どもの主体性」について、現行の保育所保育指針や幼稚園教育要領等から、その位置付けを確認した。また、学術的な面から、既往研究における定義や構造化を整理し、子どもの主体性を構成する各要素について外観した。

保育施設の既往研究として、生活支援機能の配置や食寝分離の視点、子どもの自由遊びと居場所についての視点、人数規模や建築形状のと癖に関する視点、特徴的な保育思想や保育方法と空間特性を視点にした研究など、多角的におこなわれてきた研究成果を整理した。しかし、子どもの精神面に寄り添う研究や、保育方法と空間を横断的に分析した研究が少ないという課題がある。

そこで、本研究は、子どもの主体的な活動を支援する保育施設の建築的要件を明らかにするために、保育室とは異なる保育空間として、付帯諸室を視点に、保育方針の一つの表れとして、子どもが自由に活動できる付帯諸室の範囲に着目し、保育者の空間評価の傾向と、付帯諸室における子どもの主体的な活動の様相から、保育方法と保育空間の相互関係と、子どもの主体的活動のあり様を分析する。

## 第3章 研究対象事例の保育空間と保育方法

この章では、保育施設における保育方法と建築空間の関係性を理解するために、園舎の保育空間と保育方法を概観した。全国の保育施設より、建築図面が入手可能な2000年以降の保育施設を抽出し

分析した結果、次の知見が得られた。

- 1) 保育室に付帯する諸室及び廊下のスペース（以下、付帯諸室）の整備状況では、行事や室内運動に使用される多目的室が最も多く、次いで、生活行為や遊びのための専用室や、食事または午睡といった生活行為との兼用多目的室が多く整備されていた。面積規模では、多目的室の面積分布にばらつきが大きく、全園児を集めた集会や行事、雨天時の室内運動場として整備された、広い多目的室の他に、保育室と同等または狭い多目的室をもつ事例がみられた。また、午睡兼用室の面積分布もばらつきが大きい。
- 2) 子どもの活動と活動場所の関係では、多くの事例が、生活行為と様々な遊び行為の両方を保育室内でおこなっており、保育室内の活動場所が重層的である。遊び活動の中では、「絵本を読む」活動は、保育室以外にも、廊下の専用スペースや専用室でおこなわれており、「絵本を読む」活動が、設えやすく、行動の予想がつきやすく安全性も高いことから、保育室外に整備しやすい遊び活動であると考えられる。
- 3) 食事室を整備しながらも、食事は保育室でとり、専用室を使用しない事例がある。食事室を使用しない理由は、①保育者の人員不足や連携の難しさ、②保育室から移動し、食後に再び保育室へ戻る一連の行動が、子どもの主体性を損なうという保育者の認識、③面積不足、反響音のうるささや暑さ、動線の混同など建築的な不備や配慮不足が挙げられた。
- 4) 自由保育時間中の子どもが出入り可能な活動場所では、広い多目的室と食事室は出入り自由な事例が多い一方で、保育室より狭い多目的室や遊び専用室は出入り出来ない事例が多いことから、付帯諸室構成の多様性が、子どもが自由に出入りできる場所の多様性を確保することにつながっていない。

以上より、付帯諸室の整備状況では、食事室や絵本室（またはコーナー）を整備した事例が多い一方で、一部の食事室では、場所としては整備されつつも、人員不足や建築的な不備、理念との不一致から、現在は使われていないことが明らかになった。このことは、付帯諸室構成の多様化や諸室数の増加が、子どもが自由に活動できる場所としての選択の多様性につながっていないといえる。そこで、次章では、保育空間と保育方法の関係を分析するために、自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲を視点に分析をおこなう。

## 第4章 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型とその空間構成

この章では、子どもの主体的な活動を支援する場所の選択可能性や活動の多様性について検証するために、保育方法やルールと園舎の空間構成の関係性を分析した。分析の視点として、自由保育時間中に子どもが自由に出入りできる範囲を「自由活動範囲」と称し、自由活動範囲内にある付帯諸室と保育室の配置、自由活動範囲の類型化をおこなった結果、次の知見が得られた。

- 1) 自由活動範囲内にある付帯諸室（以下、自由活動室）の種類をみると、個室として独立した諸室タイプより、廊下の一部を利用した廊下のスペースタイプの方が、自由活動室になる割合が高い。廊下のスペースタイプは、諸室タイプに比べて、保育室からの高い視認性や一体性が感じられる物理的特性をもつことが要因であると考えられる。
- 2) 自由活動室と保育室の配置関係をみると、自由活動室になりやすい付帯諸室は、保育室郡に囲まれた、一体配置や広場配置の割合が高い。対面配置など、保育室に近接して整備された付帯諸室が多いが、距離だけでなく、保育室から視認できることや雰囲気を感じられる空間の連続性、保育室との一体的な利用を想定した建具の整備など、物理的な配慮が必要である。
- 3) 自由活動範囲を次の4つに類型化した。
  - ①保育室完結型（N型：保育室のみが範囲）
  - ②範囲制限C型（C型：保育室と廊下や廊下のスペースが範囲）
  - ③範囲制限S型（S型：保育室と廊下に加えて一部の付帯諸室が範囲）
  - ④完全自由型（F型：自由活動範囲に制限がない）

N型は、保育室と同階に付帯諸室がないなど物理的環境による制約によって、子どもの活動範囲が限られている可能性を示唆した。また、F型は、子どもの主体性を優先するといった強い理念を持ち、保育者間の情報共有や複数人の保育者で子どもをみるといった保育方法の工夫によって、自由活動範囲に制限がない環境を成り立たせていると推察された。付帯諸室の構成が最も多様であったのは、S型で、複数の付帯諸室を整備していることから、活動と活動場所の対応意識が高いと考えられた。

以上から、自由活動範囲は、事例の保育方針や方法と保育空間の相乗的關係を端的に表したものであり、保育者と子どもが保育空間をどのように使いこなしているかや、園舎に対する保育者の評価の1つとしても位置付けられよう。

## 第5章 付帯諸室を含む自由活動範囲の類型と保育者の空間評価

この章では、保育方法と保育空間の相互関係さらに捉えるために、保育者による園舎の空間評価を分析した。場所の有無による重要度の比較の結果から、以下の知見が得られた。

- 1) 園舎内の特定の場所や、使われ方の有無によって、重要度の評価の平均値を比較したところ、「多様な用途に利用できるスペース」や「多様な用途に利用できる部屋」、「保育者の動線が短い」、「保育室内から子どもが未満児の様子をみることができる」という4つの項目では、項目の有無による重要度の評価に差がなく、基本的な園舎の物理環境として、保育者に重視されている。
- 2) T検定による有意差がある項目では、特に「一体的に使えるよう間仕切りを撤去できる」、「部屋の広さや形状を変更できる」、「周囲と雰囲気異なる部屋がある」、「家具や間仕切りが容易に動かせる」、「段差のない床、バリアフリーである」といった、場所の設えやすさに関する項目で、該当場所がある郡の重要度が優位に高かったため、これらの場所や物理的な特徴は、保育者の使用経験があると重視されるが、反対に使用経験がないと重視されない項目であるといえるため、整備前に、保育者に対して、その場所や物理的特徴の使い方や有用性について十分な理解を得て、検討する必要がある。
- 3) 「子どもが一人で活動できるスペース」、「継続した遊びのスペース」、「午睡時の遊びスペース」は、場所の有無による重要度の差が特に大きく、有意差がある。いずれの項目も建築的な設えを必要としない使い方に関する設問であるが、運用のためには、保育室内外における余剰スペースが必要である。

次に、保育方針による空間評価の比較のため、自由活動範囲の類型別に、場所や使い方の項目に対する満足度と重要度の差異を分析した結果、以下の知見が得られた。

- 1) 自由活動範囲の類型によって、評価に差が生じない普遍的な項目の内、重要度と満足度が共に高いのは、「室内運動場がある」、「保育者が他クラスの保育者の動きをみることができる」、「子どもが未満児の様子をみることができる」、「調理室内部の様子が廊下からみえる」の4つで、これらは、園舎に必要な空間及び物理的特性として保育者に認知され、既に概ね適切に整備されている。一方で、「保育者の副動線」、「保育室内の子どもが一人で活動できるスペース」、「電アドの小さいスペース」、「滞在を促す仕掛け」、「午睡時の遊びスペース」の5つは、いずれの類型型においても、重要度と満足度が低い。前項の場所の有無による分析では、ある郡の重要度が有意に高かったため、施設の運営方針や保育方法と照らし合わせながら、整備の必要性を検討する必要がある。

2) 自由活動範囲の類型別に、評価に差が生じた項目から、各類型毎の空間評価の特徴を述べる。

- ① N型は、廊下のスペースを重視する一方で、少人数で活動するスペースは重視しない傾向がある。
- ② C型とS型は同様の傾向を示す。専用室よりも、多目的に活用できる部屋やスペースを重視し、制作材料について子どもが自由に手に取れる設えを重視している。
- ③ F型は、空間の性質が異なるスペースや制作材料について子どもが自由に手に取れる設えは重要度が高いことから、自由活動範囲が広いのみならず、多様な性質の空間や、子どもの自由な活動を支援する環境を重視する傾向がある。

以上より、園舎の建築整備において、保育者が評価する空間や物理的配慮についての要点をまとめた。園舎整備の際には、必要最低限の機能を備えた保育室など整備の他に、保育理念や方法に合わせた場所や多様な使い方を可能にする空間整備が可能であるが、保育者にとっては、使い方の想像や空間イメージが湧かない可能性がある。本章では、自由活動範囲という保育方法による評価の傾向を示すと共に、保育者の経験の有無による評価の偏りについても言及した。

## 第6章 遊びに関する付帯諸室の使われ方と役割

この章では、付帯諸室の内、遊び活動を想定した諸室及び廊下のスペースと、デンやアルコーブなどの行為を限定しないスペース（以下、総称して遊びスペースとする）を対象に、遊びスペースを実際に整備した事例分析から、遊びスペースの使われ方や設えを比較し、遊びスペースが担う保育活動上の役割を考察した結果、次の知見が得られた。

- 1) 遊びスペースを整備した事例の内、自由活動範囲内に遊びスペースが含まれる事例は、約4割にとどまる。訪問ヒアリング調査によると、自由活動範囲に含まれながらも、使い方のルールに制限があったり、複数の遊びスペースの中で子どもの活動の自由度に差がある事例がある。
- 2) 遊びスペースの設えの比較からは、子どもの活動の自由度が高い事例ほど、造り付け以外の置き家具や、子どもが動かすことのできる家具があるなど、家具の種類と数が多い傾向がある。同時に、これらの事例では、保育者による家具の移動や設えの変更がおこなわれており、学齢における発達段階や子どもの様子、保育のねらいによって、スペースの使いこなしの試行錯誤がされている。
- 3) 遊びスペースの使い方から、場所の役割を次の4つに整理した。
  - A. 子どもの遊びや人間関係を深める

B．セルフケア

C．クラス一斉の活動または保育者の活動場所

D．活動の切り替え場所

さらに、各遊びスペースの物理的評価から、遊びスペースの位置付けを考察すると、子どもの遊びや人間関係を深める場所や、セルフケアの場所は、視認性が比較的高く、子どもの場所選択の自由度も高い。視認性の高さが、保育者の見守りやすさに繋がった結果、子どもが自由に活動できる場所として許容され、その結果、子ども自らが選択的に遊びスペースを使うことができています。また、子どもの遊びや人間関係を深める場所は、遊びスペース内の設えの可変性も高い場所が多く、子ども自身が家具を動かすことができたり、保育者によって試行錯誤的に空間整備がおこなわれていることから、子どもの様子や保育のねらいに合わせた、設えの可変性が、遊びスペースの使いこなしに繋がっていると考えられる。一方、クラスの一斉活動または保育者の活動場所になる遊びスペースは、視認性が低く保育室からも物理的に離れているため、子どもの自由な活動が許容されない代わりに、保育中でも子どもから隔離された環境で部屋を使うことができる点が利点となり、保育者の活動場所として位置付けられている。

4) 子どもの主体性を段階的に整理し、遊びスペースの役割と評価から分析すると、子どもの主体的な活動を支援する要素は、次のように整理された。

- ①まず、保育者の見守りやすさを配慮する。保育室や園庭などからの視認性を確保し、またスペース内の設えを変更することで、見え方の調整をおこなう。できない場合、子どもの自由な活動が許容されず、クラスの一斉活動や保育者の活動場所になる。
- ②子どもと保育者の適切な距離感と支援のしやすさの工夫をおこなう。遊びスペースを、子ども専用のスペースにしないという、使い方の工夫によって、スペースの人の流動性を確保することで、子どもは保育者を近くに感じながら、保育者の存在を気にすることなく自らの活動に集中することができる。保育者の視点からは、子どもに対して適切な距離を保ちつつ、子どもの様子が把握しやすくなり、必要なタイミングで支援が可能になる。
- ③最後は、子どもの居方の調整である。子どもの多様な活動には、子ども自身が設えを変更したり、スペースを創造することで、みたて遊びが展開したり、より子どもの身体スケールに合致した小スペースでの活動が可能になる。居心地の良さを子ども自身が作り替えることができることによって、遊びの発展性や、親密な人間関係を築きやすい空間の構成に繋がると考えられる。

以上より、遊びスペースの使われ方や役割を分析し、子どもの主体的な活動場所として必要とされ

る要件を考察した。子どもに主体的に使われている遊びスペースは、保育室とは異なる遊び方や過ごし方が可能なスペースであり、集団から離れ一人で過ごしたり、より小さなスペースを他者と共有することで生まれる親密感を感じる空間である。子どもは、そういった空間的特性を読み取り、その時々目的や感情によって、自らの居る場所を選択していると考えられる。また、それは保育施設という場所の特性上、保育者の理解と支援なしには成り立たない空間ともいえよう。

## 7.2 研究全体の総括と子どもの主体性を支援する要件への提言

これまでの考察を横断的にまとめ、保育施設における施設計画について、子どもの主体的な活動の視点から、今後の展望と提言をまとめる。

### 7.2.1 保育室に付帯する諸室及び廊下のスペースの計画論について

保育施設は、そこでおこなわれる保育の理念や方法に合わせて、その建築のあり様も多岐に渡ると考えられる。また、保育理念は、その時々社会や保護者のニーズによって絶えず変化しているため、方法と空間を合致させるためには、使い手の使いこなしや使い方の工夫が求められる場合がある。この場合の使い手とは、本来、子どもであるべきだが、実際の環境設定者は保育者である。

本研究では、保育室に付帯した諸室及び廊下のスペースに着目し、その整備状況と使い方を分析してきた。日本の保育環境の基準の低さは、2章で述べたとおりであるが、本研究では、限られた面積の中で、重層的に発生する生活行為と遊び活動の内、そのいくつかを保育室外に取り出すことによって、保育面積の余剰や、活動の切り替えやすさが生じると仮定し、2000年以降に整備された園舎の付帯諸室の整備状況を概観した。室内運動や行事の会場として想定された広い多目的室以外に、多用途に活用される小規模の多目的室の整備や、食事室、絵本室や絵本コーナーの整備が進んでいる一方で、付帯諸室が必ずしも、子どもの自由な活動や主体的な活動に繋がっていない点が明らかになった（3章）。食事室の使用を中止した事例からは、人員配置などの運営的な問題以外に、音・熱環境の整備不備や面積不足、移動空間との動線の混同などの建築的な不備が挙げられ、食事室の整備が子どもの主体性を損なったり、保育者にとって保育環境として適さないと考えられている事例がある事が明らかになった。また、遊び活動のための専用室やコーナーでも、保育者の判断により、子どもが自由に使えない場所や活動が制限されている場所が多くある（3章）。

また、保育の方針によって、子どもが少人数で活動するスペースや、子どもの自由な活動を支援する設えなどの、保育の場所や物理的特性では、保育者の評価に差異が生じていたが、普遍的に評価さ

れる項目もある。つまり、空間に対する保育者の評価軸として普遍性を持ち評価しにくいものと、その場所や物理的特性を実際に経験した保育者にとっては評価しやすいが、未経験の者には、使い方や空間の性質が伝わりにくく、評価することが困難なものがある（5章）ため、園舎の計画時には、保育者への伝え方やニーズの収集に、一定の配慮が求められる。

保育環境の設定者が保育者である以上、子どもの活動の自由度や多様性は、保育者の許容度に左右される事を踏まえると、子どもの居心地の良さや主体的な活動を可能にする場所を整備するためには、保育者の負担感や不安を取り除く必要がある。付帯諸室の特に遊びスペースに関しては、まずは、保育者が子どもの様子を見守りやすいよう、スペースの視認性を確保した上で、複数の場所からみえるなどの計画上の配慮によって、一人の保育者による管理から、チームで担うといった負担感の軽減にも繋がると考えられる。また、子どもにとっても、保育室から近く複数の保育者や子どもが行き来する姿がみえる場所に安心感を感じられるからこそ、保育室とは異なる小スペースで遊びや人間関係が深まったり、一人で静かに過ごす場所として子ども自身の主体性によって積極的に使われているといえよう。計画上、諸室の用途を想定して設えることは必要であるが、使い始めた後からでも、使い手や使い方に合わせて、保育者または子ども自身の手で設えを変更できるフレキシビリティが求められていると考えられる（6章）。

## 7.2.2 子どもの主体的な活動を支援する要素と保育者の関わり

保育施設における、子どもの主体的な活動とは、単に子どもが一人で際限なく自由に振る舞うという事ではなく、他の子どもや保育者の気配を感じて安心感を得ながらも、他者に学び、しかし侵害されず、活動を追求できるという事であろう。また、未就学児の遊びの発展や継続には、保育者による適度な支援が必要であると考えられる。つまり、子どもの主体的な活動を支援する遊びスペースは、単に付帯諸室などのスペースを整備するだけでは不十分で、スペースの視認性を確保しつつも、保育者が子どもとの距離を保ちながら、適切なタイミングで過不足のない支援が可能な見守りやすさがあり、さらに、保育者が子どもの発達段階や遊びの発展性から判断して、子どもに合わせて保育環境をフレキシブルに設えられたり、子ども自身が自分の居場所を自由に選び、時には設えるといった、空間の可変性を持つことで、子どもの活動の多様性を保証することが重要である。

これらの関係を「空間的配慮」、「子どもの活動」、「使い方の工夫」に整理した（図7.1）。各要素のバランスと充実が、子どもの主体的な活動を支援する関係にあり、保育者の関わり方にも影響を与え、総合的に子どもの主体性を支援する環境を構成している。

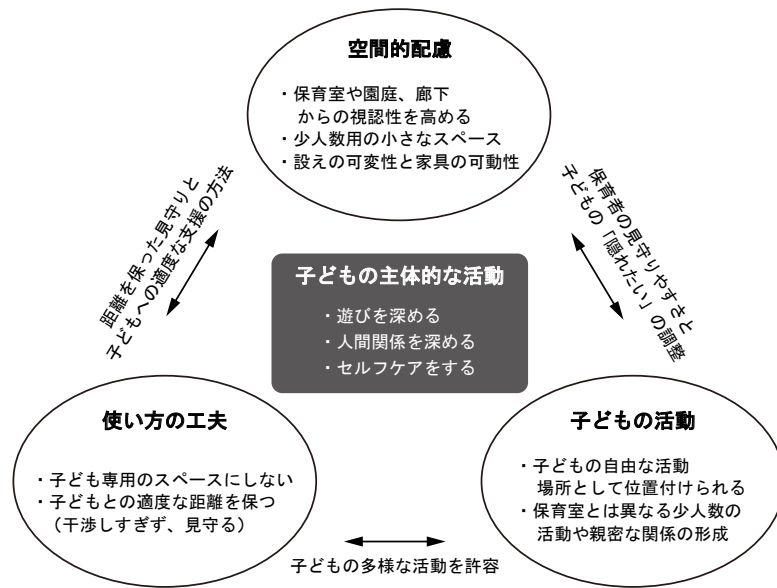


図 7.1 子どもの主体性を支援する3つの要素と保育者の関わり方

### 7.2.3 研究成果に基づく建築計画学への示唆

本研究では、保育室に付帯する付帯諸室を[Supporting room]と訳した。「付帯 (Supporting)」という用語の意味から、主となる物事に「付随」、「補助的」、という意図が感じられる可能性がある。本研究の場合では、主となる部屋は、保育室である。保育活動の中心は、やはり保育室であることに異論はない。しかし、子どもに関わらず、全ての人にとって、ある場所に居心地の良さや安心感を感じる際、その場所が、その建築用途を代表する場所であるとは限らない。図書館における閲覧空間や、美術館における展示スペース、学校における教室のように、その建築用途を最も象徴する場所や大勢が集う場所の快適性だけでなく、図書館のカフェ、美術館の半屋外空間、学校の廊下のアルコーブのように、主となる部屋より自由な振る舞いが許容された場所、場所と場所を繋ぐ中間領域や一人になれる場所といった、小さな空間の重要性により目を向けるべきではないか。このような付帯的な場所に着目することは、多様化する個人のニーズへの対応や、一人ひとりの特性に寄り添うような空間づくりにおいて重要である。

本研究の成果からは、そういった付帯的な場所のあり方として、「視認性の確保」を挙げた。管理者から付帯的な場所がみえることによって、これまでの管理主義的な視点から利点があるだけでなく、管理者のみならず、その他の利用者からも見えやすいことが、その場所で許容される活動の自由度が高くなることに繋がる。さらに、付帯的な場所を利用する人にとっても、主となる場所の活動の

様子がみえた方が、安心感が増し、より主体的に、そして多様な活動に利用される可能性がある。つまり、個人のニーズや一人ひとりの特性に寄り添うために、空間を個室化したり、隔離や遮断といった視覚的、聴覚的に他者から切り離す操作は、人の居心地の良さから評価すると、逆効果であり、むしろ互いの活動の様子がみえ、存在を感じ合うことが付帯的な場所における居心地の良さに繋がると示唆される。個人主義の風潮が広がる現代であるが、建築計画学として、一人ひとりに寄り添う建築計画学は捉え方を改めて問い直す必要がある。

また、建築空間の可変性（フレキシビリティ）についても言及しておきたい。本研究では、付帯的な場所の家具の可動性や設えの可変性が高い場所の方が、多様な活動が多くみられる傾向があった。これは、場所の用途や使われ方の変化に対応できるだけでなく、場所の利用者自身が、空間を自らの手で可変させることが、空間の使いこなしや活動の発展性の補助、空間に対する愛着の形成に寄与している可能性を示唆している。建築は、管理運営スキルや運営方針、利用者のニーズや特性、他の場所との関係性の変化など、様々な要因に合わせてフレキシブルに変化することが求められようが、これまでの建築計画学の中で、建築整備後の空間の柔軟性については、議論が少なかったように思われる。細部までFixして計画するよりも、人や時代に合わせてフレキシブルに適応し続ける余地を残すことが、今後の建築計画学に求められるのではないか。

### 7.3 今度の課題

本研究では、図面が収集可能な保育施設に対し、アンケート調査をおこなった後、自由活動範囲を保育方法の1つの指標として類型化して分析を進めてきた。その中で、残る課題を2点挙げる。

#### 1) 生活行為をおこなう付帯諸室の分析

食事室を整備しているにも関わらず、食事室を食事で利用していない事例については（3章）、運営的な問題点と空間的な不備により、保育が困難であったり、子どもの主体性を損なうとの判断によって、現在、食事室を使用していない要因として結論付けたが、実際には、食事室を使用しているも「子どもの主体的な活動」がみられる事例はある。また、午睡室についての分析も十分おこなえていない現状がある。本研究では、結果的に生活行為の主体性より、遊び活動における主体性を重視して調査分析を実施したため、生活行為に関する子どもの主体性について、十分論じられなかったことは、今後の課題である。

#### 2) 自由活動範囲の類型による特徴がみられた園舎の空間的特性

本研究では、保育方法の1つの指標であると判断した、自由活動範囲の類型毎に、保育者が重視す

る園舎の空間的特徴についての傾向を示した（5章）が、その傾向を生じさせた背景にまで、十分言及できていない。保育方法や方針の違い、保育者のスキル、施設規模や平面構成など、様々な要因によって空間の評価が異なると考えられる。保育の質を考える上で、建築が与える影響は大きいと考えられるため、引き続き、多様な視点からの保育と空間の分析が必要であるとする。

### 3) 子どもの主体性の実態について

本研究では、5章までの分析において自由活動範囲から事例を類型化し、6章以降は、遊びスペースを整備した事例のみを分析の対象としている。本研究の目的からすると、適切な手順であるが、子どもの主体性の実態に迫るためには、自由活動範囲に制限がない事例（F型）や、保育室のみで活動する事例（N型）についても、子どもの主体的な活動の比較をする必要がある。これにより、本研究で明らかになった、子どもの主体的な活動を支援する遊びスペースの要点を踏まえながら、現に遊びスペースがない施設においても代用空間を設えたり、使い方のルールを見直すことによって、子どもの主体性を保証する事ができると考える。



---

謝辭

## 謝辞

本研究に取り組み、学位論文をまとめるまでには、多くの方々のご支援とご指導を賜りました。お世話になった皆様方に、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

はじめに、指導教官である名古屋大学大学院の小松尚教授には、博士後期課程への進学及び、研究全般にわたり、細やかなご指導をいただきました。5年間の課程の中で、小松先生からは、学位論文に取り組むにあたっての心構えや、問の立て方、研究者としての当事者の方々との関係性の作り方など、様々なご助言を頂戴しました。これらは、今後の私の人生においても重要な指針となるものばかりです。入学当初の研究計画から考えると、大変長い時間が経過してしまいましたが、時に厳しく、時に励まして下さった、先生のご指導のおかげで、こうして博士論文を提出することができたと思っています。誠にありがとうございました。

次に、論文審査の労を引き受けてくださった、副査の西澤泰彦教授と太幡英亮准教授にも感謝申し上げます。入学当時から、研究の進捗や大学院生活の様子などを気にかけてくださり、お声がけいただいたことは、課程博士の同士の数が少なく、心細さを感じていた私にとって、大変励みになりました。お忙しい中、丁寧に私の論文を読み、貴重なコメントを下さり、ありがとうございました。

また、早稲田大学の佐藤将之准教授と福井工業大学の藤田大輔准教授には、学会や研究会の場で折に触れてお声がけいただき、研究のアドバイスやご指摘を頂きました。保育施設研究者としての、的確なご助言の数々によって、私の研究への視座が明確になったことが、博士論文にも大きな影響を与えています。ありがとうございました。

さらに、私が在籍した5年間の間に、小松研究室の一員として議論を重ねた、研究室の皆様にも感謝申し上げます。一人ひとりが独自の視点で建築に向き合い、社会的課題や新しい現象を捉えようとする様子は、私にとっても非常に深い学びに繋がりました。初めは小さな興味や引っ掛かりが、ゼミでの議論や既往研究のレビューを通して磨きがかかり、最終的に唯一無二の研究論文に仕上がっていく過程は、大変刺激的なものでした。またいつか、議論の場でお会いできることを願っています。

一方、相山女学園大学の橋本雅好准教授、阿部順子准教授、川野紀江准教授には、学部から修士、助手時代を経て、現在までの約15年間にわたって、常に前向きで、力強いご助言と励ましを頂きました。博士論文が思うように進まず、悩み、落ち込んでいた私を、最後まで支えてくださり、ありがとうございました。

また、名古屋大学大学院への進学を後押ししてくださった、村上心教授、藏澄美仁教授、愛知産業大学の秋田美穂准教授にも、この場を借りて感謝の意を捧げたいと思います。

そして、視察や調査を受け入れてくださった、保育施設の保育者と子ども達にも心より感謝申し上げます。保育者の先生方との何気ない会話や、子どもの様子から、非常に沢山の気づきを得ました。

研究を進めるにあたり、ご支援ご協力をいただきながら、ここにお名前を記すことができなかった多くの方々に深く感謝の意を表します。

最後になりましたが、私の博士課程の進学を応援し、いつも支えてくれた夫と、義父母には、心から感謝を伝えたいと思います。私が、自分自身のために選択した学業中心の生活を、嫌な顔一つせず、今日まで支えて頂きました。また、実父母と弟妹には、いつも弱音と愚痴を聞いてもらい、励まして頂きました。家族の精神面や生活面での支援がなければ、ここまで来ることは出来なかつたと思います。ありがとうございました。そして、今、お腹の中にいる約 150g の我が子には、数ヶ月にわたり無理をさせてしまったかもしれません。それでも耐えてくれてありがとう。

ここまで、多くの皆様に支えられて本研究を終えられたことに、改めて深い感謝の意を表します。今後は、ここをスタート地点だと思い、皆様に何か恩返しができるよう、模索の日々を送りたいと思います。また、今まで以上に広い視野をもって、フィールドを広げ、引き続き研究に邁進したいと思います。

引き続き、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

2021 年 2 月 17 日

---

学位论文公听会资料

2021/2/17

1



1



4



7



2



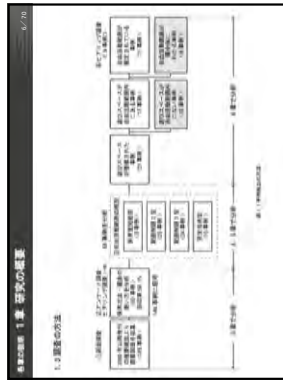
5



8



3



6



9

2021/2/17



10



11



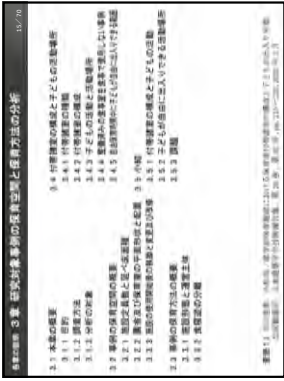
12



13



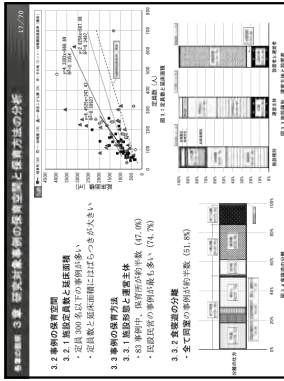
14



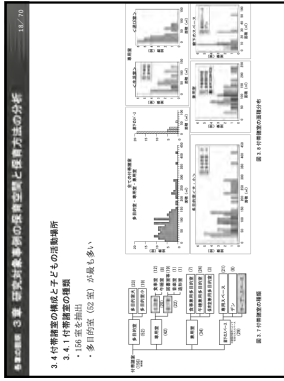
15



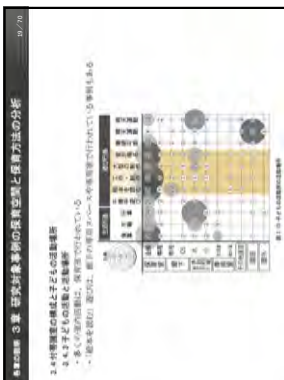
16



17



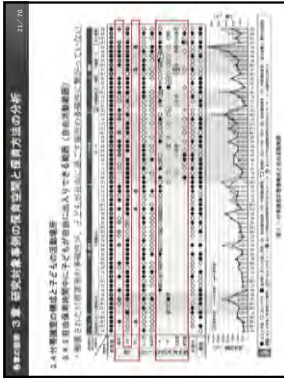
18



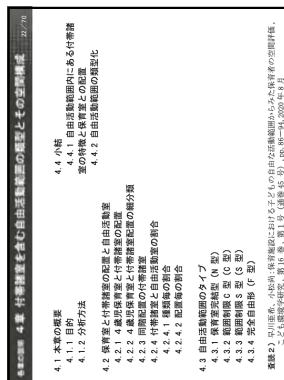
19



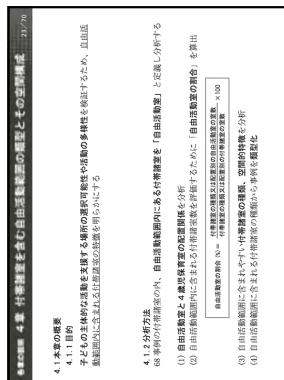
20



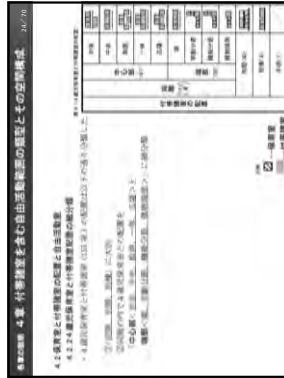
21



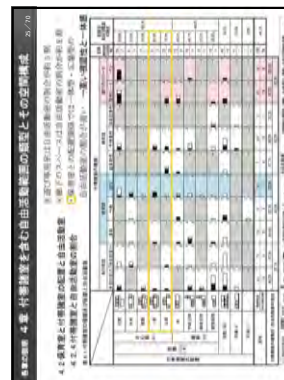
22



23



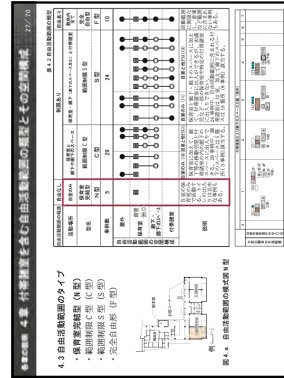
24



25

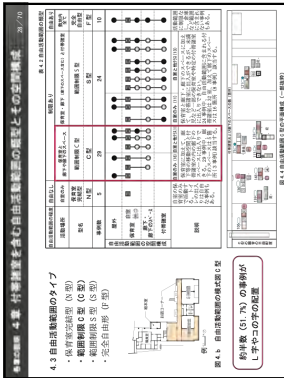


26



27

2021/2/17



28



31



34



29



32



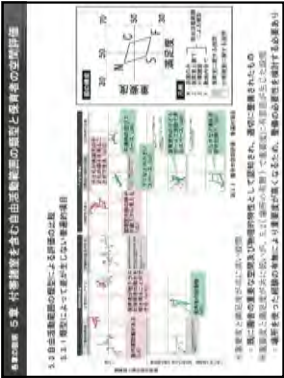
35



30



33



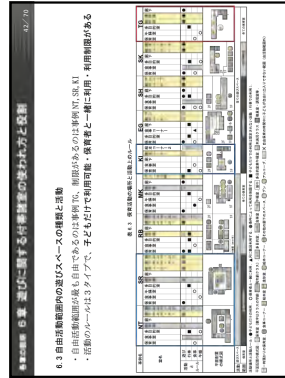
36

2021/2/17

5



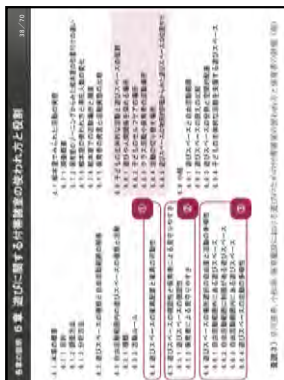
39



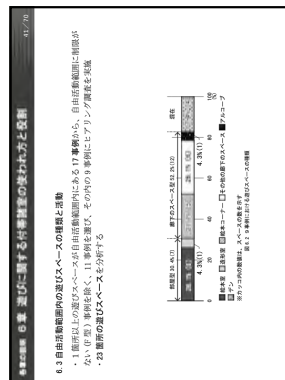
42



45



38



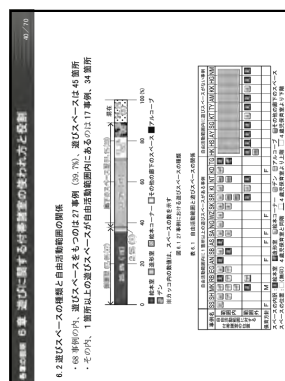
41



44



37

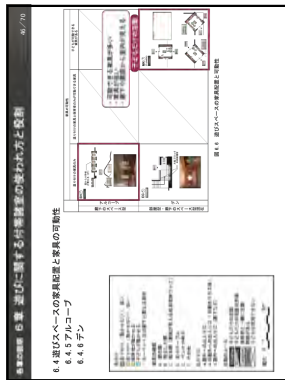


40



43

2021/2/17



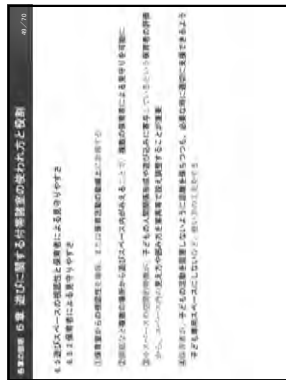
46



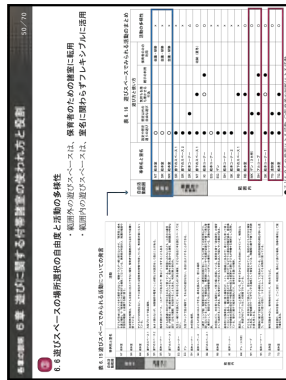
47



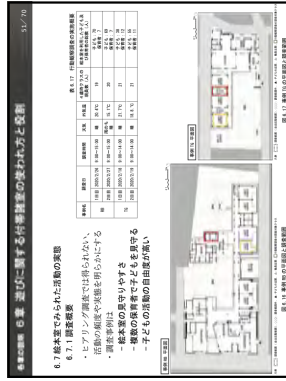
48



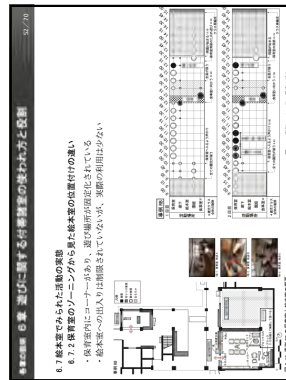
49



50



51



52



53



54

2021/2/17

7



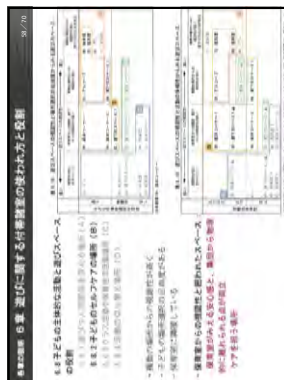
55



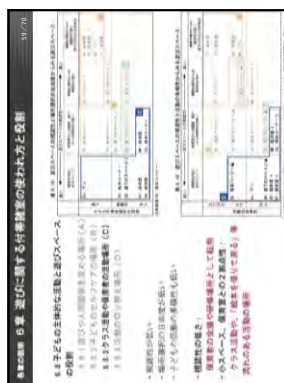
56



57



58



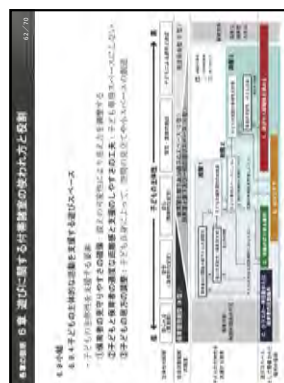
59



60



61



62



63

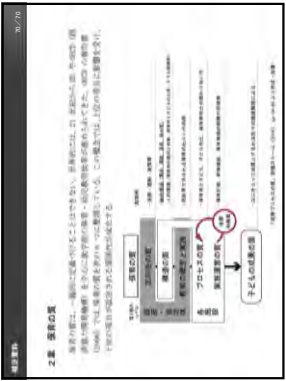
2021/2/17



64



67



70



65



68



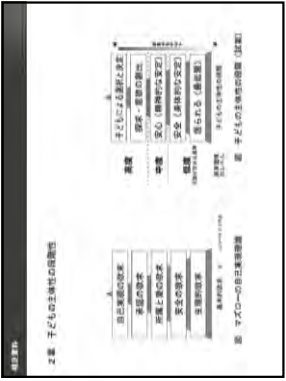
71



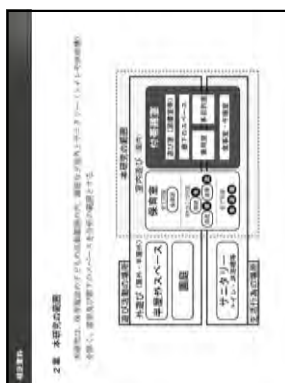
66



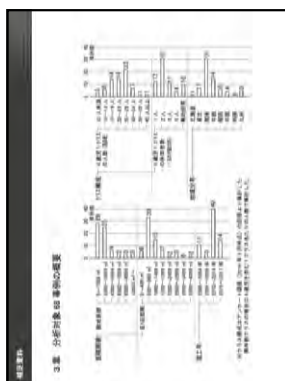
69



72



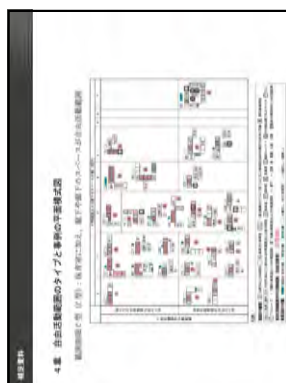
73



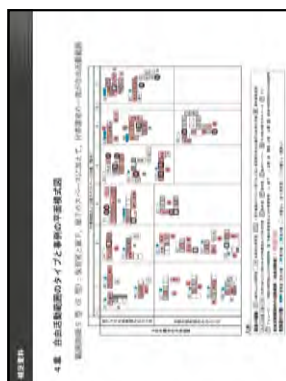
74



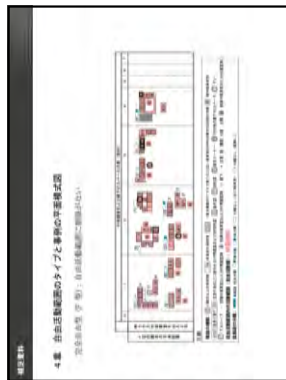
75



76



77



78



79



80



81

2021/2/17



82



83



84



85



86



87



88



89

---

既発表論文

## ■学術論文（査読付き）

### ・博士論文に関するもの

1. 早川亜希、小松尚：就学前保育施設における保育室付帯諸室の構成と子どもが出入り可能な活動場所，日本建築学会技術報告集，第26巻，第62号，pp. 215－220，2020年2月
2. 早川亜希、小松尚：保育施設における子どもの自由な活動範囲からみた保育者の空間評価，こども環境学研究，第16巻，第1号（通巻45号），pp. 86－94，2020年8月

### ・その他

3. 早川亜希、橋本雅好、佐藤将之：幼児の指示代名詞による域分節に関する実験的研究，日本建築学会計画系論文集 第76巻，第669号，pp. 2101-2107，2011年11月
4. 生田京子、早川亜希、橋本雅好、鶴飼昭年：改修によって形成される小規模な保育空間に関する分析－名古屋市グループ実施型家庭保育室の空間と使用の実態に関する研究，都市住宅学，95号，pp. 77-82，2016年10月
5. 早川亜希、橋本雅好、柄澤菜月：子どもの遊び場所と遊び方に影響を与える物理的要素の考察，こども環境学研究，第15巻，第2号（通巻43号），pp. 72－78，2019年8月

## ■口頭発表（博士論文に関するもの）

1. 早川亜希、小松尚：保育施設を取り巻く物理的および人的要素の関係に関する研究，日本建築学会東海支部研究報告書，第55号，pp. 517-520，2017年2月
2. 早川亜希、小松尚：建築雑誌に掲載された保育施設の運営団体と平面構成の傾向，日本建築学会学術講演梗概集（建築計画Ⅰ），pp. 439－440，2017年7月
3. 早川亜希、小松尚：就学前保育施設における多目的室及び専用室の種類と面積の傾向，日本建築学会学術講演梗概集（建築計画Ⅰ），pp. 15－16，2018年9月
4. 早川亜希、小松尚：保育施設における保育室に付帯した遊びスペースの使われ方と保育者による評価，日本建築学会学術講演梗概集（建築計画Ⅰ），2020年9月，大会中止のため梗概提出のみ



---

## 参考文献・論文リスト

## 参考文献

- ・川添登, 内田祥哉, 青木正雄, 中山克己, 加藤隆: 建築学体系 32 学校・体育施設, 彰国社, 1957. 7
- ・長倉康彦, 長沢悟, 上野淳, 小川信子, 渡邊昭彦: 新建築学大系 29 学校の設計, 彰国社 1983. 6
- ・Abraham H. Maslow, 小口忠彦 (訳): 改訂新版 人間性の心理学 Motivation and personality, 産業能率大学出版部, 1987
- ・笥和夫, 萩田秋雄, 吉田あこ, 加藤隆,: 新建築学大系 32 福祉施設。レクリエーション施設の設計, 彰国社, 1987. 11
- ・早田由美子: モンテッソーリ教育思想の形成過程, 勁草書房, 2003. 4
- ・藤原智美: 「子どもが生きる」ということ－ところが壊れる空間・育つ空間－, 講談社, 2003. 5
- ・ルドルフシュタイナー, 高橋 巖 (訳): 子どもの教育, 筑摩書房, 2003, 6
- ・小川信子: 子どもの生活と保育施設, 彰国社, 2004. 7
- ・OECD Organisation for Economic Co-operation and Development: Starting Strong II, OECD Publishing, 2006. 9
- ・佐藤学: 驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育, ワタリウム美術館編, 2011. 3
- ・レッジョ チルドレン, 田辺敬子他 (訳): 子どもたちの 100 の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録, ワタリウム美術館, 2012. 11
- ・小山望, 太田俊己, 加藤和成, 河合高鋭: インクルーシブ保育っていいね－一人ひとりが大切にされる保育をめざして, 福村出版, 2013. 4
- ・柴崎正行: 子どもが育つ保育環境づくり－園内研修で保育を見直そう－, 学研教育みらい, 2013. 4
- ・白石淑江, 水野恵子: スウェーデン保育の今－テーマ活動とドキュメンテーション, かもがわ出版, 2013. 7
- ・松本真理子, ソイリ ケスキネン: フィンランドの子どもを支える学校環境と心の健康－子どもにとって大切なことは何か, 明石書店, 2013. 9
- ・サライ美奈: ハンガリー たっぷりあそび就学を見通す保育－一人ひとりをたいせつにする具体的な保育－, かもがわ出版, 2014. 7
- ・定行まり子: 保育環境のデザイン－子どもの最善の利益のための環境構成－, 社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2014. 11
- ・Iram Sirai, Denise Kingston, Edward Melhuish, 秋田喜代美ら (訳): 「保育プロセスの質」評価ス

ケール，明石書店，2016. 2

- ・全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2016，ちいさいなかま社，2016. 8
- ・テルマ ハームス，リチャード M クリフォード，デビィ クレア，埋橋玲子（訳）：新・保育環境保育スケール①＜3歳以上＞，法律文化社，2016. 10
- ・高橋静子：学びを支える保育環境づくり，小学館，2017. 5
- ・全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2017，ちいさいなかま社，2017. 8
- ・新村出編：広辞苑第7版，岩波書店，2018. 1
- ・高橋節子：幼児教育のための空間デザイナーモンテッソーリ教育における建築・設備・道具一，風間書房，2018. 2
- ・仙田満：こどもを育む環境 蝕む環境，朝日新聞出版，2018. 4
- ・全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2018，ちいさいなかま社，2018. 8
- ・全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2019，ちいさいなかま社，2019. 8
- ・仲綾子，藤田大輔：保育園・幼稚園・こども園の設計手法，学芸出版社，2019. 7
- ・全国保育団体連絡会：保育研究所：保育白書 2020，ちいさいなかま社，2020. 8
- ・佐藤将之：心を育てる保育環境，小学館，2020. 8
- ・日本学術会議 子どもの生育環境分科会：我が国の子どもの生育環境の改善に向けて－生育空間の課題と提言 2020－，2020. 9

## 参考論文

- ・宮川英二，小谷喬之助，藤野則雄，山本信嘉：東京都における児童施設（保育園）について No. 1：措置児と私的契約児の割合、園児の男女の割合、年令、通園，日本建築學會研究報告，37，pp. 242-245，1956. 12
- ・浦良一，鈴木成文，日下あこ：保育内容とプランとの関係：保育所・幼稚園の研究，日本建築学会論文報告集，57. 2（0），pp. 105-108，1957.
- ・高橋博久：保育日課からみた共同保育所施設空間の使いこなしの傾向，日本建築学会大会学術講演梗概集，中国，pp. 5201，1977. 10
- ・小川信子，石井順子，斉藤幸：子保育所における生活と保育室の使われ方ー保育所の平面計画に関する研究（2），日本建築学会論文報告集，276，pp. 123-131，1979. 2
- ・高橋博久：建築計画研究の方法としての「使いこなし」研究の提案，日本建築学会東海支部研究報

告, , pp. 261-264, 1982. 2

- ・陣川桂三：子どもの主体性をどう評価するか，児童心理，第 544 巻，8 号，pp. 82-86, 1989. 7
- ・新井邦二郎：幼児の主体性の教師評定尺度の作成 1，筑波大学心理学研究，第 14 号，pp. 61-74, 1992
- ・無藤隆，倉持清美，柴坂寿子：園環境は子どもにとってどのような意味を持つか，日本保育学会保育学研究，31, pp. 13-122, 1993.
- ・新井邦二郎，宮腰養，後藤かつ：幼児の主体性の教師評定尺度の作成 2，筑波大学心理学研究，第 17 号，pp. 67-88, 1995
- ・佐藤将之，高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察—園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その 1，日本建築学会計画系論文集，562, pp. 151-156, 2002. 12
- ・北浦かほる，木下千絵，萩原美智子，木下恵津子：保育環境としてのこどもの生活空間の検討—夜間保育所の保育環境整備にむけて 2，日本建築学会計画系論文集，568, pp. 33-40, 2003. 6
- ・北浦かほる，萩原美智子：保育環境としての遊び空間のあり方—夜間保育所の保育環境整備にむけて 1，日本建築学会計画系論文集，563, pp. 139-146, 2003. 1
- ・山田あすか，上野淳，登張絵夢：保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察—保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集，580, pp. 57-64, 2004. 6
- ・北浦かほる，木下恵津子：夜間保育所の設置形態による建築計画の実態と平面の類型化—夜間保育所の保育環境整備にむけて 3，日本建築学会計画系論文集，575, pp. 37-45, 2004. 1
- ・井本佐保里，定行まり子，小池孝子：保育空間のセッティングと子どもの行為に関する研究，学術講演梗概集．E-1，建築計画 I, 5213, pp. 459-460, 2005. 7
- ・石垣文，REFUERZO Ben，小野田泰明：保育者の保育展開にみる環境構成要素の活用に関する事例的研究 アメリカにおいて，学術講演梗概集．E-1，建築計画 I, 各種建物・地域施設，設計方法，構法計画，人間工学，計画基礎，, pp. 209-210, 2005. 7
- ・山田あすか，上野淳，登張絵夢：園児の固有の活動場所の成立に影響する環境要素の分析—保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その 2），日本建築学会計画系論文集，587, pp. 49-56, 2005. 1
- ・西本雅人，今井正次，木下誠一：保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究，日本建築学会計画系論文集，601, pp. 47-55, 2006. 3
- ・吉田祥子，森傑：園児の協働による遊びから見た遊び環境と自主創造的遊びに関する研究，日本建

築学会計画系論文集, 609, pp. 25-32, 2006. 11

- ・ 山田あすか, 上野淳: 保育所における園児の居場所の反復性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 602, pp. 35-42, 2006. 4
- ・ 藤田大輔, 山崎俊裕: 幼稚園各室・空間における保育活動の時間的特性について, 日本建築学会計画系論文集, 599, pp. 203-208, 2006. 1
- ・ 宮本文人, 中尾友子: 幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間, 日本建築学会計画系論文集, 611, pp. 45-51, 2007. 1
- ・ 斎藤忠夫: 子どもの「居場所づくり」の可能性と課題, 稲田大学大学院文学研究科紀要, 52, pp. 121-129, 2007. 2
- ・ 定行まり子 (調査研究委員長): 機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業, 総合報告書, 社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2008
- ・ 正保正恵, 塩崎賢明: 保育制度転換期における認可保育所の生活保育と食寝分離の意義と実態—東京都と地方都市(岡山市・福山市)の調査を通して, 日本建築学会計画系論文集, 622, pp. 25-32, 2007. 12
- ・ 細谷俊子, 積田洋, 青木健三: 異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, 634, pp. 2565-2572, 2008. 12
- ・ 杉本範子, 大原一興, 藤岡泰寛: グルーピングが要養護児童の「居場所」に与える影響—児童養護施設における住環境に関する研究—その1, 日本建築学会計画系論文集, 73 (630), pp. 1691-1697, 2008. 8
- ・ 山田恵美, 佐藤将之, 山田あすか: 自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 74 (637), pp. 549-557, 2009. 3
- ・ 近藤ふみ, 定行まり子: 保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について, 日本建築学会計画系論文集, 74 (645), pp. 2371-2377, 2009. 11
- ・ 杉本範子, 大原一興, 藤岡泰寛: 小舎制児童養護施設における改修による子どもの達の居場所と交流への影響—児童養護施設における住環境に関する研究—その2, 日本建築学会計画系論文集, 74 (645), pp. 2339-2345, 2009. 11
- ・ 細谷 俊子, 積田 洋, 鶴崎 有: 保育園の室内遊びにおける異年齢交流と室内構成との相関分析, 日本建築学会計画系論文集, 74 (639), pp. 1029-1035, 2009. 5
- ・ 倉斗綾子, 山田あすか, 佐藤将之, 古賀誉章: 就学前保育施設の施設状況とその評価—全国保育施

- 設アンケート調査より一，日本建築学会技術報告集，第15巻、第31号，pp. 865-870, 2009. 10
- ・ 山田恵美，山田あすか，佐藤将之，：幼保一体型施設における活動の分布と規模変化に関する研究，日本建築学会計画系論文集，74（638），pp. 761-770, 2009. 4
  - ・ 山田恵美：保育における空間構成と活動の発展的相互対応 アクションリサーチによる絵本コーナーの検討，保育学研究，49（3），pp. 260-268, 2011. 12
  - ・ 高橋節子：子どもの発達のための環境とは何かー保育所における物理的環境の調査ー，発達研究，25, pp. 107-120, 2011.
  - ・ 汐見稔幸，村上博文，松永静子，保坂佳一，志村洋子：乳児保育室の空間構成と”子どもの行為及び保育者の意識”の変容，保育学研究，50（3），pp. 298-308, 2012. 12
  - ・ 境愛一郎：「境」としてのテラスは幼児にとってどのような場所であるのか，保育学研究，50（3），pp. 309-319, 2012. 12
  - ・ 金子嘉秀，境愛一郎，七木田敦：幼児の固定遊具遊びにおけるルールの形成と変容に関する研究，保育学研究，51（3），pp. 176-186, 2013. 12
  - ・ 西本雅人，河合慎介，今井正次：遊び行為の時期的変化からみた保育室におけるコーナーの利用特性 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集，78（688），pp. 1257-1264, 2013. 6
  - ・ 西村伸也，高橋鷹志，棒田恵，中村拓郎，神田結衣，小林勉，櫻井典子：時間・移動のズレを利用した生徒の行動特性 教科教室型中学校における授業間休みの生徒の居場所選択に関する研究1，日本建築学会計画系論文集，78（690），pp. 1743-1750, 2013. 8
  - ・ 西本雅人，河合慎介，今井正次：子どもの遊び行為の展開からみるコーナーを用いた保育スペースの構成 子どもの発達に伴うコーナー設定に関する研究 その2，日本建築学会計画系論文集，79（696）319-327, pp. 319-327, 2014. 2
  - ・ 高橋節子：モンテッソーリ保育所における物理的環境ー非モンテッソーリ保育所との比較による検討ー，日本建築学会技術報告集，第20巻第44号，pp. 207-212, 2014. 2
  - ・ 古賀政好，山田あすか：幼児・学齢期の障碍児の活動場面の成立に影響する環境構成要素の分析，日本建築学会計画系論文集，81（721），pp. 569-759, 2016. 3
  - ・ 清水肇：学童保育施設における過ごし方の多様性と空間構成 コーナーのある一室型施設における過ごし方の事例検討，日本建築学会計画系論文集，81（722），pp. 811-819, 2016. 4
  - ・ 吉川寿美：幼稚園における配慮の必要な子供への「居場所」作りを通じた個別支援の取り組み

- みー園での取り組みと外部機関での取り組みを通して，中村学園大学発達支援センター研究紀要，7, pp. 15-18, 2016. 3
- ・白川 賀津子， 定行 まり子：保育・教育思想に基づく保育施設の空間特性ーモンテッソーリ教育とハンガリーの保育実践を対象として，日本建築学会計画系論文集，82（734），pp. 877-884, 2017. 4
  - ・正田博之，山田あすか：就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究，日本建築学会計画系論文集，80（714），pp. 1765-1773, 2015. 8
  - ・小池孝子，定行まり子：都市部における保育施設の屋外保育環境について：東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究 その2，日本建築学会計画系論文集，73（628），pp. 1197-1204, 2008. 6
  - ・野中壽子，小泉大亮，穂丸武臣，張 琬婧：保育所における園庭と園外での外遊びの活動状況，発育発達研究，74, pp. 19-25, 2017.
  - ・稲葉直樹，佐藤将之：幼児の行動様態からみた保育空間の断面計画に関する考察，日本建築学会計画系論文集，754, pp. 2283-2290, 2018. 12
  - ・川井敬二，佐藤将之，野口紗生，船場ひさお：ドイツ・ミュンヘン市域における保育施設の音環境設計に関する視察調査，日本建築学会技術報告集，58, pp. 1135-1138, 2018. 10
  - ・藤井里咲，井本佐保里，柳澤壮一郎，西出和彦：大学内保育施設の整備手法に関する研究 全国の国立大学の事例から，日本建築学会計画系論文集，757, pp. 547-556, 2019. 3
  - ・西本雅人，河合慎介，今井正次，日比野拓：内装木質化の保育室に関する保育者による評価 保育室の内装木質化による保育への効果に関する研究，日本建築学会計画系論文集，756, pp. 355-363, 2019. 2
  - ・徐華，小林美紀：小規模な保育園における室内での行動特性と空間分布に関する研究，日本建築学会計画系論文集，760, pp. 1383-1392, 2019. 6
  - ・富田隆太，井上勝夫：鉄道高架下保育施設を対象とした音と振動に関する保育士へのアンケート調査，日本建築学会技術報告集，59, pp. 211-214, 2019. 2
  - ・野口紗生，上野佳奈子：保育室に求められる吸音性能に関する現場実験，日本建築学会技術報告集，60, pp. 719-723, 2019. 6
  - ・古川雄，石垣文，佐藤 将之，角倉英明：就学前保育施設の環境多様型園庭における園庭環境に関する事例研究：環境要素の特色と園庭環境の評価を通じて，日本建築学会中国支部研究報告集 日本建築学会中国支部 編，42, pp. 583-586, 2019. 2

## 資料編

---

資料 1.1 「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関するアンケート調査」 調査票

資料 1.2 「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関するアンケート調査」 結果報告書

資料 1.3 アンケート配布事例の収集図面と施設概要一覧 68 事例

資料 1.4 ヒアリング調査結果と事例概要（第 3 章 研究対象事例の保育空間と保育方法（3.4.4））

- 1) 事例 11, 2) 事例 36, 3) 事例 76, 4) 事例 85, 5) 事例 88, 6) 事例 100,
- 7) 事例 130

資料 1.5 ヒアリング調査結果と事例概要（第 6 章 保育室に付帯する遊びスペースの役割）

- 1) 事例 11・SH, 2) 事例 19・MK, 3) 事例 20・RB, 4) 事例 35, EG, 5) 事例 85・SK,
- 6) 事例 89・SR, 7) 事例 90・KI, 8) 事例 94・NT, 9) 事例 137・TG,

## 資料 1.1 「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関するアンケート調査」調査票

平成 30 年 6 月 10 日  
名古屋大学大学院環境学研究科  
博士課程後期 早川亜希

施設長様

就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関する  
アンケート調査への協力のお願い

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

現在、私は大学院の博士課程において、乳幼児の健やかな育ちを支える幼稚園・保育所・子ども園他、子どものための就学前保育施設（以下、保育施設）を対象に、より良い保育の環境を構成するために「保育実践の場において建築空間がどのようにあるべきか」という視点から調査・研究を進めております。今回の調査では、2000 年以降に園舎を新設された施設の中から、建築分野において一定の評価を得ている施設を対象にアンケート調査を実施しております。

つきましては、ご多用中大変不様なお願いですが、是非アンケートのご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

恐れ入りますが、同封のアンケート用紙にご記入の上、7 月 10 日までにご返信下さいますよう、何卒よろしくお願いいたします。

敬具

記

1. 同封書類

- ・アンケート回答用紙一式
- ・貴園の雑誌掲載時図面（別紙アンケート添付）
- ・返信用封筒（切手不要）

2. アンケートの回答方法について

本アンケート調査は、貴園の現状とお考えについて以下の 4 点をお伺いします。

- 1) 貴園の基本情報について
  - 2) 保育・幼児教育に対する方針
  - 3) 保育と建築空間の関係
- 別紙) 園舎建設時と現在の変更点

以上

問い合わせ先

<担当者>早川 亜希

名古屋大学大学院 環境学研究科  
都市環境学専攻 建築学コース  
小松研究室 博士課程後期

e-mail: hayakawa13a@gmail.com ☎: 090-6573-3609  
〒464-8603 名古屋市中種区不老町 ES 総合館 5 階 510 室

## 就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関する アンケート調査票

お忙しい中、お時間を取って頂き誠にありがとうございます。

本アンケートは日本全国の保育施設より、先進的な取り組みをされていると考えられる  
148 園の保育施設へお配りしているものです。是非、率直なご意見をお聞かせください。

なお、本調査で得られた全ての情報は研究目的のみで使用します。

### <本アンケートの回答方法について>

#### i. アンケート目次

1) 貴園の基本情報について 2) 保育・幼児教育に対する方針 3) 保育と建築空間の関係

#### ii. 回答者について

可能であれば4歳児をご担当の保育士及び幼稚園教諭の有資格者の先生、又は、園全体の様子を  
把握されている主任の先生にお答え頂けますと幸いです。

一部、法人や運営者への問い合わせが必要になる設問（▶）があります。回答が難し場合は、飛  
ばしていただいて構いません。

#### iii. 回答における注意点

①年齢別クラスの施設は、4歳児クラスについてお答えください。

②特別に記載がない限り、設問は貴園に該当する全ての回答を選択してください。

③本アンケートでは、「子ども」とは3歳児以上を指し、「保育者」とは保育士及び幼稚園教諭等  
の有資格者を示すこととします。

#### iv. 所要時間 30 分程度

#### v. その他のお願い

以下2点の資料について、宜しければ本アンケートと同封しご提供ください。

◎同封の平面図（別途、設問があります）

◎貴施設のパンフレット等、施設の様子や配置図がわかる資料

#### vi. 返信期限 **2018年7月10日（火）** までに同封の封筒にて返信ください。

その他、不明な点などありましたら、下記の問い合わせ先へご連絡ください。

#### vii. 問い合わせ先

早川 亜希（はやかわ あき）

名古屋大学大学院 環境学研究科 都市環境学専攻 建築学コース

小松研究室 博士課程後期 e-mail: hayakawa13a@gmail.com ☎: 090-6573-3609

〒464-8603 名古屋市千種区不老町 ES 総合館 5 階 510 室

## 0) 本調査の今後について

▶◎8月以降に一部の施設に対し追調査を計画しています。現在のお気持ちを教えてください。

1. 追加アンケート（紙面）／2. 追加アンケート（Web・インターネット）／3. メールでの問い合わせ  
4. 訪問／5. ヒアリング（1時間程度）／6. 観察（1日～数日）／7. 応相談／8. 追調査には応じない  
9. その他（ ）

※4.～6.の追調査は事前に日程や時間のご都合を伺い、保育に支障のない範囲でご相談させていただきます。

◎以下に、メールアドレスを記入していただいた方には、本調査の一次集計結果をお送りする予定です。

お名前	メールアドレス

問1 本アンケートを主に回答して下さる方について伺います。

回答者の役職又は担当クラスの学齢 職、または 歳児クラス	回答者の保育暦（累計） 年	他園（同法人内含む）のご経験 園（現在の施設を除く）
---------------------------------	------------------	-------------------------------

## 1) 貴園の基本情報について

問2 施設形態について、該当するもの1つに○を記してください。

1. 保育所／2. 幼稚園／3. こども園（幼保連携型）／4. こども園（幼稚園型）／5. こども園（保育所型）  
6. こども園（地方裁量型）／7. 特定地域型保育事業／8. その他（ ）

問3 運営形態について教えてください。

3-1. 該当するもの1つに○を記してください。

1. 公設公営／2. 公設民営／3. 民設民営／4. その他（ ）

3-2. 前問で2. 3. と回答した、民営施設の方にお聞きします。運営主体を教えてください。

1. 学校法人／2. 社会福祉法人／3. 株式会社／4. 個人／5. その他（ ）

▶問4 施設規模（定員数・園舎の面積・職員数等）を教えてください。

4-1. 貴園の定員数、現員数を教えてください。

定員数（合計）	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
名	名	名	名	名	名	名
現員数（合計） H30年6月現在	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
名	名	名	名	名	名	名

4-2. クラス数を教えてください。

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
クラス	クラス	クラス	クラス	クラス	クラス

4-3. 貴園の職員数と1クラスあたりの子ども・保育者の人数を教えてください。教えてください。

職員数（合計） H30年5月現在	1クラスの単位（年齢別クラスの場合は4歳児クラスを記入）
名（内、非正規雇用 名）	子ども 名、保育者 最多時 名・最少時 名

4-4. 貴園の保育室（クラスルーム）と子どもの学齢の関係について、最も近い使い方を1つ選択してください。

1. 毎年子どもの学齢が上がると使用する保育室が変わる／2. 毎年子どもの学齢が上がっても使用する保育室は固定である  
3. 保育室（ホームルーム）という考え方はない／4. わからない／5. その他（ ）

## 2) 保育・幼児教育に対する方針と実態

問5 平時のクラス構成を教えてください。

1. 異年齢保育（内訳： 歳児～ 歳児）／2. 年齢別保育／3. 時期や内容によって変化  
4. その他（ ）

問6 保育の方法について、貴園で取り入れているものを○、参考にしているものを◎で示してください。

1. シュタイナー教育／2. モンテッソーリ／3. イエナプラン／4. 森のようちえん／5. ハンガリー（マイハ）  
6. レッジョエミリアアプローチ／7. フレーベル／8. 園独自／9. その他（ ）

問7 1日の保育の大まかな流れとして、4歳児の5月の晴天時のクラス日課を教えてください。  
また、日課の中でクラスで一斉に行う活動を○で記してください。

時間	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
日課（活動名）										

回答例

時間	8	9
日課（活動名）	登園した子から自由遊び	朝の集まり → 一斉の活動例

## 問8 現在の保育と部屋・スペースの使い方について教えてください。(学齢別クラスの場合は4歳児を対象)

## 8-1. 保育室の使い方…最も近いものを1つ選択してください。近いものが無い場合は4. その他に示してください。

※選択肢3. は一般的な1保育室内のコーナー保育の意ではなく、異年齢保育をおこなっている施設で見られる形です。

1. 保育室1室に1クラス

2. 保育室1室に複数クラス

3. 活動内容毎の部屋や場所を園全体で設える  
(ホームルームがない場合を含む)

4. その他 具体的に記入してください

## 8-2. 遊びの設え…最も近いものを1つ選択してください。(運動と排泄行為(トイレ)以外を対象)

1. 保育室内には常設の遊びコーナーが幾つかあり、基本的に室内の活動は保育室で行っている(運動・排泄活動を除く)
2. 保育室内には遊びコーナーは作らず、活動毎に道具や素材を用意し保育室全体で活動できるようにしている
3. 保育室の遊びコーナーの他に廊下に遊びコーナーやスペースがあり一体的に使っている
4. 保育室の遊びコーナーの他に特定の遊び(運動を除く)のための専用室があり、遊びに合わせて使い分けている
5. 保育室(遊びコーナーなし)の他に廊下に遊びコーナーやスペースがあり一体的に使っている
6. 保育室(遊びコーナーなし)の他に特定の遊び(運動を除く)のための専用室があり、遊びに合わせて使い分けている
7. 広い保育室や施設全体を特定の遊びの専用室やスペースごとに領域を分け、保育を行っている
8. その他 ( )

## 8-3. 食寝遊の分離…「食寝遊の分離」とは食事・午睡・遊びの各行為を行う領域を分ける考え方のことです。最も近いものを1つ選択してください。

1. 食寝遊の3つの行為を、同室で行っている
2. 食寝遊の3つの行為を、同室で行っているが、使う場所を分けている
3. 食寝遊の3つの行為を、同室で行っているが、時間差を利用し分けている
4. 「食」を別室で行い「寝と遊」は同室で行っている / 5. 「寝」を別室で行い「食と遊」は同室で行っている
6. 「食と寝」を別室で行い「遊」は保育室で行っている / 7. 食寝遊の分離は必要ない
8. その他 ( )

## 8-4. 自由遊びの時間の活動範囲…自由遊びの時間に子どもが自由に活動できる範囲を全て選んでください。

※問10で詳細を伺います

1. 保育室 / 2. 一部の廊下 / 3. 全ての廊下 / 4. 廊下のコーナー / 5. 廊下の小スペース / 6. 室内運動場
7. トイレ / 8. 遊戯室以外の専用室 / 9. 半屋外スペース(テラスなど) / 10. 園庭 / 11. その他 ( )

## 8-5. 活動範囲の制限の方法…8-4. で選択した自由遊びの時間の活動範囲をどのように制限していますか。取り入れている方法を全て選択してください。

1. 出入り口(玄関を除く)の鍵を施錠するなど物理的に子どもが範囲外へ出られないように管理をしている
2. ドアや可動式の間仕切り壁によって物理的に範囲を仕切っている
3. 背の低い家具や物を置くなど子どもの視線は通る状態で、物理的な障害を設置している
4. 床に線を引いたり床の素材の違いを利用して範囲を明示している
5. マークや掲示板などで範囲を指示するルールを取り入れている
6. 保育者や子ども同士の声掛けでルールを知らせている / 7. その他 ( )

## 問9. 1. ~11. に示す作業を、誰が(A) おこなうか教えてください(該当作業がない場合は空欄)。項目に無い作業で「子どもがおこなう作業」(遊び以外)があれば12. に追記してください。

作業の種類	A. 誰が ※該当する選択肢全てに○をつけてください。				
	クラスの主任 担当保育者	補助的役割 の保育者	子ども 担当制	子ども 自主制	子ども 全員
0. 室内用遊具の出し入れ		○	○		
1. 室内用遊具(ブロックなど)の出し入れ					
2. 制作に使用する材料・道具の出し入れ					
3. 保育室内の机・椅子の移動や準備					
4. 昼食用の机・椅子の移動や準備					
5. 配膳(ご飯を装う、お茶を注ぐ)					
6. 下膳(食器を片付ける)					
7. 午睡用の布団(ベッド)の準備					
8. 園庭用遊具の出し入れ					
9. 保育室内の掲示物の変更					
10. 保育室内コーナーの設え変更					
11. 保育室内の家具配置の変更					
12.					

回答例

### 3) 保育と建築空間の関係

問10 貴園に現在ある部屋・スペースについて伺います。

10-1. 部屋・スペースの有無…既にある部屋・スペースを○、欲しいと思う部屋・スペースを◎で示してください。

1. クラスの保育室 / 2. 保育室内の専用スペース（ままごとコーナーなど） / 3. 保育室内のデンや小スペース  
 4. 廊下 / 5. 廊下の専用スペース（絵本コーナーなど） / 6. 廊下の多目的に利用できるオープンスペース  
 7. 保育室外のデンや小スペース / 8. 子ども用のロッカー室 / 9. 室内運動場 / 10. 多目的室 / 11. ランチ室  
 12. 図書・絵本室 / 13. 音楽室 / 14. アトリエ・造形室 / 15. 午睡室 / 16. 子ども用キッチン / 17. 倉庫（納戸）  
 18. 和室 / 19. 空室 / 20. 地域共有スペース / 21. 子育て支援室 / 22. 半屋外スペース（テラスなど） / 23. 園庭  
 24. 屋上園庭 / 25. 菜園 / 26. 職員用の休憩室 / 27. 素材の管理・保管室 / 28. 教材の作成・保管場所  
 29. その他専用室（ ） / 30. 併設の施設（ ） / 31. その他（ ）

10-2. 兼用室・スペース、複数ある室・スペース …1つの部屋・スペースで兼用する用途（室名）や同名の部屋が複数ある場合に回答してください。

兼用室・スペース	名称（例：ランチ室兼遊戯室）		兼用の用途や機能（例：昼食・おやつと室内運動）	
複数ある室・スペース	名称	用途	室・スペース数	使い分け方法（例：学年ごとなど）

問11 次に挙げる活動について、活動参加の形態（A）現状の活動場所（B）、理想の活動場所（C）を下の選択肢から全て選んでください。（18.～20. 以外の活動は平時の活動として回答してください。）

回答例	A. 参加 B. 現状 C. 理想			A. 参加 B. 現状 C. 理想			A. 参加 B. 現状 C. 理想			B. 現状 C. 理想																							
	0. 自由遊び	1. 登園時の受け入れ (バス登園を除く)	2. 朝の集まり	3. 軽い運動	4. 晴天時の運動	5. 雨天時の運動	6. 着替え	7. 昼食	8. おやつ	9. 午睡	10. 午睡時の遊び場所	11. 本を読む	12. 制作活動	13. 巨大な制作活動	14. 子どもの制作物の展示	15. 1日以上片付けなく 良い遊び(園外・ブロックなど)	16. 音が出る活動	17. 散歩の準備	18. 誕生日会	19. 発表会	20. 運動会	21. 食育活動	22. 配慮が必要な子どもの対応	23. 子どもへの個別指導	24. 保護者との面談	25. 保育者の休憩	26. 保育者による制作活動	27. 教材の管理・保管	28. 素材の管理・保管	29. 保育者の打ち合わせ	30. 地域住民との交流	31. 研修	32. その他 ( )

※1.～21. Aの回答欄

- A. 参加形態の選択肢  
 a. 園全体で合同 / b. 同学年で合同  
 c. 1クラス毎に一緒に活動する  
 d. 参加の順番を保育者が決める  
 e. 参加の順番を子ども同士が決める  
 f. 子どもの意思で自由に活動する  
 g. その都度 / h. 流動的  
 i. わからない  
 j. その他（具体的に記してください）

- B・C 場所の選択肢  
 ア. クラスの保育室 / イ. 保育室内の専用スペース（ままごとコーナーなど）  
 ウ. 保育室内のデンや小スペース / エ. 保育室前の廊下  
 オ. 廊下の専用スペース（絵本コーナーなど） / カ. 廊下のオープンスペース  
 キ. 保育室外のデンや小スペース / ク. ロッカー室 / ケ. 室内運動場  
 コ. 多目的室 / サ. ランチ室 / シ. 図書・絵本室 / ス. 音楽室  
 セ. アトリエ・造形室 / ソ. 午睡室 / タ. 子ども用キッチン  
 チ. 倉庫（納戸） / ツ. 和室 / テ. その他専用室 / ト. 空室  
 ナ. トイレ / ニ. 地域共有スペース / ノ. 子育て支援室  
 ネ. 半屋外スペース（テラスなど） / ハ. 園庭 / ヒ. 屋上園庭 / ヒ. 菜園  
 フ. 玄関及び周辺 / ヘ. 職員室（事務所） / ホ. 園外の場所や施設  
 マ. 特定の場所はない / ミ. 施設内の安全が確保された全ての場所  
 ム. 活動自体をしない / メ. 必要ない / モ. その他（具体的に記入してください）

問12 自由遊び中に子どもが自由に出入り、使用できる部屋・スペースを選択肢より全て選んでください。

- ア. 自分のクラスの保育室 / イ. 3歳以上児の他クラスの保育室 / ウ. 未満児クラスの保育室 / エ. 保育室前の廊下  
 オ. 廊下の専用スペース（絵本コーナーなど） / カ. 廊下の多目的に利用できるオープンスペース  
 キ. 保育室外のデンや小スペース / ク. ロッカー室 / ケ. 室内運動場 / コ. 多目的室 / サ. ランチ室  
 シ. 図書・絵本室 / ス. 音楽室 / セ. アトリエ・造形室 / ソ. 午睡室 / タ. 子ども用キッチン / チ. 倉庫（納戸）  
 ツ. 和室 / テ. その他専用室 / ト. 空室 / ナ. トイレ / ニ. 地域共有スペース / ノ. 子育て支援室  
 ネ. 半屋外スペース（テラスなど） / ハ. 園庭 / ヒ. 屋上園庭 / ヒ. 菜園 / フ. 玄関及び周辺 / ヘ. 職員室（事務所）  
 ホ. 園外の場所や施設 / マ. 素材の管理・保管室 / ミ. その他（ ）

問 13 保育のための園舎空間にあるべきだと考える空間的配慮（1～37）、設計者の働きかけ（38～45）の満足度と重要度を教えてください。項目毎に、現状の状態への満足度（A）、建築空間の理想的なあり方としての重要度（B）を1つずつ選んで○印をつけてください。  
（該当する場所がない場合はB、重要度のみお答えください）

	A. 現在の状態への満足度				B. 保育をおこなう空間の理想的なあり方としての重要度			
	満足	まあ満足	満足でない あまり	満足でない	重要	まあ重要	重要でない あまり	重要でない
<b>13-1. 保育室内について</b>								
<b>回答例</b> 0. 部屋の形状	1	2	3	④	1	②	3	4
1. 部屋の形状	1	2	3	4	1	2	3	4
2. 柱や床材・床高による活動領域の区切りやすさ	1	2	3	4	1	2	3	4
3. 保育者や子どもが制作した物を掲示・展示するスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
4. 周囲と明るさや床材、天井高など雰囲気異なるスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
5. 子ども数名が身を隠せるようなデンなどの小さなスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
6. 子ども数名が集中して活動できるよう区切られたスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
7. 子どもが一人だけで活動できる机やスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
8. ロフトなど視線の高さが異なるスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
9. ゴロゴロと横になれるカーペットや畳敷きのスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
10. 制作材料や道具は子どもが自由に手に取れるよう収納されている	1	2	3	4	1	2	3	4
11. 子どもが保育室全体を見通すことができる	1	2	3	4	1	2	3	4
12. 保育者が保育室全体を見通すことができる	1	2	3	4	1	2	3	4
13. 子どもが他クラスの活動を覗き見ることができる	1	2	3	4	1	2	3	4
14. 子どもが未満児の子どもの様子を見ることができる	1	2	3	4	1	2	3	4
15. 保育者が他クラスの保育者の動きを覗き見ることができる	1	2	3	4	1	2	3	4
<b>13-2. 廊下について</b>								
16. 多様な用途に利用できるスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
17. 専用のコーナー（絵本コーナーなど）	1	2	3	4	1	2	3	4
18. 子ども数名が身を隠せるようなデンなどの小さなスペース	1	2	3	4	1	2	3	4
19. 保育者や子どもが制作した物を掲示・展示する場所がある	1	2	3	4	1	2	3	4
20. ベンチや壁の窪みがあり滞在を促す仕掛けがある	1	2	3	4	1	2	3	4
21. 回廊状に周遊できる	1	2	3	4	1	2	3	4
22. 保育室と一体的に使えるよう間仕切りを容易に撤去・設置できる	1	2	3	4	1	2	3	4
<b>13-3. その他の部屋について</b>								
23. 職員室（事務室）から園庭が見える	1	2	3	4	1	2	3	4
24. 多様な用途に利用できる使い方を限定しない部屋	1	2	3	4	1	2	3	4
25. 屋内運動場（遊戯室）がある	1	2	3	4	1	2	3	4
26. 特定の遊びや活動のための専用室がある（屋内運動場を除く）	1	2	3	4	1	2	3	4
27. 調理室の調理の様子が廊下から見える	1	2	3	4	1	2	3	4
28. 周り明るさや床材、天井高などが異なる雰囲気の部屋がある	1	2	3	4	1	2	3	4
29. 保育者と子どもが一对一で話すための小部屋がある	1	2	3	4	1	2	3	4
30. 地域住民が気軽に立ち寄れる部屋やスペースがある	1	2	3	4	1	2	3	4
<b>13-4. 部屋を限定しないスペースや機能について</b>								
31. 数日間、片付けずに継続した遊びを展開できるスペースがある	1	2	3	4	1	2	3	4
32. 家具や間仕切りが容易に動かせる	1	2	3	4	1	2	3	4
33. 部屋の広さや形状を容易に変更できる仕組みがある	1	2	3	4	1	2	3	4
34. 午睡時に一部の子どもが利用できる遊びスペースがある	1	2	3	4	1	2	3	4
35. 段差のない床・バリアフリーである	1	2	3	4	1	2	3	4
36. 保育者の動線が短いこと	1	2	3	4	1	2	3	4
37. 主導線とは別に保育者専用の副動線がある	1	2	3	4	1	2	3	4
<b>▶ 13-5. 園舎の教材価値と設計者の役割について ※計画・建設時点（過去）についてお答えください</b>								
38. 設計者と保育者が会する勉強会やワークショップ	1	2	3	4	1	2	3	4
39. 第三者（大学教員など）を交えた勉強会やワークショップ	1	2	3	4	1	2	3	4
40. 設計者から保育者へのデザインや使い方の説明	1	2	3	4	1	2	3	4
41. 子どもが園舎のデザインや空間を知ったり話し合う機会を設けた	1	2	3	4	1	2	3	4
42. 建設の様子を子どもに見学させた	1	2	3	4	1	2	3	4
43. 園舎の一部（窓や壁など）に子どもの制作物を活用した	1	2	3	4	1	2	3	4
44. 園舎の一部や園庭（遊具を含む）の施工に子どもを参加させた	1	2	3	4	1	2	3	4
45. 園舎の一部や園庭（遊具を含む）の施工に保護者を参加させた	1	2	3	4	1	2	3	4
46. その他 （ ）	1	2	3	4	1	2	3	4

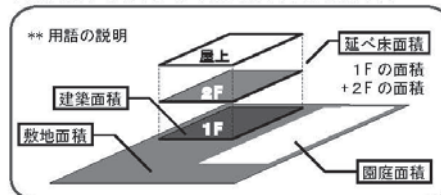
## 別紙) 園舎建設時と現在の変更点

アンケート別紙

- ▶ 問 a. 貴園の敷地、園舎の面積について教えてください。  
用語の意味がわからない場合は、右下の図「用語の説明」をご確認ください。

敷地面積 **	m <sup>2</sup>	園庭面積 **	m <sup>2</sup>	建物の階数
建築面積 **	m <sup>2</sup>	延べ床面積 **	m <sup>2</sup>	階建て建物の 階 ～ 階部分

※ 各数値については、実施設計図面等に記載がありますが、お分かりになる範囲内でご記入下さい。不明な場合は、空欄で結構です。



- 問 b. 建築雑誌掲載時の平面図（本紙）と、現在で用途（室名）の比較について伺います。  
以下に記入いただくか、図面上に直接書き込みください。

b-1. 雑誌掲載時の平面図と現在の用途（室名）が変更された部屋・場所がある場合は以下に記入してください。

雑誌掲載時の用途（室名）	現在の用途（室名）	用途が変更した時期	用途を変更した理由
回答例 遊戯室	➡ 5歳児保育室	2年前から	受け入れ人数が増えたため
雑誌掲載時の用途（室名）	現在の用途（室名）	用途が変更した時期	用途を変更した理由
➡	➡		
雑誌掲載時の用途（室名）	現在の用途（室名）	用途が変更した時期	用途を変更した理由
➡	➡		
雑誌掲載時の用途（室名）	現在の用途（室名）	用途が変更した時期	用途を変更した理由
➡	➡		

b-2. b-1の変更は何回行われましたか。最も多いものを対象にお答えください。

1. 0回（変更なし）／ 2. 1回／ 3. 2回／ 4. 3回以上／ 5. 毎年／ 6. わからない  
7. その他（ ）

- ▶ 問 c. 竣工後、部屋の用途以外に変更・改修・追加工事を行った箇所があれば教えてください。

自由記述

- ▶ 問 d. 貴園を計画するにあたり、参考にした他施設があれば施設名・所在地を教えてください。

施設名 所在地（都道府県・市町村）

- 問 e. 保育施設の園舎や空間と「保育の質」についてご意見・ご感想があれば是非聞かせください。

自由記述

質問は以上です。先生方の貴重なお時間を頂戴しありがとうございました。

資料 1.2 「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間に関するアンケート調査」結果報告書

「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間」に関する  
アンケート調査報告書

＜作成者＞早川 亜希

名古屋大学大学院  
環境学研究科 都市環境学専攻小松研究室 博士課程後期  
E-mail: hayakawa13a@gmail.com

## 1. 研究の概要

### 1-1. 調査方法

保育施設の多様な環境条件（食寝遊の分離、保育方法、活動と場所、子供が自由に活動できる範囲）を整理し、保育・幼児教育の質を向上するための要点を明らかにするために以下の通りアンケート調査を実施した。

アンケート対象施設は、2000年以降に竣工された保育施設（保育所・幼稚園・こども園）で建築図書が入手できる事例として建築雑誌等に掲載された事例を抽出し、アンケート票を郵送にて配布した。

### 1-2. 調査期間

2018年6月10日～8月20日

### 1-3. 回収状況

調査対象148事例のうち、83事例より回答を得た。回収率は56.1%であった。

## 2. アンケート集計結果

返送されたアンケートを単純集計した結果を以下に示す。一部設問については、回答者個人の属性や建築情報に関わる設問であるため報告が不要であると判断したり、単純集計による報告が困難であるため、そのような設問の回答については報告を省略させていただく。省略した問は、問1：アンケート回答者の属性・経験年数、問7：4歳児の日課、問12：自由に子どもが出入り・使用できる部屋、別紙a：延べ床面積、敷地面積等、別紙d：参考にした他事例である。

### 2-1) 施設の基本情報

#### 問2. 施設形態について（1つ選択）

#### 問3. 運営形態について（1つ選択）

回答を得た事例の内訳を図1に示す。施設形態は、保育所39事例（47.0%）、幼稚園18事例（21.7%）、こども園25事例（30.1%）である。運営主体は、公営が16事例（19.3%）、社会福祉法人が32事例（38.6%）、学校法人が27事例（32.5%）である。

#### 問4. 施設規模（定員数・現員数など）について（記述）

施設の定員数と現員数及び1クラスあたりの人数を度数分布で示す（図2）。1クラスあたりの人数では、主に4歳児クラスを対象とし、異年齢保育を行っている施設では4歳児を含むクラスを対象とした。1クラス単位は25-29名がもっとも多く、10名-29名の間に全体の8割（84.0%）の事例が該当している。

#### 問4-4. 保育室と子どもの学齢の関係について（1つ選択）

1年経過毎に子どもの学齢が上ることと保育室の利用の関係（図3）では、毎年「学齢が上がる毎に保育室が変わる」事例が62事例（74.7%）である。子どもの学齢が上がっても保育室は「変わらない」事例は11事例（13.3%）であった。

### 2-2) 保育・幼児教育に対する方針と実態

#### 問5. 平時のクラス構成（1つ選択）

クラス構成（図4）は、49事例（59.0%）が年齢別クラス、

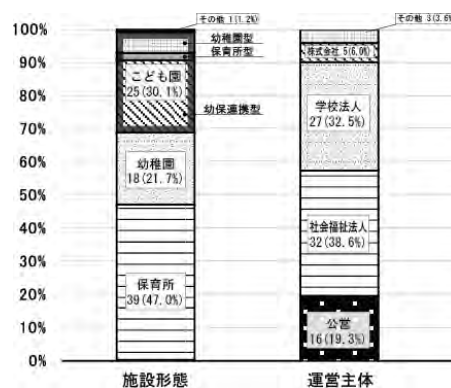


図1 施設形態と運営主体

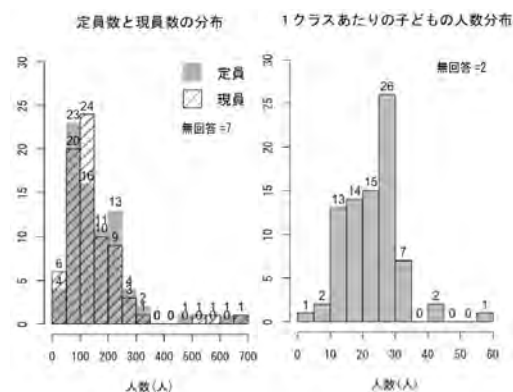


図2 定員・現員数と1クラスあたりの人数

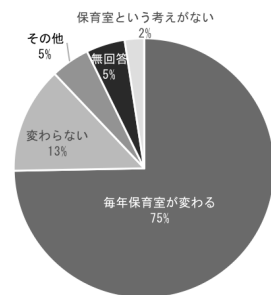


図3 保育室と子どもの学齢

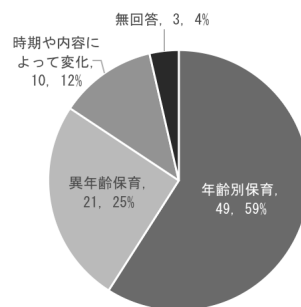


図4 クラス構成

21事例（25.3%）が異年齢クラスであった。また、10事例（12.0%）は時期や保育内容によって学齢別クラスと異年齢クラスなどのクラス編成が変更すると回答した。

問6. 保育方法についてく取り入れているもの>(1つ選択)

※く参考にしているものについては回答数が少ないため省略する

保育の教育法（図5、複数回答）は、55事例（57.9%）が「園独自」と回答し、モンテッソーリ6事例（6.3%）、シュタイナー教育・森のようちえん・マイハは各2事例（2.1%）であった。

問8-1. 保育室の使い方について（1つ選択）

保育室とクラス単位の使い方（図6）では、「1保育室を1クラスで活用する」事例が59事例（71.1%）であり、「1保育室をn(複数の)クラスで活用する」事例は10事例（12.0%）である。「活動毎に部屋や場所を設ける（クラスルームという概念がない施設を含む）」事例は9事例（10.8%）であった。

問 8-2. 遊びの設えについて (1つ選択)

遊び場所の設え（図7）は、保育室のみを遊び活動の場所として設えている事例（保育室内完結コナ型＋保育室内完結作業都度出し入れ型）が50事例（60.2%）である。保育室と廊下のコーナーや専用室を併用している事例は26事例（31.3%）である。

問8-3. 食寝遊の分離について（1つ選択）

食寝遊の分離を図8に示す。活動の分離をしていない事例は42事例(50.6%)であった。但し、その内の18事例(21.7%)については午睡自体がない幼稚園の事例であり、寝以外の食寝の2活動について分離がない。食・寝のいずれか一方が分離した事例は29事例(34.9%)であり、内訳では寝を分離した事例が20事例(22.9%)、食を分離した事例9事例(10.8%)に比べて多い。食寝遊の3つの活動を全て分離している事例は10事例(12.0%)であった。

問 8-5. 活動範囲の制限方法について取り入れている方法（複数選択可）

自由遊び時間の活動範囲をどのように制限しているか（複数回答）の結果を図9に示す。最も多かったのは「保育者や子ども同士の声かけ」51事例（33.6%）であった。次いで多いのは「ドアの施錠など範囲外へ子どもが出られないように管理している（完全管理）」33事例（21.7%）、「ドアや間仕切り壁で仕切る」28事例（18.4%）、「背の低い家具や障害物を置く」24事例（15.8%）など物理的に活動範囲の制限を明示する方法である。制限方法の組み合わせは、声かけと物理的な方法による制限を組み合わせた施設が多いが、中には子どもの主体性に任せ活動範囲の物理的制限を行っていない事例も見られた。

問9. 各作業（生活作業）を誰が行うか（複数選択可）

道具の出し入れや昼食の準備に関わる各作業について、活動の実施者を整理した(図10)。図では、常設・保育者のみ、保育者と子ども、子どものみの3つに大別した。各活動の中では、下膳が最も子どものみが実施する割合が高く、保育室

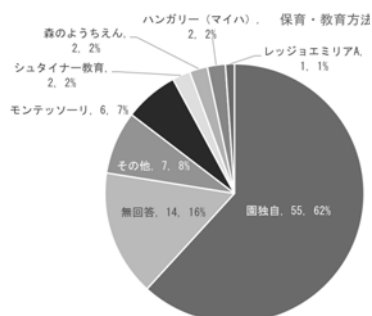


図5 保育・教育方法

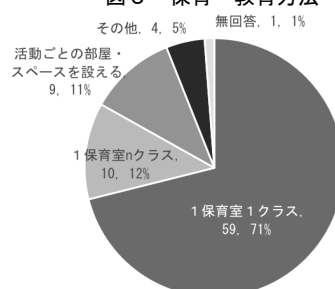


図6 保育室の使い方<室とクラス>

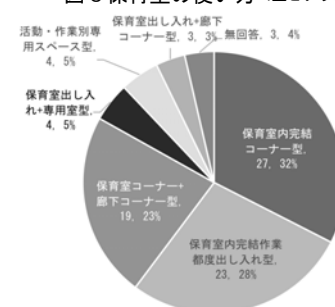


図7 遊びの設え

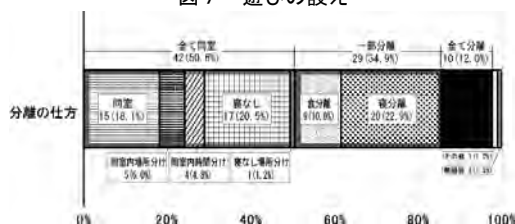


図 8 食寝遊の分離

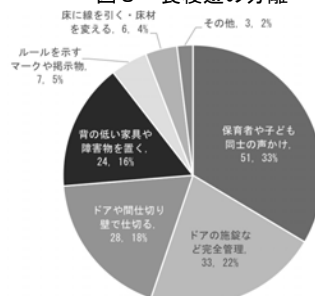


図9 活動範囲の制限方法

内の家具配置・コーナー設え・掲示物の変更は保育者のみが  
行う事例が多い。その他の活動については保育者と子どもの  
両者が行っている割合が高いが、実施する子どもが全員・担  
当制・自主性の3つに分けると、各活動で様々な傾向があり、  
施設によって子どもが経験する作業・活動の種類に差がある  
ことが示された。

## 2-3) 保育・幼児教育と建築空間の関係

### 問 10. 整備済みの部屋・スペースと欲しい部屋・スペース (複数選択可)

事例毎に整備済みの部屋・スペースと欲しいと思う部屋・ス  
ペースを単純集計した(図10)。全事例の7割(58事例)以  
上が整備している部屋・スペースは、保育室81事例、園庭  
71事例、廊下66事例、倉庫64事例である。使い方に類似点  
が多いと考えられる室内運動場と多目的室の詳細をみると、  
室内運動場と多目的室のいずれかが整備済の事例は62事例、  
両室ある事例は15事例であった。また、片方は整備済である  
がもう一方も欲しいと回答した事例が7事例であった。欲しい  
室・スペースは、職員の休憩室13事例、ランチ室12事例、

図書室11事例、造形室10事例の順に多い。

### 問 11. 次に挙げる活動の現在の活動場所について(複数選 択可) ※食事・午睡(ある場合)・室内遊びを抜粋

食・寝の各活動は、それぞれ落ち着いた空間で行われる必要  
があると考えられるが、実際は運動と部屋を兼用する事例  
が多いことから、子どもが落ち着きを失ったり、埃が舞うな  
どの衛生面にも問題が生じる可能性が推察される。

食・寝の各活動は、それぞれ落ち着いた空間で行われる必要  
があると考えられるが、実際は運動と部屋を兼用する事例  
が多いことから、子どもが落ち着きを失ったり、埃が舞うな  
どの衛生面にも問題が生じる可能性が推察される。

### 問 13. 保育のための園舎空間にあるべき空間的配慮につ いて(現状の満足度)と理想のあり方としての重要 度(1つ選択)

保育施設のあるべき設えや建築の条件を明らかにするため  
に、各該当事例における「現状の園舎に対する満足度」と「保

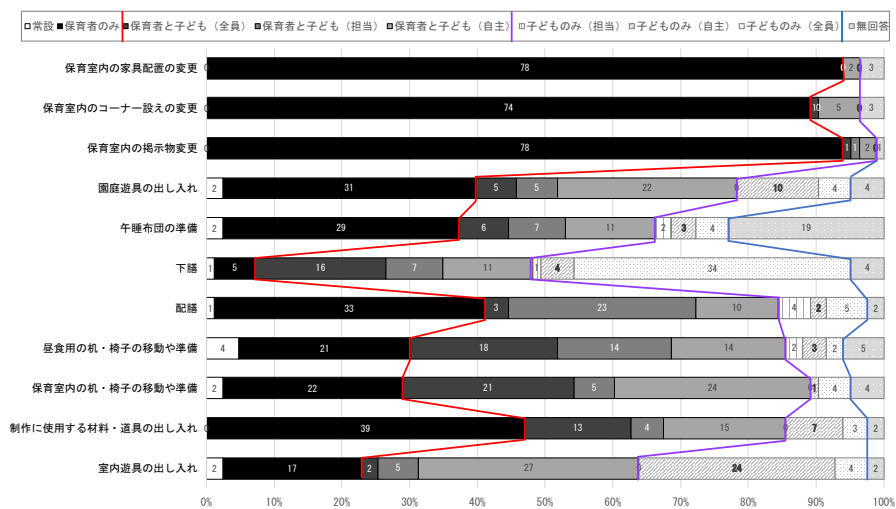


図 10 各活動における実践者

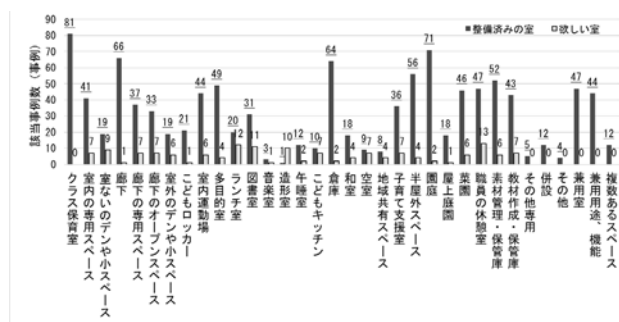


図 11 整備済及び欲しい部屋・スペースの合計

表 1 食・寝の分離と部屋の組み合わせ

分類	詳細	部屋の組み合わせ名	事例数	割合
分離なし	全て保育室	NNN	24	28.9%
	寝なし	N×N	18	21.7%
一部分分離	食・専用室	LNN	4	4.8%
	兼用室:運動あり	P&LNN	5	6.0%
	兼用室:運動なし	T&LNN	0	0.0%
	専用室	NSN	4	4.8%
寝分離	兼用室:運動あり	NP&SN	12	14.5%
	兼用室:運動なし	NT&SN	4	4.8%
全分離	各専用室	LSN	3	3.6%
	食・兼用室:運動あり	P&LSN	1	1.2%
	食・兼用室:運動なし	T&LSN	0	0.0%
	寝・兼用室:運動あり	LP&SN	5	6.0%
	寝・兼用室:運動なし	LT&SN	1	1.2%
	無回答		2	2.4%
	合計		83	100.0%

育を行う空間の理想的なあり方としての満足度」をたずねた。得られた結果を食寝遊の分離状況別に整理した（図10）。

食寝遊の分離型によって差が生じたと考えられる項目は、＜満足度＞では、C事例（全て分離）で子ども数名が身を隠したり集中して活動できるスペース（設問5、設問6）、回遊できる廊下（21）、保育室と異なる雰囲気のある部屋がある（28）、子どもと一対一で話す部屋（29）、地域住民が立ち寄る部屋（30）、片付けなくて良い部屋（31）、家具や間仕切りを動かしたり部屋の広さや形状を変更する仕組み（32、33）、午睡時の遊び場所（34）、職員室から園庭が見える（23）の各項目がA事例（食寝遊全て同室）B事例（一部分離）より平均値が高い。室数が多いことによって、より少人数の子どもに対応したきめ細やかな保育に対応できていると考えられる。また保育室から園庭が見える（23）について満足度が他事例より低

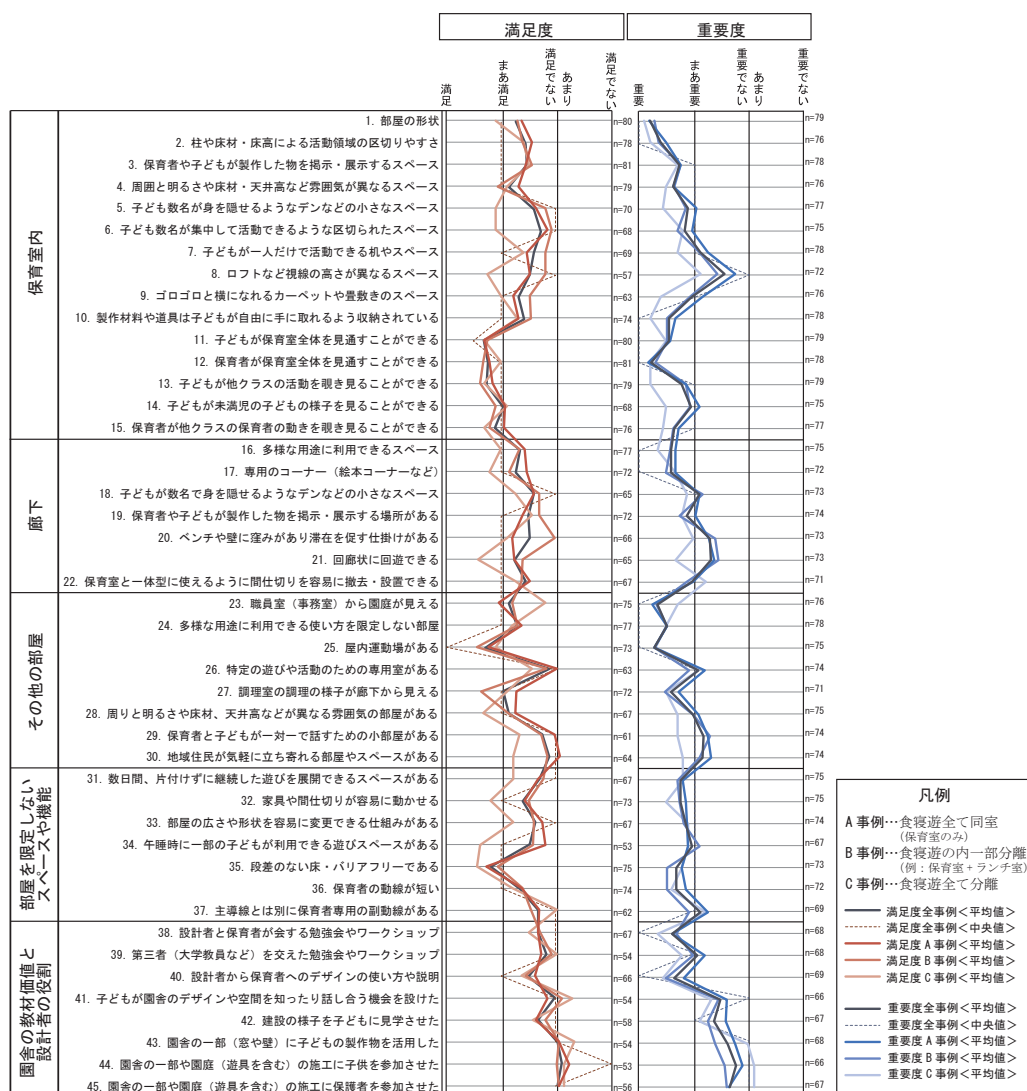
いことは、室数が多いことによって設計計画上の制約が生じ園庭側に配置することが難しい実情があると推測される。

＜重要度＞では、C事例で子どもが身を隠せる小スペース（5）、子ども一人だけで活動できるスペース（7）、横になれるスペース（9）、製作材料や道具が子どもの手に取れるよう収納されている（10）、子どもが他クラスや未満児の様子を見ることができる（13、14）、回遊できる廊下（21）、子どもと一対一で話すことができるスペース（29）の各項目がA事例B事例に比べて平均値が高い。

#### 別紙 b. 1. 計画時と現在で変更された部屋・場所（記述）

#### 別紙 b. 2. 上記変更は何回行われましたか（1つ選択）

83事例中、23事例（27.7%）で計画時の室用途から変更が生じていた。使い勝手の改善、受け入れ人数の増減への対応が要因である。変更の回数は、変更なしが20事例で最も多く、



1回は12事例であった。毎年園舎全体の室用途を議論し変更している事例（1事例）もある。

#### 別紙 c. 竣工後に行った、改修・追加工事（自由記述）

改修箇所について自由記述があったのは23事例50項目である。内訳を表2に示す。最も改修が多かったのは、家具（備え付けを含む）の7件である。新しい家具の設置や、作り付け家具の撤去をおこなっている。また、建具6件では保育室や玄関の扉を修理・変更や、窓に遮熱シートを貼ったり、遮音の為のカーテンを設置する例がみられた。建築そのものの改修では、テラス（デッキと同義）5件が最も多い。テラスでの活動は、子どもが水を使ったり裸足で活動する重要な場所である。5件中4件が張り替えをおこなっていることから、テラスに使用される材料について、耐久性の向上や日常メン

テナンスの簡素化が求められていると推測される。その他、部屋用途の変更に伴う改修、アプローチの変更（バス発着場の変更、玄関アプローチの変更）、棟の増築があげられた。

### 3. まとめ

アンケートの回答より以下のことが明らかになった。①施設形態・運営主体・人数規模・保育方法・部屋とクラスの関係・遊びの設え方などの事例概要、②生活作業をおこなう人、食寝遊の分離のパターンと各活動における活動場所の組み合わせの差異、③食寝遊の分離パターン別の施設への満足度と保育施設としての建物のあり方の内、特にC. 完全分離について他のパターンと満足度・重要度に異なる特徴を持つ項目があり、求められる建築の要点が異なることが示唆された。また室用途の変更と改修箇所は、竣工後すぐに使いづらさや部材の劣化など、変更・改修を余儀なくされた事例が確認できた。

今後、各事例の図面調査とアンケート調査との比較、協力を得られた施設に対する訪問調査を実施し、保育施設として重要と考えられる物理的要因の分析を行う。それらより、保育施設として、どのような環境が建築的に求められ、保育者を支援し得るか、さらに保育施設における子どもの主体的な活動を支援するために、保育者とのような協働が可能であるかという点に迫っていきたいと考えている。

表2 改修箇所（自由記述）

改修箇所		件数	改修箇所		件数
建築	テラス(張り替え、新設)	5	家具・インテリア	家具(新設・撤去)	7
	屋根・庇・軒先	4		建具(ふさぐ、交換)	6
	天井(形状変更)	2		柵(新設・改良)	4
	柱(撤去)	2		床材(変更)	3
	エントランス	2	園庭		5
	その他(トイレ・手洗い)	3	部屋用途の変更		3
増築		2	アプローチ変更		2

#### 別紙 e. 保育施設の園舎や空間と「保育の質」について（自由記述）

保育施設の園舎や空間と「保育の質」についてのご意見・ご感想（自由記述） ※事例を特定する可能性がある地名や固有名称については伏字（■■）や文章の改変・削除などの加工しています	
1	厨房前の食堂は、食堂として利用することはほぼなく、5歳児のおやつ作りの際にのみ利用している。アルコールは障がい児が落ち着きたい時によく利用している。道路に面した正門は危険なため、登降園には利用できない。8:15～16:15の保育時間以外にいる子ども（早朝保育、夕方延長など）の集まる部屋がないので不便を感じている。
2	■■県のアート施設として、優れた施設と紹介を受け、現在も視察などに訪れる方もあるが、デザイン重視の建造物であるが故の、メンテナンスのやりづらさが悩みの種である。使い勝手の良さ、広さなども感じているが、暑さ対策、また床下の害獣など、建設後、様々な不具合が起きた後、改修のしづらさも、長く施設として維持していく上での難しさも感じている。オリジナルのものであるために、既製品の仕様がないこと、代替え品がないことなど。
3	子どものスペースもとても大切であり、環境が保育の質を高める重要なファクターだと思うが、同時に大人（職員）が休憩をとったり、話し合ったり、保護者と面談したり、事務作業をするスペースなども質を高めるために必要だと感じている。
4	園児の原体験を支える大切な空間なので視覚的感覚的に働きかけ影響するものと考えます。
5	確実に両者はつながっている。子どもに限らず、保育者の心の持ち方、考え方にも影響はとて大きい。
6	どんな保育をしたいのか？ということ、空間づくりは密接に関係している。園舎という環境が保育の質や人間関係の質に無意識の部分に影響を与える(怖いことでもありコントロールすべきことでもある)
7	安全性(耐震構造、見通しの良いガラス戸)、活動しやすい空間(廊下の広さ、園庭)、自然豊かな環境(青空の広さと木々の多さ)により保育の質が高まる。本園は全て備えており園児がのびのびと成長しています。
8	保育の質を高めるためにも、子供の生活の場である保育室・保育環境は常により良いものを求める必要がある。子供たちの豊かな感性と響き合うものでありたい。
9	廊下の広い保育所で雨の日など廊下を歩いて散歩したりできるので子どもも喜んでいます。ベビーカーも毎日室内廊下を動いています。
10	重要なことは当然ですが、ここに文章で表せるほど単純ではないと考えます。必要あればヒアリングしてください。お答えします。
11	幼児には安心して過ごせる静かな場所が必要、しっかりと身体を休めるよう睡眠の補償が大切である。子供たちが安全に過ごせるよう部屋の配置、水回り等を考えて欲しい、季節の流れの中で日々、保育しているのでプール(水遊び)、梅雨時等環境設定がスムーズにできるよう、保育者の意見をどんどん取り込んで欲しい。
12	「保育の質」→園舎と園庭のあり方も重要、周辺環境も保育の要素として重要
13	保育の質、こころ、理念はまさに形、空間に現れています。逆に、園舎、空間が保育の目標、理念、質を表現しています。そのために改築したつもりです。実は園舎施設と同じように芝生、樹木(800本植樹)などの環境整備が重要だと思う。
14	保育を環境を通して行うものである以上、園舎や空間はとても重要であると考えます。子どもが興味を持つものがあり、始めた遊びを持続する空間がある。長い時間をかけ、皆で話し合いながら環境を整えていくことが、結局は「保育の質」の向上につながっていくと思います。
15	音については全く計画がなく、吹き抜けが多く響きやすい、勉強不足でした
16	隣家を譲り受け不定期に使用している。できるだけ広い敷地があれば今よりもっと伸び伸びした空間を子ども達に提供できるが、何事にも限りがあり、広すぎると職員が目が届かないところがあるので、バランスの問題でしょうか？
17	デザインばかりにこだわると日常の保育に支障が出るというのは現場の大半の意見である。保育園や幼稚園はデザインよりも機能性や死角ゼロなど、子どもの動きや活動を重視したものを設計してほしい。1～3Fの保育室は不便。同じフロアで自由に行き来できるのが良い。
18	教育方針と施設空間が一体となることによってより高次元の保育の質が満たされる

＜続＞別紙 c. 保育施設の園舎や空間と「保育の質」についてご意見・ご感想をお聞かせください

	保育施設の園舎や空間と「保育の質」についてのご意見・ご感想（自由記述）
19	デザインと保育士の導線が多々違う感覚がある。例）大人にとって吹き抜けは良いが、小さい子どもにとっては落ち着かない環境など
20	園舎はハードな部分の大切な環境です。皆が出入りするエントランスや事務所などもとても大切だと考えます（園舎や光の入り具合）
21	様々な隙間、空間スペースでの活動は長時間保育園で生活することの遊びを通した創造力の広がり、精神安定に大きく影響する。
22	設計士の理想とする木の香りがする、温かみのある保育園（新築部分）ができたと思うが、保育をするにあたり、死角ができて、使い勝手の良くないところもある。木質の床材のつなぎ目に凹みがあり、食べこぼしなどが入ってしまい不衛生だったりする。クラスとクラス間のテラス部分、日よけを取り付けてくれたが、デザイン重視のため、使い勝手が良くなり、すぐに壊れた。外壁、波状のところに蜂の巣ができて安全性が良くない。テラスに砂場を作ったため使いづらいなど。不便な点も多いが、全体的にゆとりある空間でゆったりと保育ができる。室内の照明などデザイン重視のところも多いが、メンテナンスに費用がかかり、実用性のことを考える必要があると思った。
23	生活シーン（遊、食、寝）ごとに空間を分けられると、子ども自身が自分なりの見通しをもち、大人の指示ではなく、活動を切り替えていく力をつけていくことにつながると思います。主体性や自主性を培うために環境の果たす役割は大きいです。
24	環境構成として舎は土台となるため、保育園の設計経験のある事務所に絞り依頼した
25	空間をどう使うか、どう支えるかの発想で保育の広がりも増えると思います。そこから保育の質の向上にもつながると思います。子供にとってこの空間が必要なかは、現場の保育でないとわからないことではないかとも感じています。
26	子どもの自主性を尊重する「見守る保育」を遂行するにはワンルーム型式が活かされると思うし、保育の幅が広がる。園舎内の騒音に悩まされている現状を保育の工夫によって乗り越えたい。神社の境内、斜めの土地、御神木等様々な条件のため、止む無く狭くなってしまったという原因もあり、設計に苦労したと思われる。
27	建築の段階で携わっていない者にとり返答が難しい。
28	計画面：＜保育室外＞廊下は壁がなく、雨が降り込み、入室時に濡れてしまう。また、夏暑くて冬寒い（壁がないため）。倉庫は棚がなく、収納力がない。扉が大きく、重さに耐え切れず開閉できなくなった箇所がある。修理できない。保育室と廊下の床材は天然木（オイル加工なし）なので、腐食が著しく、細かいトゲが刺さったり、ネジが浮き出て汚く、滑って危険。廊下はウッドデッキ状なので、清掃しづらく埃がたまり、排水もできず、害虫が発生している。手すりはトゲが刺さるので「触ってはいけない」と言っている。2階の避難用滑り台がなく、避難袋で設置に時間と人数が必要で、子供に適していない。雨漏りが多い。 ＜保育室＞保育室は遊びのスペース等仕切りがなく、落ち着いて遊び込めるスペースや読書コーナーもない。保育室内の収納はオープンな棚なので、地震時に物が落ちてきて危険。コンセントが大人でもとどかない、もしくは子どもがとどく（床から10cmほどの）場所にあり、数も少なく使いづらい。ドアクローサーがない扉が多く、子どもが指を挟む。＜外部＞エントランスで入り口に樹木が植えられ、救急車や消防車など緊急車両が入れない。 ＜外部＞園庭は樹木のみで遊具はない。毛虫が大量発生し、木も大きく手入れできない。毛虫が危ない。園庭に高低差があり、雨になると砂が流れ石がゴロゴロしている。配管が詰まってしまった。園庭は凸凹である。金網は金属がトゲトゲで子供が触ると怪我をするため、全部にヤスリをかけてもらった。駐車場の雨水マスは浸透しないので、早い時は2、3日で人力で排水を行っている。園庭の砂が入ってくることもある。ウッドデッキの耐久性によって、事故が起きないかと心配。 防犯面：壁がないので、どこからでも侵入者が入ってきてしまう。エレベータが外部から簡単に侵入できる。プールは近隣住民・道路から丸見えである。 良い点：児童館と併設なので、何かと共有したり遊びに行き来しやすい。
29	保育園のあり方は土地の形や広さで決まる場合が多く、特に大切なのは女性が働く職場という面が強く、男性は少数、その場合の更衣スペースや保育室で作業するスペースを取ることに重点を置いた。しかし、保育者の意見は聞いたものの、実際に使うと管理（自由な園）の方法（室内の）に個人差が出て、それもまた面白いので、実際に使ってみてどうかと聞かれても難しい。またこのアンケートは保育現場をどのように考えて取られたのかわからない。
30	空間が与える質の加減はあると思いますが、使用者は現場の先生なので設計段階から現場の声と設計者の設備情報やアイデアのすり合わせが必要と考えます
31	この園の設計に当たっては、子どもの利益を最優先に考え、室内も室外も子供目線に立ち、起きている時間のほとんどを保育園で過ごす子供たちが、ゆったり伸び伸びと過ごすことができる構造、そして、自然の恵みを受け自然と共に園児が成長していける、そんな園を目指しました。職員たちは、経験の浅い保育士でも不安を持たずに保育ができるよう、何より保育園全体で子どもたちを見守り、声かけ育むことができる空間であるような設計をお願いしました。緑豊かな■■■の町、あるいは円周の端に同じようにまあるく、その子にも優しく、分け隔てなく伸び伸びと遊ぶことができる保育園として、螺旋状につながるウッドデッキに囲まれ、中から子どもをしっかりと守ることができる。子どもの遊び心を刺激し、探索し、周ってまた、元の場所へ戻ってくるそんな保育園を設計し、提案していただきました。保育園という場を核に保護者と保育者、そして地域が育む者としての絆を持って、一人一人の子供たちと向き合い触れ合っていきたい、保育園のある場所が、緑あふれる地域であることから「■■■保育園」と名付けました。保育室は建築基準法をクリアする範囲で、子どもが落ち着いて遊ぶよう天井を低く設計してもらっています。園舎の空間と環境（コーナーの設定や保育者の言動）は保育していく上で大きな影響があると考えています。
32	広い空間で回遊できることで、クラス間の壁をなくし、子どもたちが主体的に遊びを見つけることができます。その中で子どもたちの想像力が養われる。
33	年齢が低いほど少人数でゆったりと過ごせる空間が大切であると感じる。デザイン性だけでなく、保育教諭と園児が関わり合いながら落ち着いて生活出来る園舎でなくてはならないと思う。
34	本園は「自由と自立」を柱としているため、子どもが自分の方で遊びを創造できる環境が望ましいと考え、広いテラスを設けています。オープンで広々とした印象を与え、実際にのびのびと生活できますが、安全上の配慮も必要で折り合いをつけることが難しい面もあります。
35	保育室全体および空間は子どもを取り巻く環境として重要な位置を占めると考えています。子どもが安心・安定して1日中過ごせるようにしていただきました。
36	園庭が充実していて保育環境として理想的。室内ホールでもロープ遊びや運動など自由に使えるところに満足している。
37	3.4.5歳で90名になる2年後だが、その人数にしては部屋が狭いため、ランチルームやホールなどを上手に使っていききたい。もう少しパーティションなどを使って遊ぶスペースを細かくしていきたい。これから少しずつ手直ししていきたい。

---

「就学前保育施設における保育方法と園舎の建築空間」に関する  
アンケート調査報告書

作成日 平成 30 年 10 月 17 日

作成者 早川 亜希

名古屋大学大学院 環境学研究科 都市環境学専攻

小松研究室 博士課程後期在籍

E-mail: hayakawa13a@gmail.com

〒 464-8603 愛知県名古屋市千種区不老町

---

## 資料 1.3 アンケート配布事例の収集図面と施設概要一覧 68 事例

	施設名	開園	運営法人	設計者	延べ床面積	定員	所在地
4	白金幼稚園	2000	学校法人 白金幼稚園	SUDA設計室	797.6	7	東京都港区白金台5-23-11
6	聖心幼稚園	2000	学校法人 東北カトリック学園	アトリエタクー一級建築事務所	696	105	青森県五所川原市末広町7
11	白浜幼稚園	2001	和歌山県西牟婁郡白浜町	アーキ・クラフト建築事務所	1636	160	和歌山県西牟婁郡白浜町190
13	八代の保育園「高田あけぼの保育園」	2001	八代市立	みかんぐみ	863.47	60	熊本県八代市本野町522
19	むくどり保育園	2001	むくどり福祉会	持田善夫建築設計室	1156	120	神奈川県相模原市緑区下九沢454
20	ルンビニ幼稚園	2001	学校法人 佐伯大谷学園	栗野木建築研究所	901.91	180	大分県佐伯市城下東町 5-4
21	松月院幼稚園	2002	預教法人 松月院幼稚園	竹中工務店	1392	240	東京都板橋区赤塚6-4-9
22	中央保育所	2002	千葉県四街道市立	榎本建築設計事務所	1491	120	千葉県四街道市流津895-33
25	由仁保育園	2002	北海道由仁町立	アトリエフジ	868	80	北海道夕張郡由仁町本町318番地
27	遠星保育園	2002	茨城県水戸市立	株式会社樹設計事務所	460.37	60	茨城県水戸市昭和町480-7
28	大橋保育園	2003	社会福祉法人 東光会	竹原義二／無有建築工房	996.29	60	岡山県岡山市南区大橋160-2
35	エンゼル幼稚園	2008	学校法人 八幡学園	ジャックエツ環境事業一級建築士事務所	3942.94	480	三重県四日市市千代田町499番地
36	あすなろ幼稚園	2009	学校法人 あすなろ学園	北比野設計＋幼児の城	862.46	180	静岡県浜松市南区遠州浜1-10-2
37	西武学園文庫幼稚園	2009	学校法人 西武学園	KAJIMA DESIGN	1984.07	280	神奈川県横浜市区沢区西条4丁目24-1
39	愛星幼稚園	2010	学校法人 胡蝶バプテスト学園	team DREAM	1859.24	79	沖縄県沖縄市胡蝶6-2-1
40	ようとう(はくえん)	2010	社会福祉法人 青雲会聖徳保育園	SJ建築設計	669.56	120	新潟県新潟市東区河邊本町1-15-16
41	昭和保育園	2010	社会福祉法人 青龍会	山本成一郎＋鈴木隆之	721.12	50	群馬県桐生市東2丁目4-45
42	はやし幼稚園	2010	学校法人 緑ヶ丘学園	長谷川造子・建築計画工房	1092.12	240	神奈川県横浜市緑区緑2-13-41
43	本郷台キリスト教会チャースクール	2010	本郷台キリスト教会	保坂延建建築都市設計事務所	531.94	44	神奈川県横浜市中区西条4丁目24-1
46	あきたチャイルド園	2011	社会福祉法人 風の道育舎	奥俊俊／サムコンセプトデザイン	1056.63	170	秋田県秋田市土崎港3-8-28
49	いづみ保育園	2011	社会福祉法人 東光会	アーキテチャー・ラビ	741.69	70	東京都足立区西新井栄町1-15-10
51	えいの星保育園	2011	社会福祉法人 慶祥会	新田孝吾建築設計事務所	827.21	80	兵庫県明石市大久保町江井島960-1
52	キッズタウン・東十条保育園	2011	社会福祉法人 こうほうえん	田口知子建築設計事務所	860.19	90	東京都北区東十条3-18-40
55	きざなみの森	2011	学校法人 緑波学園	竹原義二／無有建築工房	1123.31	259	広島県東広島市西条町寺家201
56	猿山ひかり幼稚園	2011	学校法人 石川学園	アタケンタロウ計画事務所	662.5	160	埼玉県狭山市鶴ヶ木7-18
58	聖光緑が丘保育園	2011	社会福祉法人 聖光会	アマタラス都市建築設計	1100.4	138	東京都武蔵村山市緑が丘 1610-1
59	日本女子大学付属麗音幼稚園	2011	学校法人 日本女子大学	日本女子大学住居学研究室	2145.2	230	東京都文京区目白台1-18-14
60	認定こども園 和田学園	2011	学校法人 和田学園	竹原義二／無有建築工房	825.55	320	長野県善光寺町6602-1?
63	みどりの保育園	2011	社会福祉法人 緑野会	石原健也＋デネフェス計画研究所	983.62	120	東京都多摩市連光寺3-57-2
65	むさしの幼稚園	2011	学校法人 むさしの学園	京里親治アトリエ	738.1	120	愛知県豊橋市石巻町学園場3-23
70	日本キリスト教団 広島牛田教会＋牛田教会学園 あやめ幼稚園	2012	学校法人 牛田協会学園	神子達達総合環境デザイン	307	90	広島県広島市東区牛田中2丁-7-34
71	井内保育所	2012	宮城県石巻市立	伊藤喜三郎建築研究所＋メックデザインインターナショナル共同	645.11	100	宮城県石巻市新栄一丁目24
73	社地区保育所	2012	公益財団法人 日本ユニセフ協会	城収建築設計事務所?フリップラック?	341.01	54	宮城県石巻市船川浜清崎山7
74	さかがわ幼稚園	2012	静岡県掛川市立	竹下一級建築士事務所	769.4	80	静岡県掛川市伊達方474-1
75	WOOD すだじこども園	2012	学校法人 護国寺学園	ナウハウス	997.43	60	静岡県浜松市南区豊地町291
76	ともだちの森保育園	2012	社会福祉法人 森友会	北田修治＋戸室太一	740.86	70	東京都国分寺市1-22-41
77	豊中あけぼの保育園	2012	学校法人あけぼの学園/社会福祉法人あけぼの事業福祉会	竹原義二／無有建築工房	567.27	80	大阪府豊中市城山町1-2-25
79	宮田村こけの保育園＋東保育園改修	2012	長野県宮田村	森らと建築社＋inairtoridori	1064.78	210	長野県上伊那郡宮田村6745番地1
80	フレンドシップ幼稚園	2012	学校法人 少女学園	横須賀満夫建築設計事務所	402.2	70	茨城県水戸市備前町5-36
81	レイモンド荘中保育園	2012	社会福祉法人 樟樹会	アーキビジョン広谷スタジオ	636	140	愛知県尾張旭市庄中町1-2-8
85	境こども園	2013	公益財団法人 武蔵野市こども会	園設計	1672.29	167	東京都武蔵野市境4-11-6
88	庄原保育所	2013	庄原市	大畑連合建築設計	2311.4	251	広島県庄原市三日市町24
89	しらはたこども園	2013	千葉県山武市立	竹中工務店	2611.61	200	千葉県山武市白樺1919
90	城山保育園・上石原	2013	社会福祉法人 稲城青葉会	北比野設計＋幼児の城	968.07	120	東京都墨田区上石原3丁目8-10
94	なるとうこども園	2013	山武市	白船建一級建築士事務所	2785.81	240	千葉県山武市成東210番地3
98	レイモンド向日保育園	2013	社会福祉法人 樟樹会	アーキビジョン広谷スタジオ	1207.96	160	京都府向日市森本市石田13-3
100	青良保育園	2014	長野県飯田市	松島潤平建築設計事務所＋桂建築設計事務所	1081.42	140	長野県飯田市北方130
102	上町みどり保育園	2014	社会福祉法人 慶生会	IAO竹田設計	927.86	90	大阪府大阪市中央区上町1-20-6
103	川通れのみ保育園	2014	社会福祉法人 どれみ福祉会	長建設計事務所＋山下秀之＋江原憲泰	1124.99	80	新潟県三条市尾崎955-2
105	北幼稚園	2014	大塚市	東畑建築事務所	3571.63	300	岐阜県大塚市室村町1丁目42番地8
106	グローバルキッズ武蔵境園	2014	(株)グローバルキッズ	石嶋設計室	398.24	62	東京都武蔵野市境南町4-2-19
107	市が岡保育園	2014	株式会社 ホビーズ	Gm(伊藤昌行)	1935.03	133	愛知県長久手市市が岡1-401
113	東京ゆかりこ幼稚園	2014	学校法人 東京内野学園	速辺治建築都市設計事務所	1855.65	248	東京都八王子市七園3-50-2
121	社のひかりこども園	2014	社会福祉法人 正記会	DIG Architects＋久田屋建築研究所	1949.89	211	愛知県豊田市大清水町100-1
123	あまねの杜保育園	2015	社会福祉法人 南生会	相坂研介設計アトリエ	1493.54	160	千葉千葉美船橋市行田2-9-10美船橋市行田2-9-10
124	園こころ保育園	2015	社会福祉法人 東京児童協会	bask design	1333.64	109	東京都足立区関1-22-28
125	かまいこども園	2015	社会福祉法人 愛泉会	平田晃久建築設計事務所	917.72	105	岩手県釜石市天神町5-13
128	坂下東幼稚園	2015	福島県会津坂下町	阿部・辺見・秋月設計共同体	1424.66	180	福島県河沼郡会津坂下町字上口705
130	昭和女子大学附属昭和こども園	2015	学校法人 昭和女子大学	納谷孝＋納谷彰／納谷建築設計事務所	2996.52	223	東京都世田谷区太子堂1-7-57
134	とうわこども園	2015	福島県二本松市	辺見美津男設計室	1226.13	120	福島県二本松市針道字大町町46
135	所沢ひまわり幼稚園 改築棟	2015	学校法人 太陽学園	堀増弘＋工藤和美／シーラカンズKH	378.1	320	埼玉県所沢市三ツ島4-2282
136	原西保育園	2015	社会福祉法人 原西保育園	工藤和美＋堀増弘／シーラカンズKH	958.43	156	福岡県福岡市早良区小田部3-24-15
137	豊松認定こども園げんき	2015	学校法人 東松幼稚園	谷口麻里子／タニグチアトリエ＋龍浦院／龍浦院建築設計事務所	591.46	105	埼玉県東松山市石橋1781
138	星の杜こども園	2015	社会福祉法人 愛心会	ジャクソン環境事業＋アトリエ9建築研究所	683.97	95	兵庫県神戸市北区星の子台南町1-2-15
139	森のおうろ保育園	2015	社会福祉法人 トムニスカート	環・設計工房	467.72	60	福岡県福岡市中央区小區3-16-6
142	辰窪りよるばんぐみず	2016	社会福祉法人 清善会	龍美・ツチヤタケン建築事務所	781.84	90	東京都杉並区荻原3-7-29
148	大塚と大塚のなーりー 下井草駅前園	2017	株式会社 キッズユー・ポレーション	KNO architects	643.92	70	東京都杉並区荻原1-6-11
149	にじの森保育園	2017	社会福祉法人 三樹会(ミルキークエイグループ?)	LOAD&A ASSOCIATES	1401.73	162	東京都荒川区南千住8-13-1 (13-2? Google)

## データシートの見方と凡例

## 施設概要

## 活動別の活動場所

事例 No.

施設名

運営法人

所在地

設計者

建築雑誌からの収集情報

竣工年（西暦）

※一部、Web 上の HP などから補完

延べ床面積（㎡）

定員数（人）

掲載雑誌名

アンケート調査の回答結果  
から作成

活動場所の凡例（横軸）

●：全ての場所で活動

●：主な活動場所

◎：主な活動場所（複数）

○：時々活動する場所

○：活動していない

×：活動自体がない

諸室・スペースの凡例（縦軸）

□：自由に活動できる

■：自由に活動できない

■：整備されていない

## 模式化平面図

4 歳児保育室がある階の平面図から作成

## 雑誌掲載図面

建築雑誌の平面図 ※ No nscale

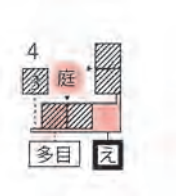
施設概要

事例 No.	4
施設名	白金幼稚園
運営法人	学校法人 白金幼稚園
所在地	東京都港区白金台 5-23-11
設計者	SUDA 設計室
竣工年（西暦）	2000
延べ床面積（㎡）	797.6
定員数（人）	160
掲載雑誌名	新建築 第75巻7号

活動別の活動場所

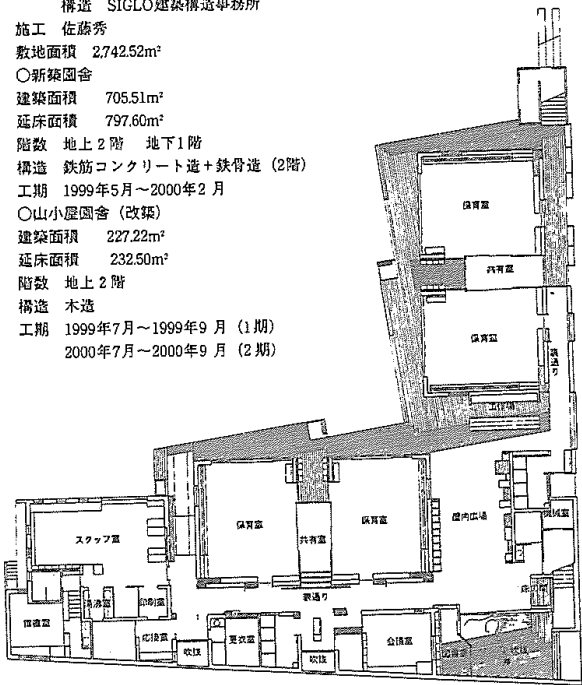


模式化平面図



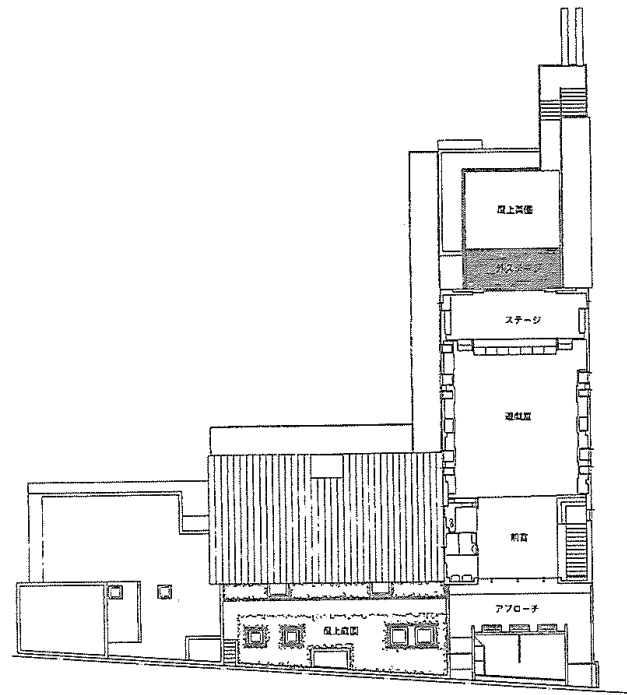
雑誌掲載図面

設計 建築 SUDA設計室  
構造 SIGLO建築構造事務所  
施工 佐藤秀  
敷地面積 2,742.52㎡  
○新築園舎  
建築面積 705.51㎡  
延床面積 797.60㎡  
階数 地上2階 地下1階  
構造 鉄筋コンクリート造+鉄骨造（2階）  
工期 1999年5月～2000年2月  
○山小屋園舎（改築）  
建築面積 227.22㎡  
延床面積 232.50㎡  
階数 地上2階  
構造 木造  
工期 1999年7月～1999年9月（1期）  
2000年7月～2000年9月（2期）



1階平面 縮尺1/400

0 8 2 | 0 6

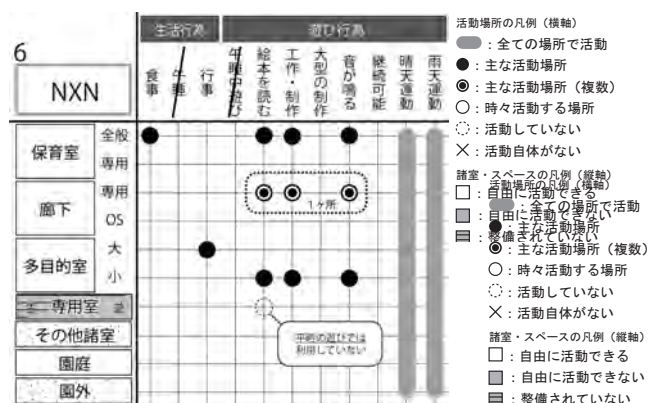


2階平面

## 施設概要

事例 No.	6
施設名	聖心幼稚園
運営法人	学校法人 東北カトリック学園
所在地	青森県五所川原市末広町 1
設計者	アトリエタアクー級建築事務所
竣工年（西暦）	2000
延べ床面積（㎡）	696
定員数（人）	105
掲載雑誌名	建築設計資料 第 91 保育園・幼稚園 3

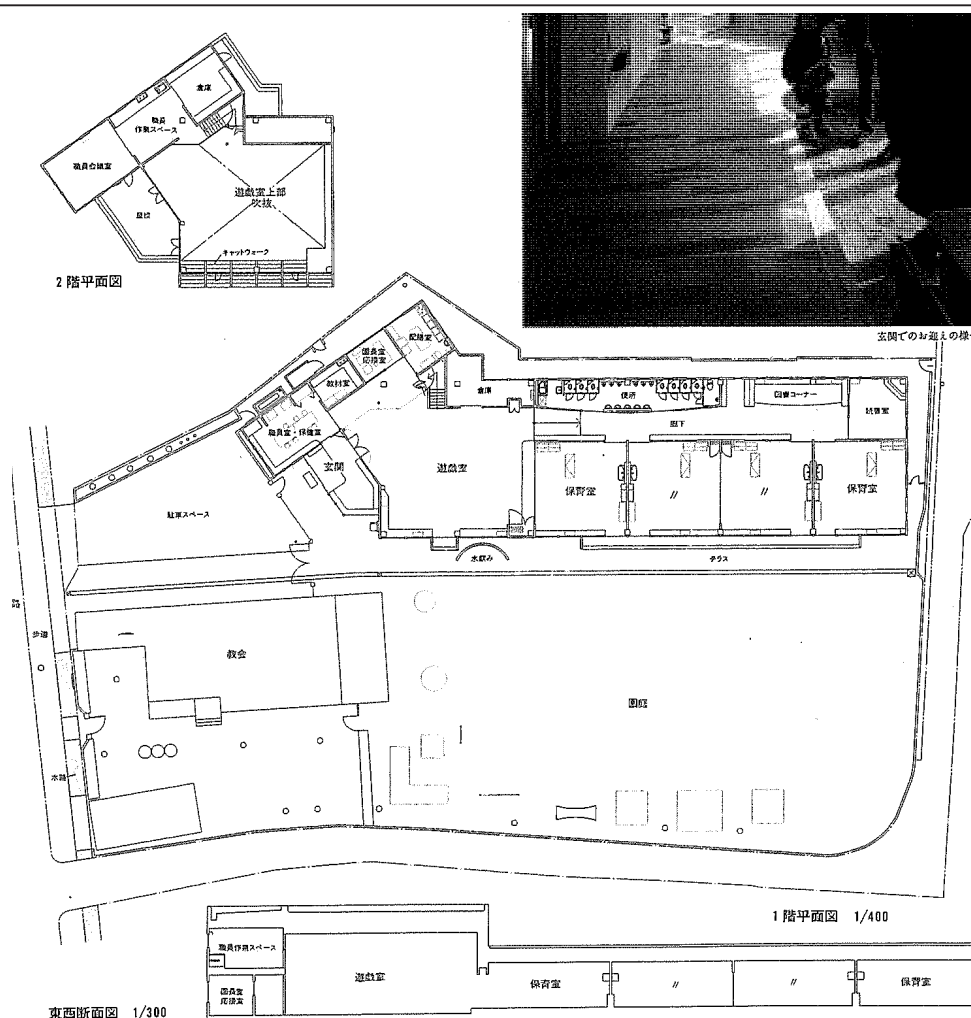
## 活動別の活動場所



模式化平面図



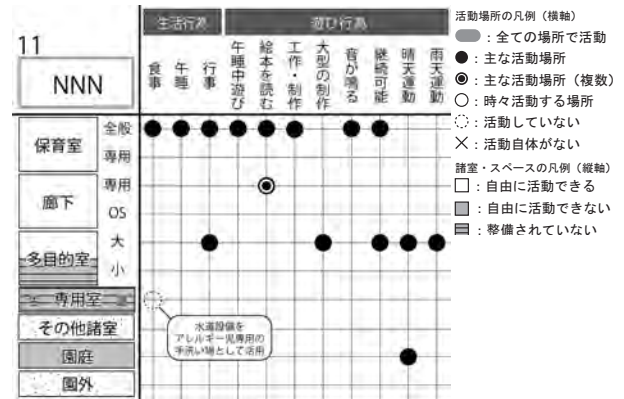
## 雑誌掲載図面



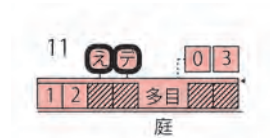
施設概要

事例 No.	11
施設名	白浜幼稚園
運営法人	和歌山県西牟婁郡白浜町
所在地	和歌山県西牟婁郡白浜町 1 9 0
設計者	アーキ・クラフト建築事務所
竣工年（西暦）	2001
延べ床面積（㎡）	1636
定員数（人）	160
掲載雑誌名	建築設計資料 第 91 保育園・幼稚園 3

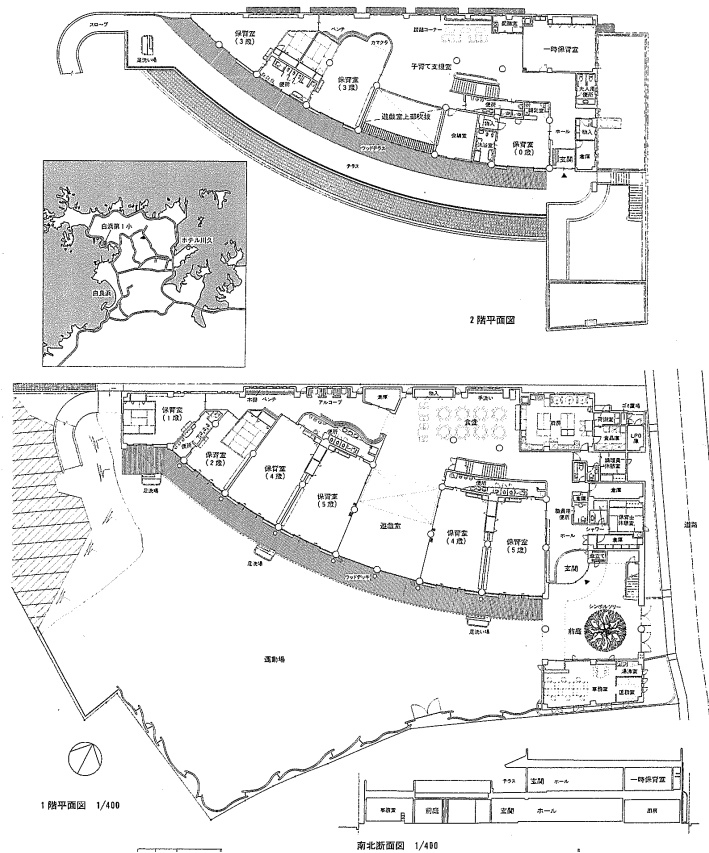
活動別の活動場所



模式化平面図



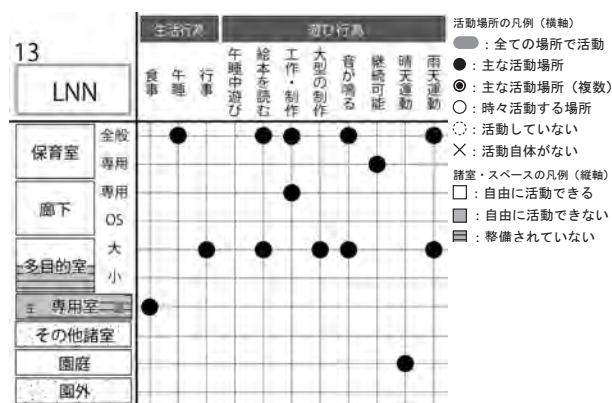
雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	13
施設名	八代の保育園「高田あけぼの保育園」
運営法人	八代市立
所在地	熊本県八代市本野町 522
設計者	みかんぐみ
竣工年（西暦）	2001
延べ床面積（㎡）	663.47
定員数（人）	60
掲載雑誌名	新建築 76 巻 7 号

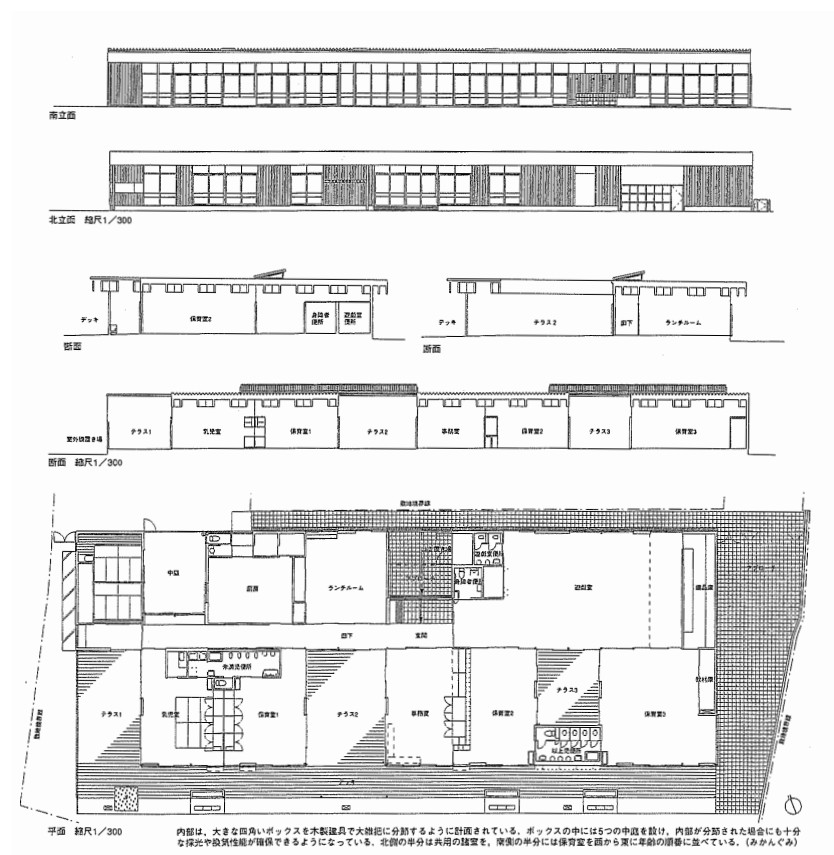
## 活動別の活動場所



模式化平面図



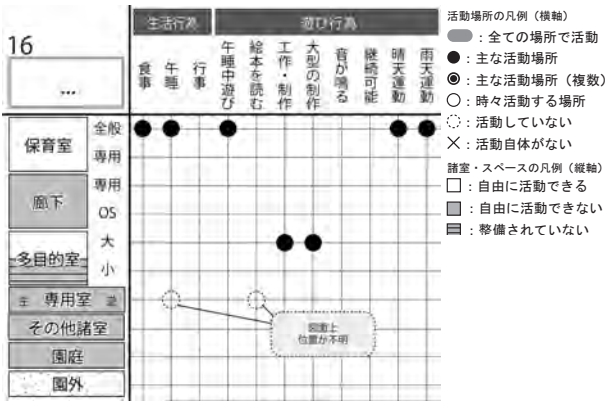
## 雑誌掲載図面



施設概要

事例 No.	19
施設名	むくどり保育園
運営法人	むくどり福祉会
所在地	神奈川県相模原市緑区下九沢 4 5 4
設計者	袴田喜夫建築設計室
竣工年（西暦）	2001
延べ床面積（㎡）	1156
定員数（人）	120
掲載雑誌名	建築設計資料 第 91 保育園・幼稚園 3

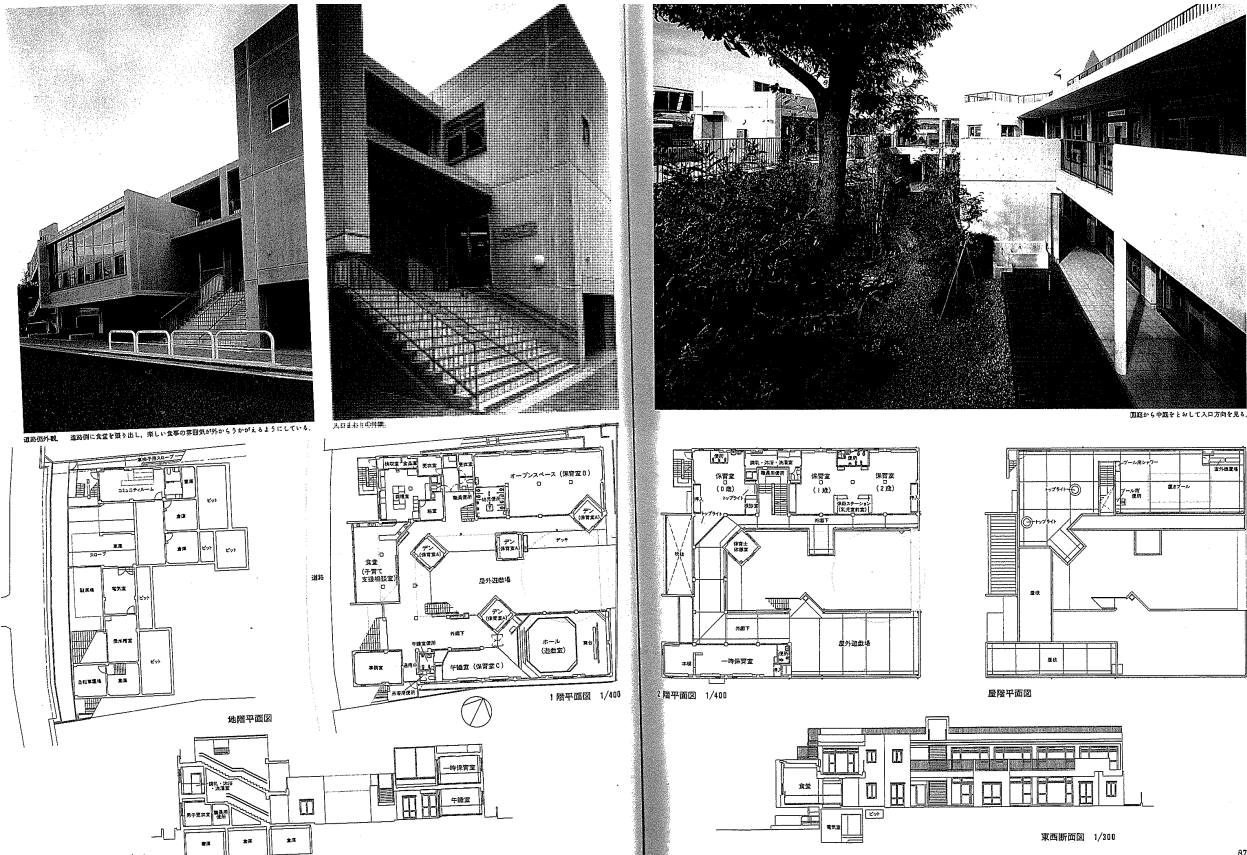
活動別の活動場所



模式化平面図



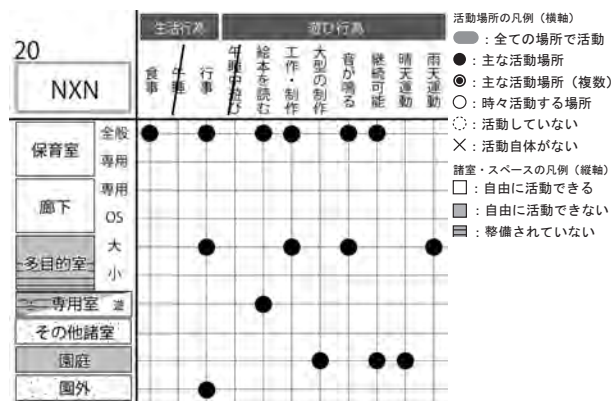
雑誌掲載図面



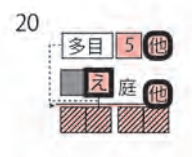
## 施設概要

事例 No.	20
施設名	ルンビニ幼稚園
運営法人	学校法人 佐伯大谷学園
所在地	大分県佐伯市城下東町 5-4
設計者	深野木建築研究所
竣工年（西暦）	2001
延べ床面積（㎡）	901.91
定員数（人）	180
掲載雑誌名	新建築 第78巻10号

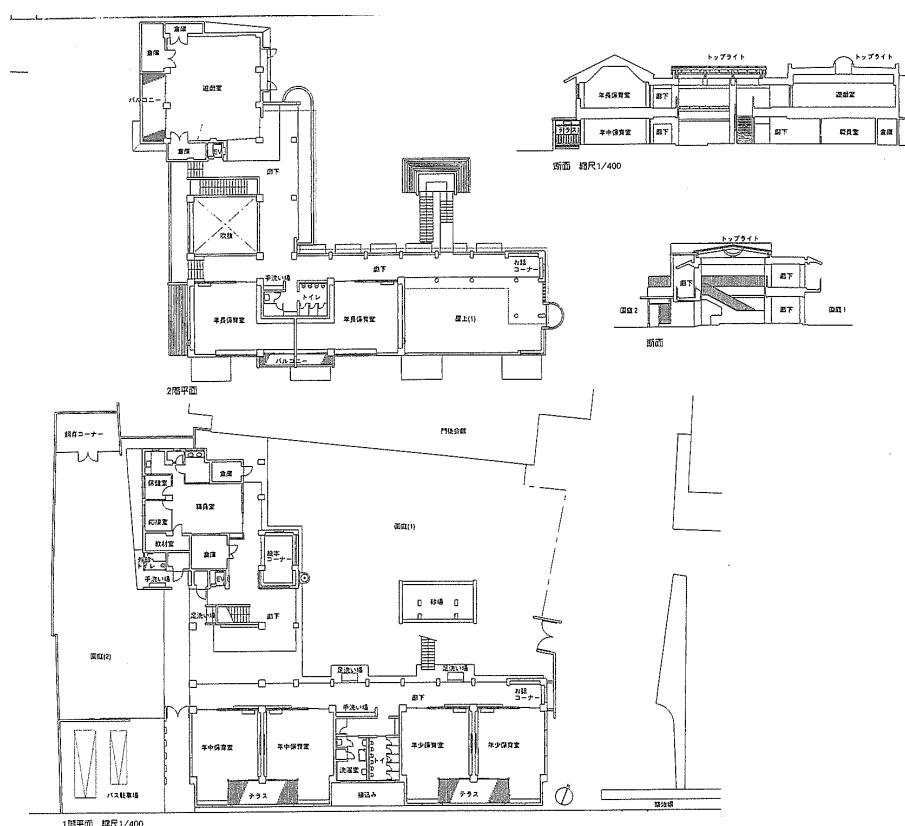
## 活動別の活動場所



模式化平面図



## 雑誌掲載図面





## 施設概要

事例 No.	22
施設名	中央保育所
運営法人	千葉県四街道市立
所在地	千葉県四街道市鹿渡 895-33
設計者	榎本建築設計事務所
竣工年（西暦）	2002
延べ床面積（㎡）	1491
定員数（人）	120
掲載雑誌名	建築設計資料 第91 保育園・幼稚園 3

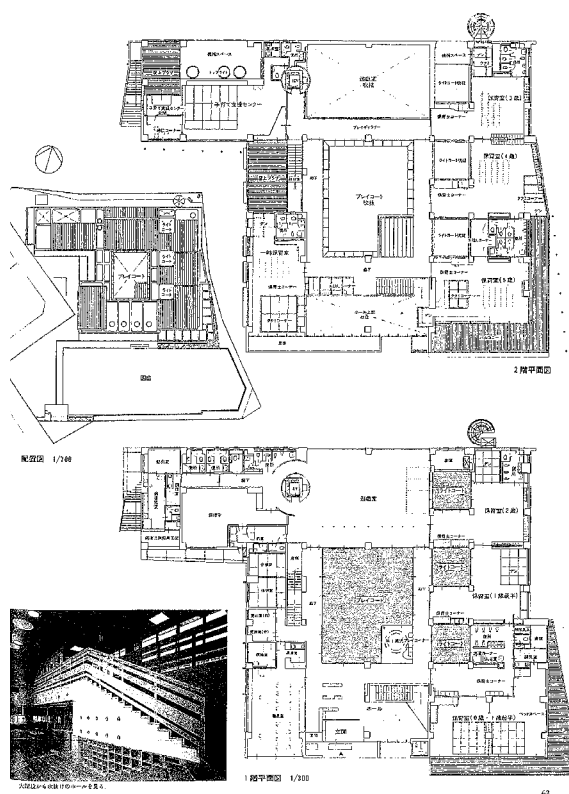
## 活動別の活動場所



模式化平面図



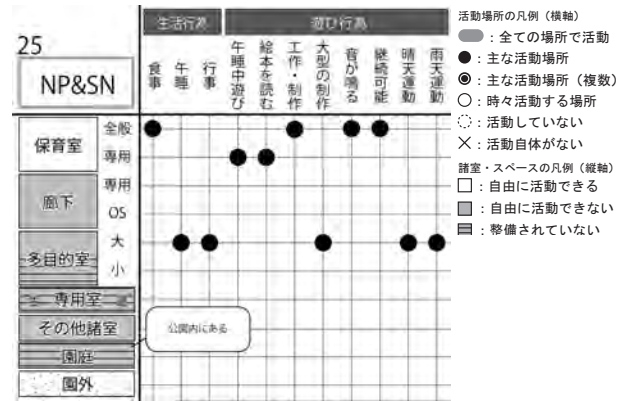
## 雑誌掲載図面



施設概要

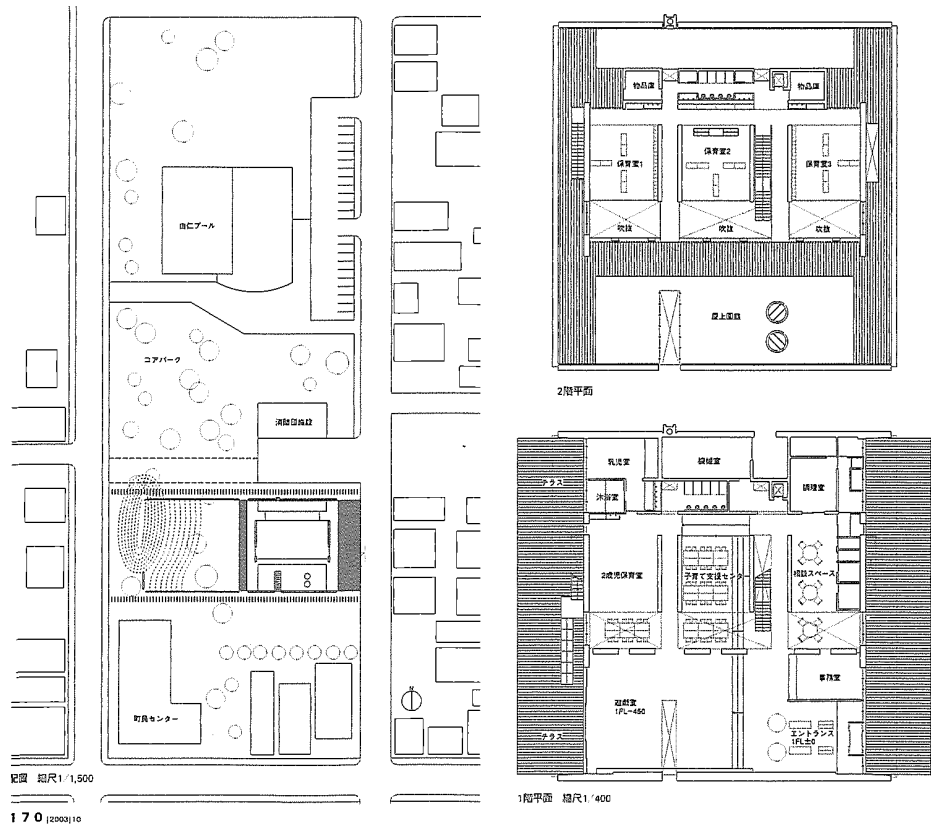
事例 No.	25
施設名	由仁保育園
運営法人	北海道由仁町立
所在地	北海道夕張郡由仁町本町 318 番地
設計者	アトリエブング
竣工年（西暦）	2002
延べ床面積（㎡）	868
定員数（人）	80
掲載雑誌名	新建築 第 78 巻 10 号

活動別の活動場所



模式化平面図

雑誌掲載図面



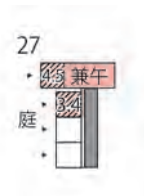
## 施設概要

事例 No.	27
施設名	渡里保育園
運営法人	茨城県水戸市立
所在地	茨城県水戸市堀町 480-7
設計者	株式会社樹設計事務所
竣工年（西暦）	2002
延べ床面積（㎡）	460.37
定員数（人）	60
掲載雑誌名	建築計画・設計シリーズ 10

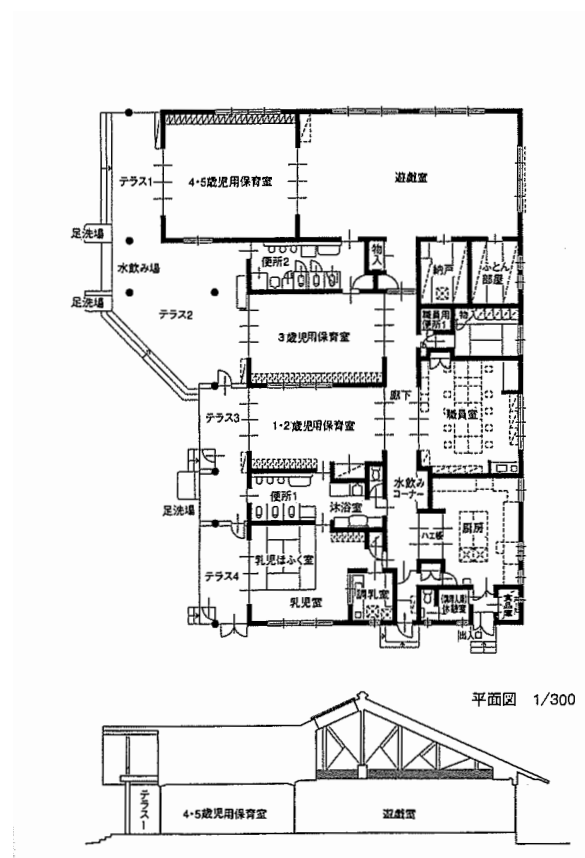
## 活動別の活動場所



模式化平面図



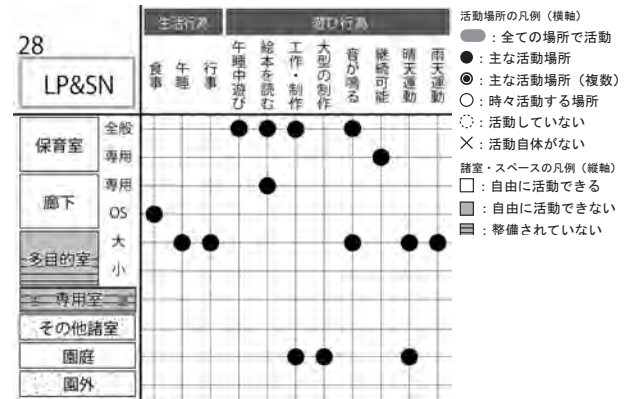
## 雑誌掲載図面



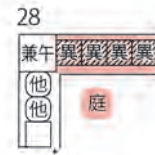
施設概要

事例 No.	28
施設名	大福保育園
運営法人	社会福祉法人 東光会
所在地	岡山県岡山市南区大福 760-2
設計者	竹原義二 / 無有建築工房
竣工年（西暦）	2003
延べ床面積（㎡）	996.29
定員数（人）	60
掲載雑誌名	新建築 第79巻6号

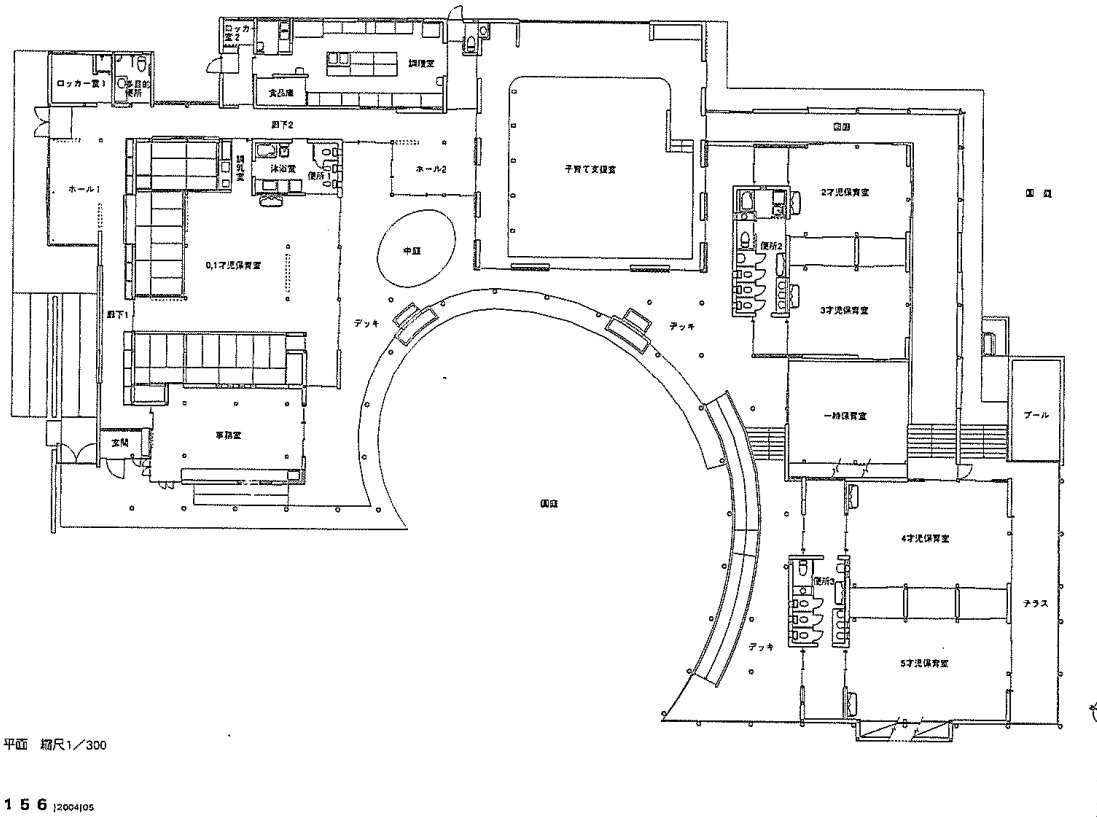
活動別の活動場所



模式化平面図



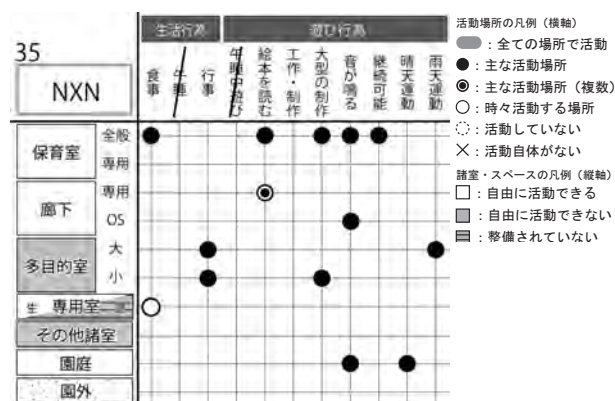
雑誌掲載図面



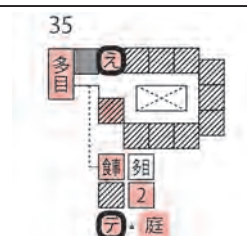
## 施設概要

事例 No.	35
施設名	エンゼル幼稚園
運営法人	学校法人 八郷学園
所在地	三重県四日市市千代田町 459 番地
設計者	ジャックエツ環境事業一級建築士事務所
竣工年（西暦）	2008
延べ床面積（㎡）	3942.94
定員数（人）	480
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

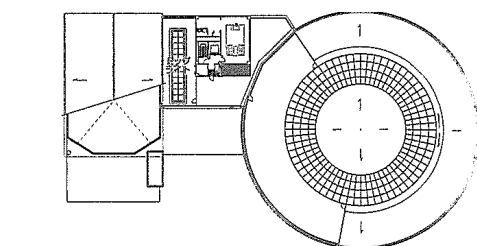
## 活動別の活動場所



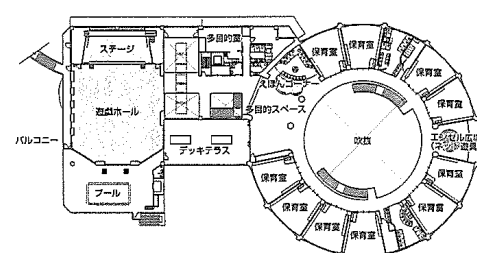
## 模式化平面図



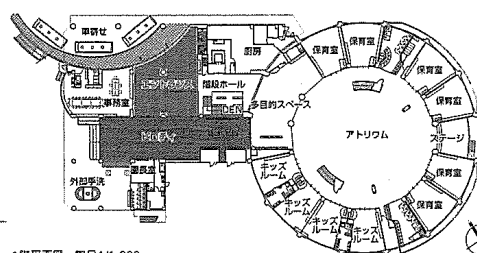
## 雑誌掲載図面



3階平面図



2階平面図

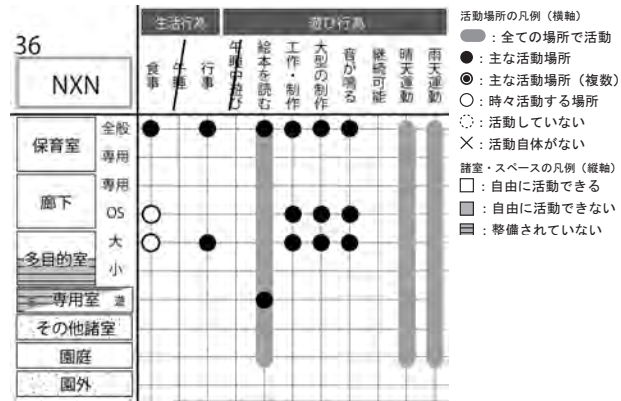


1階平面図 縮尺1/1,000

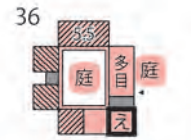
施設概要

事例 No.	36
施設名	あすなろ幼稚園
運営法人	学校法人 あすなろ学園
所在地	静岡県浜松市南区遠州浜 1-10-2
設計者	日比野設計+幼児の城
竣工年（西暦）	2009
延べ床面積（㎡）	882.46
定員数（人）	180
掲載雑誌名	新建築 第86巻13号

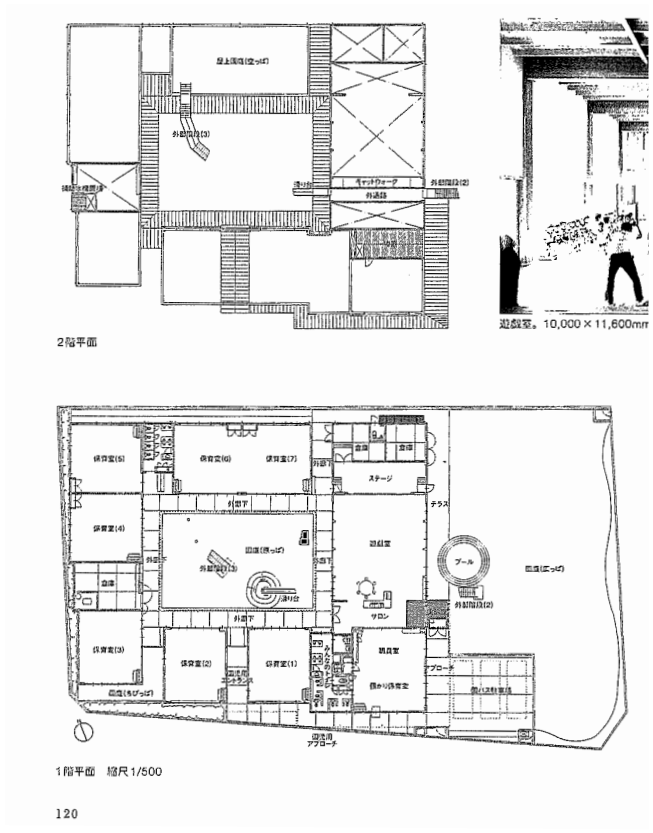
活動別の活動場所



模式化平面図



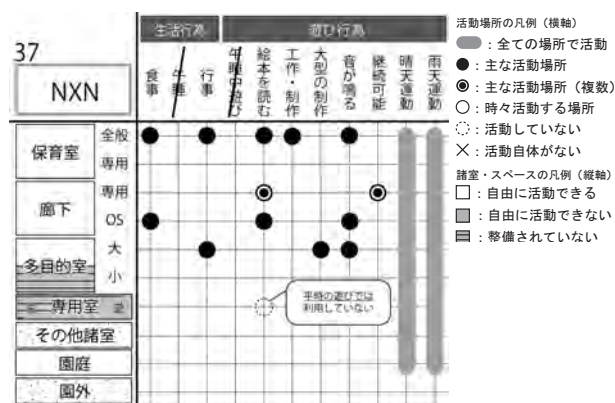
雑誌掲載図面



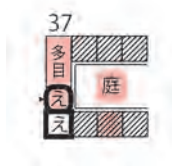
## 施設概要

事例 No.	37
施設名	西武学園文庫幼稚園
運営法人	学校法人 西武学園
所在地	神奈川県横浜市金沢区西柴 4 丁目 24- 1
設計者	K A J I M A   D E S I G N
竣工年（西暦）	2009
延べ床面積（㎡）	1964. 07
定員数（人）	280
掲載雑誌名	新建築 第 85 巻 6 号

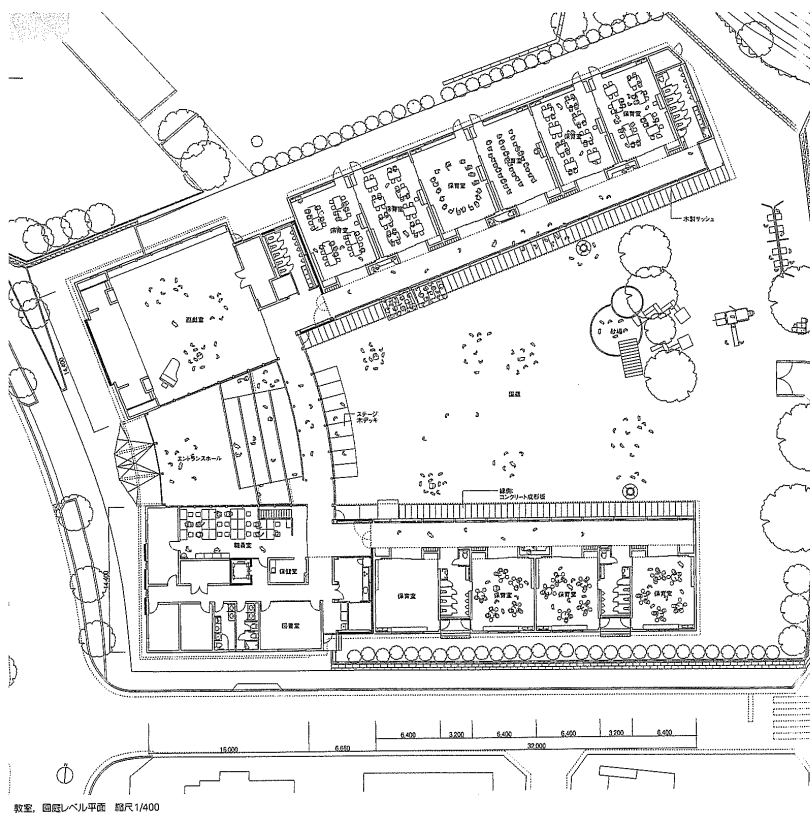
## 活動別の活動場所



模式化平面図



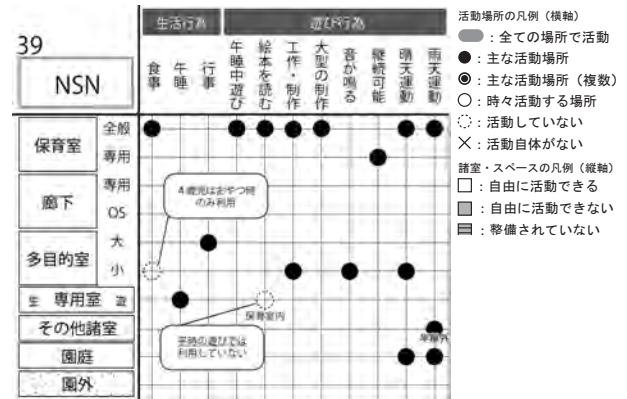
## 雑誌掲載図面



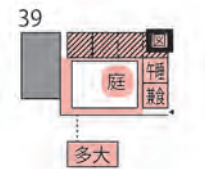
施設概要

事例 No.	39
施設名	愛星幼稚園
運営法人	学校法人 胡屋バプテスト学園
所在地	沖縄県沖縄市胡屋 6-2-1
設計者	team DREAM
竣工年（西暦）	2010
延べ床面積（㎡）	1959.24
定員数（人）	79
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

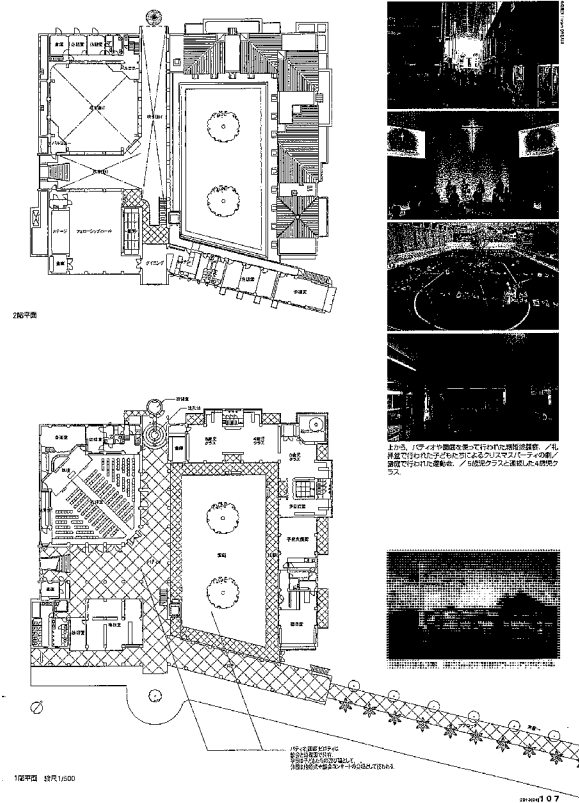
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面



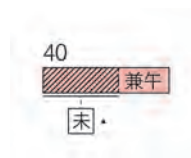
## 施設概要

事例 No.	40
施設名	しょうとくほいくえん
運営法人	社会福祉法人 青鸞会聖徳保育園
所在地	新潟県新潟市東区河渡本町 15-16
設計者	S.U 建築設計
竣工年（西暦）	2010
延べ床面積（㎡）	669.56
定員数（人）	120
掲載雑誌名	新建築 第86巻13号

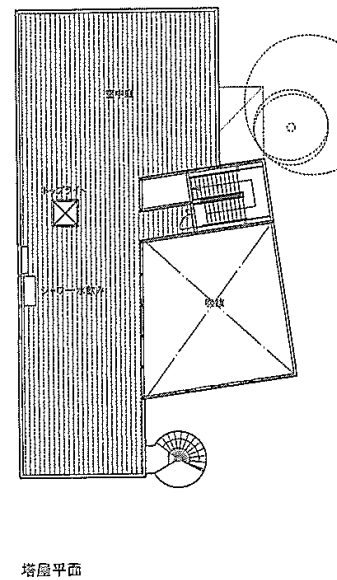
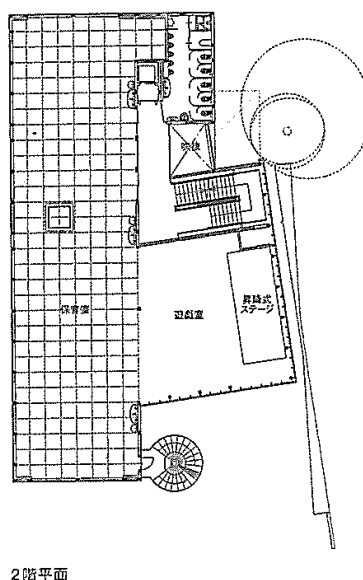
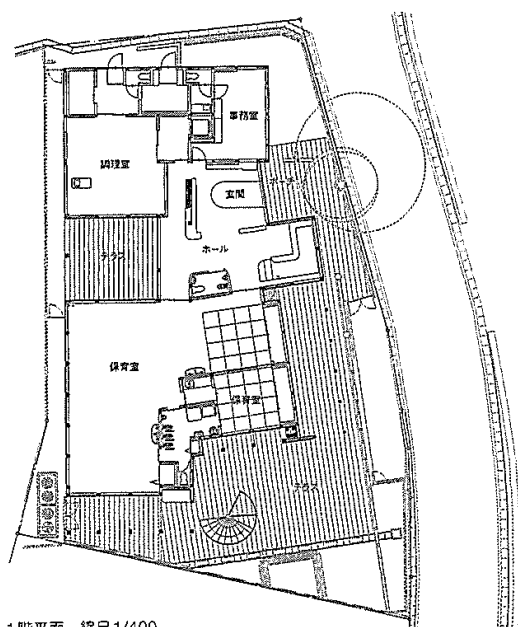
## 活動別の活動場所



模式化平面図



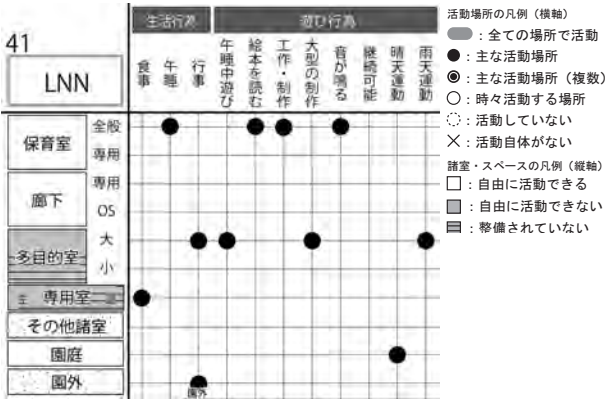
## 雑誌掲載図面



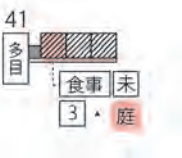
施設概要

事例 No.	41
施設名	昭和保育園
運営法人	社会福祉法人 青龍会
所在地	群馬県桐生市東2丁目4-4 5
設計者	山本成一郎＋鈴木隆之
竣工年（西暦）	2010
延べ床面積（㎡）	721.12
定員数（人）	50
掲載雑誌名	新建築 第85巻13号

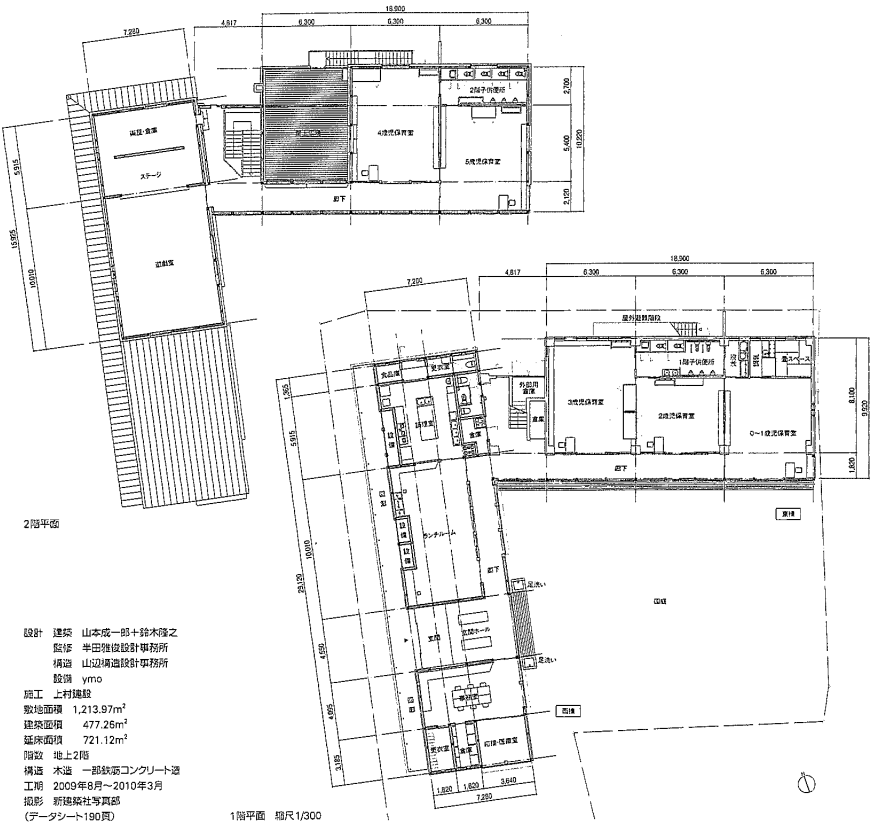
活動別の活動場所



模式化平面図



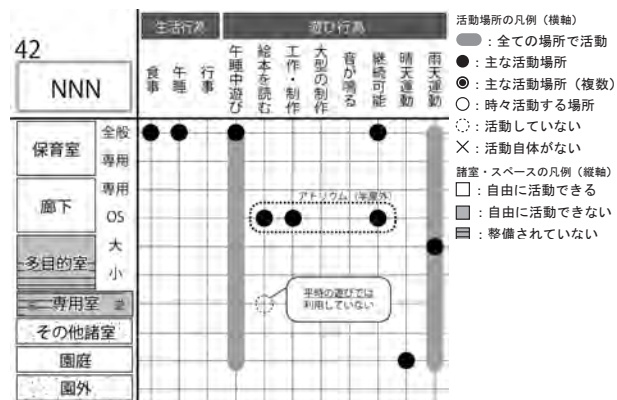
雑誌掲載図面



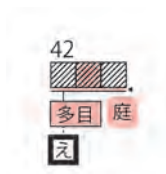
## 施設概要

事例 No.	42
施設名	はやし幼稚園
運営法人	学校法人 緑ヶ丘学園
所在地	神奈川県厚木市林 2-13-41
設計者	長谷川逸子・建築計画工房
竣工年（西暦）	2010
延べ床面積（㎡）	1092.12
定員数（人）	240
掲載雑誌名	新建築 第85巻13号

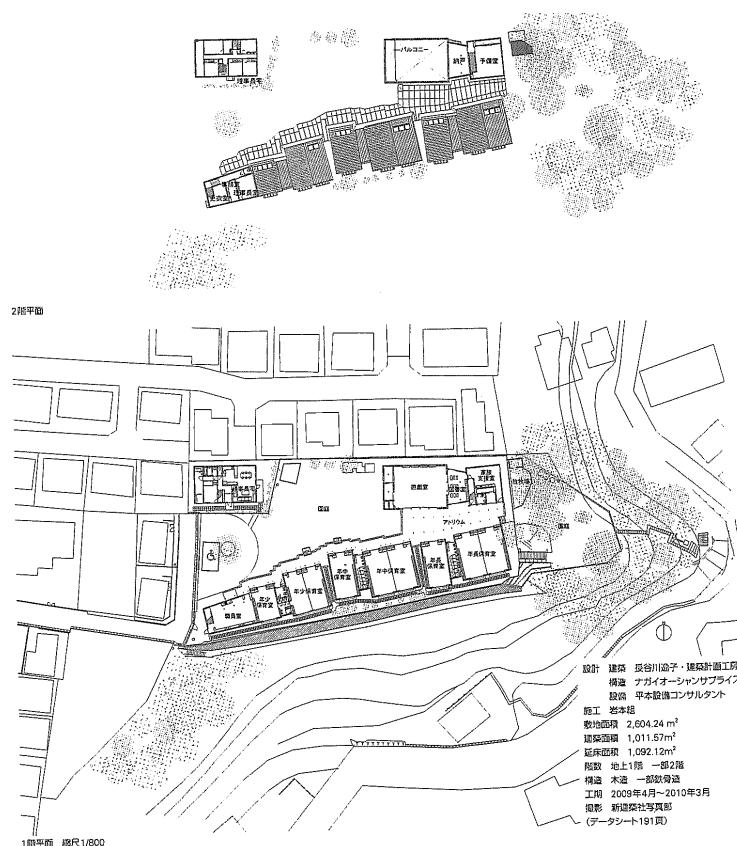
## 活動別の活動場所



模式化平面図



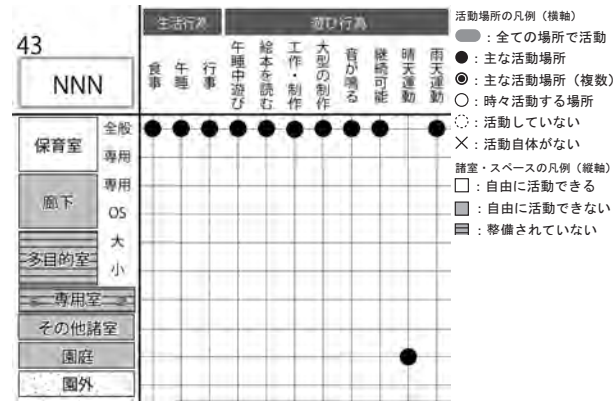
## 雑誌掲載図面



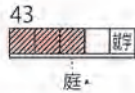
施設概要

事例 No.	43
施設名	本郷台キリスト教会チャークス쿨
運営法人	本郷台キリスト教会
所在地	神奈川県横浜市
設計者	保坂猛建築都市設計事務所
竣工年（西暦）	2010
延べ床面積（㎡）	531.94
定員数（人）	44
掲載雑誌名	新建築 第85巻6号

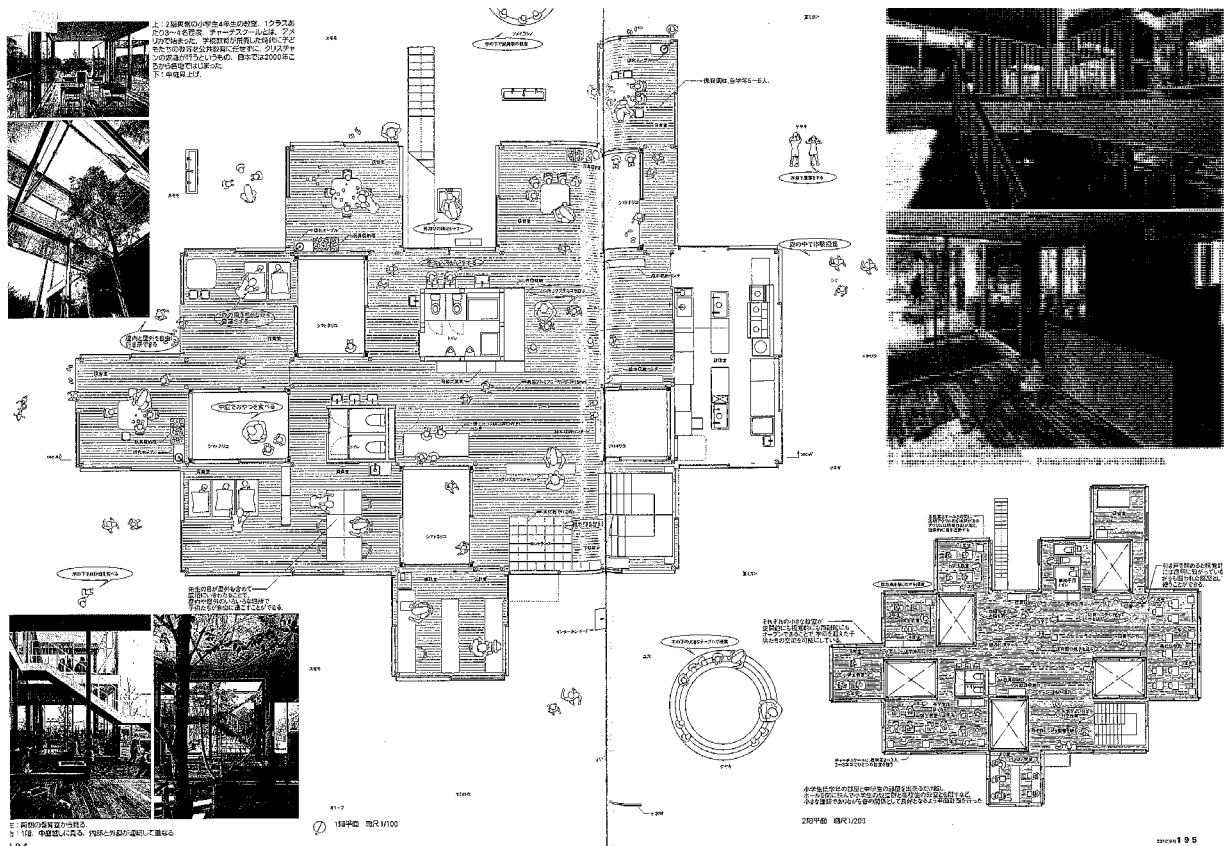
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面

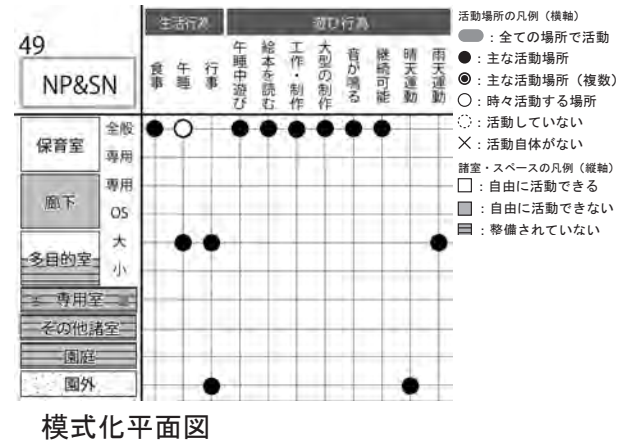




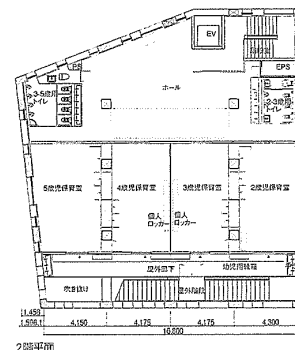
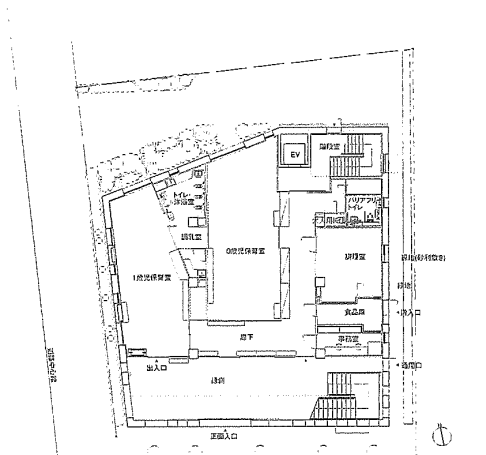
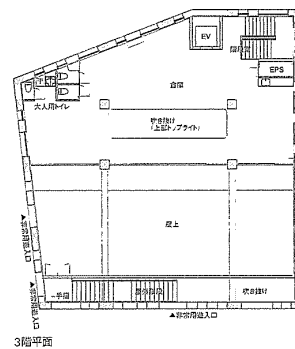
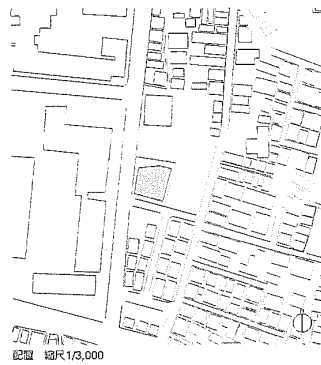
施設概要

事例 No.	49
施設名	いづみ保育園
運営法人	社会福祉法人 泉光会
所在地	東京都足立区西新井栄町1-15-10
設計者	アーキテクチャー・ラボ
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	741.69
定員数（人）	70
掲載雑誌名	新建築 第87巻4号

活動別の活動場所



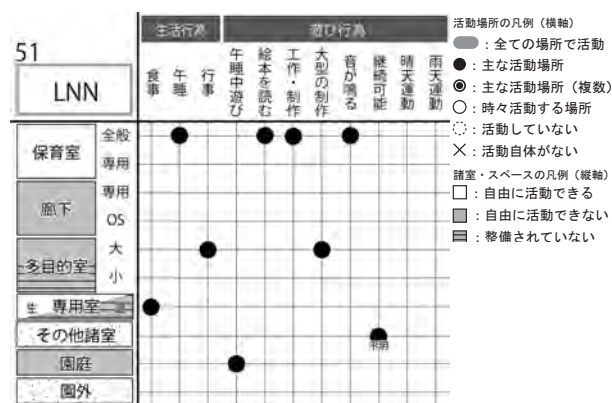
雑誌掲載図面



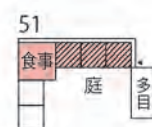
## 施設概要

事例 No.	51
施設名	えいの里保育園
運営法人	社会福祉法人 慶照会
所在地	兵庫県明石市大久保町江井島 9 6 0-1
設計者	岩田章吾建築設計事務所
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	827.21
定員数（人）	90
掲載雑誌名	新建築 第87巻4号

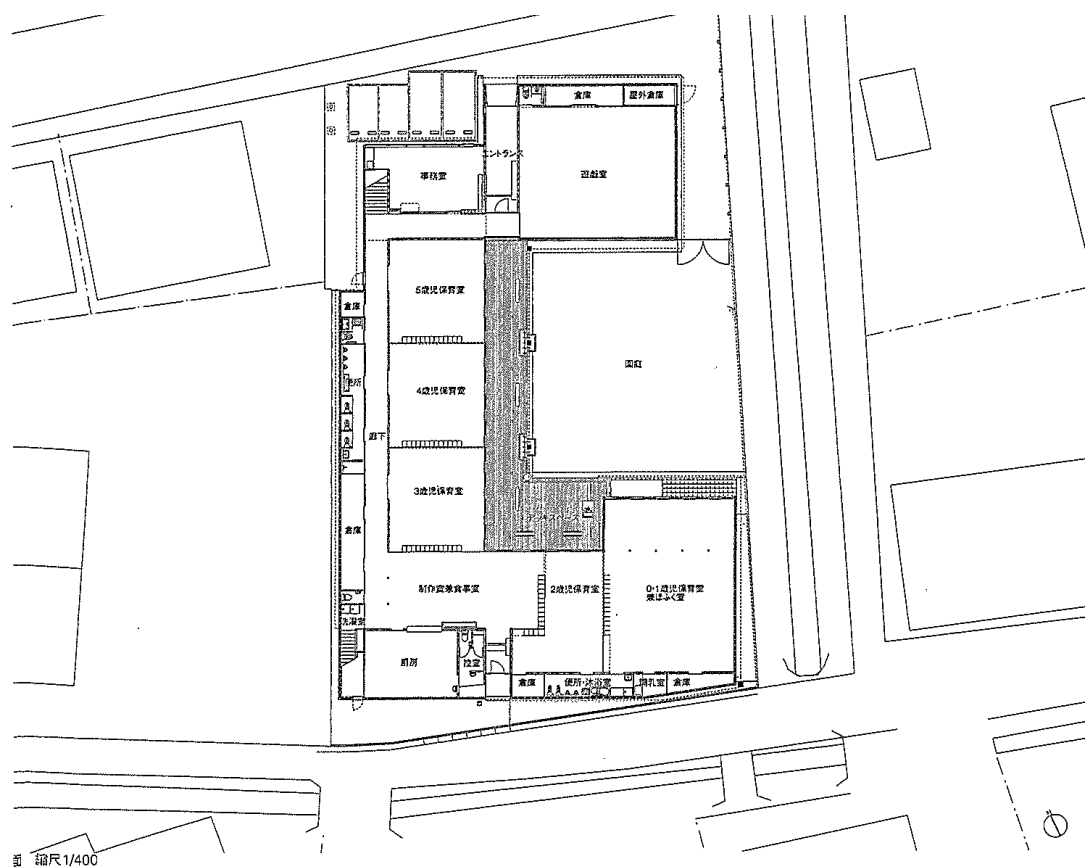
## 活動別の活動場所



模式化平面図



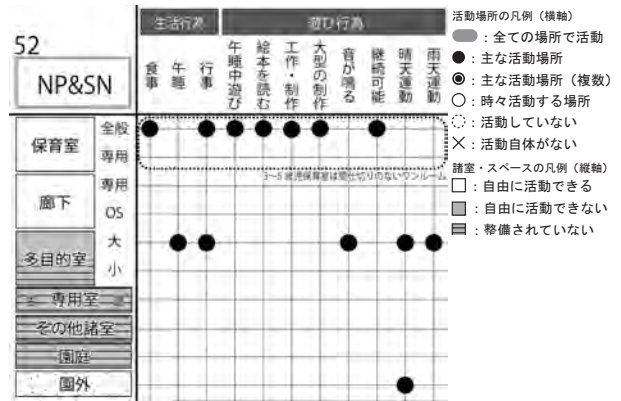
## 雑誌掲載図面



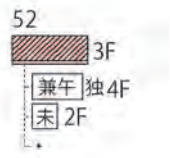
施設概要

事例 No.	52
施設名	キッズタウン東十条保育園
運営法人	社会福祉法人 こうほうえん
所在地	東京都北区東十条 3-18-40
設計者	田口知子建築設計事務所
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	860.19
定員数（人）	90
掲載雑誌名	新建築 第86巻6号

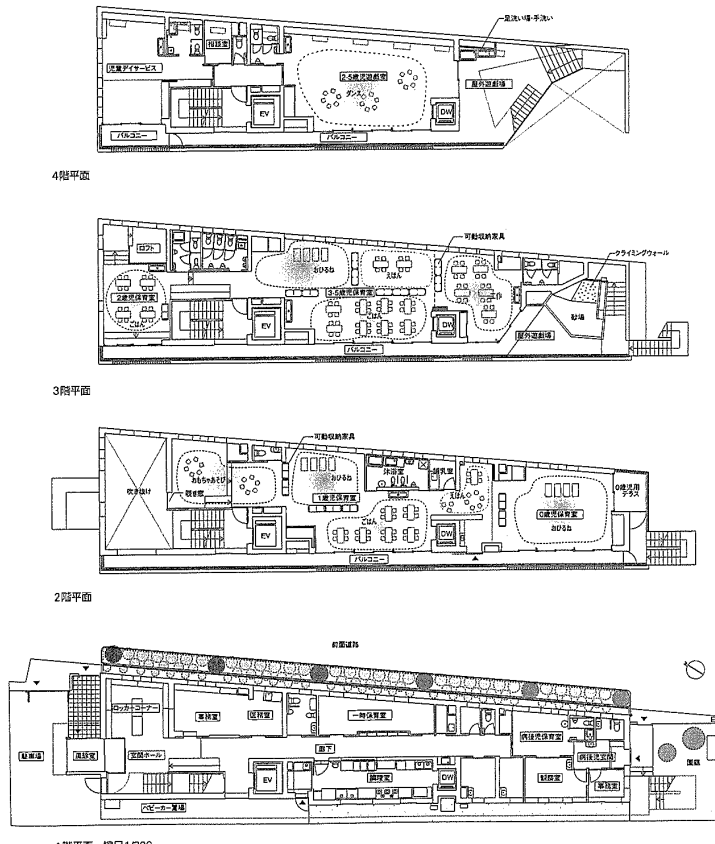
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面



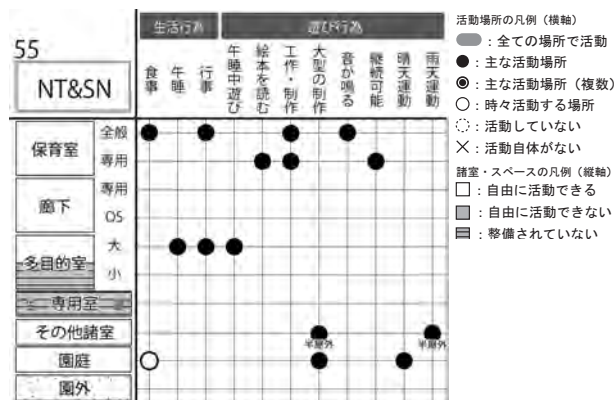
上：5階の線路側に設けられた遊歩道。下：1階廊下より調理室を見る視座の様子が見えるよう、ガラス張りとしている。



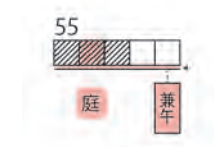
## 施設概要

事例 No.	55
施設名	さざなみの森
運営法人	学校法人 難波学園
所在地	広島県東広島市西条町寺家 261
設計者	竹原義二／無有建築工房
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	1123.31
定員数（人）	259
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

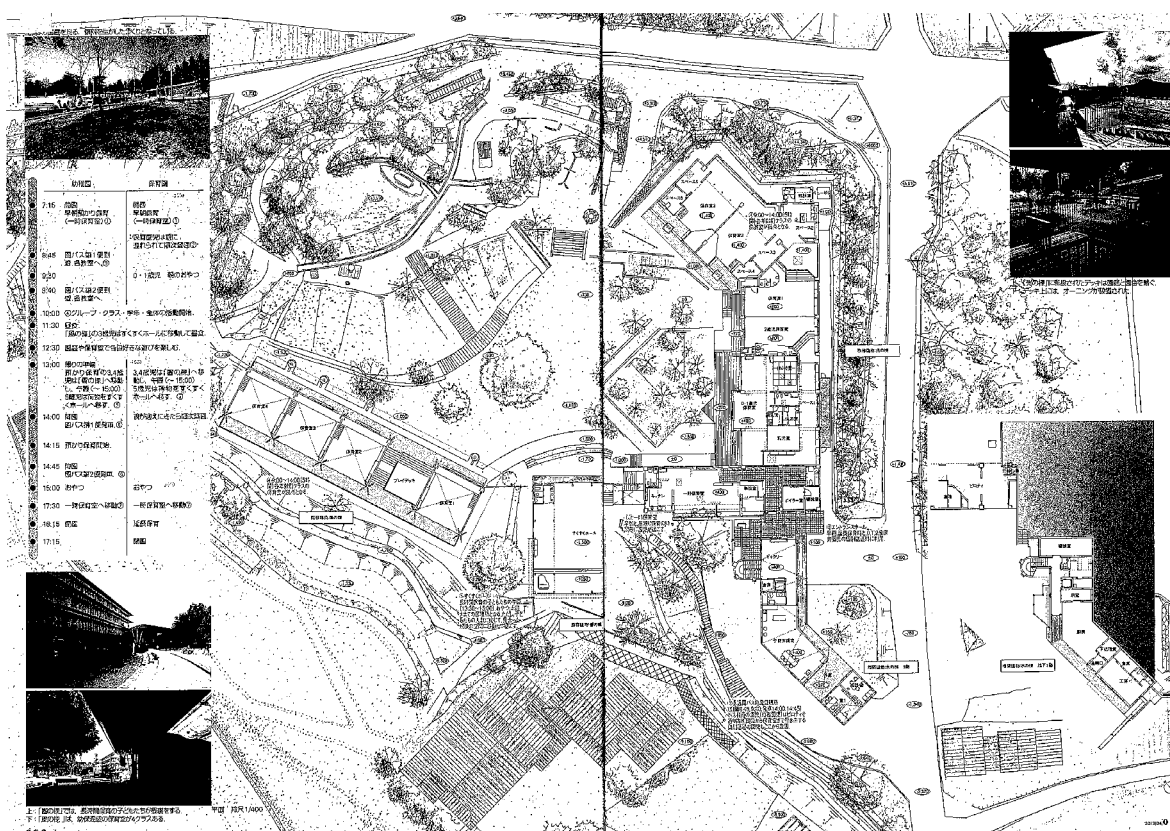
## 活動別の活動場所



模式化平面图



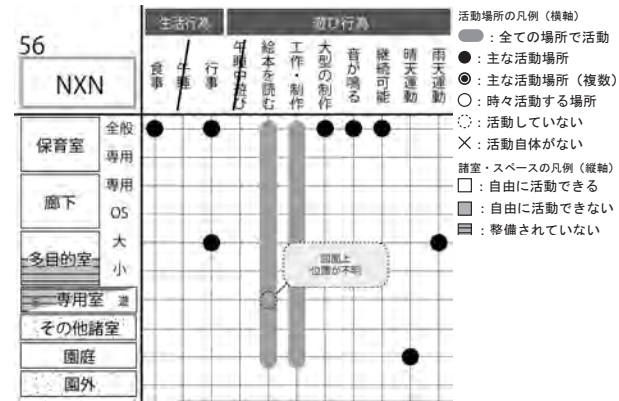
## 雑誌掲載図面



施設概要

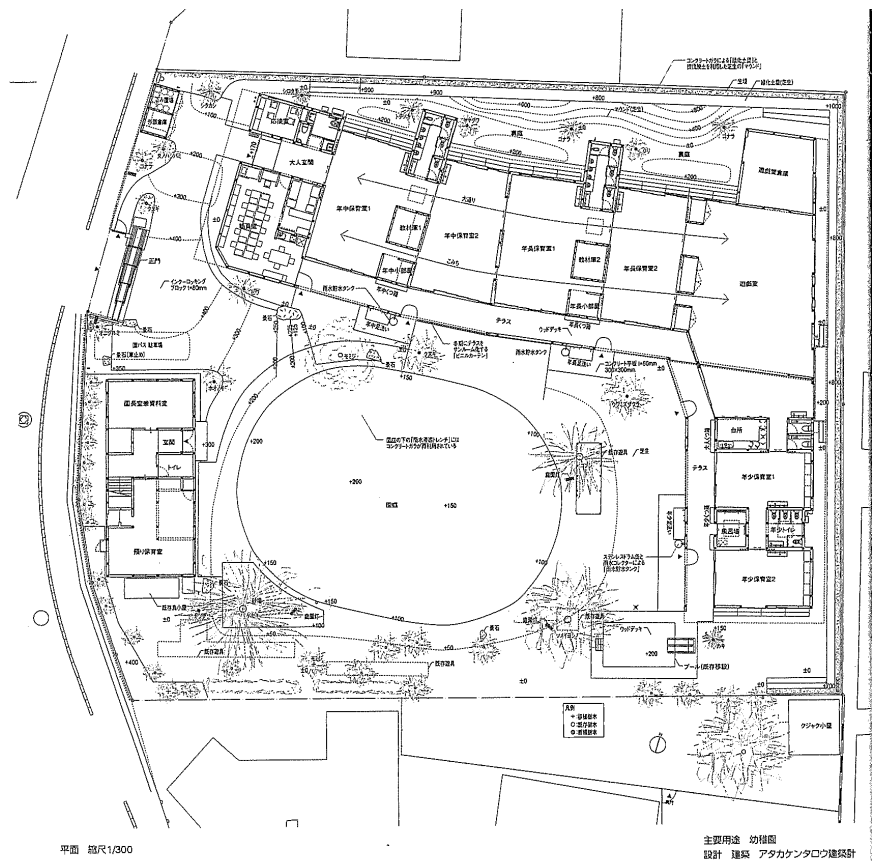
事例 No.	56
施設名	狭山ひかり幼稚園
運営法人	学校法人 石川学園
所在地	埼玉県狭山市鶴ノ木 7-18
設計者	アタカケンタロウ計画事務所
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	682.5
定員数（人）	160
掲載雑誌名	新建築 第86巻6号

活動別の活動場所



模式化平面図

雑誌掲載図面





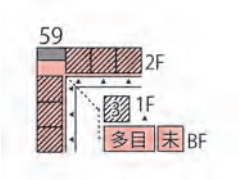
施設概要

事例 No.	59
施設名	日本女子大学付属豊明幼稚園
運営法人	学校法人 日本女子大学
所在地	東京都文京区目白台 1-18-14
設計者	日本女子大学住居学研究室
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	2145.2
定員数（人）	230
掲載雑誌名	新建築 第86巻6号

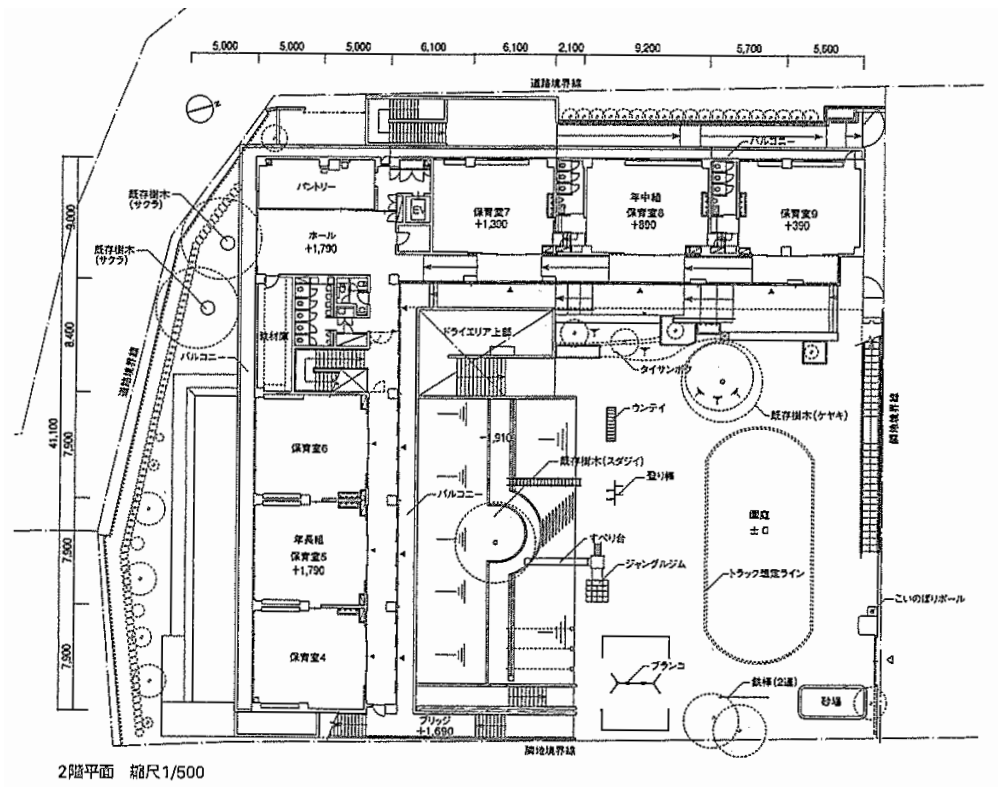
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面

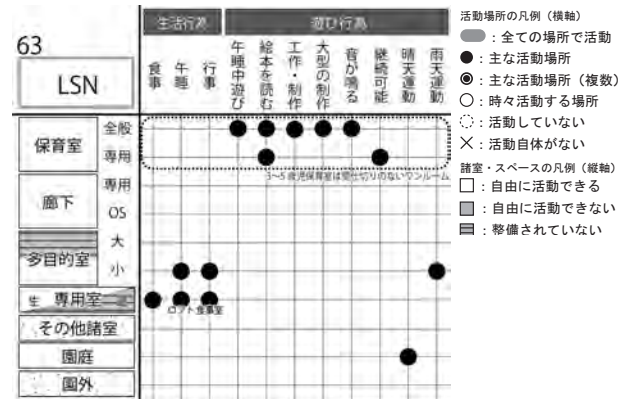




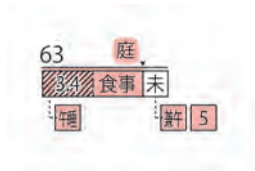
施設概要

事例 No.	63
施設名	みどりの保育園
運営法人	社会福祉法人 緑野会
所在地	東京都多摩市連光寺 3-57-2
設計者	石原健也+デネフェス計画研究所
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	983.62
定員数（人）	120
掲載雑誌名	新建築 第86巻6号

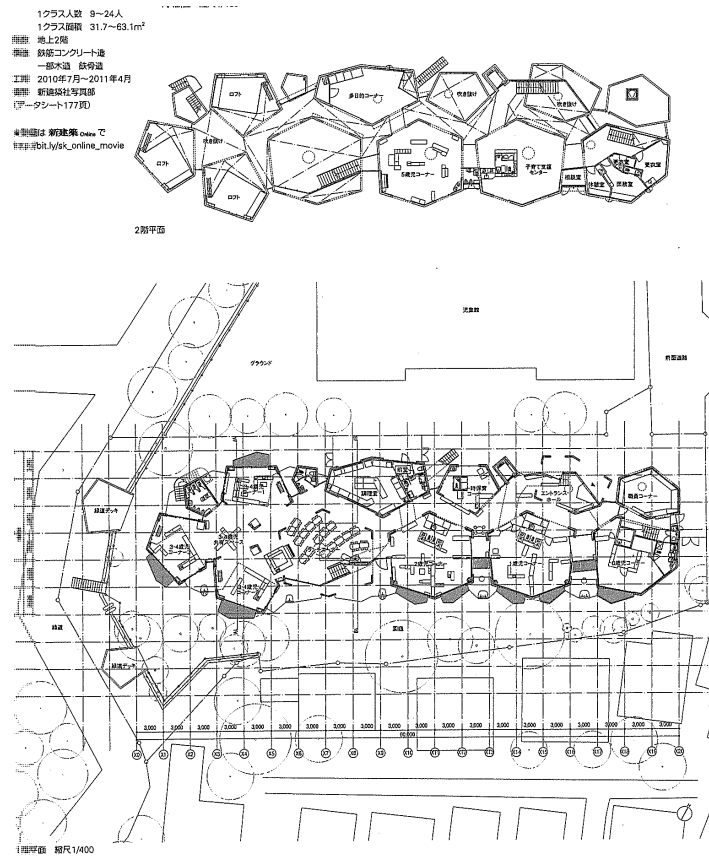
活動別の活動場所



模式化平面図



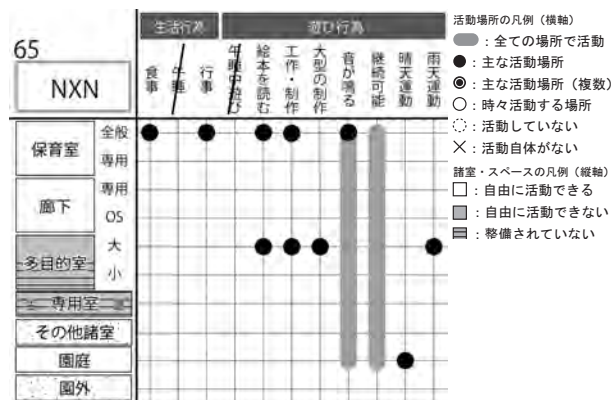
雑誌掲載図面



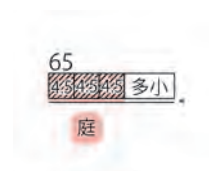
## 施設概要

事例 No.	65
施設名	むさしの幼稚園
運営法人	学校法人 むさしの学園
所在地	愛知県豊橋市石巻町間場 83-23
設計者	宮里龍治アトリエ
竣工年（西暦）	2011
延べ床面積（㎡）	738.1
定員数（人）	120
掲載雑誌名	新建築 第 87 巻 4 号

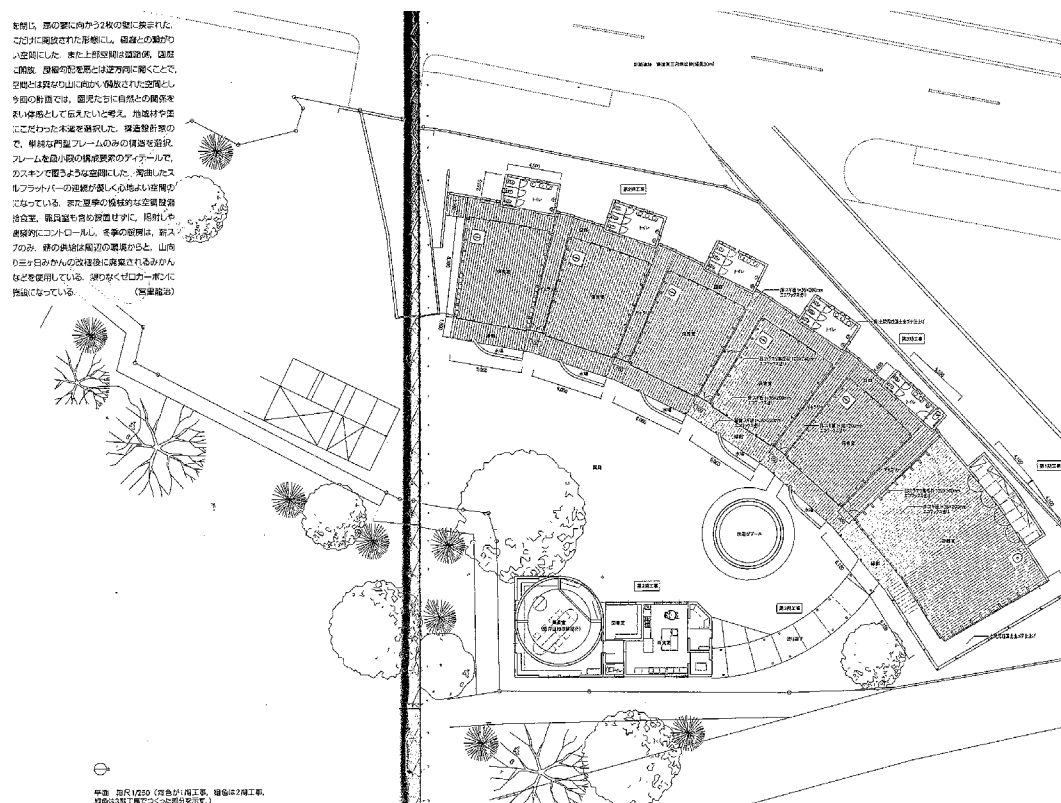
## 活動別の活動場所



模式化平面图



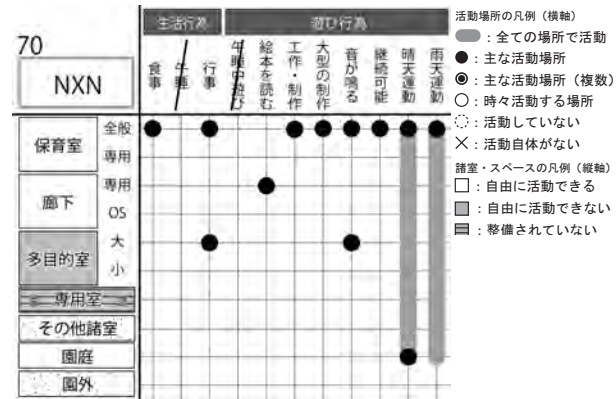
## 雑誌掲載図面



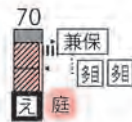
施設概要

事例 No.	70
施設名	牛田教会学園 あやめ幼稚園
運営法人	学校法人 牛田協会学園
所在地	広島県広島市東区牛田中 2-7-34
設計者	仲子盛進総合環境デザイン
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	307
定員数（人）	90
掲載雑誌名	新建築 90 巻 5 号

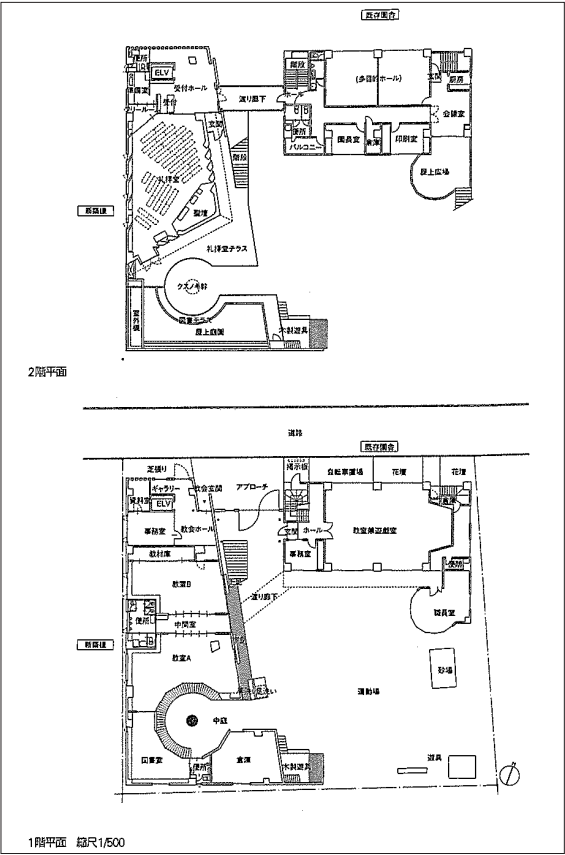
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面



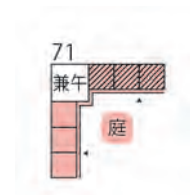
## 施設概要

事例 No.	71
施設名	井内保育所
運営法人	宮城県石巻市立
所在地	宮城県石巻市新栄一丁目 24
設計者	伊藤喜三郎建築研究所+メックデザインインターナショナル共同体
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	645.11
定員数（人）	100
掲載雑誌名	新建築 第87巻4号

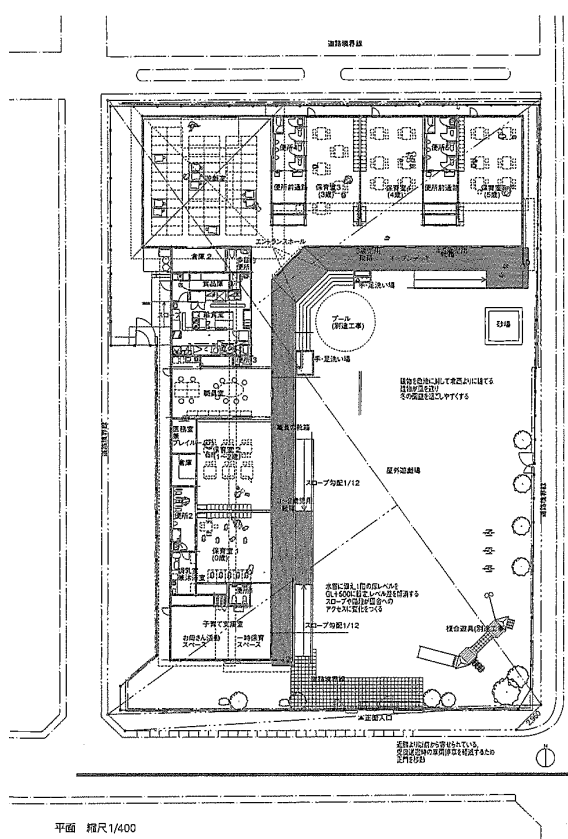
## 活動別の活動場所



模式化平面図

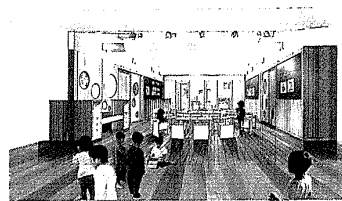


## 雑誌掲載図面



外観ハース、水当に設置。1階の床レベルをGL+0.00mmに設定。

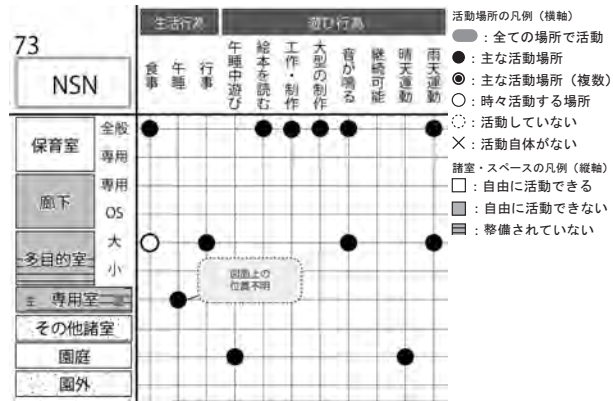
主要用途 保育所  
 設計 建築 伊藤喜三郎建築研究所+  
 メックデザインインターナショナル  
 共同体  
 構造 伊藤喜三郎建築研究所  
 +シエルター  
 施工 シエルター  
 敷地面積 1,920㎡  
 建築面積 698.19㎡  
 延床面積 645.11㎡  
 総児童数 100人 0～5歳  
 1クラス人数 6～28人  
 1クラス面積 34.44㎡ (0歳)  
 43.92㎡ (1・2歳合計)  
 50㎡ (3歳)  
 56㎡ (4・5歳)  
 階数 地上1階  
 構造 木造  
 工期 2011年12月～2012年6月  
 (データシート187頁)



施設概要

事例 No.	73
施設名	牡鹿地区保育所
運営法人	公益財団法人 日本ユニセフ協会
所在地	宮城県石巻市鮎川浜清崎山 7
設計者	城取建築設計事務所？フィンプラットフォーム
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	341.01
定員数（人）	54
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

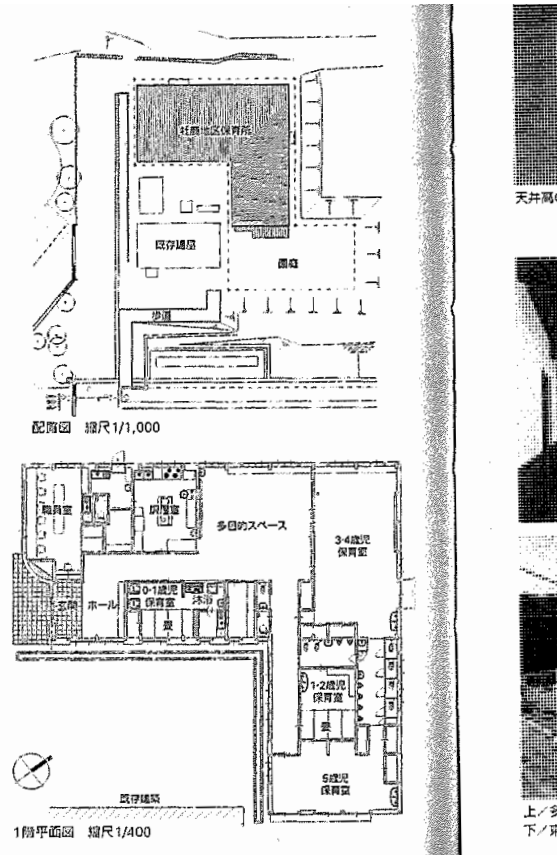
活動別の活動場所



模式化平面図



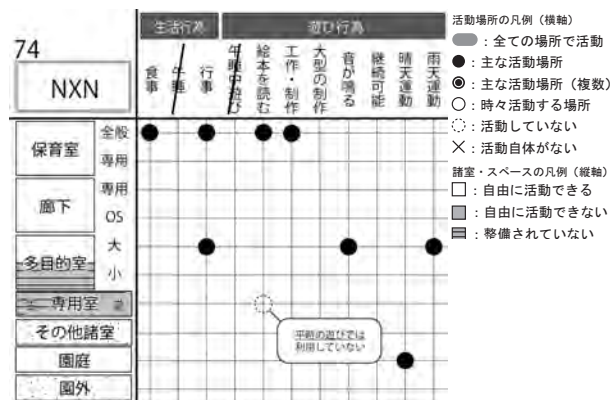
雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	74
施設名	さかがわ幼稚園
運営法人	静岡県掛川市立
所在地	静岡県掛川市伊達方 474-1
設計者	竹下一級建築士事務所
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	769.4
定員数（人）	90
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

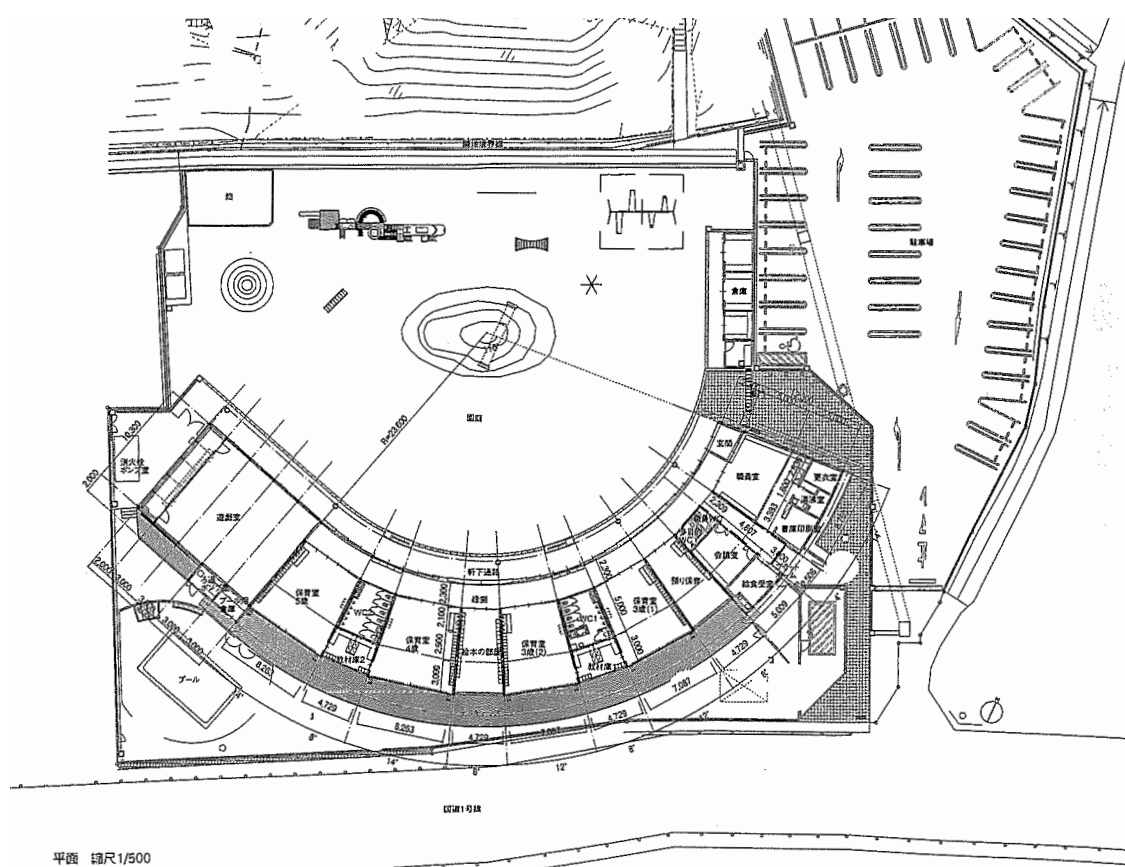
## 活動別の活動場所



模式化平面図



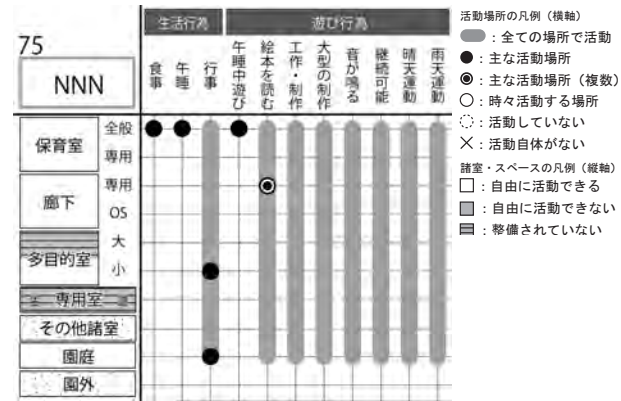
## 雑誌掲載図面



施設概要

事例 No.	75
施設名	WOOD ずだじこども園
運営法人	学校法人 頭蛇寺学園
所在地	静岡県浜松市南区恩地町 291
設計者	ナウハウス
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	997.43
定員数（人）	60
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

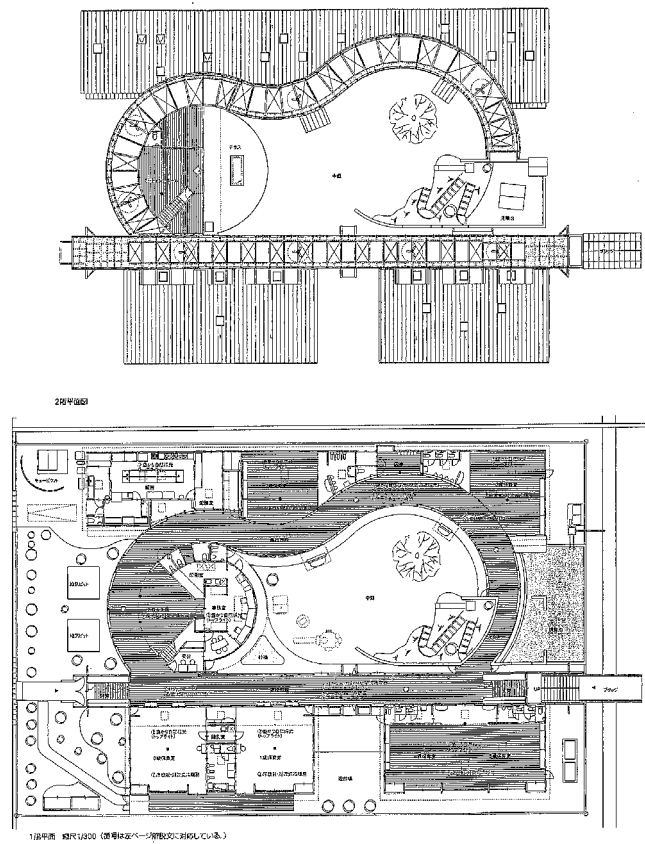
活動別の活動場所



模式化平面図



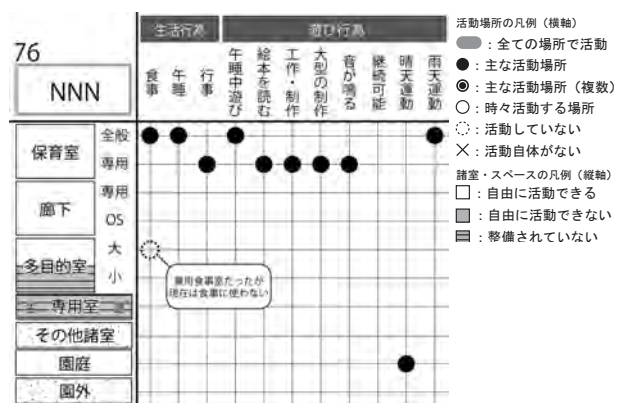
雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	76
施設名	ともだちの森保育園
運営法人	社会服法人 森友会
所在地	東京都国分寺市 1-22-41
設計者	北田修治+戸室太一
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	740.98
定員数（人）	70
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

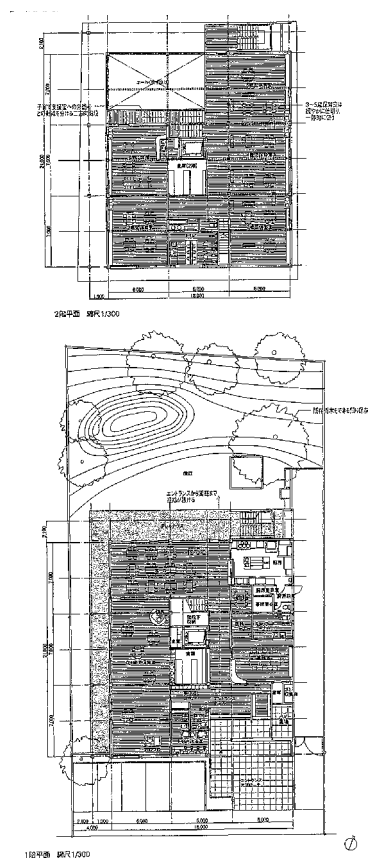
## 活動別の活動場所



模式化平面図



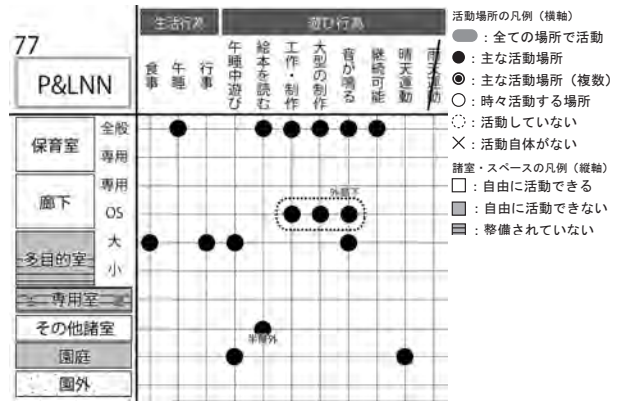
## 雑誌掲載図面



施設概要

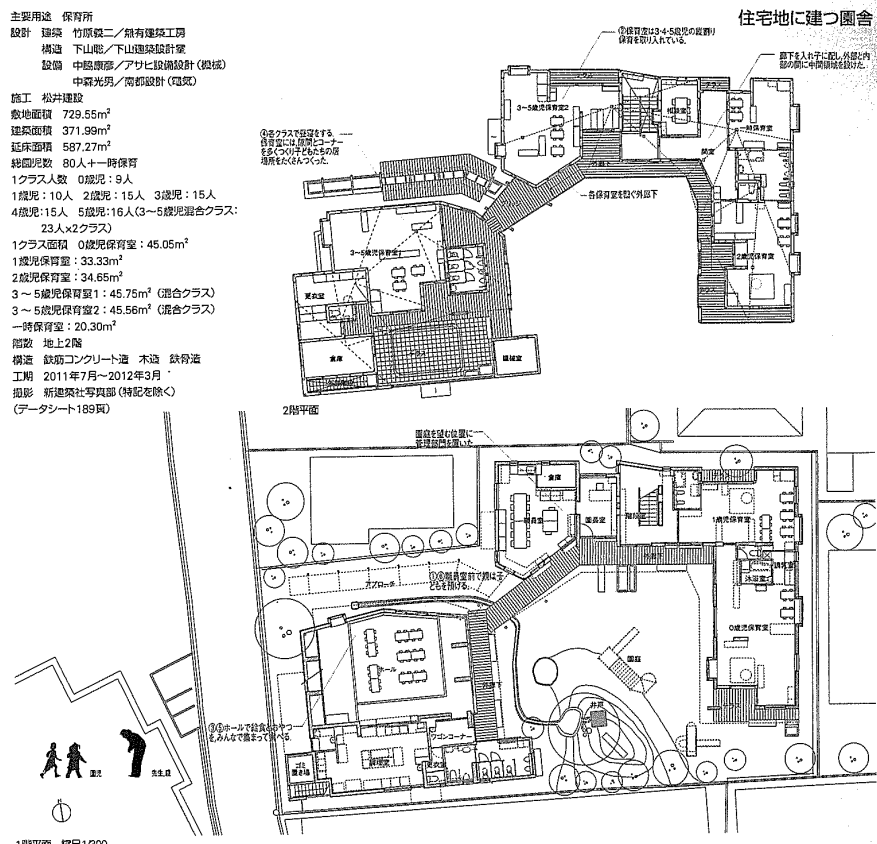
事例 No.	77
施設名	豊中あけぼの保育園
運営法人	学校法人あけぼの学園 / 社会福祉法人あけぼの事業福祉会
所在地	大阪府豊中市城山町 1-2-25
設計者	竹原義二／無有建築工房
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	587.27
定員数（人）	80
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

活動別の活動場所



模式化平面図

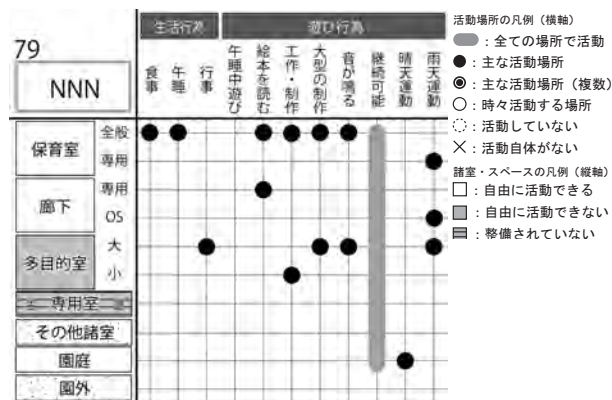
雑誌掲載図面



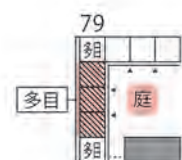
## 施設概要

事例 No.	79
施設名	宮田村こうめ保育園+東保育園改修
運営法人	長野県宮田村
所在地	長野県上伊那郡宮田村 6745 番地 1
設計者	暮らしと建築社+ iroirotoridori
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	1064.78
定員数（人）	210
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

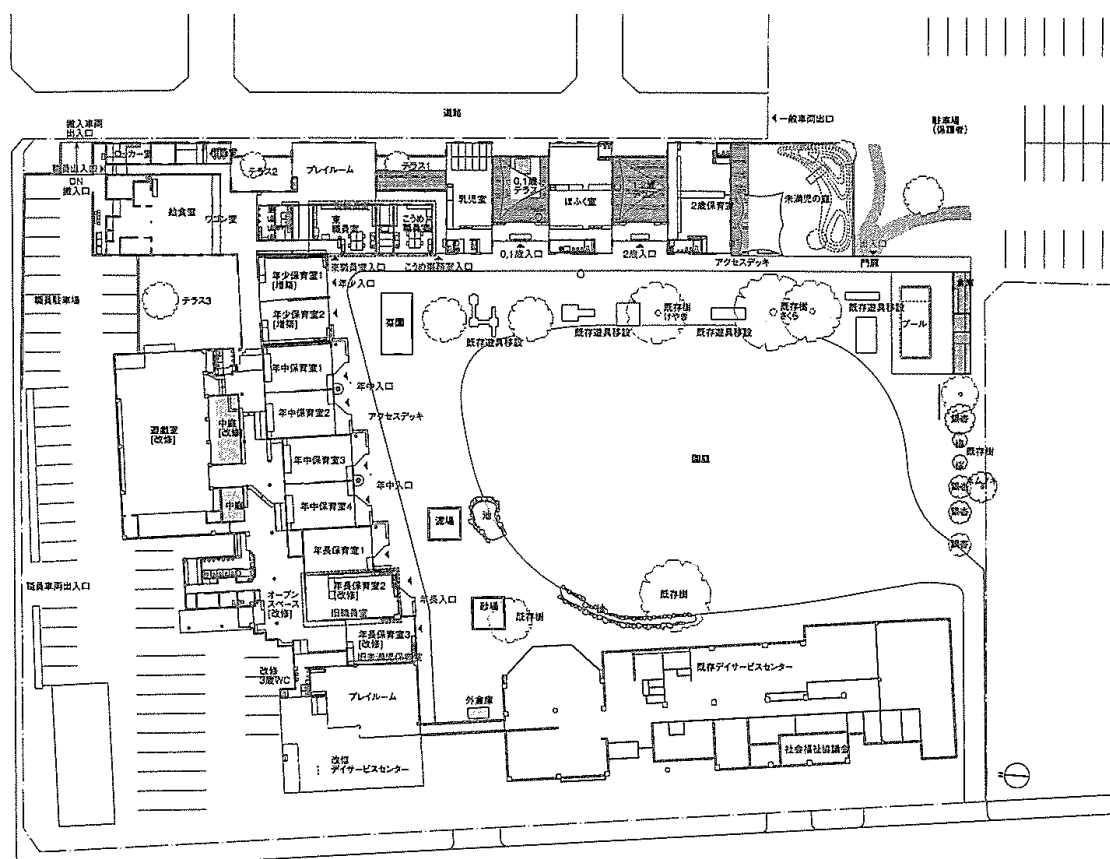
## 活動別の活動場所



模式化水平面図



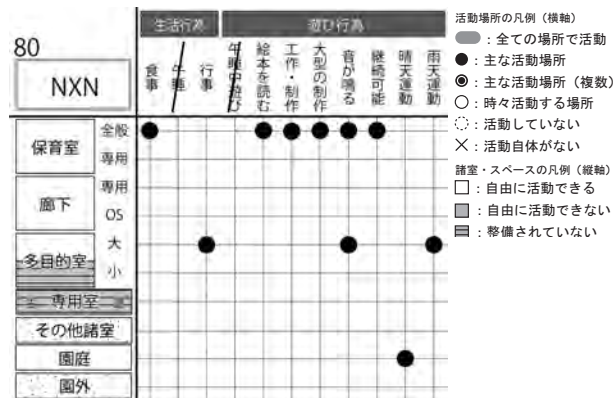
## 雑誌掲載図面



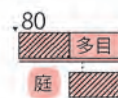
## 施設概要

事例 No.	80
施設名	フレンド少友幼稚園
運営法人	学校法人 少友学園
所在地	茨城県水戸市備前町 5-36
設計者	横須賀満夫建築設計事務所
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	402.2
定員数（人）	70
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

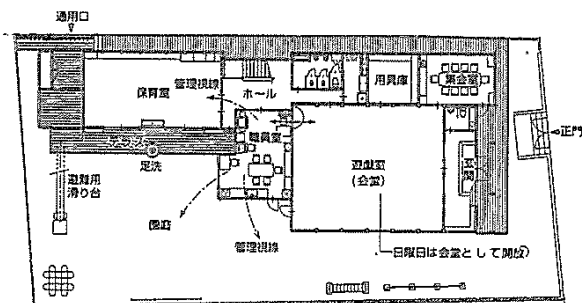
## 活動別の活動場所



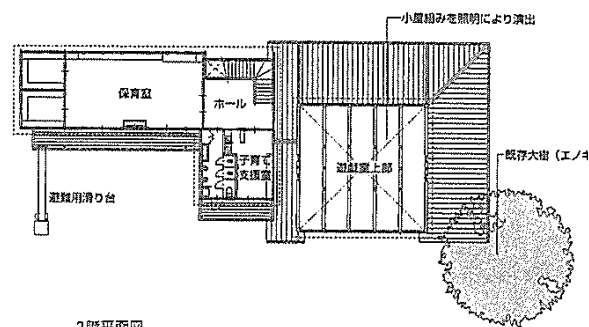
模式化平面図



## 雑誌掲載図面



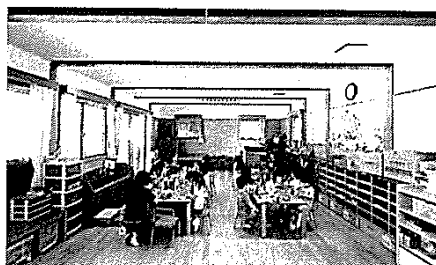
配置・1階平面図 縮尺1/500



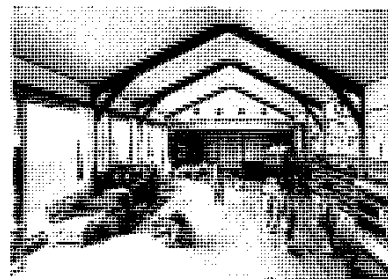
2階平面図



上/3つの屋根の造り P.164上/東側外観 P.164下/遊戯室



1階保育室

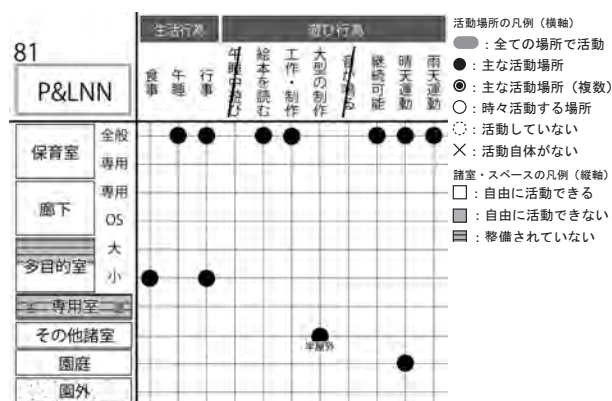


2階保育室

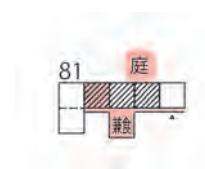
## 施設概要

事例 No.	81
施設名	レイモンド庄中保育園
運営法人	社会福祉法人 檸檬会
所在地	愛知県尾張旭市庄中町 1-2-8
設計者	アーキビジョン広谷スタジオ
竣工年（西暦）	2012
延べ床面積（㎡）	838
定員数（人）	140
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

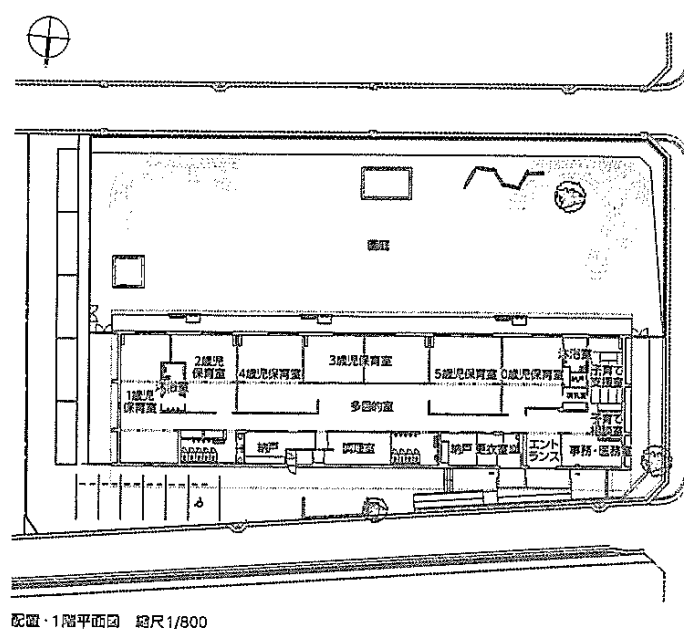
## 活動別の活動場所



模式化平面図



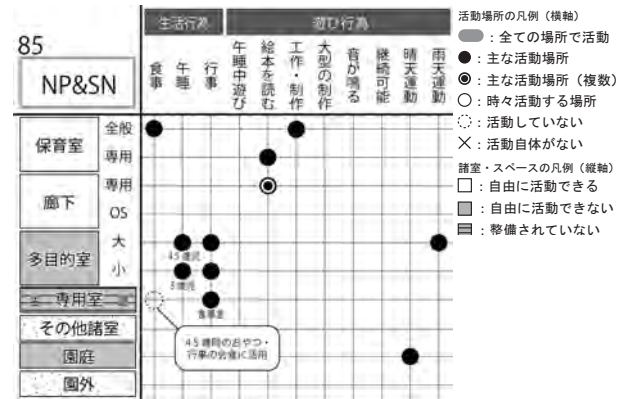
## 雑誌掲載図面



施設概要

事例 No.	85
施設名	境こども園
運営法人	公益財団法人 武蔵野市こども教会
所在地	東京都武蔵野市境 4-11-6
設計者	国設計
竣工年（西暦）	2013
延べ床面積（㎡）	1672.29
定員数（人）	107
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

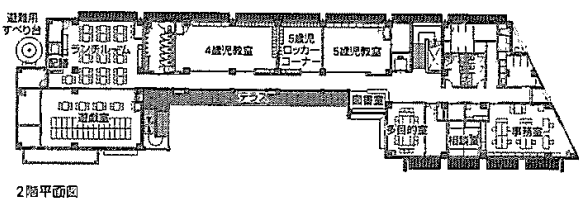
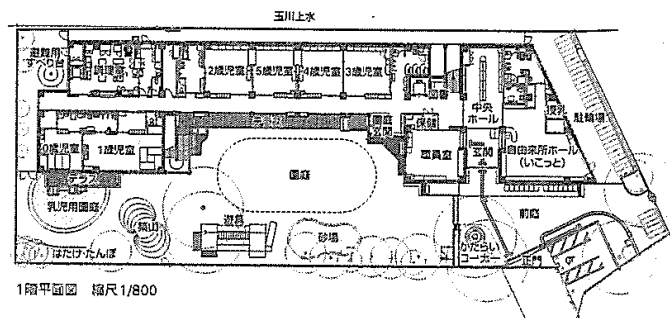
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面



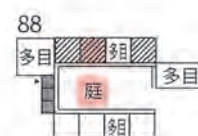
## 施設概要

事例 No.	88
施設名	庄原保育所
運営法人	庄原市
所在地	広島県庄原市三日市町2-4
設計者	大畑連合建築設計
竣工年（西暦）	2013
延べ床面積（㎡）	2311.4
定員数（人）	251
掲載雑誌名	近代建築 68巻6号

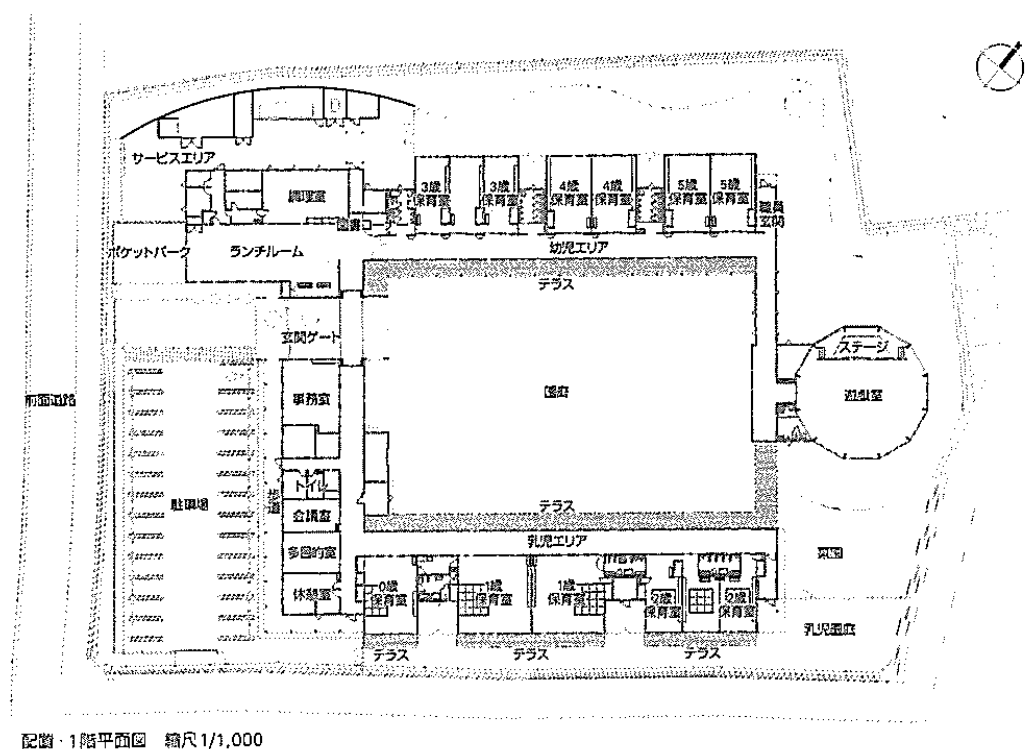
## 活動別の活動場所



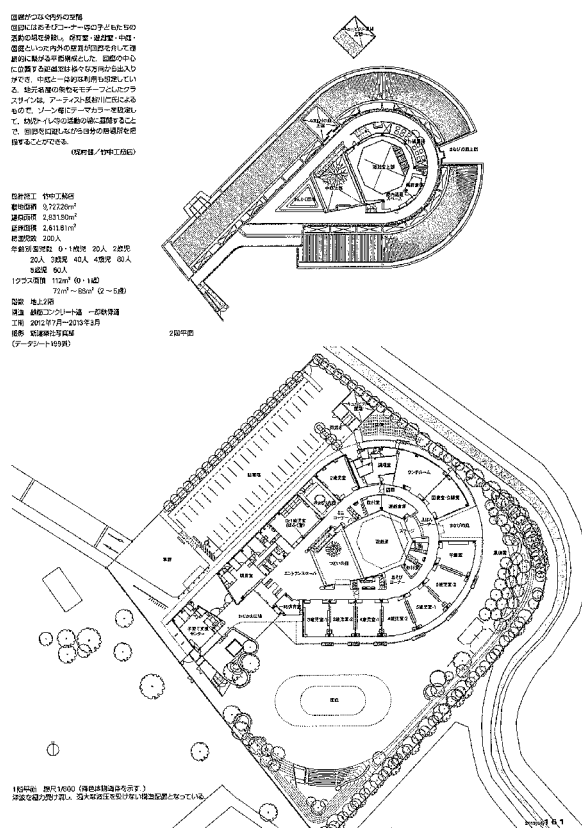
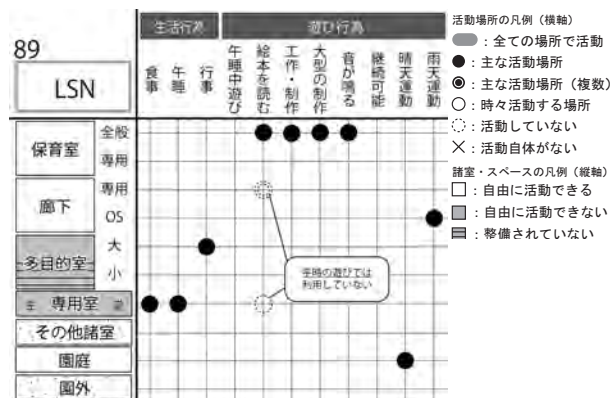
模式化平面図



## 雑誌掲載図面



事例 No.	89
施設名	しらはたこども園
運営法人	千葉県山武市立
所在地	千葉県山武市白幡 1919
設計者	竹中工務店
竣工年（西暦）	2013
延べ床面積（㎡）	2611.61
定員数（人）	200
掲載雑誌名	新建築 88 巻 4 号

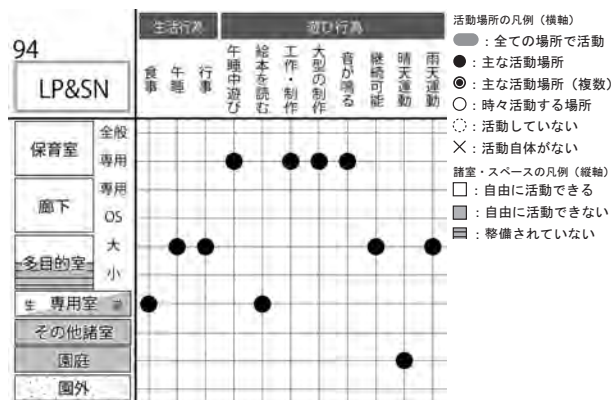




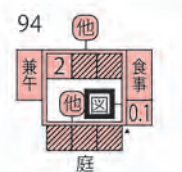
## 施設概要

事例 No.	94
施設名	なるとうこども園
運営法人	山武市
所在地	千葉県山武市成東 210 番地 3
設計者	日総建 一級建築士事務所
竣工年（西暦）	2013
延べ床面積（㎡）	2785.81
定員数（人）	240
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

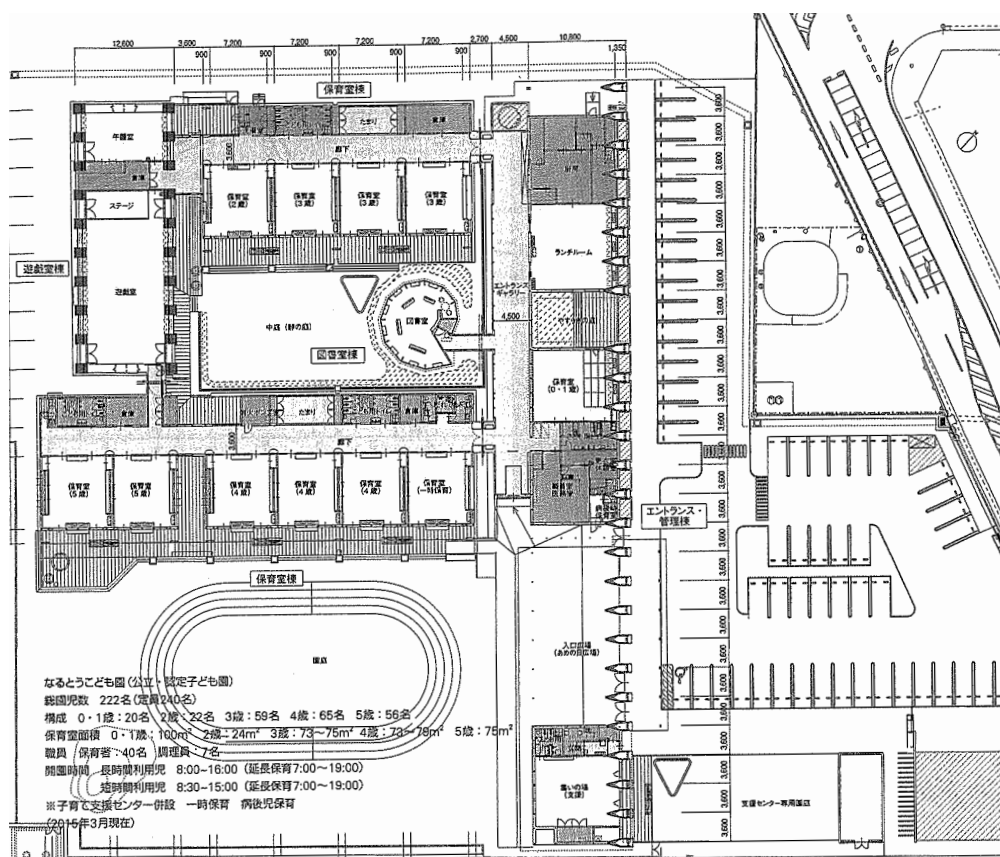
## 活動別の活動場所



模式化平面図



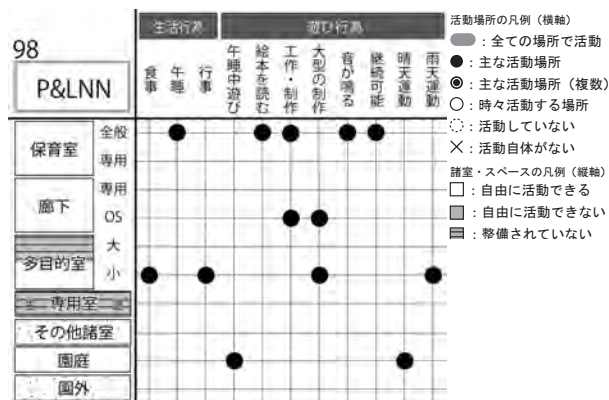
## 雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	98
施設名	レイモンド向日保育園
運営法人	社会福祉法人 檸檬会
所在地	京都府向日市森本町石田 1 3-3
設計者	アーキビジョン広谷スタジオ
竣工年（西暦）	2013
延べ床面積（㎡）	1207.96
定員数（人）	180
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

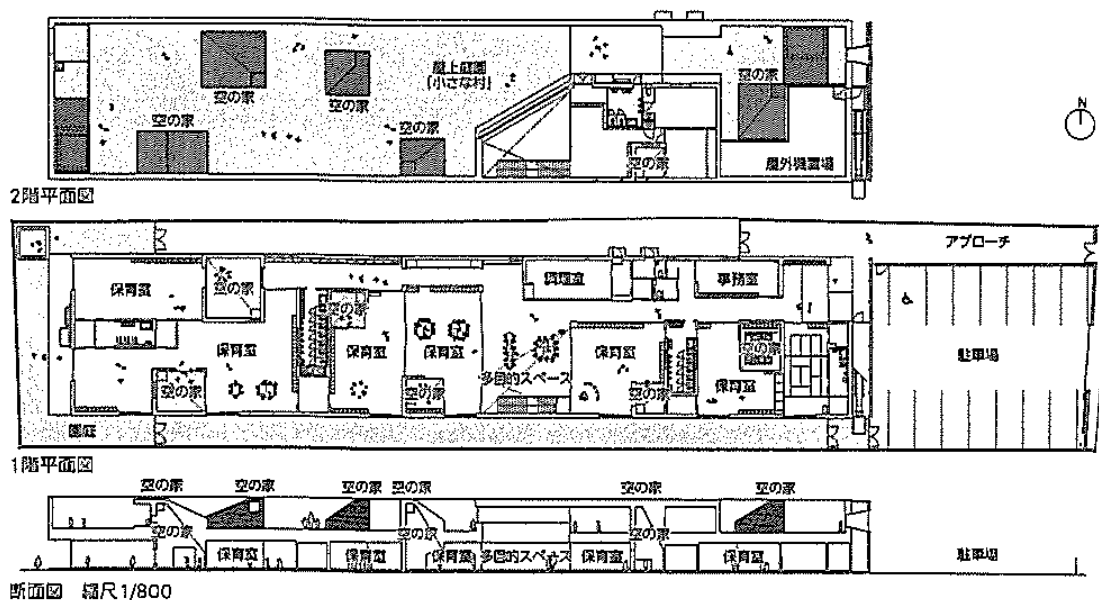
## 活動別の活動場所



模式化平面図



## 雑誌掲載図面



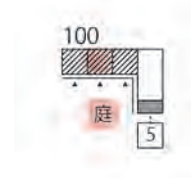
施設概要

事例 No.	100
施設名	育良保育園
運営法人	長野県飯田市
所在地	長野県飯田市北方 130
設計者	松島潤平建築設計事務所＋桂建築設計事務所
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	1081.42
定員数（人）	140
掲載雑誌名	新建築 90 巻 5 号

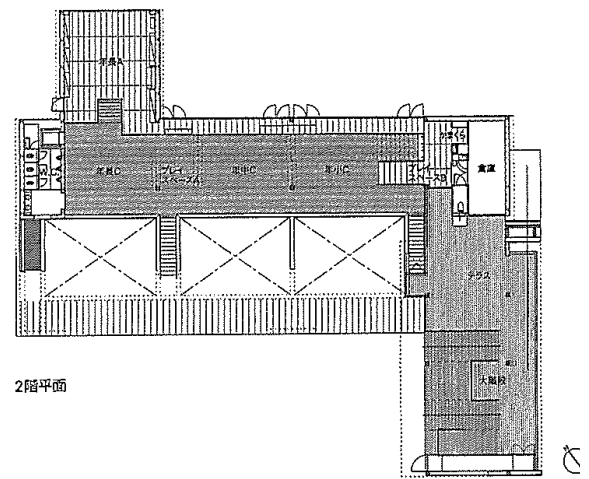
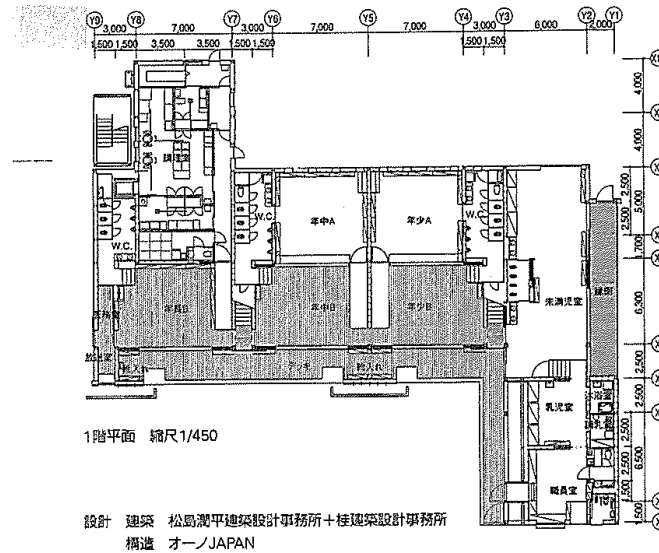
活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面



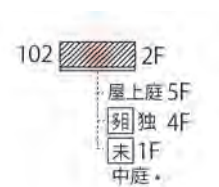
## 施設概要

事例 No.	102
施設名	上町みどり保育園
運営法人	社会福祉法人 慶生会
所在地	大阪府大阪市中心区上町 1-20-6
設計者	IAO 竹田設計
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	927.86
定員数（人）	90
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

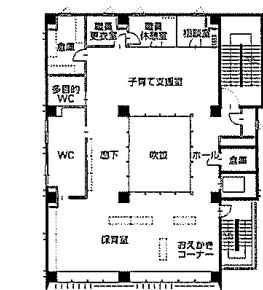
## 活動別の活動場所



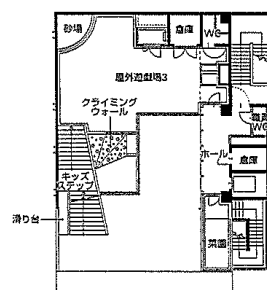
模式化平面図



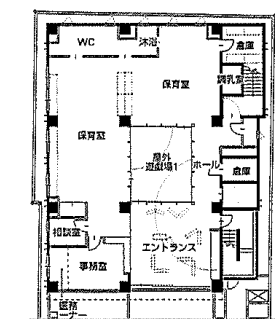
## 雑誌掲載図面



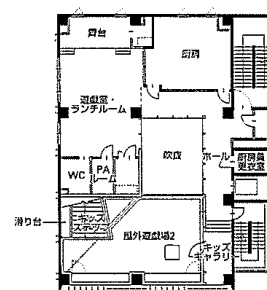
2階平面図



5階平面図

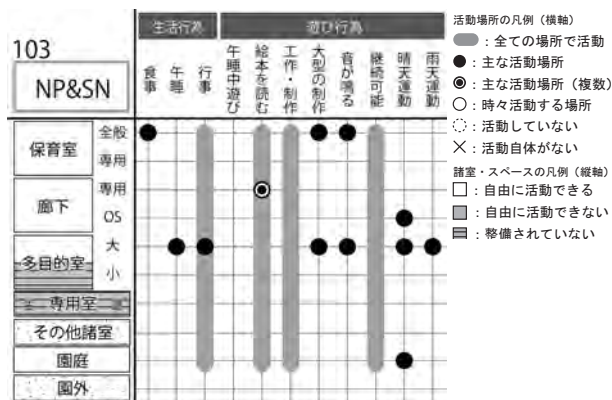


1階平面図 縮尺 1/400

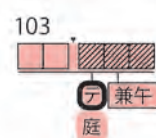


4階平面図

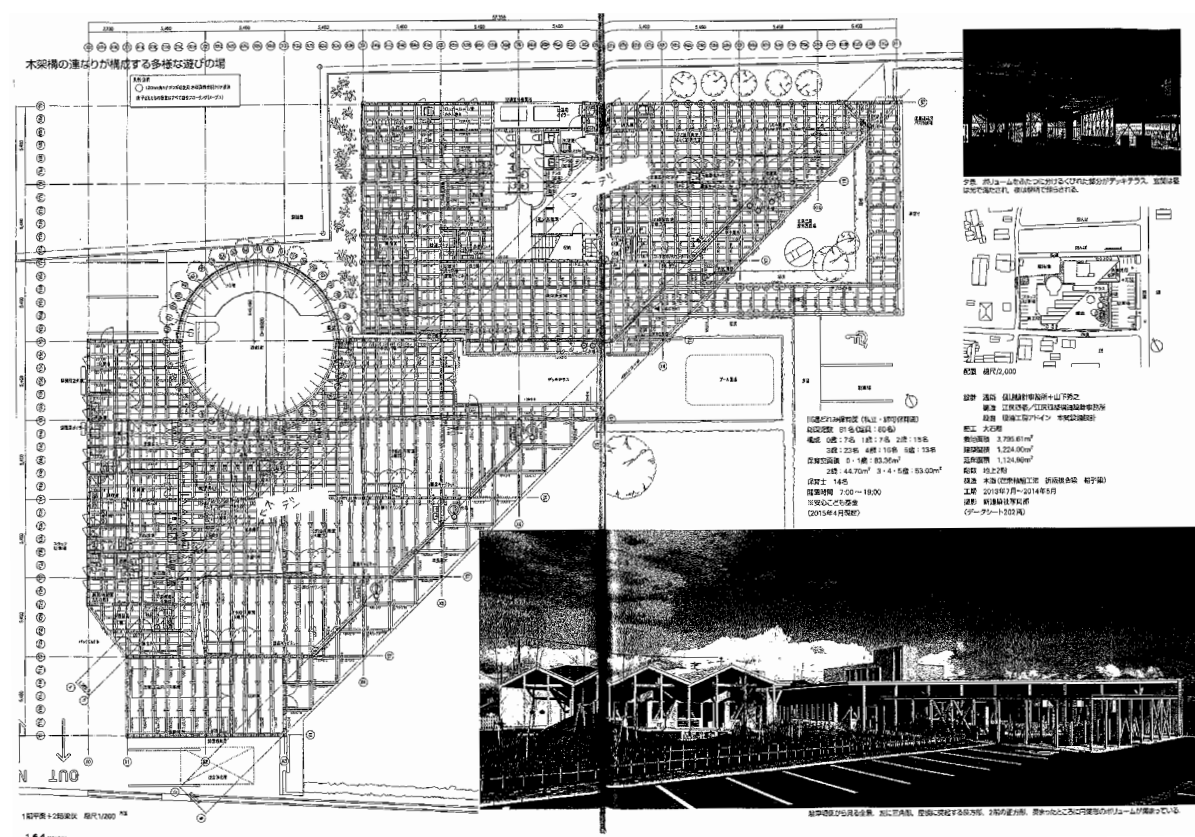
事例 No.	103
施設名	川通どれみ保育園
運営法人	社会福祉法人　どれみ福祉会
所在地	新潟県三条市尾崎 955-2
設計者	長建設計事務所＋山下秀之＋江尻憲泰
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	1124.99
定員数（人）	80
掲載雑誌名	新建築　90 巻 5 号



### 模式化平面图



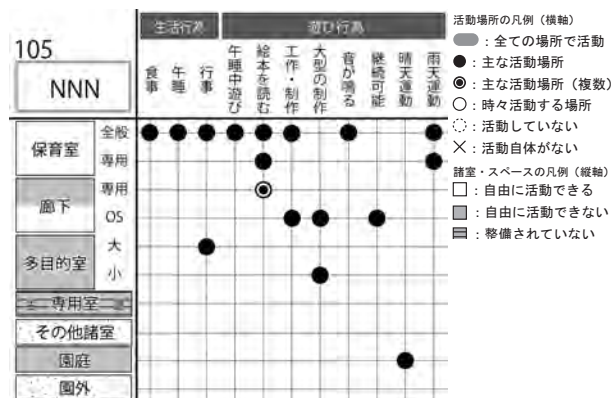
## 雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	105
施設名	北幼保育園
運営法人	大垣市
所在地	岐阜県大垣市室村町1丁目42番地8
設計者	東畑建築事務所
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	3571.63
定員数（人）	300
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

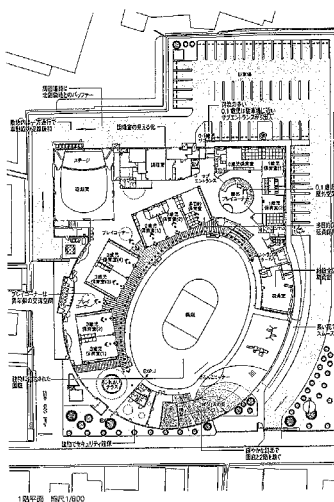
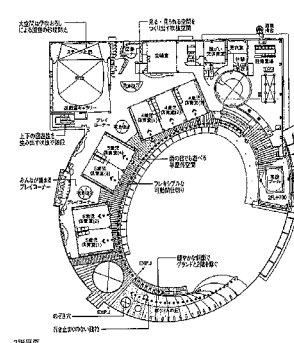
## 活動別の活動場所



模式化水平面図



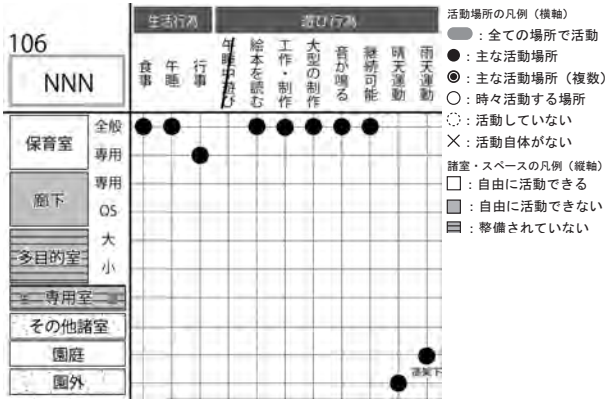
## 雑誌掲載図面



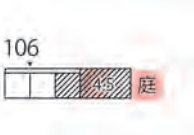
施設概要

事例 No.	106
施設名	グローバルキッズ武蔵境園
運営法人	(株) グローバルキッズ
所在地	東京都武蔵野市境南町 4-2-19
設計者	石嶋設計室
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	398.24
定員数（人）	62
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

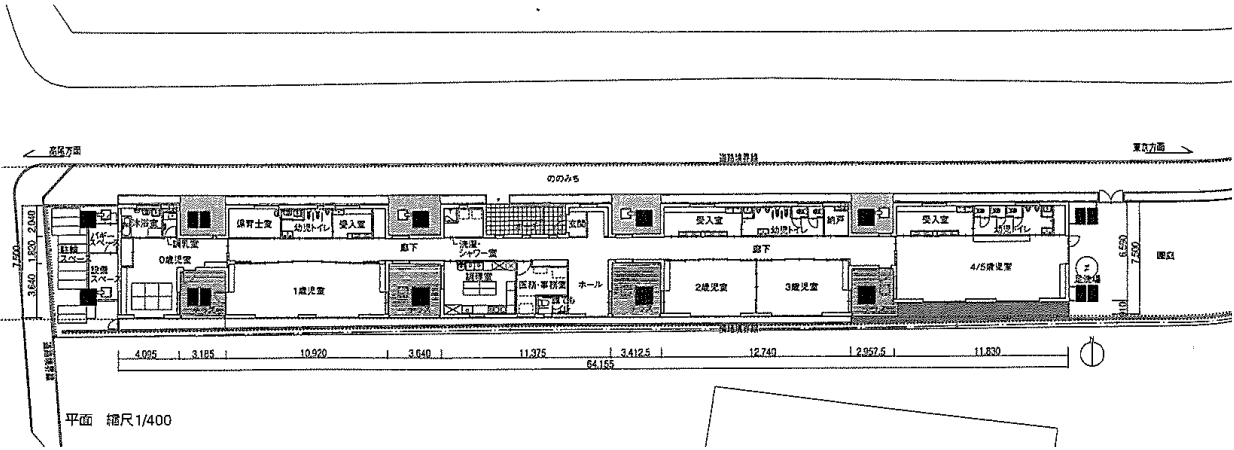
活動別の活動場所



模式化平面図



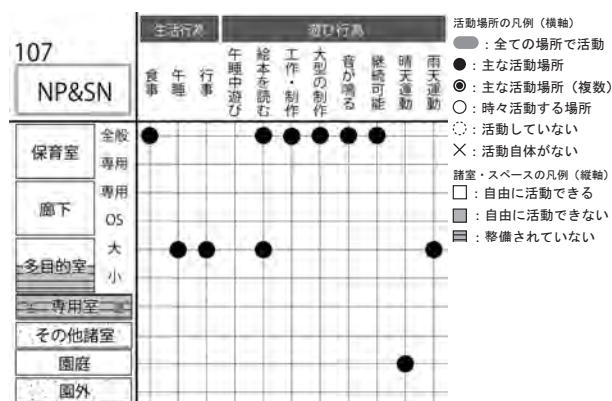
雑誌掲載図面



## 施設概要

事例 No.	107
施設名	市が洞保育園
運営法人	株式会社 ポピンズ
所在地	愛知県長久手市市が洞 1-401
設計者	Can (伊藤恭行)
竣工年(西暦)	2014
延べ床面積 (㎡)	1935.03
定員数 (人)	133
掲載雑誌名	近代建築 68 巻 6 号

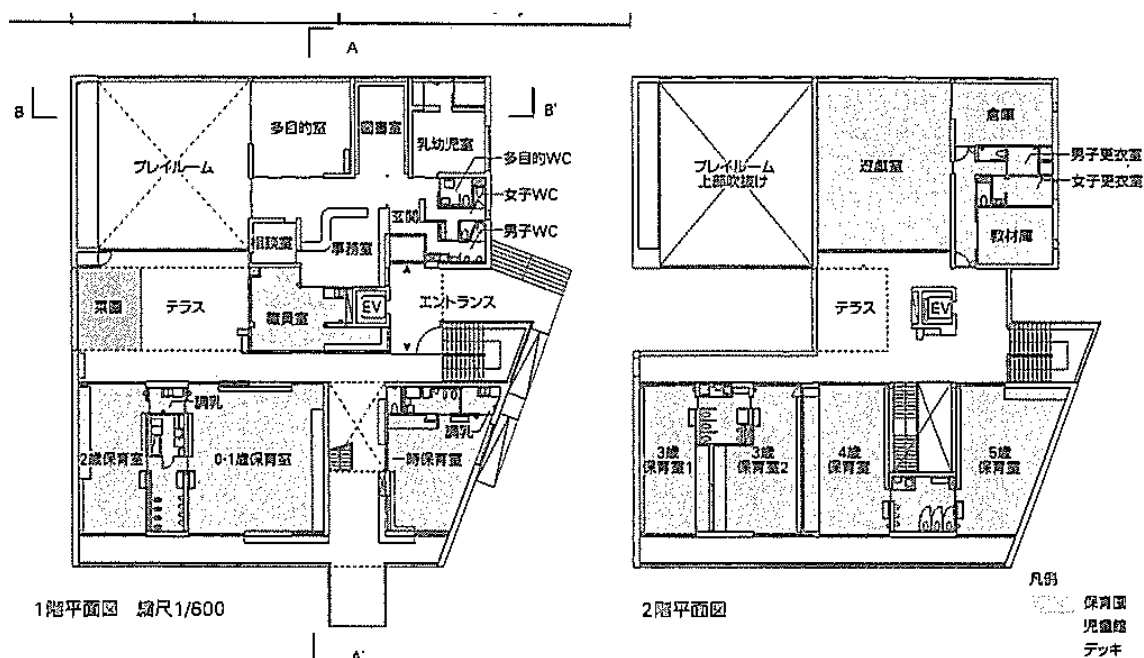
## 活動別の活動場所



模式化平面図

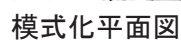


## 雑誌掲載図面



---

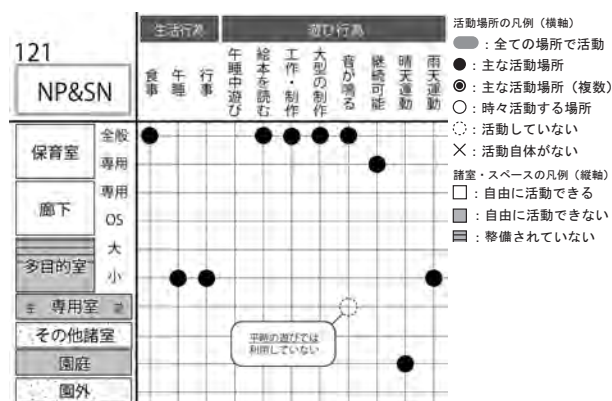
---



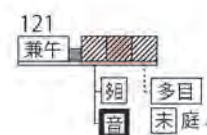
## 施設概要

事例 No.	121
施設名	杜のひかりこども園
運営法人	社会福祉法人 正紀会
所在地	愛知県豊田市大清水町 100-1
設計者	D. I. G Architects + 久田屋建築研究所
竣工年（西暦）	2014
延べ床面積（㎡）	1949.89
定員数（人）	211
掲載雑誌名	新建築 90 巻 5 号

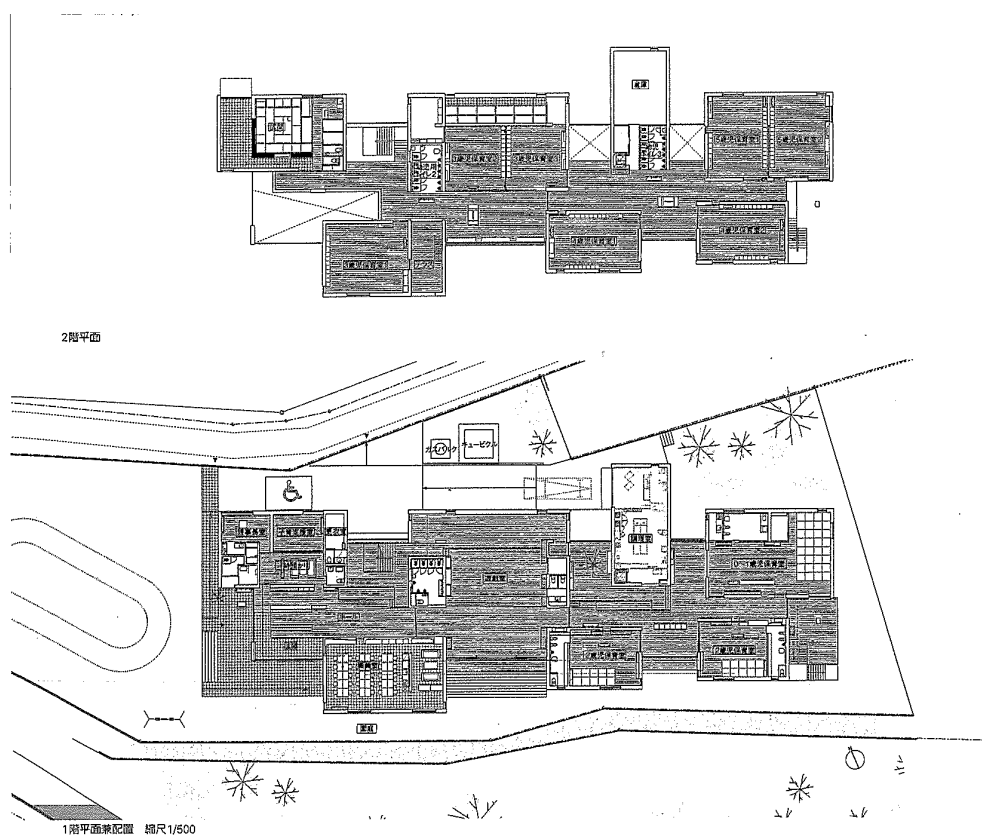
## 活動別の活動場所



模式化平面図



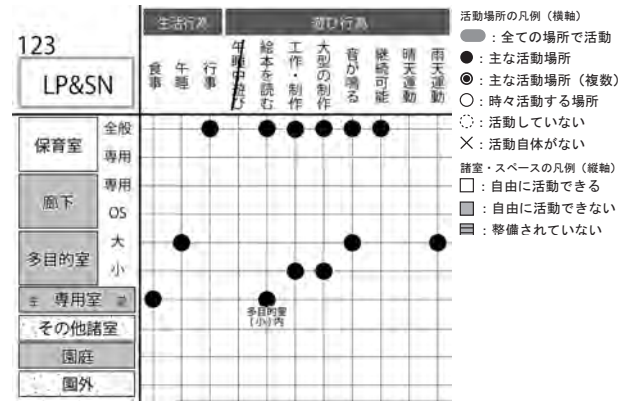
## 雑誌掲載図面



施設概要

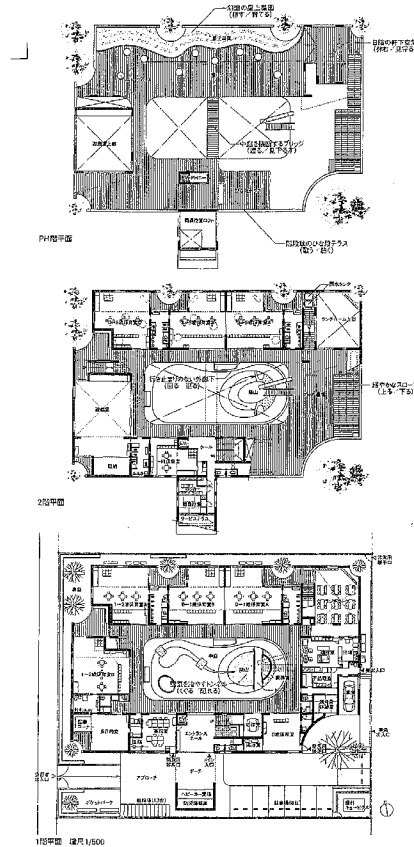
事例 No.	123
施設名	あまねの杜保育園
運営法人	社会福祉法人 南生会
所在地	千葉千葉県船橋市行田 2-9-10
設計者	相坂研介設計アトリエ
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	1493.54
定員数（人）	169
掲載雑誌名	新建築 90 巻 5 号

活動別の活動場所



模式化平面図

雑誌掲載図面

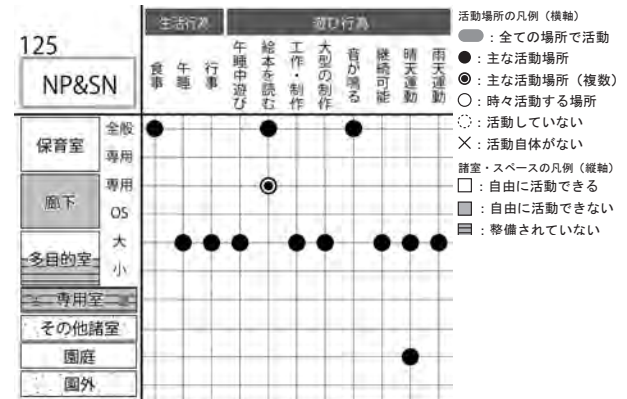




施設概要

事例 No.	125
施設名	かまいしこども園
運営法人	社会福祉法人 愛泉会
所在地	岩手県釜石市天神町 5-13
設計者	平田晃久建築設計事務所
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	917.72
定員数（人）	105
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

活動別の活動場所



模式化平面図



雑誌掲載図面

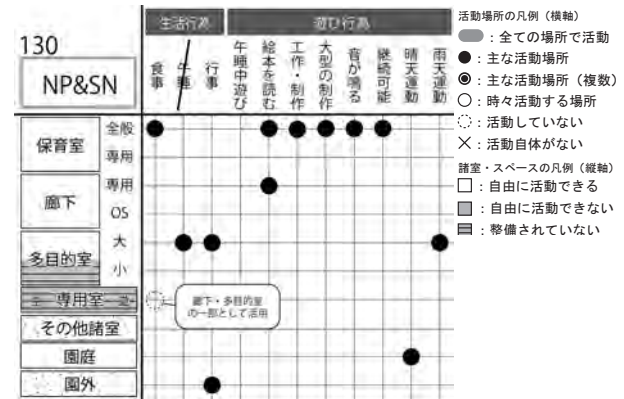




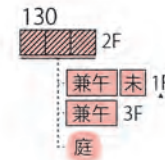
施設概要

事例 No.	130
施設名	昭和女子大学附属昭和こども園
運営法人	学校法人 昭和女子大学
所在地	東京都世田谷区太子堂 1-7-57
設計者	納谷学＋納谷新／納谷建築設計事務所
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	2898.52
定員数（人）	223
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

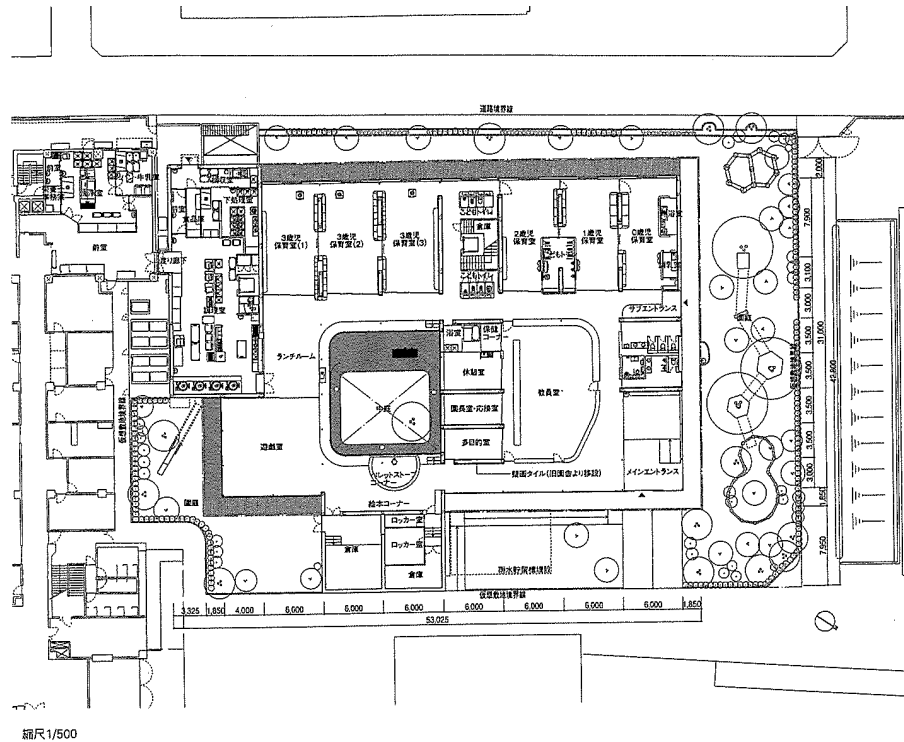
活動別の活動場所



模式化平面図



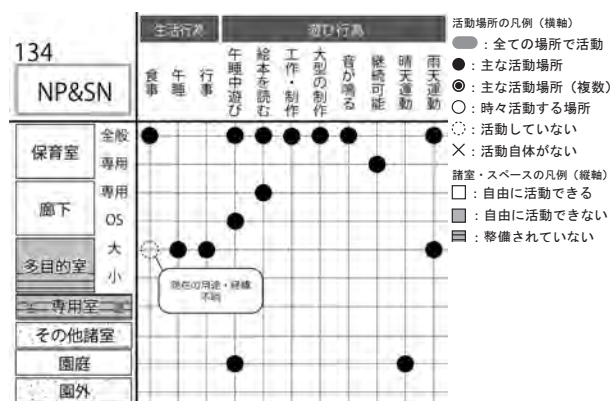
雑誌掲載図面



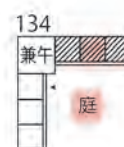
## 施設概要

事例 No.	134
施設名	とうわこども園
運営法人	福島県二本松市
所在地	福島県二本松市針道字大町西 46
設計者	辺見美津男設計室
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	1226.13
定員数（人）	120
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

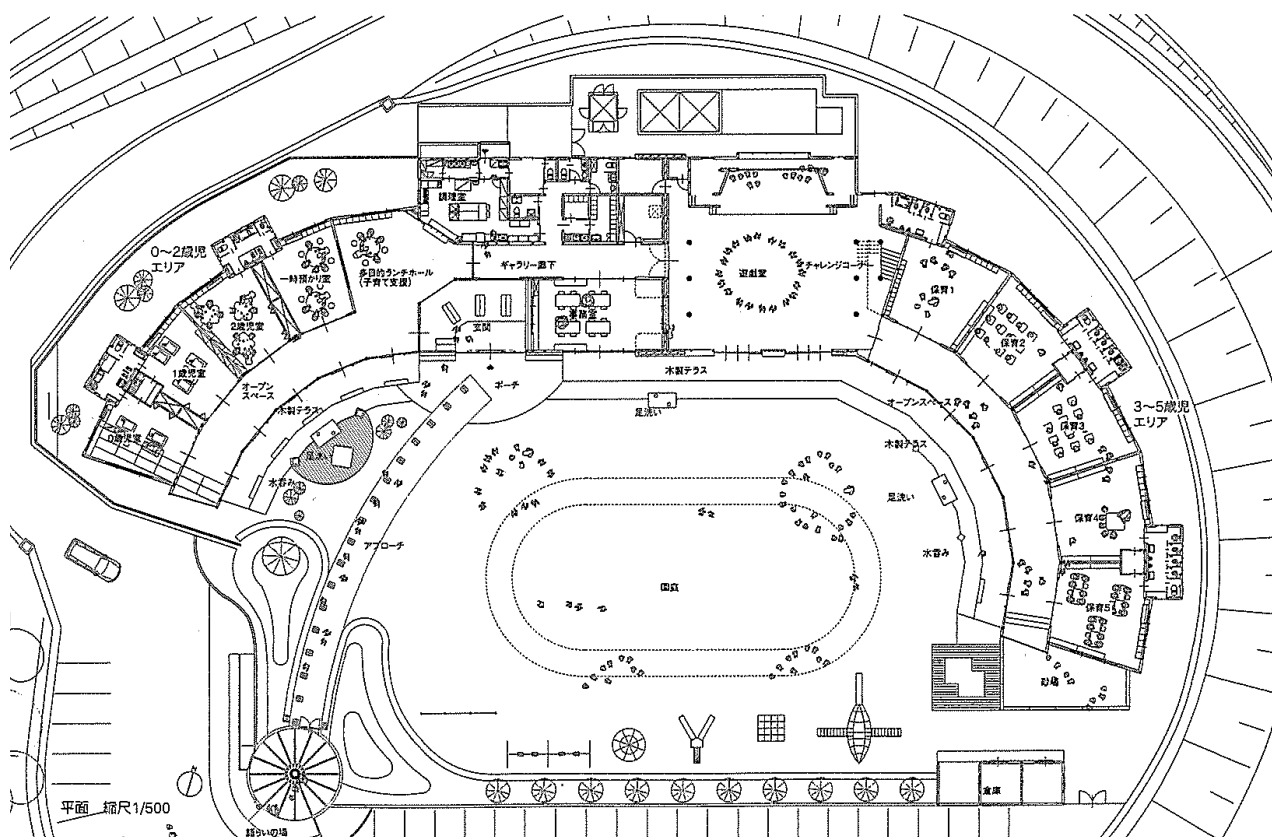
## 活動別の活動場所



模式化平面図



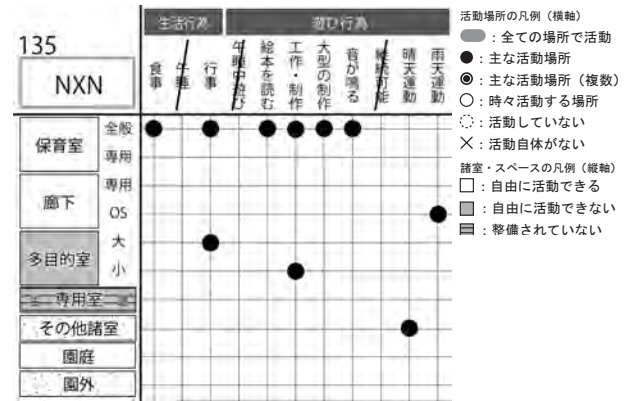
## 雑誌掲載図面



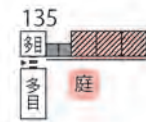
施設概要

事例 No.	135
施設名	所沢ひまわり幼稚園
運営法人	学校法人 太陽学園
所在地	埼玉県所沢市三ヶ島 4-2282
設計者	堀場弘＋工藤和美／シーラカンス K&H
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	378.1
定員数（人）	320
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

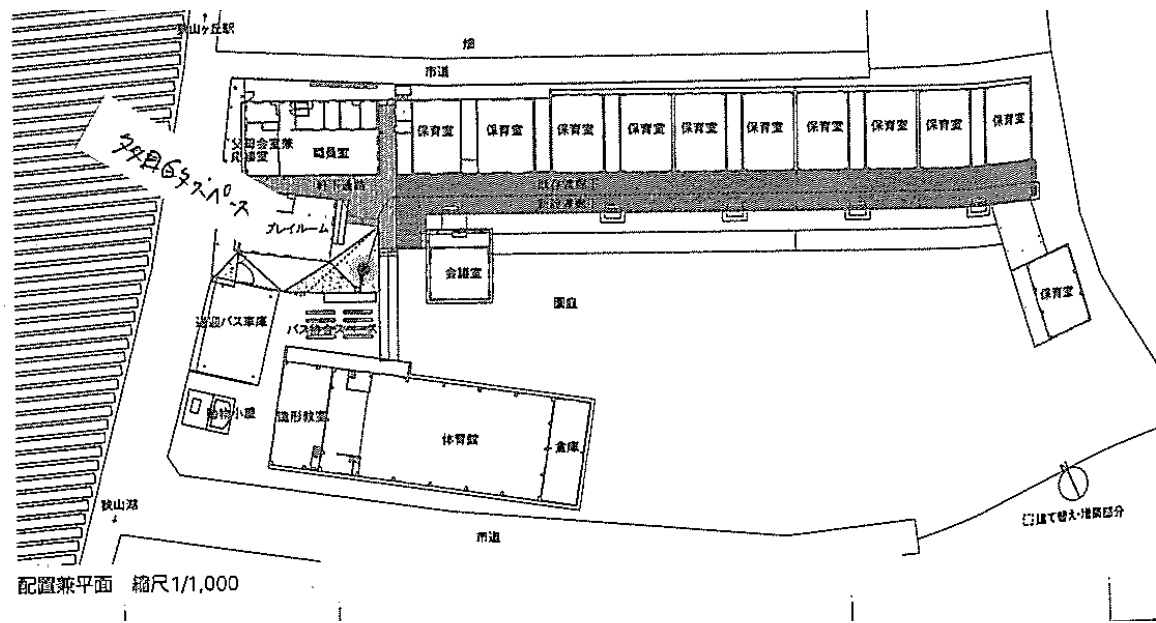
活動別の活動場所



模式化平面図



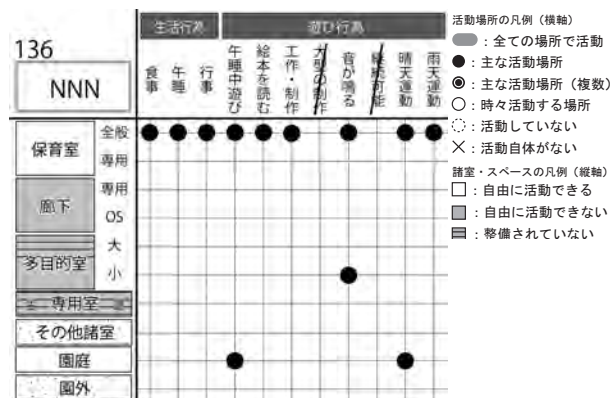
雑誌掲載図面



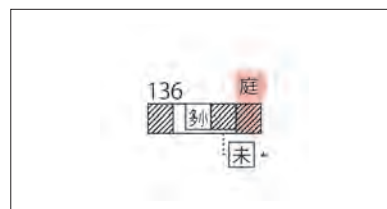
## 施設概要

事例 No.	136
施設名	原西保育園
運営法人	社会福祉法人
所在地	福岡県福岡市早良区小田部 3-24-15
設計者	工藤和美＋堀場弘／シーラカンス K&H
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	958.43
定員数（人）	156
掲載雑誌名	新建築 90 巻 5 号

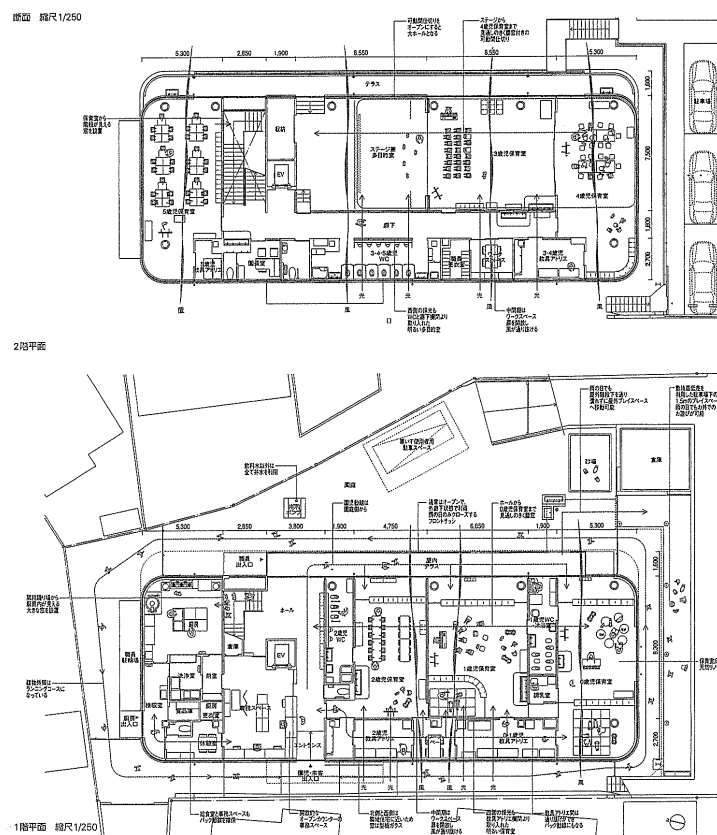
## 活動別の活動場所



## 模式化平面図



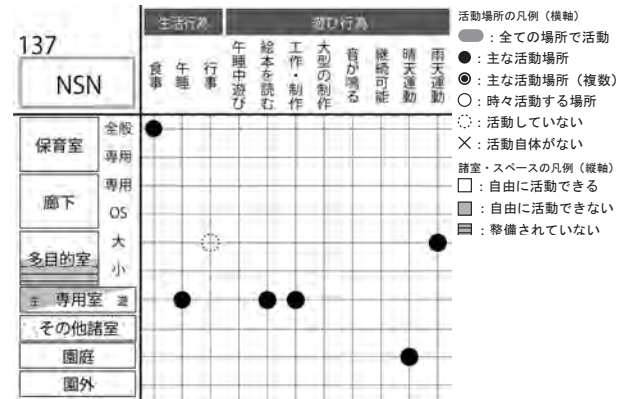
## 雑誌掲載図面



施設概要

事例 No.	137
施設名	東松認定こども園げんき
運営法人	埼玉県東松市
所在地	埼玉県東松山市石橋 1761
設計者	谷口麻里子／タニグチアトリエ＋梶浦暁／梶浦暁建築設計事務所
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	591.46
定員数（人）	105
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

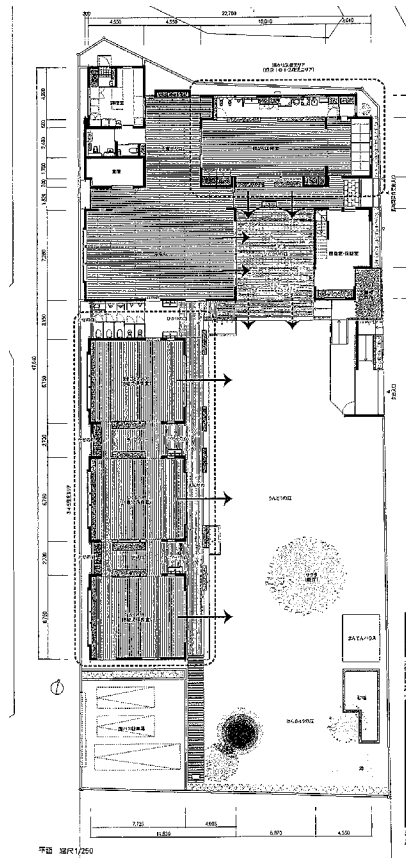
活動別の活動場所



模式化平面図



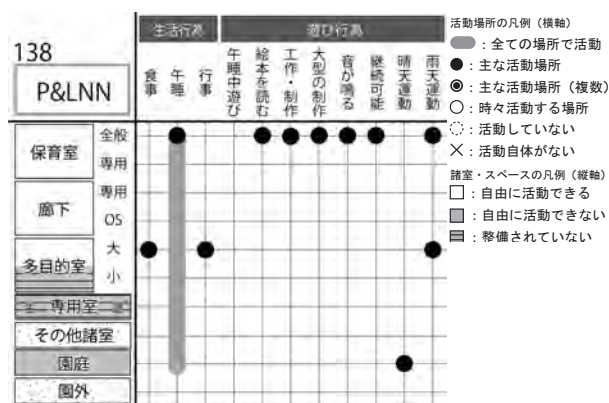
雑誌掲載図面



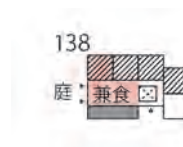
## 施設概要

事例 No.	138
施設名	星の杜こども園
運営法人	社会福祉法人 愛心会
所在地	兵庫県神戸市北区鹿の子台南町 1-2-15
設計者	ジャクエツ環境事業+アトリエ 9 建築研究所
竣工年（西暦）	2015
延べ床面積（㎡）	683.97
定員数（人）	95
掲載雑誌名	新建築 91 巻 9 号

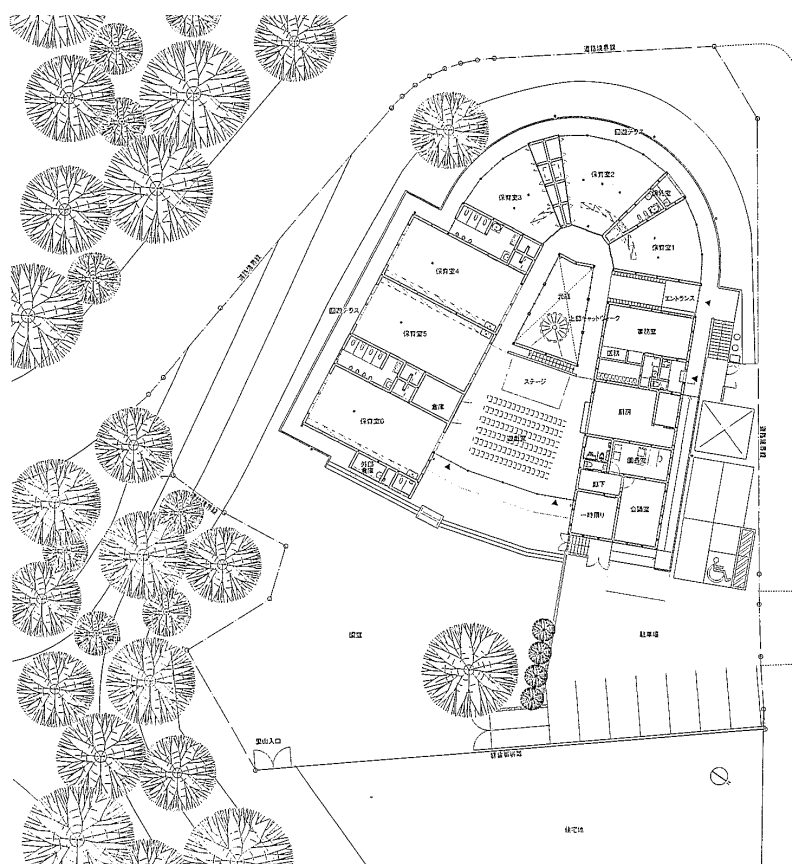
## 活動別の活動場所

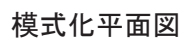


模式化平面図



## 雑誌掲載図面

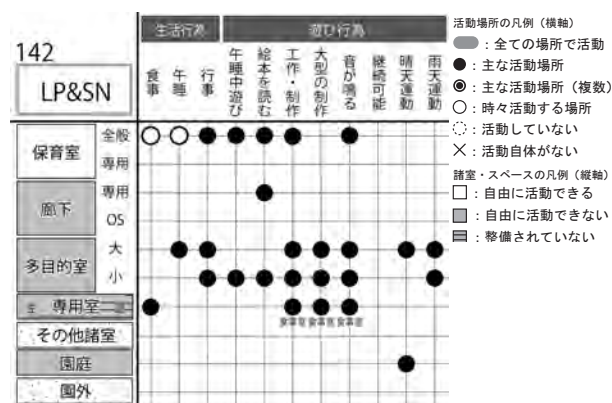




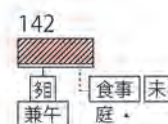
## 施設概要

事例 No.	142
施設名	荻窪りとるぱんぷきんず
運営法人	社会福祉法人 清香会
所在地	東京都杉並区荻窪 3-7-29
設計者	龍美 + ツチヤタケン建築事務所
竣工年（西暦）	2016
延べ床面積（㎡）	781.84
定員数（人）	90
掲載雑誌名	新建築 92 巻 7 号

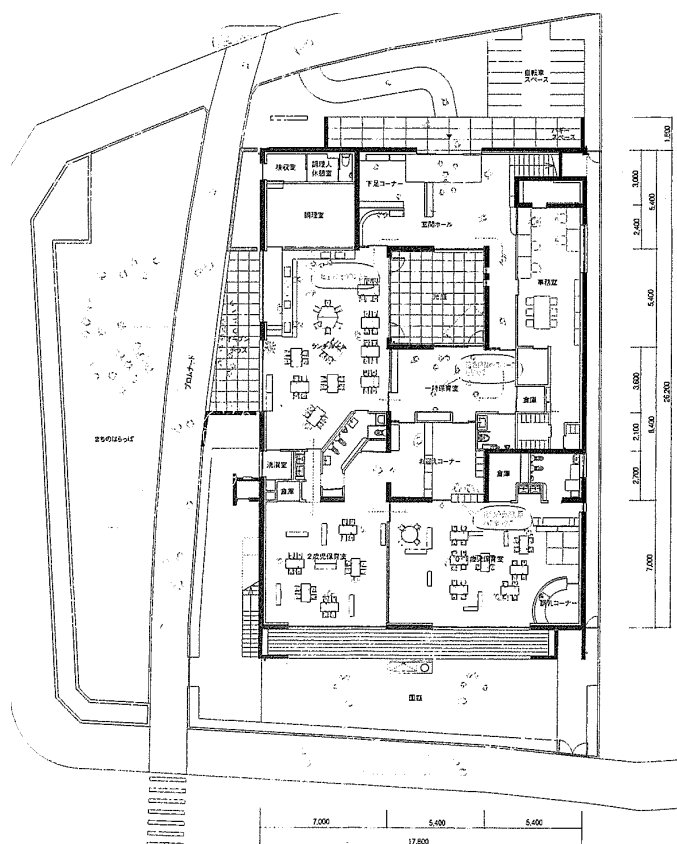
## 活動別の活動場所



模式化平面図



## 雑誌掲載図面



施設概要

事例 No.	148
施設名	大空と大地のな一さりい 下井草駅前園
運営法人	株式会社 キッズコーポレーション
所在地	東京都杉並区井草 1-6-11
設計者	KINO architects
竣工年（西暦）	2017
延べ床面積（㎡）	643.92
定員数（人）	70
掲載雑誌名	新建築 92 巻 7 号

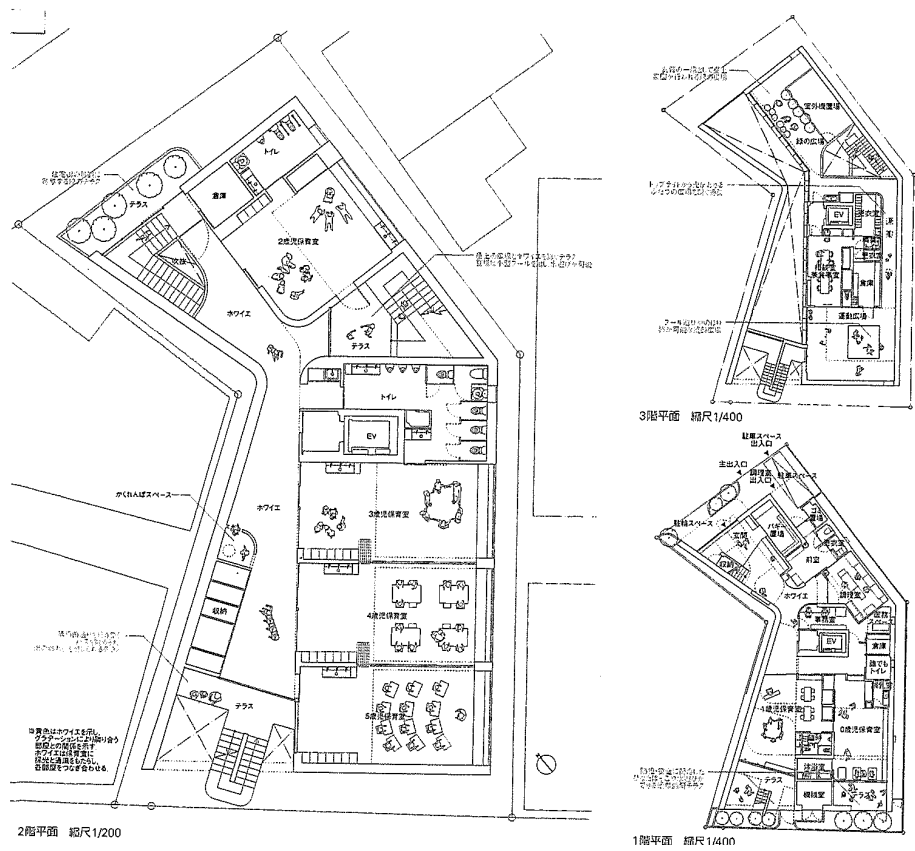
活動別の活動場所



模式化平面図



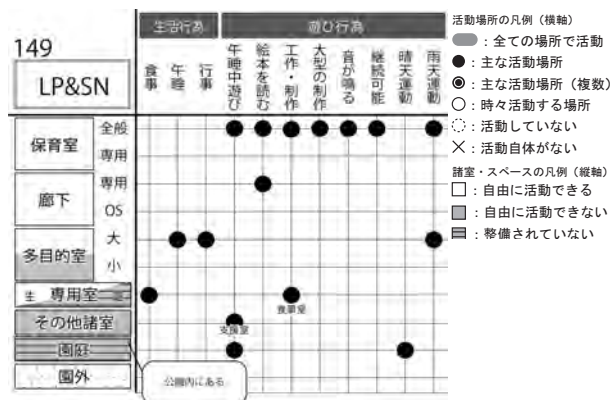
雑誌掲載図面



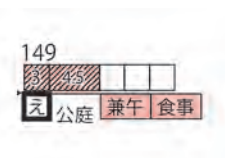
## 施設概要

事例 No.	149
施設名	にじの森保育園
運営法人	社会福祉法人 三樹会
所在地	東京都荒川区南千住 8-13-1
設計者	LOADY&ASSOCIATES
竣工年（西暦）	2017
延べ床面積（㎡）	1401.73
定員数（人）	162
掲載雑誌名	新建築 92 巻 7 号

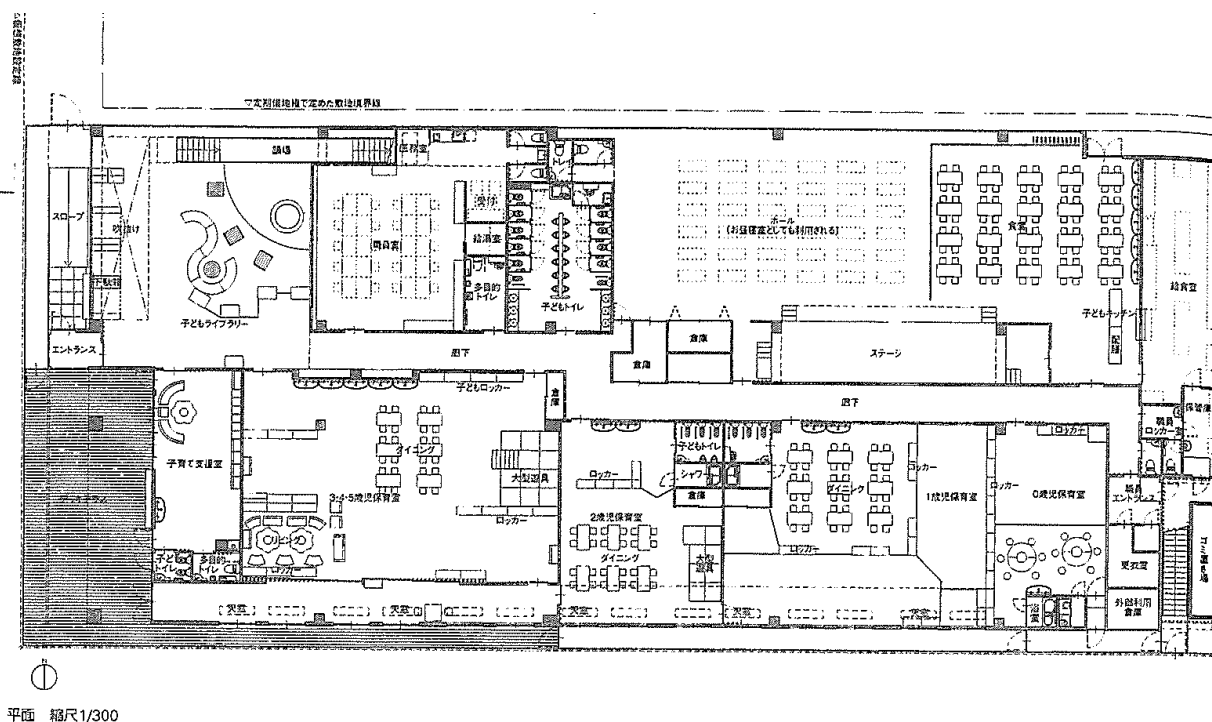
## 活動別の活動場所



模式化平面図



## 雑誌掲載図面



## 資料 1.4 ヒアリング調査シートと事例概要 第3章 研究対象事例の保育空間と保育方法 8 事例の結果

## 1) 事例 11

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

11

施設名	白浜幼稚園	法人	和歌山県西牟婁郡白浜町
所在	和歌山県西牟婁郡白浜町 1 9 0	事例記号	Sh_k
訪問日	2018. 12. 21	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	1960 年	定員	160 名
保育方法	独自 NNN	4 歳児クラスの人数	14 名

→来年度から、保育者 1 名増員で定員数が倍（28名）になる予定

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	1636	m <sup>2</sup>
建物建設年	2001 年	構造 RC2階
使用室改修の有無	新築（建て替え）	設計者 アーキ・クラフト建築事務所

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

市内の建築設計事務所が担当、詳細の経緯は不明。

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より 4 歳児の利用は想定していない	1)か2)、11年前に赴任した時から、既に使っていない。各保育室で食事していた。現在も、椅子と机は出しっぱなしにしている。
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	
3) 一時的（アンケート回答時）に使用していないが、近く使用を再開する	アレルギーを持つ子どもの専用手洗い場になっている（蛇口にシールを貼り、専用化）、遊具を置いている
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在 4 歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	15)食事室を使うと、先に食べ終えた子どもを見る人員が確保できない。
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい（反響しすぎる）	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	2) アレルギー対応としては重宝している	ドアが重い、トイレが暗い（子どもが怖がる）、指つめ防止策不足、網戸の後付けは特殊な窓のため苦労した（サイズが大きい、曲面）、ベランダの防水シートが劣化したため水漏れがある、南面の雨の吹き込みを改善したい、台風で門が外れた
2) 変更する予定はない		
3) わからない		

## &lt;アンケートの回答&gt;

改修場所	
保育の質と園舎への意見	厨房前の食堂は、食堂として利用することはほぼなく、5 歳児のおやつ作りの際のみ利用している。あるコープは障がい児が落ち着きたい時によく利用している。道路に面した正門は危険なため、登降園には利用できない。8：15～16：15の保育時間以外にいる子供（早朝保育、夕方延長など）の集まる部屋がないので不便を感じている。

## 2) 事例 36

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

36

施設名	あすなろ幼稚園	法人	学校法人 あすなろ学園
所在	静岡県浜松市南区遠州浜1-10-2	事例記号	An_y
訪問日	2018. 11. 16	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	1968 年	定員	180 名
保育方法	園独自 N×N	4歳児クラスの人数	15 名

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	882. 46 m <sup>2</sup>		
建物建設年	2009 年	構造	木(KES) 2F
使用室改修の有無	新築 (建て替え)	設計者	日比野設計+幼児の城

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

出入りの保育教材屋から紹介された。変なところにお金をかけないところが良かった。中庭が良いサイズであるが、園庭との繋がりをもっと強化したい。直したいところはいっぱいある。どんな保育をしたいか、明確に空間に表すのは大変。

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より4歳児の利用は想定していない	1) 計画当初からフレキシブルな使い方を想定。現在のように、子ども達・先生の働きかけでキッチンで調理したものをみんなで食べたりする使い方で良い。専用室にすると、それだけにしか使えなくなる。お膳立てが必要になり不便。
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	
3) 一時的(アンケート回答時)に使用していないが、近く使用を再開する	
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在4歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	15) 上記記載の通り
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい(反響しすぎる)	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	2) アレルギー対応としては重宝している	衝突防止シール:よくよくぶつかる子を挙げてみると、普段から注意力が足りない子だった。安全を確保することは大事だが、何でも先回りして整えることが、誰のためなのかを考える必要がある。「死角で事故」は起きない。死角で子どもが何をしている(可能性がある)か先生がきちんと把握できていれば良い。先生と子どもが信じ合えていれば大丈夫。死角を作らないことが安全性を保つことではない。子どもが挑戦するチャンスをつままない。使う側がどう過ごしたいのかを見直すきっかけ。オープンな職員室は子供の出入りも自由。井戸端会議のようにいつも会議をしている。何の目的で、どこを見据えた園舎(保育)か、何のための教育か、が重要。多くの施設が、今しか見ていない。生活の質をいかに高めるかが、子どもが主体的に過ごすことである。
2) 変更する予定はない		
3) わからな		

## &lt;アンケートの回答&gt;

改修場所	-
保育の質と園舎への意見	どんな保育をしたいのか?ということ、空間づくりは密接に関係している。園舎という環境が保育の質や人間関係の質に無意識の部分に影響を与える (施設は、保育の質と人間関係の質を高めるために必要である)

3) 事例 76

視察ヒアリングシート

＜基本情報＞				76
施設名	ともだちの森保育園	法人	社会福祉法人 森友会	
所在	東京都国分寺市1-22-41	事例記号	Tm_h	
訪問日	2018. 12. 18	ヒアリング協力者	クラス担当保育者	先生
開園年	- 年	定員	70 名	
保育方法	独自 NNN	4 歳児クラスの人数	60 名	

＜建物基本情報＞			
使用室床面積	740. 98 m <sup>2</sup>		
建物建設年	2012 年	構造	大断面木造 2F
使用室改修の有無	新築 (建て替え)	設計者	北田修治＋戸室太一

＜建築家に園舎を依頼した経緯＞	
不明	

＜ランチ室の使用状況について＞

1) 整備済みの専用室の使用状況	
1) 計画当時より 4 歳児の利用は想定していない 2) 始めは使用していたが、現在は使用していない 3) 一時的 (アンケート回答時) に使用していないが、近く使用を再開する 4) 現在も使用している	2) 1年目は使用していたが、2 階の保育室から「ご飯を食べるために 1 階へ降りる」のは、子どもの主体性にあてない。保育者の連携ができていない。一斉保育的な活動。
2) 整備済みの専用室を現在 4 歳児が使っていない理由	
1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった 2) 現員数が増えたため、使わなくなった 3) 現員数が減ったため、使わなくなった 4) 部屋が広すぎた 5) 部屋が狭すぎた 6) 部屋がうるさい (反響しすぎる) 7) 部屋が暑すぎた 8) 部屋が寒すぎた 9) 部屋が明るすぎる 10) 部屋が暗すぎる 11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい 12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい 13) 部屋の形が利用しづらい 14) 子どもが落ち着かない 15) 自由記述 →	1) 「今日は〇〇クラスの日」という取り組みはありうるが、「全員が食べなければならない」はおかしい。(食事室は) 目的空間となりすぎる。遊びと食事を区切りすぎるのは△。大人のための区切り、大人がくぎりやすくなっているだけで、子どもの主体的な活動ではない。匂い、ともだちの様子を見て、動ける活動がいい。ランチルームがあってもなくても、1つの部屋として考えたい。  現在の保育室での食事は、配膳台設置 (11:00am) →子どもが好きな席に座り始める→保育者から声かけ→盛り付け→食事→食べ終わった子から午睡か遊び (声かけする) →全員の食べ終わり 13:00 保育室内でどこを食事で使うかは、ある程度決めている。好きなタイミングで、好きな机で食べられる。
3) 整備済みの専用室の今後について	
1) 変更したい 2) 変更する予定はない 3) わからない	4) 使い心地など 専用室は、大人がやりやすい環境だと思う。子どもが強制される、特別な部屋になってしまい、遊びで使えない。週一回、フロア会議を保育士同士で行い、子どもの様子を相談して保育室内の環境を変更している。棚に入れる教材、それに対して何人用の椅子机スペースを作るか、人数が集まりやすい遊びは話して配置する。教具が混ざるのは、設えに満足していないか不足している証拠なので、改善する。子どもが 1 箇所に集まりすぎないようにする。慣れてきた、落ち着かなくなってきたら、設えをガラッとかえる (2・3ヶ月に 1 回)。死角はあえてつくる。死角に先生がどれくらい配慮して子供に寄り添えるかが大切。

＜アンケートの回答＞

改修場所	ホールはランチルームとして使用していない
保育の質と園舎への意見	園舎はハードな部分の大切な環境です。皆が出入りするエントランスや事務所などもとても大切だと考えます (園舎や光の入り具合)

## 4) 事例 85

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

85

施設名	境こども園	法人	公益財団法人 武蔵野市こども教会
所在	東京都武蔵野市境4-11-6	事例記号	Sk_k
訪問日	2018. 11. 12	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	2013 年	定員	107 名
保育方法	園独自 NT&SN	4 歳児クラスの人数	15 名

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	1672. 29 m <sup>2</sup>		
建物建設年	2013 年	構造	木造 1 F
使用室改修の有無	新築 (建て替え)	設計者	国設計

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

前幼稚園の閉園に伴い、次の施設形態(幼稚園以外で調整)の検討委員会が2年前に発足。←矢野先生参加  
その前にプロポーザルがあった。2階建が妥当(3階案もあった)とのこと「幼児には3階はなじまない。移動が大変」。工事中に建築会社(施工会社?)が倒産し、戸建建設が引き継いだ。武蔵野の森に溶け込むように、森側は配色等にも配慮。また、有識者を交えた会議も行った。

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より4歳児の利用は想定していない	1) 計画時点ではランチ室使用の想定があったが、新設園(子ども、スタッフ共に新しく募集)のため①開園当初(12月)お弁当だった②保育士がより子どもの様子を注視したい③保育士同士の連携力が低いという懸念があり、保育室で食事をする方針となった
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	
3) 一時的(アンケート回答時)に使用していないが、近く使用を再開する	
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在4歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	15) 当初定員が半分程度(100名以下)のため部屋食から始め、子どもの状況を詳しく把握したい、クラスを超えて連携する必要があるランチ室(1室に複数のクラスが集まるスタイル)の利用に課題があった。
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい(反響しすぎる)	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	ランチ室(調理室を乳児室に近接させてことによる)が園舎の一番奥に配置され、幼児保育室から見えない上に遠いため、本来の「活動を見て、自分の活動に区切りをつけ、自ら判断し行動する」狙いが達成できない、また死角になるため、使うことができない。←配置の問題大きい

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	2) 現行のようにプレキシシブルに使うことで良い	食・寝・遊の分離について：兼用室と専用室、部屋の広さなど
2) 変更する予定はない		遊戯室での4・5歳児の午睡は広すぎるので、簡易パーテーション(手作り)で狭くしている。市から暗くしすぎないよう指導があるので(発作などを早く発見するため)現在はカーテンを閉めるのみでロールカーテンはしない。天井は高すぎると感じているが、人員配置的に午睡専用室は難しい(幼稚園と異なり、午睡中は貴重な休憩時間および打ち合わせ時間で、大広間に集めて少数人数で見守る体制が良い。←制度上(財政状況)の問題。
3) わからない		

## &lt;アンケートの回答&gt;

改修場所	階段に転落防止ゲート(引き違い戸がた)を設置
保育の質と園舎への意見	生活シーン(遊、食、寝)ごとに空間を分けられると、子ども自身が自分なりの見通しをもち、大人の指示ではなく、活動を切り替えていく力をつけていくことにつながると思います。主体性や自主性を培うために環境の果たす役割は大きいです。

## 5) 事例 88

視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

88

施設名	庄原保育所	法人	庄原市
所在	広島県庄原市三日市町2-4	事例記号	Sy_h
訪問日	2018. 11. 30	ヒアリング協力者	所長、副所長 先生
開園年	2013 年	定員	251 名
保育方法	ハンガリー、園独自、 コダーイ NNN	4歳児クラス の人数	23 名

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	2311.4			m <sup>2</sup>
建物建設年	2013 年	構造	木造 1F	
使用室改修の有無	新築 (建て替え)	設計者	大畑連合建築設計	

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

市の担当課、前所長(市営時)が主導して、設計会社を選定、話し合い。

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より4歳児の利用は想定していない	2) 4年前までは使っていた(1年くらいは使用していた)、現状は延長保育(30名)の際のあそび場所として遊具を置き使っている、子どもとクッキングをするときに使う
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	
3) 一時的(アンケート回答時)に使用していないが、近く使用を再開する	
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在4歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	6),14),15)
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	保育室からの動線が長い、一度に100名の子どもが入ると音が響きすぎてうるさいため、子どもも落ち着かず使っていない。
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい(反響しすぎる)	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	食事室が良くなれば使	
2) 変更する予定はない	いたい	
3) わからない		

## &lt;アンケートの回答&gt;

改修場所	玄関ゲートの天井の穴を塞ぐ、下駄箱の位置を変える、園庭から部屋に入るのではなく、玄関から入る(導線の変更)
保育の質と園舎への意見	

## 6) 事例 100

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

100

施設名	育良保育園	法人	長野県飯田市
所在	長野県飯田市北方130	事例記号	lr_h
訪問日	2018. 11. 29	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	- 年	定員	140 名
保育方法	園独自 NNN	4 歳児クラス の人数	18 名

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	1081. 42 m <sup>2</sup>		
建物建設年	2014 年	構造	S2F
使用室改修の有無	新築 (建て替え)	設計者	松島潤平建築設計事務所+桂建築設計事務所

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

隣接するホールを設計した設計者に依頼したら、その息子さん(建築家)が建てることになった

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より4歳児の利用は想定していない	4) 5歳児のみの食事室になっている
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	パントリー→EVが狭く使いづらい
3) 一時的(アンケート回答時)に使用していないが、近く使用を再開する	
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在4歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	5),11)
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	食事室は、5歳児保育室の一部なので、他のクラスが使うのは使いづらい。4歳児はクラスで食事をする
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい(反響しすぎる)	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	2)	天井高が高すぎて暑い、各階段のヘリが保護されていなくて危ない(鉄製?)、音が反響しすぎるので防音カーテンをつけた(100万くらい)、子どもの主体性を確保するためには、保育者の心理的余裕と面積的な余裕が必要。午睡室は保育室の隣に欲しい。
2) 変更する予定はない		
3) わからない		

## &lt;アンケートの回答&gt;

改修場所	園庭内に音が響きすぎるため、遮音のために防音カーテンをつけて1.2階を仕切った
保育の質と園舎への意見	子どもの自主性を尊重する「見守る保育」を遂行するにはワンルーム型式が活かされると思うし、保育の幅が広がる。園舎内の騒音に悩まされている現状を保育の工夫によって乗り越えたい。神社の境内、斜めの土地、御神木等様々な条件のため、止む無く狭くなってしまったという原因もあり、設計に苦勞したと思われる。

## 7) 事例 130

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

130

施設名	昭和女子大学附属昭和こども園	法人	学校法人 昭和女子大学
所在	東京都世田谷区太子堂1-7-57	事例記号	Sj_k
訪問日	2018. 11. 05	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	2016 年	定員	223 名
保育方法	園独自 NT&SN	4 歳児クラス の人数	21 名

## &lt;建物基本情報&gt;

使用室床面積	2898.52			m <sup>2</sup>
建物建設年	2015 年	構造	RC一部S	
使用室改修の有無	新築（建て替え）	設計者	納谷学＋納谷新／納谷建築設計事務所	

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

法人(昭和女子大学)が4社のプロポーザルをし、選定した

## &lt;ランチ室の使用状況について&gt;

## 1) 整備済みの専用室の使用状況

1) 計画当時より4歳児の利用は想定していない	1) 図面上は「ランチルーム」となっているが、一度も使っていない
2) 始めは使用していたが、現在は使用していない	緑の芝生や3Fテラスでランチをすることはよくある。通常は保育室で食事
3) 一時的(アンケート回答時)に使用していないが、近く使用を再開する	
4) 現在も使用している	

## 2) 整備済みの専用室を現在4歳児が使っていない理由

1) 保育の方針が変わり、専用室を使う必要がなくなった	15) 食事のために場所を移動すると、保育の流れが途切れるので、食事室は不要。保育の流れの方が重要。保育室の前方を食事スペース、後方を遊び(食後の絵本)スペースに分けて使っている。
2) 現員数が増えたため、使わなくなった	
3) 現員数が減ったため、使わなくなった	
4) 部屋が広すぎた	
5) 部屋が狭すぎた	
6) 部屋がうるさい(反響しすぎる)	
7) 部屋が暑すぎた	
8) 部屋が寒すぎた	
9) 部屋が明るすぎる	
10) 部屋が暗すぎる	
11) 部屋の配置場所が悪く利用しづらい	
12) 部屋の見通しが悪く利用しづらい	
13) 部屋の形が利用しづらい	
14) 子どもが落ち着かない	
15) 自由記述 →	

## 3) 整備済みの専用室の今後について

## 4) 使い心地など

1) 変更したい	2)	午睡は、3.5歳児が1Fの多目的室、4歳児は3Fの遊戯室で行っている。3歳児と5歳児が同室なのは、異年齢の交流によって(3歳児が5歳児の)姿を見て学ぶメリットがある。午睡中に、保育室の環境設定を変更することができるので、それもメリット。
2) 変更する予定はない		
3) わからない		

## &lt;アンケートの回答&gt;

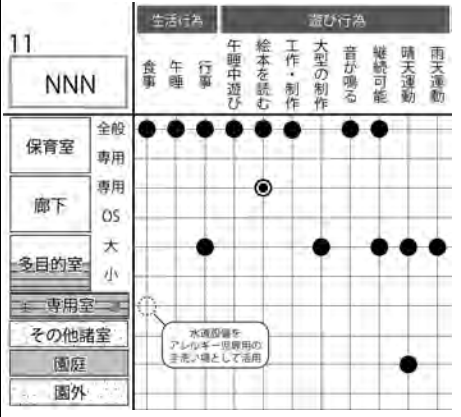
改修場所	1階遊戯室の天井をドーム型から平らにした、掃除用具入れを各部屋に増設した、照明設備を増設した
保育の質と園舎への意見	広い空間で回遊できることで、クラス間の壁をなくし、子供たちが主体的に遊びを見つけることができる。その中で子供たちの想像力が養われる。



資料 1.5 ヒアリング調査シートと事例概要 第6章 保育室に付帯する遊びスペースの役割 9事例の結果

1) 事例 11, SH

視察ヒアリングシート				11
＜基本情報＞				
施設名	白浜幼稚園	法人	和歌山県西牟婁郡白浜町	
所在	和歌山県西牟婁郡白浜町	事例記号	Sh_k	
訪問日	2018. 12. 21	ヒアリング協力者	先生	
開園年	1960 年	定員	160 名	56%
保育方法	8	4 歳児クラスの人数	14 名	
各活動の場所	A NNN	自由活動範囲	S3 室数3	

＜建物基本情報＞			11	
建物周辺環境	市街地		NNN	
建物建設年	2001 年			
使用室改修の有無	新築			
使用室床面積	1636 m <sup>2</sup>			
構造	RC			
設計者	アーキ・クラフト建築事務所			
				

＜付帯諸室＞		
使 い 方	生活行為	食事室：使っていない。洗面スペースだけ、アレルギーのこの専用として使用。保育者が限られるので、食べ終わったこの見守りができない。 午睡は保育室。
	遊び行為	アルコーブ：コールドダウンのため利用する。子どもが本を持ち込んだり、特定の子が好きで利用したり、小学校を見ている。親子が本を読むスペースでもある。保育者は気がついていないが、子どもにとっては少し隠れられる場所。遊び込める場所。広い場所との対比が良い。絵本コーナー
	その他	遊戯室では、継続した遊び（まちづくり）など行うこともある。収納スペース不足。

＜建築家に園舎を依頼した経緯＞	
町の設計士に依頼。取手が取れたり、ドアが重すぎるなど不具合もある。トイレが暗い、指詰め対策不足。色々と追加工事があった。	

### ＜園舎に対する保育者の評価＞

1)	全体的な印象	
2)	保育のやりやすさ	
3)	回廊について	なし
4)	生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて 保育者の人数によって、ランチルームで食べることを断念。</li> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
5)	遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） 保育室ないでは気分転換できないので、囲われた小スペース（アルコーブ）は良い。クールダウンできる。特定の子の好きな場所になっている。小学校を覗ける。大人からは見えている。</li> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
6)	自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方 他クラスは入室しない。覗いていることはよくある。アレルギーの子の水道など使えない場所はある。</li> <li>・活動範囲のルール</li> </ul>
7)	付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか アルコーブは重宝されている。</li> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット 見守りやすい、気分転換の場所として利用。外が見える。</li> </ul>
8)	付帯諸室の意義について	アルコーブは保育者からは見えているが、子どもは少し隠れられる場所。遊び込める場所であり、広い場所との対比ができる。先生が声をかけやすい。 本ランチルーム、遊戯室は広い子どもの遊び場所。遊戯室は、材料を置いておいて自由に遊ぶ事ができる。継続した遊びもできる。行事があると中断させてしまうのでフリースペースが欲しい。発展性がある遊びは重要。
①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ） ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）		

### ＜その他＞

	改修場所	
	保育の質と園舎への意見	厨房前の食堂は、食堂として利用することはほぼなく、5歳児のおやつ作りの際にのみ利用している。あるコーブは障がい児が落ち着きたい時によく利用している。道路に面した正門は危険なため、登降園には利用できない。8：15～16：15の保育時間以外にいる子供（早朝保育、夕方延長など）の集まる部屋がないので不便を感じている。

## 2) 事例 19, MK

## &lt;基本情報&gt;

19

施設名	むくどり保育園	法人	社会福祉法人ムクドリ福祉会
所在	神奈川県相模原市緑区	事例記号	Mk_k
訪問日	2016. 10. 27	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	1960 年	定員	120 名 #VALUE!
保育方法	モンテッソー <sup>2</sup>	4 歳児クラスの人数	26 名
各活動の場所	C LSN	自由活動範囲	S3 室数 <sup>7</sup>

## &lt;建物基本情報&gt;

建物周辺環境	住宅街	
建物建設年	2001 年	
使用室改修の有無	新築	
使用室床面積	1156 m <sup>2</sup>	
構造	RC	
設計者	袴田喜夫建築設計室	

## &lt;付帯諸室&gt;

使い方	生活行為	ランチ室、午睡室完備。 ランチは11:00～好きな時間に来て食べる。午睡室は3歳児が寝る。その他、合同保育、体操の部屋としても利用。 ランチ室は、130名（幼児80名）には少し狭い。
	遊び行為	遊戯室：普通保育室（異年齢）として使っている。保育室不足。月1回誕生日会 絵本室：子どもだけの利用はない（なぜ？） デン：ロッカー、中でピアノなどをする様子もあり。自由に遊んでいる。
	その他	柱がやや多い、廊下などでも自由に遊んでいる姿あり。死角に対し危険意識なし。むしろ、死角で起こる（子どもが起こす）ことへの想定ができるよう、保育者のスキルアップにつながると捉えている。廊下の鏡などを使い補足している。死角があるのは（子供にとって）良いこと。 保育者（男性）が自作した柵や補助具（鍋おき、椅子、鋸を切る時の固定台）がある。子どもが自分でできることを補助している。

### ＜建築家に園舎を依頼した経緯＞

平成20年風の丘保育園（平家木造）を依頼	
----------------------	--

### ＜園舎に対する保育者の評価＞

1)	全体的な印象	
2)	保育のやりやすさ	子どもにとって隠れ家的な陰（死角）を作る事が良い。死角で起こることの想定をしている。
3)	回廊について	園庭を介して回遊している
4)	生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて 全て専用室</li> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
5)	遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） 隠れ家的な場所をしつらえる事が重要、何をするかは子どもの自由にさせているが、危険がないように遠くから見守っている</li> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか 柱が多いが、それも子どもにとって隠れる場所になるので、よりよく使うようにしている。鏡などを利用して、子どもの姿を捉えている。保育者のスキルは必要。</li> </ul>
6)	自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方 子ども（発達段階や性格）によって、行ける範囲がそれぞれ異なる。いつもと違う行動をしていたら（範囲外に出ていたら）保育者が確認するようにしている</li> <li>・活動範囲のルール 原則的には自由</li> </ul>
7)	付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか デンは現在ロッカールームとして利用しているが、中で遊んでいる子どももいる。遊び方は自由で、制限していない。訪問時は2人でピアノ演奏をしていた。兼用的な使い方。</li> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット</li> </ul>
8)	付帯諸室の意義について	隠れ家？

①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）

②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### ＜その他＞

改修場所	屋上の周りのフェンスの高さを加えた、おウールのところのドア、食堂前・正面前・オープンスペース前に庇のような屋根をつけた、0歳児保育室
保育の質と園舎への意見	こどものスペースもとても大切であり、環境が保育の質を高める重要なファクターだと思うが、同時に大人（職員）が休憩をとったり、話したり、保護者と面談したり、事務作業をするスペースなども質を高めるために必要だと感じている。

## 3) 事例 20, RB

視察ヒアリングシート →こども園（2019年度より）					20
<b>&lt;基本情報&gt;</b>					
施設名	ルンビニ幼稚園	法人	学校法人 佐伯大谷学園		
所在	大分県佐伯市城下東町	事例記号	Rb_y		
訪問日	2020. 01. 31	ヒアリング協力者	先生		
開園年	1960 年	定員	180 名	95%	
保育方法	仏教 8	4 歳児クラスの人数	30 名		
各活動の場所	A N×N	自由活動範囲	S3 室数4		

→L×N

<b>&lt;建物基本情報&gt;</b>			20	
建物周辺環境	市街地		NXN	
建物建設年	2001 年			
使用室改修の有無	新築（建て替え）			
使用室床面積	901.91 m <sup>2</sup> →1876.94m <sup>2</sup>			
構造	RC一部S			
設計者	深野木建築研究所			

**<付帯諸室>**

使 い 方	生活行為	ランチルーム：新設、3歳以上が利用。吸音がなくうるさい。一斉に集まらないよう、ずらして利用している。異性活動になりがちなのを気にはしている。 午睡は基本なし。個人対応で必要な子は寝させる。
	遊び行為	絵本室：落ち着きたい子がおもちゃを持参して入室している。基本的には絵本を読む場所として指導。4歳はクラス単位や少人数で貸本をする時などに利用。5歳は比較的自由に利用する。 お話コーナー：歌を歌ったり、活動の切り替え場所として使う事がある。全面クラスの3歳児が使う事が多い。2Fnoお話コーナーは乳児が比較的使っている。
	その他	2019年にランチルームを含む新園舎を増築 遊戯室は、運動場所。2クラスまで同時に使える。

**<建築家に園舎を依頼した経緯>**

同法人の短大を設計した人に依頼
-----------------

### <園舎に対する保育者の評価>

1) 全体的な印象	保育室は暗いと思うが、明るくしてもらえなかった
2) 保育のやりやすさ	
3) 回廊について	なし
4) 生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて</li> </ul> <p>ランチを食べたい人から食べるスタイルにしたいが、現状一斉活動になっていてできていない。ランチルームがうるさい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul> <p>準備は5歳児が当番制で行う。食べるのが遅い子を置いてきている。</p>
5) 遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能）</li> </ul> <p>発達障害児などクラスに入れない子や、本が大好きな子の場所として活動。絵本を静かに読む場所として見ている。子供同士の親密な関係が作りやすい。子どもにとって都合がいい場所。狭さが落ち着ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul> <p>保育者が全員の子どもを見ている。</p>
6) 自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方</li> </ul> <p>現在、やや一斉気味。保育室で遊ぶときは保育室内。外は皆で外遊び。待たせる時間が発生している。保育室から出て行っても、あまり補足していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動範囲のルール</li> </ul> <p>2Fには行かない。</p>
7) 付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか</li> </ul> <p>絵本コーナーは専用の使い方、お話コーナーは柔軟な使い方。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット</li> </ul> <p>待機場所、切り替え場所、落ち着く場所として使える</p>
8) 付帯諸室の意義について	<p>4歳になれば、滅多にハザードは生じない。保育室に入れない子どもにとって良い場所。子どもは小ぢんまりした空間が都合が良い。</p>

①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）  
 ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### <その他>

改修場所	
保育の質と園舎への意見	園児の原体験を支える大切な空間なので視覚的感覚的に働きかけ影響するものと考えます。

## 4) 事例 35, EG

## 視察ヒアリングシート

## &lt;基本情報&gt;

35

施設名	エンゼル幼稚園	法人	学校法人 八郷学園
所在	三重県四日市市千代田	事例記号	Ez_y
訪問日	2020. 2. 4	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	1960 年	定員	480 名 105%
保育方法	8	4 歳児クラスの人数	33 名
各活動の場所	A N×N	自由活動範囲	S2 室数5

## &lt;建物基本情報&gt;

建物周辺環境	市街地	<div>35</div> <div>NXN</div> <div>生活行為</div> <div>遊び行為</div> <div>食事</div> <div>午睡</div> <div>行事</div> <div>牛乳中あひ</div> <div>絵本を読む</div> <div>工作・制作</div> <div>大型の制作</div> <div>音が鳴る</div> <div>継続可能</div> <div>雨天運動</div> <div>雨天運動</div> <div>保育室</div> <div>廊下</div> <div>多目的室</div> <div>生専用室</div> <div>その他諸室</div> <div>園庭</div> <div>園外</div>
建物建設年	2008 年	
使用室改修の有無	新築	
使用室床面積	3942.94 m <sup>2</sup>	
構造	RC一部S	
設計者	ジャックエツ環境事業一級建築士事務所	

## &lt;付帯諸室&gt;

使 い 方	生活行為	食事は保育室、午睡なし 時々、1Fの多目的スペースでランチする。
	遊び行為	絵本コーナー：自由に絵本を読む場所ではない 多目的スペース（絵本室の隣）：自由遊び、運動遊びの際に重宝 デン：ニモの部屋。自由に出入りしている。中に大型ブロックあり。
	その他	見渡せるように円形、中央のスペースで運動（サッカー大会など）できる。遊戯室では、体操教室や行事など。年少児が観客になるなど、違いを見る事ができるのが良い。見渡せる安心感。

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

元々、園庭遊具を入れていて、相見積もりした。理事長がかなり設計している。色など拘った。

### <園舎に対する保育者の評価>

1)	全体的な印象	全体を見渡せる設計が気に入っている。
2)	保育のやりやすさ	見渡せて安心感がある
3)	回廊について	なし
4)	生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて</li> <li>なし</li> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか</li> <li>なし</li> </ul>
5)	遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能）</li> <li>デン：ニモの部屋として人気がある（本当に使っているか？）</li> <li>多目的室：多目的に使えるので良いが、収納がない。</li> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
6)	自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方</li> <li>・活動範囲のルール</li> </ul>
7)	付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか</li> <li>絵本コーナーは、先生と本を読むスペースか、本を借りに来るスペース。トイレの前すぎる？隣の多目的スペースの方が重宝されている様子。</li> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット</li> </ul>
8)	付帯諸室の意義について	多目的に使える大小のスペースが重宝されている様子。

- ①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）  
 ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### <その他>

	改修場所	
	保育の質と園舎への意見	

## 5) 事例 85, SK

## 視察ヒアリングシート

85

## &lt;基本情報&gt;

施設名	境こども園	法人	公益財団法人 武蔵野市こども教会
所在	東京都武蔵野市境4-11	事例記号	Sk_k
訪問日	2018. 11. 12	ヒアリング協力者	先生
開園年	1960 年	定員	107 名 105%
保育方法	8	4歳児クラスの人数	15 名
各活動の場所	B NT&SN	自由活動範囲	S3 室数7

## &lt;建物基本情報&gt;

建物周辺環境		85 NP&SN	生活行為	遊び行為									
建物建設年	2013 年		食事	午睡	行事	午睡中遊び	絵本を読む	工作・制作	大型の制作	音が鳴る	継続可能	雨天運動	雨天運動
使用室改修の有無	新築		保育室	全般									
使用室床面積	1672.29 m <sup>2</sup>		廊下	専用									
構造	RC		多目的室	OS									
設計者	国設計		専用室	大小									
			その他諸室										
		園庭											
		園外											

## &lt;付帯諸室&gt;

使 い 方	生活行為	ランチ室：開園当初より使用していない。新園舎・新メンバーであることから、落ち着くまでお弁当にしようと言う話だったが、保育者が子どもをよく知りたい、保育者同士の連携が未熟であるために、以後も保育室での昼食になった。姿を見て移行する緩やかな方針だったが、部屋が遠すぎる。70人規模の設計。現在は食育イベント、行事食、行事、4.5歳のおやつに利用。 遊戯室：午睡は4.5歳が合同。広すぎるため、手作りパーティションで仕切っている。本来は専用室が良いが、人員不足。2.3歳は多目的室小を利用。
	遊び行為	絵本室：床下げたかった。自由に出入りできる（2F）。1Fは、親子が短い時間滞在し、読む姿あり。貸本あり。障害児が落ち着きたい時リセットルームとしてよく使う。
	その他	調理室：乳児の部屋からすぐだが、奥まわって幼児の部屋から遠い。大きな窓があるのは良い。 多目的室小：2.3歳児の午睡、子育て支援センターのイベントで利用

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

プロポーザル。3F案もあったが、乳幼児になじまないと思い実現しなかった。  
幼稚園の定員割れから最終的にこども園として開設した。

### <園舎に対する保育者の評価>

1)	全体的な印象	
2)	保育のやりやすさ	ランチルーム、遊戯室（兼午睡室）などの利用状況からは、保育室との距離が遠く、保育者の人数が確保できないために専用室として使えないなどの「使いづらさ」がある
3)	回廊について	なし
4)	生活行為の専用室	・生活行為を保育室で行うことについて 午睡は専用室でしたいが、1室に1人保育者を配置すると休憩や打ち合わせができなので、合同で行っている。食事室も保育者連携の難しさや保育室からの距離によって保育室で撮ることになった。フレキシブルに使える多目的室があることは良いこと。 ・準備のしやすさ、やりにくさはあるか 使いづらさから現在は使用していない。
5)	遊びの専用コーナー	・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能）  ・保育のしやすさ、やりにくさはあるか 障害児のケア場所として頻繁に利用。親子の交流場所にもなっている。
6)	自由活動範囲	・決め方  ・活動範囲のルール
7)	付帯諸室（コーナー）について	・専用コーナーか兼用コーナーか フレキシブルに活用できる部屋（旧ランチルーム、遊戯室）があるのはよい。午前、午後とクラスを変えることで人間関係が多様になるのは良い。 ・コーナーがあることのメリット、デメリット
8)	付帯諸室の意義について	絵本室（1Fアルコーブ）はリセツトルームとして日常的に活用されているようだったが、2Fの利用実態不明。

- ①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）  
②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### <その他>

改修場所	階段に転落防止ゲート（引き違い戸がた）を設置
保育の質と園舎への意見	生活シーン（遊、食、寝）ごとに空間を分けられると、子ども自身が自分なりの見通しをもち、大人の指示ではなく、活動を切り替えていく力をつけていくことにつながると思います。主体性や自主性を培うために環境の果たす役割は大きいです。

## 6) 事例 89, SR

## 視察ヒアリングシート

89

## &lt;基本情報&gt;

施設名	しらはたこども園	法人	千葉県山武市立
所在	千葉県山武市白幡1919	事例記号	Sr_k
訪問日	2019. 12. 24	ヒアリング協力者	園長 先生
開園年	1960 年	定員	200 名 86%
保育方法		4歳児クラスの人数	29 名
各活動の場所	C LSN	自由活動範囲	C2 室数7

## &lt;建物基本情報&gt;

建物周辺環境	田畑	<div>89</div> <div>LSN</div> <div>生活行為</div> <div>遊び行為</div> <div>食事</div> <div>午睡</div> <div>行事</div> <div>午睡中遊び</div> <div>絵本を読む</div> <div>工作・制作</div> <div>大型の制作</div> <div>音が鳴る</div> <div>継続可能</div> <div>雨天運動</div> <div>雨天運動</div> <div>保育室</div> <div>廊下</div> <div>多目的室</div> <div>生専用室</div> <div>その他諸室</div> <div>園庭</div> <div>園外</div>
建物建設年	2013 年	
使用室改修の有無	新築	
使用室床面積	2611.61 m <sup>2</sup>	
構造	RC一部S	
設計者	竹中工務店	

## &lt;付帯諸室&gt;

使い方	生活行為	ランチルームは、3歳児以上（5歳児は9月から保育室）机は出しっぱなしにして、椅子だけ隅に片付ける。 午睡室は、3歳児以上が使用するが、少し狭い（5歳児は9月まで）。長時間部の子ども（約半数）が利用する。布団を敷いて寝る。
	遊び行為	遊戯室：廊下と繋げて大型ブロックなどで遊ぶ。 ミニコーナー：動線と重なるためあまり使っていない。休憩スペース、電車ゴッコの駅として使う。 絵本室：自由保育中は自由に来れない。廊下（エントランス）に絵本コーナーを設定中。絵本室は会議室兼用なので、保育者や保護者が使う場所。部屋が広すぎると、子供の遊びは盛り上がらない。他の遊びに気がつけない事がある。 絵本コーナー：絵本をもってきて読んだり、劇ごっこをする場所 遊びコーナー：大型ブロック
	その他	エントランスの広いスペースについて、使い方を検討中（絵本コーナーを増設中）。未満児用の庭は0.1か2のどちらかしか遊べない（狭い）。 保育室間のドアは開いたり閉まったり、日常的に活用している。

## &lt;建築家に園舎を依頼した経緯&gt;

市が決めている（プロポ？）。要望は全然聞いてくれなかった。担当者が自分の子供を連れてきて目線などをチェックしていた（経験が浅い？）
---

### ＜園舎に対する保育者の評価＞

1)	全体的な印象	近代的で綺麗
2)	保育のやりやすさ	死角が多い。エントランスが広く、使いこなすのが難しい。北側は暗い。ライトがオレンジ色で暗い。
3)	回廊について	複数担任制なので、まだ対応できているが、死角が多く見渡せない。基本的には「どこに行っても良い」としたいが、保育者の人数が足りない場合は「ここは今日お休み」などを変更する。先生の立ち位置を決めている。子どもの様子によって変更している。
4)	生活行為の専用室	・生活行為を保育室で行うことについて ・準備のしやすさ、やりにくさはあるか
5)	遊びの専用コーナー	・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） 保育室から見えない、子どもが他の遊びに気が付きにくい ・保育のしやすさ、やりにくさはあるか見守りにくい時はある。保育者の人数によって見守れない時は、活動範囲を狭くして対応している。
6)	自由活動範囲	・決め方 広ければ良いと言うわけでもない。 ・活動範囲のルール 園庭、保育室、廊下は自由に行けるルールだが、コーナーは（死角になるので）日によって変更する。保育者の人数や子どもの遊び方の様子を見て。
7)	付帯諸室（コーナー）について	・専用コーナーか兼用コーナーか まちまち ・コーナーがあることのメリット、デメリット
8)	付帯諸室の意義について	
①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ） ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）		

### ＜その他＞

	改修場所	
	保育の質と園舎への意見	

## 7) 事例 90, KI

視察ヒアリングシート				90
＜基本情報＞				
施設名	城山保育園上石原	法人	社会福祉法人 稲城青葉会	
所在	東京都調布上石原3丁目	事例記号	Ki_h	
訪問日	2020.1.20	ヒアリング協力者	園長 先生	
開園年	1960 年	定員	120 名	107%
保育方法		4歳児クラス的人数	24 名	
各活動の場所	B LNN	自由活動範囲	S3	室数4

## ＜建物基本情報＞

建物周辺環境		<div>90</div> <div>LNN</div>
建物建設年	2013 年	
使用室改修の有無	新築	
使用室床面積	968.07 m <sup>2</sup>	
構造	木造	
設計者	日比野設計+幼児の城	

## ＜付帯諸室＞

使 い 方	生活行為	4. 5歳児はランチルームで食事。昼寝は保育室。 ランチ室の上階は3歳児保育室であるが、足音がよく響く。気配を感じられて良い。週1回5組が「キッズランチ」として地域に開放。グループごとに固まって自由に食べる。アレルギー児は個室対応。 午睡時は電気を消してカーテンは閉めない。ベットの横になる時間。
	遊び行為	遊戯室：ない。4. 5歳児保育室の間仕切りをとり、集会、クリスマス会、卒園式を行う。小学校の体育館を借りて遊戯会などの行事を行う。 絵本室：親子の憩いの場（貸本）、活動の切れ目（散歩→絵本コーナー→保育室、昼食→絵本コーナー→保育室（着替え、午睡）に子どもの待機場所として使っている。トイレは自分で行くので、その帰りに廊下の水槽を見たり絵本コーナーに立ち寄ったりしている。
	その他	里山あそぼう会（5歳、年間2. 3回）実施。自分で発見する保育クレーリングスペース（自分が落ち着ける場所）をつくりたい。余剰保育室（今はない）か、1人なら談話室のような場所。落ち着く場所。先生が一人付きガラス張りの扉。

## ＜建築家に園舎を依頼した経緯＞

理事長先生が、他園を見て依頼。保育者の意見を取り入れて相談し、修正をしていた。開演時WS実施。
---

### ＜園舎に対する保育者の評価＞

1)	全体的な印象	概ね気に入っている。 大きなホールがあってもよかった。
2)	保育のやりやすさ	寺もある。廊下の水槽を覗いたり、絵本コーナーにいる。死角にいる。トイ
3)	回廊について	
4)	生活行為の専用室	・生活行為を保育室で行うことについて 3歳児は保育室で食事。4.5歳児がランチ室。窓をあけて開放的に食べることもある。  ・準備のしやすさ、やりにくさはあるか
5)	遊びの専用コーナー	・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） 活動の切れ目、保育室の準備が必要な時に利用。子どもの待機場所として使っている。朝夕に親子が一緒に絵本を読む姿がある。本を見に行く時は、保育者から声かけをして取りに行くスタイル。保育者が1名はコーナーに入り、見守っている。 ・保育のしやすさ、やりにくさはあるか 保育室からすぐの動線上にある（見える、気配がある）事が使いやすさにつながっている。
6)	自由活動範囲	・決め方  ・活動範囲のルール
7)	付帯諸室（コーナー）について	・専用コーナーか兼用コーナーか 兼用コーナーとして使いたい。 ・コーナーがあることのメリット、デメリット 保育室の配置換え等で待つ時間や気持ちの切り替えの場所として、保育室の外で（絵本を読みながら）待機できるのは、保育室内でただ待たせるより良い。先生が保育室を抜けなければならない時も使用。
8)	付帯諸室の意義について	子どもが主体的に選べる場所としては弱い。①準備の間の待機場所、②行為の切れ目の調整場所、③次の行動のために気持ちを切り替える場所として機能している。 子どもが自由に遊ぶ場所、居場所としては機能していないが、スペースとしては重視されている。「整える場所」 子どもにとっては、広い保育室一室だけでなく、小グループで使える場所の方が、保育者との関係や友人関係を作りやすい
①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ） ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）		

### ＜その他＞

改修場所	
保育の質と園舎への意見	

## 8) 事例 94, NT

視察ヒアリングシート				94
＜基本情報＞				
施設名	なるとうこども園	法人	山武市	
所在	千葉県山武市成東2104	事例記号	Nt_k	
訪問日	2020. 1. 22	ヒアリング協力者	園長	先生
開園年	1960 年	定員	240 名	98%
保育方法		4 歳児クラス的人数	35 名	
各活動の場所	C LP&SN	自由活動範囲	S3	室数5

→NP&amp;SN

＜建物基本情報＞				
建物周辺環境	住宅街	<div>94</div> <div>LP&amp;SN</div> <div>生活行為</div> <div>遊び行為</div> <div>保育室</div> <div>廊下</div> <div>多目的室</div> <div>生 専用室</div> <div>その他諸室</div> <div>園庭</div> <div>園外</div>		
建物建設年	2013 年			
使用室改修の有無	新築			
使用室床面積	2785.81 m <sup>2</sup>			
構造	木造			
設計者	日総建 一級建築士事務所			

## ＜付帯諸室＞

使 い 方	生活行為	ランチルーム：今年から使っていない（会議室として利用）部屋がうるさい（反響する）、保育者の人数が足りない（1クラス1名担当制）、トイレが遠いため。 午睡室：3歳児専用。避難経路配慮不足。4. 5歳児は遊戯室で寝る。
	遊び行為	絵本室：子どもが自由に入れるスペースではない。 <u>複数クラスが一緒に使えないので</u> 「絵本を選びに保育者と来る」や「保育者だけが来る」場所になっている。会議などで職員が使う事がある（訪問時も市の職員と他園の先生との会議に使用されていた）。 たまり：冷暖房がないので、夏と冬は使えない。春と秋は子どもの発達に合わせてしつらえを変更している。また、保育室に入れない子が保育者と本を読んで落ち着くなどクールダウンの場所として利用している。作り付けの家具が不便。
	その他	廊下の冷暖房がなく、季節が厳しい時は使いづらい。 入り口の自動ドアは、保育中手動になる。ギャラリーエントランスは暖房がないので、冬は寒い。 避難経路はかなり怪しい。カートに乗ったまま避難できないところがあり、追加工事しているが、まだ怪しい。保育者の心配の種になっている。 収納スペースは多め。

## ＜建築家に園舎を依頼した経緯＞

プロポーザル
--------

### <園舎に対する保育者の評価>

1)	全体的な印象	しらはたの方が使いやすそうとの声あり。見通せない点？
2)	保育のやりやすさ	
3)	回廊について	
4)	生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて 保育室のコーナーをそのままにして食事などの行為に移れていたが、集団行動しなければならず、人員不足で運営しにくかった。トイレが遠く目が届かないため、今年から食事にランチルームを使っていない。</li> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
5)	遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） 保育室の外にあることに意義はあるが、現状は環境の悪さ（寒さ暑さ）から、限定的な使い方になっている。保育室の延長として使ったり、子どもがクールダウンするために使う。</li> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか</li> </ul>
6)	自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方</li> <li>・活動範囲のルール</li> </ul>
7)	付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか 発達段階に合わせて、設を変更新している。お化け屋敷を作ったり。今（冬）は使用していないため、実際の雰囲気など不明だが、作り付け家具が大本津着て使いづらそう。現状は収納スペースとして雑多に使われていた。</li> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット</li> </ul>
8)	付帯諸室の意義について	保育者自身は意義を感じているようだが、明言されなかった。

- ①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）  
 ②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### <その他>

改修場所	
保育の質と園舎への意見	

## 9) 事例 137, TG

視察ヒアリングシート				137
＜基本情報＞				
施設名	東松認定こども園げん	法人	埼玉県東松市？	
所在	埼玉県東松山市石橋1	事例記号	Tg_k	
訪問日	2019. 4. 23	ヒアリング協力者	先生	
開園年	1960 年	定員	105 名	82%
保育方法		4 歳児クラスの人数	29 名	
各活動の場所	B NSN	自由活動範囲	S2	室数4

## ＜建物基本情報＞

建物周辺環境	住宅街	<div>137</div> <div>NSN</div> <div>保育室 全般 専用</div> <div>廊下 専用 OS</div> <div>多目的室 大 小</div> <div>生 専用室 遊</div> <div>その他諸室</div> <div>園庭</div> <div>園外</div> <div>生活行為</div> <div>遊び行為</div> <div>食事 午睡 行事</div> <div>午睡中遊び</div> <div>絵本を読む</div> <div>工作・制作</div> <div>大型の制作</div> <div>音が鳴る</div> <div>継続可能</div> <div>雨天運動</div> <div>雨天運動</div>
建物建設年	2015 年	
使用室改修の有無	新築	
使用室床面積	591.46 m <sup>2</sup>	
構造	木造	
設計者	谷口麻里子／タニグチアトリエ＋梶浦晴	

## ＜付帯諸室＞

使 い 方	生活行為	食事：保育室。まっすぐに机並べない。 午睡：3 歳児の希望者だけが専用室で寝る。
	遊び行為	製作室、絵本室共に自由に出入り。少人数で遊ぶ場所。集中して遊べる子（発達段階）はずっと集中して取り組んでいる。 絵本室：手紙交換や飯事の部屋にもしている
	その他	遊戯室：行事など 2 歳児の前のテラス多様に使われていた

## ＜建築家に園舎を依頼した経緯＞

園長先生の知り合い。
------------

### ＜園舎に対する保育者の評価＞

1)	全体的な印象	風邪をひかない園。風通しが良い、換気がしっかりできている。
2)	保育のやりやすさ	フリーの先生が多い、チーム保育。見通している。
3)	回廊について	
4)	生活行為の専用室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活行為を保育室で行うことについて なし</li> <li>・準備のしやすさ、やりにくさはあるか 食事の都度、準備。</li> </ul>
5)	遊びの専用コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び専用コーナーが保育室の外にあることについて（位置、数、機能） やりたい子がやりただけできる部屋。支援が必要な子がクールダウンに使う。各保育室も「絵画のへや」などと機能があるので、行き来は頻繁。</li> <li>・保育のしやすさ、やりにくさはあるか なし</li> </ul>
6)	自由活動範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決め方 基本自由。</li> <li>・活動範囲のルール 補助の先生がフォローしているので特になし。</li> </ul>
7)	付帯諸室（コーナー）について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専用コーナーか兼用コーナーか 製作室：材料が豊富にありいつでも手に取れる。特定の子の場所ではないが、作りたいものを形にできる子が特に長く使っている。</li> <li>絵本室：絵本を読む以外に、友達と手紙交換をしたりコソコソしてる。上級生の使い方を 見て、下級生が真似ている。</li> <li>・コーナーがあることのメリット、デメリット</li> </ul>
8)	付帯諸室の意義について	支援が必要なこの避難場所、保育者の目を逃れる場所（コソコソ）、直ぐに声をかけないように、ふらっと保育者が用事を済ましたりできる（一人にしすぎない）場所である事が重要。何かアイテムを投入する事で遊びが深まる。

- ①活動室と非活動室の違い（保育室との連続性、空間の区切り方、視認性の高さ）  
②専用室と多目的に利用できる室の違い（どちらが求められているか）

### ＜その他＞

改修場所	
保育の質と園舎への意見	